続・knight of monster　ナイト・オブ・モンスター

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
続・ｋｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ｍｏｎｓｔｅｒ　ナイト・オブ・モンスター

【Ｎコード】
Ｎ１０５０Ｘ

【作者名】
神戒

【あらすじ】
ジャン・スティールは幼い頃に、ケンタウロスの女騎士に命を助けられた。
「強くなれ」
その言葉から、彼は人生を決定する。
強くなり騎士になる。そう決意して身体を鍛え、数年が経過する。
やがて肉体、精神共に成熟した少年は、あの女騎士が属しているという国にやってきたのだが――。

出会う女性は異種族ばかり。
ボーイ・ミーツ・人外ガール。ここに登場。

とりあえず色々とやりながら気長に続けます。
気長に生暖かい目で見守ってください。

主な人物紹介（随時更新あり）

アレスハイム王国
王立騎士養成学校
一年

ジャン・スティール　男　ヒト
使用武器：刀剣類
主な魔術：肉体強化（パワー・ポイント）（魔方陣）
魔力放出（アウト・ルック）（同上）
禁断の果実（フォービドゥン・フルーツ）（同上）
魔法：なし
特徴：東洋系の深い黒髪は本来短髪でまとめられているが、散髪の時間がないために現在では適当に伸ばしたままになってしまっている。鋭い目付きは笑顔によって柔和なものになるが、一重の涼しげな目元には冷たさが伺える。
通った鼻筋に、薄い唇は色男然としているが、長年鍛えられた肉体からの雰囲気が見事にそれらの要素をかき消し、長身とも言い切れぬ中途半端な背丈がその容姿を一般層に引き下げる。
性格は基本的には温和で事なかれ主義であるが、沸点を超えると死すら我物とする幽鬼が如き戦いを見せる。

サニー・ベルガモット　女　妖精族（エルフ）
使用武器：弓
主な魔術：索敵魔術（スコーティング）（魔術紋様）
魔法：治癒系
特徴：色素の薄い明るめの茶髪は肩の長さで切り揃えられるが、もみあげは肩口を越して脇にまで伸びる。二重まぶたは大きめの瞳を強調し、顔立ちにさらなる幼さを加速させる。華奢で外観年齢は

義務教育レベル。基本的に容姿が良く頭の回転も早いが、誰かと共に行動するとそれらに依存し指示待ちになることが多い。単独行動では瞬間的な判断が正しいと信じ、またそれ故に戦況を持ちこたえる、あるいは逆転させることが多い。

性格は基本的にジャンの影響によって同様だが、その容姿に反して怖いもの知らず。遠くからの射撃を好む。

トロス　男　不明

使用武器：短剣

主な魔術：炎、風を主とする。（魔術紋様）

魔法：地牢獄々《ヘル・プリズン》

特徴：生え際が黒くなりつつある金髪を持つ。年齢の割に大人っぽい（老け）顔をし、無精髭は毎晩剃っている。顔立ちは一般的で、やや華奢なのがコンプレックスとなっている。ジャンに憧れてトレーニングを開始して努力は実り始め、戦闘訓練での成績は上がり始めた。

テポンを姉に持つので”誰かに頼る”といった考えが根底にあるが、徐々に自立し始め、それが戦闘センスに大きく影響を与えている。

レイミィ　女　蛇族（ラミア）

使用武器：拳

主な魔術：補助魔術となるものを主とする。（魔術紋様）

魔法：魔眼

特徴：深い青色の長い髪を持ち、それを薄めたような蒼眼は魔法使用時には黒に近い紺色に変化する。身体は細身で、腰の辺りからは全長五メートルになる蛇の尾を持つ。蛇族ゆえに腕力はヒトの数倍に至り、さらに蛇の肉体は意のままに操ることができ、また絞めつける力は瞬間的に最大で二トンを超える。

大らかで、悪く言えば雑だが多くを容認する寛大な器や、誰とで

も分け隔てなく接する話しやすさ、また座学での成績から人望は厚く友人が多い。だが主な友好関係は、サニー、アオイ、クロコの三名である。

アオイ　女　植物族
使用武器：植物
主な魔術：魔力放出（アウト・ルック）（魔方陣）
魔法：自然干渉（アンナチュラル）
特徴：茶系の髪は肩より高く短めに整えられていて、右側頭部には紅いハイビスカスが咲く。体調や感情によって花の色や状態が変化する。目尻が下がり顔立ちは優しく穏やか。言動は丁寧で、スタイルは特に秀でたものはないが、制服でも私服でも、常に葉で構成されたスカートを身につける。
当たり障りのない雰囲気に溶けこむことを得意としているが、彼女が創りだす穏やかな雰囲気を好んで好意的に接してくる人間が多い。またそれによって、人望とは別に同性異性問わず好かれている。

クロコ　女　蜥蜴（リザード）人族
使用武器：爪
主な魔術：肉体強化（パワー・ポイント）（魔術紋様）
魔法：瞬間加速
特徴：赤みの掛かった明るい茶髪は雑に短く切りそろえられていて、また右半身は緑の鱗によって覆われている。右腕は左腕とは対照的に図太くなり、また物々しい鉤爪をそこに備える。戦闘を得意とする種族故に戦闘能力は高く、単純な身体能力では学校で上位に喰い込むほどである。
そっけなくぶっきらぼうな印象が殆どで、あまり誰かと交流することはないが、関われば関わったなりに相手をいたわり大切にする、情に厚い一面もある。また、サニーを”血縁関係でないのに妹”と扱っているジャンに不安を抱き、やや嫌悪の念を抱いているが、戦

闘面から見直し、ある種の信頼を寄せている。

リサ（クリィム）　女　蠍族
使用武器：爪、尾、毒
主な魔術：風（魔術紋様）
　　幻惑（同上）
魔法：隠密（ステルス）
特徴：血のように紅い髪は長く腰まで伸び、その毛先から上辺りをリボンで纏める。同色の瞳は宝玉を思わせる秀麗さで、だが目尻は釣り上がり、一見鋭い印象を与える。美人の部類に入る外見だが、人見知りでしどろもどろな対応や、視線を合わせないことから周囲からある程度の距離を置かれている。
　幼少期から集団生活を離れて師と仰ぐ者との生活ゆえの影響であり、学校に編入してからはジャンを通してクラスにも溶けこんできている。またその経験が純粋に戦闘に慣れさせ、芽生えている野生の本能が戦場で”生き抜く”という執着を生み出し、瞬間的に己の限界を凌駕する力を発揮する。
　その為、戦闘能力は高く、騎士に十分通ずる力を持っている。
また、その師が有名な傭兵であり、そこから”元はぐれ”である事が割れぬようにエクレルのはからいで偽名を使用している。

ラック・アン　男　ヒト
使用武器：剣、短槍、手斧
主な魔術：氷雪、土属性を主とする。（詠唱）
魔法：硬質化（ダイアモンド）
特徴：短く揃う黒髪を持ち、またその瞳も黒くどこか東洋人らしい出で立ちだが、純然たるエルフェーヌの生まれで育ちである。元はその才能を買われてエルフェーヌで騎士を務めていたが、ある事件を気に右腕を喪失（うし）ない、精神療養や左腕の生活に慣れるためにアレスハイムの養成学校に編入。

幼い出立ちは確かに十八歳未満だが、特例として認められている。またその風貌から一部の女生徒から”かわいい”と評判で、人当たりの良さから友人も多い。

騎士を務めていた事だけあって実力は高く評価されていて、左腕のみとなっても学校では常に上位に名を残している。

ルーク・アルファ　男　ヒト

使用武器：長槍（二槍）

主な魔術：爆破（魔術紋様）

魔力放出（アウト・ルック）（同上）

干渉魔術（同上）

魔法：反発（リベリオン）

特徴：黒にも見える濃い緑色の短髪はつんつんと尖り、自己主張を見せる。ジャンよりやや身長が高く、常に周囲を敵視するように鋭い目付きは悪いが、基本的には競争心は高いものの明るく元気なムードメーカーである。細身でありながらもがっしりとついた筋肉は己より遥かに長い二対の槍を簡単に振り回すことができ、槍術に長けている。また魔法を使用する機会は素手での白兵戦以外にはないが、周囲からの評価は武器を使用しないほうが強い、というのが殆どである。

戦闘能力は、ヤギュウ侵攻の際に訓練部隊に編入されるレベルであり、ジャンに負けずとも劣らぬ実力を孕んでいる。

二年

レイ・グリーム　男　ヒト

使用武器：長槍

主な魔術：空間の障壁（グレイト・ウォール）（魔術紋様）

魔力糸（ワイヤー）（同上）

魔法：爆破予告（ワーニング）
特徴：生まれつきの白髪は乙女よろしく長く伸びて首筋あたりから一つにまとめられるが、ケアもしていない為に一つの束にならずに爆ぜたように広がる。常に笑顔だが温和というわけではなく、悪巧みでもしているようなソレであり、横暴さから知り合いは多いが友人は少ない。長身で筋肉質、顔も良く座学も戦闘訓練も優秀と来ているが、そういった人間関係の薄さは常に高みを求める為に強者を求める姿勢にある。
自分の障害になるとなれば力づくで排除し、あるいは頭を使って排除する。信ずるのは己と武器であり、認めるのは相棒であり好敵手（ライバル）たりえるクランのみ。

クラン・ハセ　男　ヒト
使用武器：太刀
主な魔術：魔力放出（アウト・ルック）（魔術紋様）
その他多くの魔術を状況に合わせて使用する（詠唱）
魔法：魔眼
特徴：ある時をきっかけにして脱色し、染めた紅い髪は好き放題に伸びてボサボサ。倭国とアレスハイムの混血（ハーフ）であるが、東洋の血が強く現れている。輪郭がやや丸く、東洋故の幼さというものを残す顔立ちだが、しなやかに伸びる肢体がそれを拒絶し歳相応な外見を持つ。
基本的に人当たりは良い方だが、深く踏み込む会話を拒み、そしてその殆どには無関心。目付きの悪さがコンプレックスで常にやや目を見開いた形である。面倒くさがりで座学や戦闘訓練での成績は悪いが、彼を知る者の多くはその実力を認めており、不思議と人望は厚い。
出来る限りの面倒事は回避するが、唯一受けて立つのは己の”腕”を確かめるための挑戦。その為、一月に一度はレイと、校庭で戦うハメとなっている。

また魔眼使用時には黒い瞳は赤く変質する。

テポン　女　不明
使用武器：なし
主な魔術：雷属性（魔術紋様）
魔法：無常の果実
特徴：闇に溶け込む黒い髪は肩よりやや下の位置で切り揃えられている。また瞳は真紅で、吸血鬼然としているがそういった能力はなく、平凡。サニーよりは幼いという外見はないが、それでも歳相応に見られた経験はなく、その身長の低さがコンプレックスになっている。
　明るく人当たりが良く、友人は多い。だが一度感情的になれば感情のままに突き走ることもあり、戦闘面でもそれが反映されている。対人戦闘は、背後に回りこんで急所を打ち込みひるんだ所で、武器を奪う事を主として居る。が、感情に流されれば魔術を主とした戦闘を行い、中でも得意とするのが雷。雷を鎌に形を変えて武器とすることもある。
　また、珍しい”魔法無力化”の魔法を持つ。

王立騎士団
騎士団は全てで第十騎士団まで存在し、
精鋭部隊を第一
偵察部隊を第二
戦争や異種族殲滅戦で主に前線に出るのが第三～五
魔術や魔法を主戦力とする部隊を第六
衛生部隊を第七
国防部隊を第八～十
と指定している。
また第七騎士団の育成は基本的には養成学校で行われているが、

より専門的な技術を身につける場合には修道院を推薦、あるいは修道院から人材を推薦する場合がある。

ユーリア　女　人馬族（ケンタウロス）
所属部隊：なし（補充要員）　元第一騎士団、特攻隊長（トップアタッカー）
使用武器：槍
主な魔術：炎、雷属性（魔術紋様）
魔法：雷撃疾走（ストライク）
特徴：色素の薄い金髪は、それ故に光を良く通してきらめく。頭の高い位置でくくられて一束になるのは、その馬の尾と良くにて居て、彼女の特徴とも言える。凛と引き締まる目元に、形の良い鼻、口はそれ故に美形であり、また誠実な性格や国で最高峰たる実力から周囲はおろか、名も顔も知らぬ国民からの信頼も厚い。
口調は堅いが雰囲気は穏やかであり、また根が真面目であるために誰が居ても居なくても常に誠実に生きるが、意識すればそこから逸れることも出来る。
また彼女が雷撃と信じてやまぬ魔法は、実のところ光の粒子であり、雷撃ではない。それを身に纏って一体化し、疾駆すれば空気摩擦で過剰な静電気をまとい、それを魔力で圧縮し電撃として放出することを無意識に行う為に、彼女はそれを雷撃と認識していた。

アエロ　女　鳥人族（ハルピュイア）
所属部隊：第三騎士団　副団長
使用武器：なし
主な魔術：数多の疾風（サウザンド・ウェイブ）（魔術紋様）
魔法：暴風流々《ストーム・イーチ》
特徴：明るい緑色の髪は短くまとめられていて、同色の瞳は光を反射しやすくキラキラと煌めく。腰から羽毛を生やして鳥の腿を持ち、また黒い鳥の足は鋭い爪を生やす。両腕は肘先から手羽先となって髪と同色の羽毛を生やす。

それ故に日常生活は不便に思われがちだが、器用に手羽先で掴んで物事をこなしたり、あるいは魔法で風を操って操作することも出来る。

明るく、小生意気な性格を持つが、あどけない笑顔や悪気のない発言から部隊に限らず多くから好かれている。自分では賢いつもりで少し上から目線の言葉遣いになるが、その実勉強が苦手という典型的な頭の弱いタイプであり、特にモノを覚えるという事が一番苦手で、それ故に鳥だから鳥頭、とバカにされる事が多い。

それでも白兵戦の実力は高く、先陣切っての力比べというよりは相手を翻弄する立ち回りでいなし、倒すというものが主要な戦い方を得意としている。

クレア・ルーモ　女　ヒト
所属部隊：第三騎士団
使用武器：剣
主な魔術：土、風属性（魔術紋様）
魔法：吸収
特徴：長い金髪はそのまま下ろされて、琥珀色の瞳は大きく、少女の名残を見せる。華奢な肢体は少女然としているが、騎士然とする誠実かつ生真面目な態度が、その雰囲気を払拭する。
基本的には生真面目で公私で言えば公の態度で多くの人と接し、堅いイメージを根付かせる。
戦闘能力は平均よりやや上というものだが、自分に自信を持てず、自己鍛錬を日課にしている。

エクレル　女　人牛族（ミノタウロス）
所属部隊：第一騎士団　副団長
使用武器：斧、槌、大剣
主な魔術：自己治癒（魔術紋様）
魔法：絶対領域

特徴：黒を明るく、紺をさらに明るくしたような色の髪は適当に流されて背中まで伸び、側頭部には二本で一対となるうねる角、規格外の豊乳、そして腿から黒の毛皮に包まれる蹄を持つ足が特徴的なミノタウロスであり、怪力持ち。主な武器を大戦斧を使用するが、殲滅戦では身の丈を遥かに超える長大な大剣を振るうことがある。
性格は穏やかで、下がった目尻から”お姉さん”という雰囲気をもたらし、また世話好きで面倒見が良く、またその引き締まるところは引き締まり、出るとこは出る肉付きの良いスタイルから多くの男性陣を魅了している。が、怪力から下手に手を出せず、いわゆる隠れファンというものが多い。

ミキ　女　ドワーフ族
所属部隊：第二騎士団　団長
使用武器：大剣
主な魔術：武器や装飾品経由の多数の魔術（魔術紋様）
魔法：全方位知覚
特徴：やや暗めの金髪を頭の左右でくくり、瞳はそれぞれ琥珀と蒼からなる。種族が持つ避けられない小柄さを持ち、背丈は少女そのもの。また顔つきも幼く、サニーよりも子供らしい。が、ドワーフが持つ特殊技能によって造られた装飾品や武器を個人で作成することができ、そこから腕力などを強化したり、肉体に紋様を刻まずに魔術を使用する。
が、任務が基本的には隠密厳守でるために戦闘は極力避けるので実力を知る者は少ないが、彼女個人でも精鋭部隊に編入できるレベルの力を持つ。
真面目で努力家という面を部下から評価され、信頼も厚い。しかしユーモアもある程度はあるために部隊は常にリラックスし、公私をはっきりとするために、団長たりえる器だと認められている。

シイナ　女　鬼族（オーガ）

所属部隊：第一騎士団　特攻隊長（トップアタッカー）
使用武器：規格外の特大武器多数
主な魔術：なし
魔法：自在重力（マインド・グラビティ）
特徴：赤鬼たる真っ赤な肌を持ち、瞳は黒。側頭部にひねりの無いまっすぐの角を二本生やし、鋭い牙を持つ。起伏の多い肢体は艶やかで、基本的な出立ちも露出度が高い。が、硬派な性格ややる気の無い適当な受け答えから男性陣が手を出せず、浮いた話に縁がない。

種族の特徴として高い身体能力を持ち、戦闘能力や瞬間的な判断能力は極めて高く正確。正に一騎当千の実力を持つが、ユーリアには一歩及ばず。後輩的な関係であるために彼女を尊敬する一面もあるし、基本的には分け隔てなく誰とも接し、豪快な性格。

己より大きな武器を好み、鉱山都市やコロンの街に特注品を頼むことが多く、また戦場には所持している半数以上の武器を持っていくことが殆どである。

十万に及ぶ人口の中で、その十分の一を占めるのが警ら兵（いわゆる憲兵）である。

主な役割は歩哨として街を警備する事、犯罪者を逮捕する事、そして重要施設や門の当番などであるが、緊急時には兵站や戦闘員として騎士団に率いられて前線に赴く。警察と軍の役割を兼ねている、という事になる。

養成学校の入試で落第したものや、学校を諦め退学した者、卒業出来なかった者や、また己を鍛えるため、働き口がないためなど様々な理由で就く事が多い職業。基本的に魔法を持つものは少ない。

騎士団同様に部隊編成はされているが、管理はされておらず、部隊長らが編成の見直しを軍務大臣に申請しているが、その兆しはない。

エミリオ　男　ヒト

所属部隊：なし　警ら兵を統率する大隊長

使用武器：剣

主な魔術：なし

魔法：なし

特徴：頭部が薄くなってきた事をきっかけにしてきれいに剃り上げた頭とは対照的に、口ひげはたくましく伸び続けている。巨漢とは行かずともゴツい外見を持つ中年男性であるが、常に着こむ鎧の下には筋肉の鎧が構成されており、”下手な騎士でも殺せない男”という異名が知れ渡っている一方で、そういった噂すら聞き逃さない為に”地獄耳”のあだ名を持つ。そして後者がより一般的。

戦闘能力は極めて高いとされていて、部隊に所属せず指示のみを出すデスクワーカーだが、状況により複数の部隊を纏めて部隊長として戦場に駆ることがある。

実力は第一騎士団に匹敵するとされているが、事実は闇の中である。

傭兵組合”ブラックオイル”

ディライラ・ホーク　男　ヒト

所属部隊：教導隊　隊長

使用武器：剣　双剣ではなく、普通の剣を二本

主な魔術：不明

魔法：無限射程（シューター・オブ）の〇〇

特徴：黒い髪は短く、だが坊主というほどではない。前髪はまゆにかかる程度で、後ろ髪は襟にかかるほど。左目に眼帯をしているが、他は五体満足。世界的に手を広げている傭兵組合ブラックオイ

ルの教導隊メンバーであり、現在はその隊長を勤めている。
剣、あるいは徒手空拳での戦闘力は個人として達することが出来る限界レベルまで精錬されているが、好きであり得意であり、自他ともに認める本来の実力は銃火器を持つことで発揮される。狙撃銃を使用するが、隠れて伏せてなどということが嫌いであるために、その身軽さや豊富な経験を使用した突撃スナイパーとして活躍することがある。

テポン家

タマ　女　獣人族　（ネコ）
使用武器：爪
主な魔術：なし
魔法：狩猟者（ハンター）
特徴：ネコ時は一般的な三毛猫として過ごし、また食べ物の消化や燃費の問題から好んでその姿になっていて、必要であったり、求められない限りそこから姿を変えることはない。
人型時は肘、スネから先をネコの四肢に変え、肉球の大きさも規格外のソレになる。また髪は濃密な金色に染まり、琥珀の瞳を持つ。身体能力はネコの延長線上であり、極めて高いが、怠惰と興味あるものにしか反応しない性格から、それが発揮されることはない。
自分を理解し、受け入れる者を好む傾向にあり、それ故にジャンには一度恋心を抱くが、徹底したペット扱いに今では友人、あるいはペットとして信頼を抱いている。
また同じ視点にたって行動するノロとの交友関係が深い。

オクト　女　タコ族
使用武器：触手
主な魔術：水属性（魔術紋様、詠唱）

魔法：監中水泳（スイミング）
特徴：頭にタコの触手を太い房として四本備え、また身体は透き通るような美白。四肢には細やかな吸盤を付ける形で、テポン家でお手伝いとして働く。が、家族同然で接しているために下手な隔てが無く、その為に仕事そっちのけで趣味である読書に夢中になることもある。
キャミソールに短パンという簡単な格好だが、ヘッドドレスだけは身につけている。
種族の特性として擬態を得意とするが、使い道はなく、長年の間その存在すら忘れている。
好きな本のジャンルは恋愛ものから、恋愛からなるサスペンス。
戦闘能力は皆無と言っていいほど、低い。

スクィド　女　イカ族
使用武器：触手
主な魔術：水属性（魔術紋様）
魔法：君死氷片（アイスノン）
特徴：頭に十本の触手を持ち、額から鼻筋にかけて稲妻のような魔術紋様を持つ。大きな瞳がひとつだけ存在し、眼力が強い。下半身は皮膚と癒着し人魚のようになるが、それは自在に二つに分かち足とする事もできる。
真面目で懇切丁寧な対応に定評があり、掃除や庭の手入れなど隅々まで丁寧な仕事をやってのける。料理は苦手というわけではなく、あまり経験がないためにする機会が無いが、料理をした場合は全てに栄養満点のイカ墨をかけるために焦げと見間違えられることが多い。
戦闘能力はオクト同様に無い。

パスカル　男　不明
使用武器：なし

主な魔術：不明
魔法：不明
特徴：黒い短髪は、坊主を少し伸ばした程度の長さ。二十代前半という外見を持ち、テポン家では基本的に力仕事を任せられているが、殆ど家にはとどまらない。
テポンの命によって”溝の向こう側”と行き来をするが、その事実を知るものは居らず、また他言することはない。

その他

ノロ　女　不明
使用武器：触手
主な魔術：多数の魔術を状況に応じて利用する（詠唱、魔方陣）
魔法：なし
特徴：学校の地下にある広大な空間に閉じ込められた謎の生命体。本体は生肉として空間に広がり、その中心には心臓のような形をもつ。学校の七不思議の一つとして数えられる”呪い”と呼ばれ始めた存在。知能は高く、瞬時に現代の言語を理解し我が物とする。
図書館並に魔術を持っていると自称し、また触手の一部をヒトの形に変える事ができる。が、触手から離れた時点での寿命は二時間であり、寿命が終わりに近づくにつれて腐食していく。またその外観は、少女然とし、長い銀髪、深い闇が如き瞳に、紅いワンピースを纏う格好をしている。
ジャンの肉体に身体の一部を埋め込み、『禁断の果実』を強制的に刻み込んだ張本人。

ラァビ　女　獣人族　（ウサギ）
使用武器：外套に付属される爪
主な魔術：爆破（魔術紋様）

魔法：疾駆発火（イグジット・イグニッション）
特徴：茶髪は肩よりやや長い程度。頭に長い耳を持ち、また常に羽織る外套は肘辺りから流線型に太くなり、その先に収納可能な三本の鉤爪を備える。下半身はウサギのそれであり、常につま先立ちのような状態になる。酒を好んで飲み、常に何かしらを飲用している。酒には強く、蒸留酒を薄めずに瓶のまま直に口にするほど。
開けた性格で、大らか。大雑把で、酒飲みという事から軽い女と見られがちだが、貞操観念は強く、また己と同等か、ソレ以上の実力の持ち主以外とは交際しないと決めている。
戦闘能力は高く、その為、アレスハイムからの傭兵という形で幅広い範囲で仕事をこなしている。

ボーア　女　獣人族　（イノシシ）
使用武器：なし
主な魔術：灼熱の牙（ブロークン・ブレイズ）（魔術紋様）
魔法：熱暴走（ヒート）
特徴：胸元から足先にかけて伸びる網目のシャツに、毛皮のベスト、革のショートパンツに太ももまでの革製のブーツを身につけるという目立った格好を基本とし、また黒髪は艶やかで長く、白目のない目は深淵のように黒。
元は騎士団に所属しており、ある理由から国を追放されて”はぐれ”となる。
常に孤独感を抱えていたが、ジャンと出会い、徐々に解消されていく。やや口が悪い面もあるが、基本的には思いやりがある暖かな気持ちをもっている。
戦闘能力は、騎士団に居ただけあって高く、着の身着のままでの戦闘でも異種族を殲滅出来るほど。

ウィルソン・ウェイバー　男　ヒト
使用武器：剣

主な魔術：幅広く使う為に特に決まって出す、という固定化した魔術はない
魔法：不明
特徴：小汚い旅人然とした外套を着こみ、ボサボサの黒髪に、やや緑がかった瞳をもつ。
武器商人として組合（ギルド）から支給される人型（マクロ）武器倉庫と呼ばれる、擬似脳と言う実際の脳と相違ないそれを埋めこまれた意識ある、ヒトと見分けがつかぬ外見のタスクという名の相棒と共に商売をしながら旅をしている。
また旅の目的に私的なものを含み、それは”天（そら）から落ちてきた鉱物を使用して造られた”と言われる十本の武器の収集。神話時代の武器、あるいは伝説の武器と呼ばれるそれらを集めることが彼の人生目標である。既に二本を所有している。
ジャンとの出会いをきっかけに、彼に目をかけるようになり、白い鉱物を利用した通信からジャンにアドバイスをしたり、手助けをしたりするようになる。

エルフェーヌ公国

ドラゴ　男　ヒト
所属：騎士団
使用武器：剣
主な魔術：不明
魔法：不明
特徴：ラック・アンの師たる男。基本的に黒い外套を頭まで羽織る。が、その下は黒髪の甘いマスクをもった色男であり、ノリのよい適当な性格ゆえに親しみやすい。
アレスハイムと共闘の異種族殲滅作戦時には活躍することが出来なかったが、アレスハイムでも十分通用できる実力の持ち主。

ヤギュウ帝国

クリード　男　ヒト

所属：先遣隊

使用武器：剣

主な魔術：不明

魔法：付加属性（アトリビュート）

特徴：薄い黒髪、琥珀の瞳の男。中肉中背で、外見の特徴はあまりない。が、猛禽のような鋭い目付きや全身から吹き出る雰囲気が、近づきがたい印象を与える。

戦闘能力は高く、またそれを誇示するかのように強者との戦いを求めている。

プロローグ

春先のまだ肌寒い季節。しかし日中は、上着を羽織らずとも外を歩ける程度に、ほどよく温かい。

春の日差し。

されど、その空間だけは異様なまでに熱かった。

大地は焦げ、熱を孕む。その上に立つだけで肉体は予熱で中までじっくり火を通されてしまうようだった。

青年は構えを解いて幅広の剣（ブロードソード）を振り下ろす。が、対応する人の手が――そこから鋭く伸びる長い爪が、その最中で剣の横っ腹を叩いて弾いた。

甲高い、金属音が響く。

同時に対象を斬り裂かんとしていた刃は、ちょうどその対象、目の前の女性の脇に落ちた。刃は情けなく焦げた石畳を勢い良く叩いて打撃し、砕けぬ故に跳ね返る力が腕へ戻る。衝撃が両腕をビリビリと痺れさせ、

「ちょっとは面白かったわよ」

彼女はそう言って、青年の顔面を力強く押しこむように掴んだ。

視界は暗転し、そして華奢な腕なのにも関わらず青年にはとても太刀打ちできぬ暴力が、彼の行動を束縛した。直接的な攻撃からではなく、ただ純粋に己の力を誇示するだけで、適わぬと理解させていた。

そして腰に引きつけた腕。貫手を作る手は依然として爪を鋭くさせたまま。

「もっと強くなってから遊びたかったわね」

毛皮のベストを羽織り、頭には中身のない猪の顔を乗せる。ネットのような網目だけの衣服をまとい、エナメルのズボンを履く。妙に露出度が高く、またそのあらわになる肉々しい肢体には目のやり場に困ったが、今ではもうその姿すら見えない。

黒目しかない瞳がギロリと青年を睨む。
もう終わりだ、ここで死ぬ。
そういった思考を、恐怖の中で、あるいは絶望の中ですら無く、どこか他人事のように感じる自分に思わず呆れた。
――体の中の、魂や心といったモノが熱くなるのを感じた。
ここで死んだら後ろの少女はどうなる？　新たな獲物としてこの女に殺されるだけではないか。
冷静な思考はそう告げると同時に、されど己の死の予感を認めなかった。
そう、おれは死なない。
漠然とそう思う。
根拠なんて無い。
だが死なない。
「おれは、お前の暴走を止める……っ！」
女が腕を振り抜いた。
同時に、頭の中のもっと奥、芯たる部位が熱く、熱く、熱くなるのを感じて――。
「やっと来たわね、だけど……ッ！」
「降り注げ！　数多の疾風（サウザンド・ウェイブ）ッ！」
女が楽しげな微笑を崩して表情を歪めたのはその刹那だった。
顔を掴む腕を少し引き、そして突き飛ばすように青年を弾いた。
同時に大地を弾いて彼女は後退。その場に僅かな残像を見せて、彼女は既に石畳に傷一つ無い位置で跪いていた。
その直後に降り注ぐのは、半月状のかまいたちだった。
標的を仕留められずに虚空を切り裂き大地を刻む幾多の真空波。
彼は勢い良く背後に吹き飛ばされながらそれを見て、
「っ？！」
壁もないはずの位置で、何かが背中を打った。滑空を遮る障害物は人の形であり、そして力強く青年を受け止める。やがて慣性の力も失われて着地すると、その”人の身体”のあった部分は妙に高い

位置だった事に気づく。
「下がっていろ、一般人」
凛とした声が届く。
透き通るような金髪を持つ女性。それを後頭部の高い位置で一纏めにし、身体には甲冑を纏う。装備する武器はその身の丈ほどの槍。
”馬”の下半身は、薄い生地の下着を履いたうえに鉄の佩楯（はいだて）を纏って守られる。
彼女は”ケンタウロス”と呼ばれる、異種族だ。人の上半身に、馬の下半身。その異形の姿は、されど力強く凛々しく雄々しい。彼女はケンタウロスなれど、この国を守護する王立騎士団の一人だった。
「き、騎士様……！」
ケンタウロスが睨む先、”獣人族”で猪科の女性は、前屈姿勢で様子を伺っていた。
青年がそれを確（み）認る中で、気配は声と共に現れた。
「そうそう、お子ちゃまはあたしたちに任せればいいのよ」
青年を挟むようにして現れた女性。
その身の丈は一般人とほぼ同等だが、その両腕は人ならざる鳥の翼だった。さらに羽毛滾る腿を経て、足さえも鳥のソレである。彼女も同様に異種族であり、鳥人（ハルピュイア）と呼ばれる存在だ。
人を凌駕する聴力、視力を持って尚飛行能力を有する。また種族としてもひどく友好的で、だが戦闘能力はそうそう大きく離れているというわけでもなかった。
「でもまあ、こんなに出てくる必要はないのでは？」
うねるツノを持つ女性は、それ以外にも規格外に豊満な胸と、そして獣を直立させたような毛皮を纏い蹄を持つ足が特徴的なのはミノタウロス。甲冑を装備できないのか身体に張り付くような衣服一枚を着て、腰巻を装備するだけの姿。さらに異種族の特徴として怪力が挙げられ、それを誇示するように身の丈ほどの戦斧を肩に担いで鳥人の隣に立った。

「いいんじゃないの、暇だしな。それにアイツだって常連客だ、門前、っつーか門内だけど、さすがにそろそろもてなすべきじゃないか？」

ケンタウロスの影になる位置に来たのは、一際小柄の少女だった。明らかに自分よりも巨(おお)きな大剣を背負うが、その剣先は既に地面を削っている。が、彼女ドワーフ族の作る道具の全ては逸品であり、『魔術』を用いて特殊な効果を持たせる道具ばかりが生まれている。例えば筋力を増加させるものもあれば――彼女の大剣のように、硬度、密度、素材がそのままでありながらも質量だけを減らす事も可能である。

「というか女郎蜘蛛(おひめさま)が待機してるし、ちゃっちゃと終わらせない？昨日徹夜で、彼女イライラしてんのよ」

そう提案したのは、全身をゆでダコのように真っ赤に染め上げる女性だった。

頭に対となる二本のツノを誇り高く聳えさせるように生やす彼女は、胸当てとショーツだけを身につける大胆ないで立ちでドワーフの隣についた。

彼女、鬼族(オーガ)は尋常ならざる身体能力を持つ。純然たる戦闘能力ならばこの集団の中でも随一であり、それゆえに切込隊長(トップアタッカー)に任命されることが多い。が、その場合は切込隊長だけの活躍で戦闘が終えると言われるほどに強靭だ。

まさに鬼というくらいに強い。容赦もない。

――ケンタウロス、鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼。

総数五名の女騎士。それぞれ人に似て非なる者でありながらも、その姿は圧巻だった。そして異種族と呼ばれる存在でありながらも、王立騎士団の屈指の実力者だった。

やがてそれぞれが揃い、構える。

「ま、そういう事だからキミらは下がってなさい」

槍を構える。同時に、ケンタウロスの雰囲気が一気に変わった。

殺気が迸る。鋭い眼光が、まるで獣人族の女性を射ぬくようだっ

た。
「さすがに予想外。私もここで退かせてもらうわッ！」
そう言うが早いか――魔術か、単なる身体能力か。彼女の言葉を理解する頃には既に、その姿は忽然と失せていて、
「じゃ、ジャン！」
ぷつりと、緊張の糸が切れたようだった。
首を締められたように、意識が不意に遠のく。深淵に蹴落とされたように身体が地面へと沈むその中で、背後で待機していた少女がそう叫ぶのを聞いて――青年、ジャン・スティールの意識はそこで途絶えた。

試験前夜

ここアレスハイム王国が存在する大陸の地平線上がひび割れ巨大な”溝”が現れたのは、今から約一五〇年前。全世界を混乱の渦に陥れた世紀の大地震を伴ってそれが突如出現したというのは、この世界で生きる人間ならば知らぬ者はいないほど有名な話だ。

溝は階段状になっている。そしてその深淵の最中、階段の突き当りには巨大な門扉（ゲート）があった。

そこから現れたのは無数の『異種族』。

架空の生き物だと信じてきたケンタウロスや鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼……さらに無数の異様な、半分は人であったり、完全な”魔物（モンスター）”の風体をするそれらが現れた。

彼らは知能を持つ。人間と同等、あるいはソレ以上の超高度な知的生命体だった。

そして彼らが望んだのはこの世界。

ふっかけたのは戦争。

ではなく、友好的な関係を築く為の慈善活動（フィランソロピー）だ。

荒れ果てた土地を潤し、枯れ果てた河川を潤し、汚れた大地、海を浄化。魔法のような業の数々で、人類の文化は加速度的に進展して、今がある。

持つもの、持たざる者は居るが――個人が持つ、根拠不明寮の奇跡の業である『魔法』が、個人の才能（センス）が無くとも努力次第で使用可能になる『魔術』が人々の手に渡ったのも、その異種族の出現と同時期だった。

魔法とは、一人が一つだけ持つ特異な能力。だが持たざる者が殆どであり、全人口を見てもその一割に満たぬ存在である。

魔術とは、先ほどの真空波がそうであるように、『精霊』という者の力を借りて起こすもの。例えば『炎』や『雷』、『水』や『氷雪』、あるいは『具現化』を可能とする業であり、それは肉体に紋

様を刻んで”世界と契約”する事でまず扱える段階になる。
が、『数多の疾風（サウザンド・ウェイブ）』のように本格的に使うには、惜しまぬ努力が必要となる。
――世界各国。それでもやはり異種族という存在（もの）を拒むところは多い。
世間に馴染み、『魔法使い』を主として構成する騎士団は各国に必ず在るものの、そこに異種族を含めるのはやはり異例な事だった。
それは、ここアレスハイム王国が、その異種族たちとの外交官的な役割を持つことが理由だった。
たとえ異種族と人類が対立したとしても、ここだけは中立を貫く。
そう契約（やくそく）したのは、やはり今から一五〇年前だった。

このジャン・スティールは、幼い頃にどこぞの帝国軍によって故郷を焼き尽くされた。強奪して食料、水を補給。ついでに金銭を奪い、村人を殺害してから村々を焼き払っていった。追手はその村での補給が不可能になり、さらにその残虐性を見て追跡を諦めたという。
彼はその追手の部隊に、その中に居たケンタウロスの騎士に生き残っていた所を助けられたのだ。
「ジャン、またトレーニング？」
そう声をかける少女も、同じ故郷出身の生き残りだ。
二人はそれから近く、この王国の支援下にある街の児童保護施設で十二歳まで育った。義務教育の制度のお陰で、彼らはまともに文字を読み書きでき、極めて一般的な幼少時代を過ごすことが出来た。
「ああ、身体がなまっちまうからな」
それからは自立生活だ。
二人でドワーフが営む炭鉱、鉱山、採石場で働き、ジャンは現場仕事を、『サニー・ベルガモット』は寮で寮母手伝いとして過ごしてきた。
かくして生き抜き、六年後。

十八歳となる少年少女は、騎士になるべくこの王国にやってきた。
騎士の求人は毎春行われる。募集要項は極めて簡単で、『十八歳以上』であり『心身共に健康』で、『文字の読み書き』ができ『特殊技能』を有すること。
特殊技能は砕いて言えば、魔法の有無である。
サニーは簡単ながらも『治す』力を持つ。
ジャンはと言えば――。
「っと、一先ず腕立て伏せは終わりだ」
規定の回数を終えた所でジャンは起き上がり、肩で息をしながら質素な寝台に腰をかける。
共同住宅で寝食を共にするサニーは、そんな彼の自室で、彼の隣に腰掛けた。
セミロングの茶髪が揺れ、琥珀色の瞳がジャンを捉える。尖る長い耳は、彼女がエルフ族である証拠だった。
容姿端麗、頭脳少し明晰。さらに弓を自在に扱い、治癒の力を持つ。
天はいくつ彼女に与えれば気がすむのだろうかと嘆いたのは、ジャンが物心ついたその時だった。
彼が持つものといえば、ドワーフ族から餞別にと渡されたブロードソードが一振り。特別製だから魔術を扱う為の道具にもなるが、それだけだった。
「もう、明日が試験なんだからね？　少しは休まないとダメだよ」
立ち上がり、机の上に乱雑に置かれる赤い本を手に取る。表紙には『毎日十分勉強するだけで絶対に受かる！　王立騎士入試対策～傾向と対策～』と立派な御託が並べてあるが、僅か一時間で理解できるほどに内容は薄っぺらく、一般常識程度の事しか綴られていなかった。
こういった商法があることを、鉱山で働いていた彼は知らない。
購入時の店員の嘲笑の意味を理解したのは、この本の第一章を読み終えた頃だった。

昼食三日分の値段が一時間で潰された。
しかも一切有意義にすらならない内容で。
「わかってるけどさ。落ち着かなくて」
すり切れるほどに読んだと思うそれを、また読み始める。
いくら内容が稚拙だろうと、もしかするとコレが本当にヒントになるかもしれないのだ。とりあえず頭に入れておくだけでも損にはならない筈だ。
――意識を失った後は、この寝台の上で寝ていた。共同住宅まではあのケンタウロスが運んできたらしく、それから半日ほど眠りこけていたらしい。
本当なら礼を言いに城まで行くべきだったが、どのみち騎士の入試試験があるのだ。わざわざ赴かなくとも逢える、はずである。
ちなみに試験で合格してもすぐに戦場へ、というわけではない。二年制の学校に通い、そこで知識を蓄え肉体を鍛える。そこで卒業して晴れて騎士なのだ。
「わくわく？」
「そわそわ」
「でも楽しみでもあるんでしょ？」
身体にひっつき、体重を掛けるようにしてサニーが言った。
「まあな」
自分のこれまでの力が試せる。
ケンカもなく、ただ鍛えるだけ鍛えてきた今までの全てを出せるのが、明日の試験だ。
心配でもある。
楽しみでもある。
しかしやはり、
「サニーは？　運動神経悪いってわけじゃないけど、得意でもないだろ？」
彼女が一番心配だった。
騎士を目指した理由が『ジャンが目指すから』であり、仮にジャ

ンが落ちれば『辞退する』という。騎士を舐め腐った考えだが、そんな彼女がこれまで支えになってくれたのは確かだった。

だからサニーと一緒に騎士になりたい。

あの騎士に恩返しがしたいという事もあったが、今ではそれが一番の願いになっていた。

妹のような存在。ゆえに、たった一人しか居ない大切な家族だ。

互いに助けあってきたからこそ、その心は繋がり、今に至る。この触れ合いだって男女の性的な意味ではなく、もはや動物のスキンシップのようなものだった。

「わたし？　そうだね、わたしはねぇ、実はジャンに隠れてトレーニングしてたりして」

「へえ、どんな？」

「えへへ、筋トレとか、あとね、素振りとか」

「割りとちゃんとやってんだな。頼んでくれればもっと指導とか出来たのに」

「やだよ、だってジャン、人一倍頑張ってるからあんまり迷惑かけたくなかったもん」

「いや、そんな事……」

「次の日仕事なのに、夜中に抜け出して走りこみしてたり」

「そ、それは……」

思わず口ごもる。

まさか見られていたとは思わなかった。

それこそ、彼女の言葉を借りるが、人一倍頑張ってるサニーに心配を掛けぬために影でひっそりとやっていたのだが、それは無駄な努力になっていたようだ。

お陰で今では、年齢の割には随分とがっしりとした体形だし、体力だって自信がある。だが基準がわからない以上、試験に余裕を持てることはなかった。

「でもほら、ジャンは頑張り屋さんだから絶対受かるよ！」

彼女がいるから、ガチガチに緊張して集中できなくなることがな

い。
「ああ。サニーもな」
「えへへ、ジャンに言われると嬉しいな」
言って、頭を肩に乗せる。この上なく嬉しそうな顔で、彼女はこのひと時を過ごしていた。

その後、適当なトレーニングを二人で行い、夕食を済まして、少しばかり早めの就寝となる。
適度に疲れた身体が休息を求める。そのお陰で高ぶった精神はいくらか落ち着いて、夢の中へと落ちかけていた。
サニーが、「どうせだから一緒に寝る？」と聞いてきたが、なにが”どうせなんのか”分からないし――彼女だって年頃の娘だ。淫らな獣となる男の本能を殺しきれていないジャンが、そんな事を二つ返事で許可できるわけがなかった。
いくら妹のように思っていたって、女の子のやわらかさにはドキドキするし、髪の石鹸の香りには虜になる。今まで仕事もあったから尋常ならない運動量で誤魔化してこれたが、今度はそうにはならないだろう。
騎士を侮っているわけではないが、それでもあの炭鉱や鉱山での苦行じみた活動は無い。もしそうなったら、
「死ねるな……」
ドワーフの力持ちが大勢いたからこそ、それらが創りだす特別な魔術稼働の道具があって尚あのキツさだ。同等の苦行など、この街で一ヶ月ほど過ごした適度な気楽さからそっちへなんて、とても堪えられるきがしない。
もっとも、それは杞憂に過ぎるだろうが――。
コンコン。
不意に音が、静寂を司る自室に響いた。
コンコン。
大した間も置かずに、もう一度。

扉ではなく、窓を叩くような軽い音。
壁に寝台が添えられるような配置だ。窓は、その壁に埋め込まれている。だから思わず目を開けてそちらに視線を向ければ、見えてしまうのだ。
月明かりを遮る、妙な人影。
息を呑む。
微妙な尿意ゆえに我慢していたことが悔やまれるほど、心臓が凍りつき、全身の血液が凍てついた。
「っ……！？」
悲鳴が出なかったのが、不幸中の幸いというものだろう。
コンコン。
ノックは繰り返された。
『ちょっと、開けてってば！』
窓越しにこもる声は、女の子のソレだった。
強気に、命令口調。
どちらにせよ悪い予感しかしなかったが、これ以上ノックを繰り返されてサニーを起こすわけにもいかない。
ジャンは身体を起こして布団を剥ぐと、寝台の上で膝立ちになってカギを開け、窓を開け放つ。と共に、その影は勢い良く部屋の中に飛び込んできた。
寝台を飛び越えて床に着地。両手を天井高く伸ばして直立。まるでその妙技（スタント）を褒めてと言わんばかりの笑顔をジャンに向けていた。
「おーすごいすごい」
やるせない拍手だった。
だというのに、彼女はとてもうれしそうな笑顔だった。
なにやら胸が痛くなるが、ジャンは気にせずに続けた。
「どちらさまで？」
「あ、えーっと……あたしの名前はテポン」
コウモリのような羽根を折り曲げて収納する。ソレ以外の特徴といえば、炎のように真っ赤な瞳や、サニーといい勝負の少し小柄な

女の子らいし肉体程度しかない。またエナメル質の、腿まで伸びる妙に踵の高い靴や肘までの手袋という異文化の服装しか無かったが、この街で出会った異種族の中で一番人間に近い少女だった。

何族なのかと聞いてみたかったが、異種族とそれほど深く関わった経験がない。ドワーフはいい歳の中年男性――といっても寿命の関係で殆どが百歳超え――だったから、会話は普通の人間とあまり変わらなかった。

だから”違う部分”に関して、どこまで聞いて良いのかが未だに分からないのだ。

異種族初心者というところだろう。

興味が人一倍あるのは、いつかのケンタウロスのおかげかも知れない。

「お、おれはジャン・スティール……。おれに何か用？」

「え、まあね。ほら、この前、獣人のボーアと戦ってたじゃない？」

「ボーア……？　あの炎の魔術使ってたヤツ、だよな」

「うん。知らないと思うけど、あのヒト毎月、不規則だけどね。来るの。街を壊すけど、門の近くだけ。人を殺すけど巻き込まれたヒトだけ。確実にアブないんだけど、すぐに逃げちゃうから捕まえられないのよね。なんで来るのか、理由がわかんないし」

彼女は丁寧に説明してくれる。

自分より少しばかり年下に見える彼女はやはり華奢で、だが異種族ならではの身体能力を持つのだろう。

だが、わざわざ聞いても居ないことを補足してくれるあたり、

（こいつ、イイヤツかも）

そう思えた。

「あ、それでね。特に用ってわけじゃないけど……あんた、騎士を目指すんでしょ？　明日試験だし」

「ああ、その情報をどこで仕入れたか甚だ疑問だが、その通りだ」

寝台の上であぐらをかく。彼女は腕を組んで、ジャンを見下ろした。

「警ら兵のなんとかってヒトが教えてくれた。あの、ヒゲがすごいヒト」

「隊長じゃねえか……」

地獄耳のエミリオの名を関する彼は、街の、そして国が保有する軍の主力として活躍する警ら兵の隊長だ。もっとも全てを統率する隊長という訳ではなく、いくつか分けられた部隊の長である。だがやはりその実力は折り紙つきで、特に周囲に近づいた敵の足音を聞き逃さず、逆にそれを利用して勝利を収める――奇襲対策のプロであることから、その二つ名が冠されていた。

だからもちろん、ジャンの話を聞いていてもなんらおかしい話ではなかった。

「えっと、テューポーンっつったっけ？」

「テポンよ！　あんたの脳みそ醗酵（はっこう）してんじゃないの？」

「おお、おれの頭は二酸化炭素でパンパンだぜ」

「もう、冗談はそこまでね」

腰に手をやり、呆れたように首を傾げる。

もしここでため息を吐かれたとしても、寝ぼけた頭だから傷つくことは無いだろう。多分。

「あたしはもういいんだけどね。ただウチの連れが騎士志願で、たぶんあんたと一緒に試験を受けることになるのよ。素質はあるように見えるんだけど、どうにもヘタレっていうか、気が弱いってわけでもないんだけどね……」

ははん、とジャンが鼻を鳴らす。

そういう事かと彼は察した。

「良かったら試験だけでも仲良くやってくれない？　名前はトロス。黒い髪で、見た目はニンゲンそのもので、まあそわそわしてるから、見れば分かるわよ」

「トロそうな名前だな」

「せっかちだけどね。まあ、飽くまで良かったらだし、気にしないでもいいわ。邪魔したわね」

なんでもないような顔で彼女は寝台を飛び越えて、窓のサンへと跳躍した。身軽なジャンプで、まるで浮遊するように優しくそこにとどまる。窓の枠を掴んで身体を支え、首をジャンへ回した。
「せっかく起こされたんだ。仲良くやっとくよ、テュポーン、だっけ？」
「テポンよ。ふふ、ありがとう。ジャン・スティールね、覚えとくわ」
窓の外へと身を投げる。その直後にコウモリの羽根を広げて、風を起こす。と、風もないのに空中でとどまり、彼女は頬を赤くして微笑んだ。
「騎士試験、受かりなさいよ。あたしは”まだ”だから、今年受かればやさしくしてあげる」
「よく分からないがありがとよ。風邪、引かないようにな。薄着だからさ」
「あたしは大丈夫よ。年中コレだし。あんたもね」
「あいよ。おやすみ」
「ええ、おやすみなさい」
彼女は控えめに手を振って、また羽根をはためかす。するとその身は瞬く間に上空(そら)高く浮かび上がって、闇の中に影すら残さず消えていった。
ジャンはそこで寒さが染み込んだ身体を震わせてから窓を閉め、カギをそのままにして寝転んだ。
ただそれだけの会話で疲れたのか、その余韻もそこそこに、ジャンの意識は可及的速やかに夢の世界へと転げ落ちていった。

入試試験

「ねえジャン見てみて！　お城だよぉ！」
「ああ、いつみてもすごいよな」
噴水のある広場を抜けて、大通りをしばらく歩いた先に、半円に広がる広大な空間がある。それだけでも十分驚きだというのに、その突き当りには門があった。
そしてその向こう側にあるのが巨大な城だ。
見上げるだけで首が痛くなるような、荘厳で威圧的な雰囲気。でありながらも上品で、自分なんかが足を踏み入れて良いのか戸惑うほどに格式高いのが見るだけで理解できる。
少し高い丘の上に立っているのか、城は見下ろすように、あるいは見守るように街の奥にある。門の付近には警ら兵が槍を天に突きあげて構えており、その脇には大きな看板が設置してあった。
「えーっと、『試験会場はこちらです』だって」
矢筒と弓を背負いながらジャンの手を引く彼女は、そう教えてくれる。
同様に剣しか持たないジャンも、彼女に連れて行かれるままに、その開け放たれた門の中へと進んでいく。門の警ら兵に会釈をすると、「頑張れ」だの「期待している」だのと妙に励ましてくれる言葉に嬉しく思いながら、やがて敷地内へ。
――この街に来た当初は観光客気分でぶらぶらと歩いてみて回ったが、それでも城の中ばかりは入ったことがなかった。
そしてまた、まさか試験が城の敷地内で行われるなんて考えても見なかったが……。
「うわぁ、けっこー人いるねぇ」
「本当に。百人以上いるんじゃないか？」
「でも大丈夫だよ。ジャンなら、ね」
「あまり自信を持ちすぎるのもどうかと思うけど。一緒に合格する

んだ、サニーだって大丈夫さ」

一応、合格すれば学校に通うことになるのだ。学校からさらに騎士へと昇格する時点で”ふるい”にかけられるとしても、騎士養成学校に入学させるのは一定数という数が決まっているはずだ。

となれば、一クラス三〇人前後だとすれば……推測できるのは三〇人から六〇人が限界。何クラスも育てる時間も無いだろうし、多ければ多いほど国の負担も大きくなる。

そしてまた、ジャンのように自分が”特殊技能（まほう）”を使えるか否かすら分からない者も多いはずだ。

一応試験内容に『適性検査』があり、その力が扱えて居らずとも、本質的にはその力を持っている。その有無を確認によって騎士になれるかが決定的になる。が、その検査は最終試験で午後に行われる。恐らく精神、肉体ともに健常であれば警ら兵として推薦するためなのだろう。

ともかく、今は考えても無駄な事だ。

筆記試験はあるかどうかも疑わしいし心配だが、なるようにしかならない。

今までだってそうだった。

ジャンはそう帰結すると、大きく息を吐いて、愛しい妹（仮）の頭を優しく撫でてやった。

「頑張れよ、サニー。試験中はずっと一緒ってわけにはいかないし、自分の力を試すしかないんだからな？」

「もう、子供扱いしないでよ！　私だってね、結構やるときはやるんだよ？」

「はは、頼もしいな。それじゃおれは人探しするから、適当にそこらへんぶらついててくれ」

「人探し？　じゃあ私もついてく！」

「んー、まあ、大丈夫か……な？」

トロそうな名前でせっかちという印象しかない相手だ。

黒髪ということだったが、今朝起きた時には窓に手紙が挟まって

いて『金髪に染めたみたい』との追加情報があったから、それを念頭に置いて探せば良いのだろうが……。

周囲を見渡せば人だらけ。

それでも門のすぐ内側の、城の敷地内にしてみればちょっとした空間に集まっている彼らである。

甲冑を着こむもの。ラフな、布の服だけで剣を持つ男。あるいは外套姿など。

また異種族は集団の二割ほどしか居らず、まるで猪をそのまま人型にしたような男や、トカゲのような皮膚と尾を持つ蜥蜴人族（リザードマン）の女など。そう種類が多いわけではなく、他にはドワーフの少年や鳥人（ハルピュイア）の少女などありふれた種族ばかりだった。

周りを見るだけで、この中から探すのかとうんざりする。

だがその中で、一人だけ妙な男を発見した。

「ねえジャン？」

サニーもそれを視界に入れたのだろう。不安気に、手を握る力が少し強まるのを感じる。

「すまん、たぶん探し人見つかった」

今度はジャンが手を引いて、人ごみをかき分けその男へと近づいた。

短い金髪頭で、前面にボタンがつく黒い外套（コート）を着る男。彼は落ち着かない様子で、その場をグルグルと回転していた。

なぜ引き受けてしまったのだろうと後悔しても時既に遅し。

保護者は随分とまともな風だったのに、こっちがコレでは――そう思っても、約束は約束だ。

物理的に無理というわけではないのだから、いい加減決意するしか無いだろう。

だから胸いっぱい息を吸い込んで、口を開けた。

「あ、あの、さ。ちょっといいか？」

男には妙な斥力（ちから）があるらしい。

彼の周りには人がおらず、半径一メートルほどだが空間ができて

いる。
人ごみがあまり得意ではないジャンにしてみれば羨ましい限りだが――こういったいかにも変だという条件付きで得られる力だったら願い下げだった。
だからその、ちょっと変な人に声を掛けた刹那に周囲が無意識に少しだけ緊迫するのが、彼にも良くわかった。本来ならばそこに居た人間なのだから。
果たして男は回転を止めた。
ちょうどジャンと対面するように停止し、恐らく長い間回っていたであろう筈なのにしっかりと、鋭い視線を彼に向ける。
瞳は燃えるように紅く、肌の色はジャンと同じ。背中にコウモリの羽根がある以外に、ソレ以外の特筆するべき特徴は一切ない。まさに人間そのものだ。羽根さえなければそう間違えていたことだろう。
「なんですか？」
男は冷淡に、直球に聞く。
せっかちで、どこか人見知りであるような事を聞いたが気のせいだったか。
そう思ったのも束の間、そんな男の膝は驚くほどに小刻みに震えていた。
気がつけばガチガチと顎を震わせて歯を噛みあわせているのすら見える。
純粋に、彼はジャンに怯えていた。
「あー、いや。そんな身構えないで欲しいんだけど……ほら、キミ一人だったし、もし良かったら試験始まるまでだけでも話ししたいなって思ってさ。おれも緊張しちゃってて」
ははは、と発した乾いた笑いは、果たして良い方向に事態を招いた。
「あ、あー！　だよね、僕もちょっと緊張して、落ち着かなくてさ。知り合いも居ないし、姉さんが大丈夫って言ってたけど、でも全然。

ガチガチで」
「はは、良かった。おれはジャン・スティール。んでこっちが」
「サニー・ベルガモットです。よろしく」
代表してジャンが手を差し出すと、彼は快くソレに応じた。
「僕はトロス。人間(きみ)たちとはちょっと違うけど、仲良くしてくれたら嬉しいな」

街の通りのような幅広の道。その両脇は芝生が敷き詰められており、城に近づく位置になると噴水があるちょっとした広場がある。
それからややあってからやってきた甲冑姿の男が約百人余りの集団をそこにまで移動するように指示し、また待機の命があった。
「最初は何するんだろう。スティール、分かる?」
「ああ、一応募集用紙みたいなの貰ったからな」
トロスにきかれて、ポケットから持参した紙を取り出す。
そこには集合時刻と場所、そして行われる三つの試験がおおまかに記されており、恐らく自主的にここに集まった者はそれを持っているだろう。
姉に為す術もなく連れてこられた彼は持っていないし、それも仕方が無いことだ。
「えーっと、第一次試験が身体検査。次が体力で、最後に適性検査だってよ」
「身体検査か……。ねえジャン、私の検査員が男の人だったらどうしよう」
「自分の並ぶ列を間違えることで回避できるから安心しろ」
「でもそれだとだいぶ時間(ひま)ができるよね?」
「まあダベってりゃいいだろ。次が始まれば招集かけるだろうし」
そう提案した最中の事だった。
「注視せよ!」
甲冑姿の男がそう叫んだ。
噴水の縁に仁王立ちして、まるで英雄ごっこをして遊ぶ子供のよ

うに腰にてをやって。
兜を外して足元に置き、鼻の下にちょっとしたヒゲを伸ばした中年男性は、瞬く間に静まり返る集団を見て頷いた。
「ここに居る者はみな少なからずとも騎士を志したのだろう。その給金が目当ての者、騎士という存在に憧れを持つ者、ただ流されるままにここに居る者……それこそ、ここに立っている貴様ら一人ひとりに別の理由があると言っても過言ではないはずだ」
騎士らしき男は語り始める。
ただそれだけで、にわかに和らぎ始めていた空気は瞬く間に引き締まる。
彼は一拍置いてから続けた。
「騎士とは誇り高き戦士の肩書きだ。ただ乗馬し剣を、槍を振るい戦う職業だ。貴様らはこれからそれになる。だがソレ以上に、騎士という存在(もの)は最上に気丈で気高い。騎士とは職業だが、職業ではないとも言える。魂が、心が気高く誇り高く成長する！　貴様らにはそれを感じて欲しいと思う……簡単だが挨拶を終わりとする。噴水の後ろに簡易小屋をこしらえた。貴様らは男女に別れ、それぞれ列を成せ。第一次試験はそこで開始する。以上！」
――騎士になるまでの試練。
そのまず始めがこれから開始される。
男の言葉の後に、各々はその表情をキッと鋭く引き締めて円形の噴水の左右へと流れていく。
「それじゃ、またね！」
十数人ほどしか居ない女性の列に、サニーは紛れていく。ジャンは手を挙げる彼女に返事をしながら、トロスと共にぞろぞろと動き出す列の最後尾についていった。
トロスが小屋に入って数分が経過する。
列が出来上がってから既に一時間以上が経過していて、寒空の下、いくら晴れ間で日差しが暖かいと言えどもいい加減身体が冷えてき

た。
　後ろではまた噴水付近に戻っていった志願者たちがたむろし、緊張がいくらか解れたからか、誰もが親しげに会話を楽しんでいた。それはサニーも例外ではなく、さっそく友達が出来たのか、蜥蜴人（リザードマン）の少女と対面してなにやら話し合っていた。
　ジャンは最後尾であり、後ろには誰もいない。強引にでも割り込めばよかったのかもしれないが、わざわざこんな所で心証を悪くする必要も無い。
　彼は腕を組んで縮こまる。歯がガチガチと噛み合って音を鳴らし始める頃に、トロスは安堵したような表情で扉を開け、外に出てきた。
「スティール、君が最後か」
「最初じゃないだけマシだよ」
「扉の前で声を待つんだ。入れって言われたら、入ればいい」
「ああ」
　頷き、トロスと立ち位置を入れ替える。
　やがて眼前に扉が迫り、彼はそこで足を止めた。
　ひとつ大きな深呼吸でもして心を落ち着かせておこう。そう思って息を吸い込むと、声がかかった。
『次の者、入れ』
「っ、はい！」
　肩を大きく弾ませてから、息を吐く。
　彼は扉を二度叩いてから、開け、中へと入っていった。
「失礼します」
　扉を閉め、頭を下げる。
　――自室より少し広い程度の小屋には、簡素な椅子と、その前方に机があった。書類が何十枚と重なるそこには小柄な少女が居た。
　左右の瞳の色が違う、ただそれだけの違いがあるだけの少女だ。
　なぜこんな所に幼い子がいるのだろうかと思うのも束の間、記憶が、その正体を見破った。

左右で長い髪を括る少女。それはドワーフ族の騎士だ。一度だけ見たことあるその姿は、以前獣人の襲来時に駆けつけた内の一人であるからだ。

「ん……、お前、どこかで見たことあるな」

書類に羽ペンの先を押し付けながら彼女が言った。

「と、まあいいか。お前が最後か？」

「はい！」

「そうか。まあ座れ」

「はい、失礼します」

一礼を置いて、椅子の左側へ。そこでその手前に移動し、ぎこちなく、操り人形のように腰を落とした。

ドワーフの少女は奇妙なものでも見るような目で彼を蔑みながら、その口角を少しだけ釣り上げてから咳払いを一つ。一呼吸を置き、口を開いた。

質問されるだろう事はおおよそ予測してきたし、その返答は全て暗記してきている。

これで問題はないが、一つだけ非常に困ったことが現在起きてしまっていた。

その返答を全て忘れてしまったことである。

その原因は、この少女の正体を思い出す過程により、集中が別方向に向いてしまったことだと考えられた。

（ええい、ままよ）

そう決意する。

見透かしたように、彼女の言葉はその直後にやってきた。

「えーと、ジャン・スティールで間違いない？」

「あ、はい」

「住所はアレスハイムでいいんだな？」

「あはい」

「これは元々か？　この街で生まれ育ったっていう？」

「いえ、元々はその、コロンの街で過ごしてまして、十八になった

ので騎士になるべくここに越してきました」
ほう、と唸る。
ふう、と胸を撫でた。
「いい心がけだな。なら寄宿舎でなくとも良いわけだな？」
「あ、いや……共同住宅は結構金銭面で負担になるので、貯蓄が結構キツい事になりまして、ですね……」
「血族の家に転がり込んだわけではなく、共同住宅の一室を賃貸したっていう？」
「あーまあ。肉親居ないんで」
「それは、すまない。悪いことを聞いた」
「いえ、大丈夫ですよ。慣れっこですし」
彼女はそれから少しだけペンを動かして何かを記入した。カツカツと書きこむ音だけが空間内に響き、妙な緊張に包まれる。
彼女は少女だが、それでも大人っぽい言葉遣いだ。そして事務的でもある。
あの時もそうだったが、今回は特に固い口調だった。
だからそのせいで緊張が助長されているのかもしれない。
「まあいい。本題に入ろう」
彼女は言い、そしていよいよと彼は決意する。
「お前はなぜ、騎士に志願した？」
ごくりと喉を鳴らしツバを飲み込んだ。
妙に心臓が高鳴って、耳元で脈動が聞こえるような気がした。
乱れる呼吸を察されぬように息を飲み、彼はようやく口を開く。
「おれは昔、故郷を滅ぼされました。その時に、生き残りだったおれを助けてくれたのが……強くなるという事を、生きる希望を教えてくれたのが、騎士さまだったんです。ケンタウロスの、金髪で、碧眼の……。そして強さの象徴が騎士になったのも、その時でした。だからおれはそれから身体を鍛えて、ようやく今になったんです」
「騎士になって何かをするということが目的ではなく、騎士になることが目的という事でいいか？」

「いえ。おれは騎士になって人の助けになりたいんです」
「具体的には？」
具体的に――横暴すぎる戦火を出来る限り抑えたい。だがそれを成すには個人では到底不可能だ。
ならば街で、困っている人の手助けになりたい。しかし、であればわざわざ騎士にならずとも出来る事。
とどのつまり、困窮。答えは無く、正解は存在しない。
おもわず宙を泳いだ視線を、彼女は狡猾に見逃さなかった。
「つまり、漠然と”誰かの助けになりたい”と？」
その通りだ。
人の助けでもない、確かに村を焼き払うような事を止めたいことは確かだったが――。
彼が助けたいのは、その、強くなった力で手伝いたいのはあのケンタウロスの女騎士だった。今ではサニーと共に騎士になる事で頭がいっぱいだったが、根底にはソレがある。決意し、揺らがぬたった一つの思いだった。
だがそれを言ってどうなる？
寒いはずなのに、額から一筋の汗が流れ落ちた。
いや、だがここで落ちるわけにはいかない。妙な予感だが、次は無い気がするのだ。こと、自分に限ったことだが。
言えば少なくとも何らかの評価につながる。だが言わなければ何も残らない。
そう思い立った瞬間には既に、ジャン・スティールの言葉は紡がれていた。
「ただの騎士に、新米に何ができるかわからない。だけどおれは、手助けになりたいんです」
この平和な世界で。
特に戦争もない、異人種が現れてから特に平穏になったこの国で。
「綺麗事を言っているわけじゃないんです。ただ力があるなら助けたい。誰を、じゃなくて、誰でも……困っている人を。助けを求め

ている人を！」
「……それがお前の正義か？」
「正義……？」
「騎士はいついかなる時でも、どんな場所でも悪に対抗し正義を守る。お前はその魂を守り通せるか？」
「はい！」
気がつけば、ドワーフの少女は微笑んでいた。
また筆を走らせ、簡単に一言二言を記入する。が、やはりその位置からでは何を書いたのかは分からなかった。
「では次の質問。義務教育は受けていたか？」
「はい。コロンの街で受けていました」
「なら読み書きは大丈夫だな。最後に何か質問は？」
「あー、その。お名前を伺っても？」
「構わないが、なぜわざわざそんな事を……」
「おれが騎士になった時に、お世話になるかもしれないんで」
彼女はふんと鼻を鳴らして、また記入する。
そこでペンを床に叩きつけるようにして彼女は立ち上がった。机を軽々と飛び越えて、瞬く間に座るジャンの目の前へ。
「立て」
言われるがままに起立。すると、彼女はボディーチェックでもするように肩、腕、脇、など身体中に手を添わして検査する。
「座れ」
次いで、少しだけ自分より小さくなったジャンの瞳を覗き込むようにした。
蒼と、琥珀色の瞳。そして端正に整った、幼さが残るというか幼さ前回の顔。そして石鹸の香り。それが近づき、赤面し始める頃に彼女は離れた。
「異常はないな。視力も、普通よりはいいくらいだ」
「あ、ありがとうございます」
「体つきも割合にがっしりしてるし。どこかで鍛えてたのか？」

「え、ええまあ。炭鉱とか、鉱山とかで六年間働いてました」
「ろ、六年!?　というと、十二からか？　すさまじいな……」
ほうほうと唸りながら、彼女は何度も彼の身体と顔とを見比べた。
ジャンは何やら恥ずかしくなって、頬が熱くなるのを感じながら、されどどうしようもないこの状況を甘んじた。
「それじゃあドワーフはもう慣れっこか」
「まあ、すごいお世話になりましたし」
「そうかそうか、いやー、立派だな。十八で、ねぇ。……あー、そうか！　お前、あの時の少年か！　ボーアの時の！」
「はは、あの時はお世話になりました」
そうかそうかと、今度は力一杯両肩を叩き続ける。うれしそうに、もう身体検査や面接なんて忘れてしまったように彼女の顔は、興奮やらなにやらで上気していた。
この上なく嬉しそうに笑顔を作って、まだ若者も捨てたもんじゃないと褒めちぎる。それから頭を鷲掴みしてぐわんぐわんと振り回すと、今度はつかれたのか、机に腰をかけた。
小柄な身体は床から足を離し、ぶらぶらと振り子時計よろしく揺れる。
「あの時のみんなは結構褒めてたぞ？　警ら兵だってビビってたのに良く立ち向かったって。ただユーリア……あのケンタウロスだけは『無謀だ』って怒ってたけどな」
「いや、でも本当に褒められたもんじゃないですよ。ただ、その場の勢いで行っちゃっただけですし」
「だがそうするにも勇気が要る。お前には、まずそれがあるって事だけでも誇るべきだと思う」
ぴょん、と机から飛び降りて、彼女は腰に手を当てる。騎士のポーズはこれが一般的なのかおと思うほどに、騎士はこうやっていた。
「ジャン・スティールと言ったな」
「はい」
「私はミキだ。検査は以上。最後のお前に配慮がないのは申し訳な

いが、このまま第二次試験に移行する。準備はいいか？」

名を名乗ってくれた。

それは一概には言い切れないが――騎士である彼女がこの青年を認めた。そうとも取れるものであり、そして彼女自身はそういった意味合いで名前を教えていた。

この青年には期待できる。

そして、こういった若者こそ騎士にしてやらねばならないとも思えていた。

それはとても平等じゃないし、私情を挟むというか完全に私情だ。が、恐らくこの調子ならば、普通にやっていれば合格するだろう。

彼女はそうとも思っていた。

「はい！」

気持ちのいい返事を最後に、第一次試験は終了を告げた。

体力検査

圧倒的だった。

「くっ、駄目だみんな退けッ！」

木剣を構える男が悲鳴のように仲間に命ずる。そして呼応するように、彼らは出会って僅か一、二時間やそこいらであるのにもかかわらず、それだけで前に出ていた二人は地面を弾いて飛び退いた。

コンビネーションはこれまで前に出た組（グループ）よりも抜群だ。旧来の友と組んでいるような戦いぶりである。

しかしそれはあくまでも”素人”にしては、だ。

鬼を前にして、それが通るはずがない。

「良い判断。六十点」

切迫する真っ赤な拳。燃えているわけではなく、血に濡れているわけでもない。肌の色素が濃密な緋色なのであり、そしてそれは腕のみならず全身がそうであった。

そして強打。

志願者、その三人組のリーダーのみが装備する胸の青銅器は音を立てて粉々に砕け散った。

――失格。

これはそういう試験だった。

集まった総数一〇〇余名が二から四名のグループを作り、その中で一人のリーダーを決める。

決定した代表者は木剣を人数分、そして青銅器と、それを括りつける紐を担当試験官まで取りに行き、それぞれが装備する。

そしてそのグループは、いつぞやの鬼族（オーガ）の女騎士との戦闘が強いられた。

一太刀を入れる、あるいは五分間逃げ切れば志願者の勝利。試験続行。

だが五分内でその青銅器を破壊された時点で無条件に受験資格が喪失する。つまりは落第だ。

あの身体検査、面接はこの戦闘を行う際に著しく障害があるものを省く為のモノだったのだろう。今回は奇跡的、というか当たり前にそれが居なかっただけだ。

この体力検査で”ふるい”にかける。

見ているだけでもよくわかるが、圧倒的過ぎる敵を前にして、逃げ出さずに五分間を守りぬく事は酷く困難だ。だから敢えて攻めに転ずる手段を選ばざるを得ないが、攻撃の隙を狙われて撃沈。

既に落第した十数組はみながそうだった。

そして体力が切れて戦闘を強制終了させられた者も多数。

まだ十数組残って居るが、指名は殆どランダムであるためにいつ呼ばれるか分からない。緊張が血流に乗って、痛む下腹部が少しだけ気になった。

「サニーちゃんが心配？」

無意識に零れるため息を聞いて、トロスが尋ねた。

サニーは今、珍しくジャンの隣に居ない。それは、仲良くなったらしい蜥蜴人（リザードマン）の娘が一人ぼっちだったからだ。最初は四人組はどうか、という提案を彼女がしたのだが、

『人数が多すぎると逆に不利になる可能性が大きい』

『素人ならなおさらだ』

ジャンとリザードマンから出たその意見が見事に合致したために、今ではその右腕、右足に鱗と鉤爪を持つその娘『クロコ』とサニーが、そしてトロスとジャンがそれぞれ二人一組で組んでいた。

少し寂しい気もしたが、こうやって成長してそれぞれ自立するのが当たり前なのだと彼は思う。

そしてまた、もし合格したらこれでサニーにも友だちができる。

これは嬉しい限りではないか。

「心配だが、あのクロコって娘。中々やるぞ、アレは」

「爬虫人はそもそも身体能力が高いらしいけど、それとは別に個人

の強さでって事？」
「ああ。まず立ち振る舞いが経験者だ。据えた腰、歩き方。無駄のない修練されたそれだ」
さらに右半身が鱗で覆われている。鉤爪もあるところを見るに、攻撃の主体となる部分だ。そして青銅器の着用は原則的に右胸であり、代表者は彼女。ならば、いくら鬼だとしても手加減をしながら掻い潜るのはある程度の難易度を誇るだろう。
死ぬ気で逃げれば、あるいは攻めれば五分はもつ。ジャンはそう評した。
もっとも、彼自身も素人だからあまり信ぴょう性のある評価とは言えないのだが。
「なら僕たちも負けてられないな」
「その通りだ。今はおれたちだからな」
――気がつけば呼ばれていたとある一組。
トロスとの話に夢中になっていたが、そろそろ順番が来るだろうと思って戦場と化すちょっとした空間に目を向ければ、そこにはまだ二人組が立っていた。
そして試験官の鬼も動きを止めていて……。
「五分経過。合格」
人間と鳥人（ハルピュイア）の組み合わせ。その二人は暫くの間、言葉の意味を理解できていないような顔でそれぞれ見合わせていたが――実感が湧いた。そんな風に笑顔を作って、両手に作る拳を空高く突き上げていた。
「や、やったァッ！」
「あはは！　良かった……！」
腰が抜けそうになる鳥人の肩を抱いて、彼らは鬼が示す方向――城内へと進んでいく。
まるで勢いがついたのか、あるいはコツを掴んだのか。単に彼女自身が見込みがある者には手心を加えているだけなのかもしれない。

そこからの合格者は徐々に数を増して行った。
だがそれまで十数組が続き、合格するのは約半数。城内へと向かったのは三十人に満たない数である。
そして残るのはいよいよ、サニー組とジャン組。この二名で、
「そこの女子二名。来い」
どうやら随分と運に見放されているようだと確信したのは、その時がきっかけだった。
「はい！」
サニーが木剣を手に提げて前に出る。クロコは手ぶらで、そして――青銅器を付けずに出てきた。
何かがおかしい。その異変に気づいたときには既に、サニーの胸にはクロコが付けていると信じていたソレが装備されていた。
ジャンがそれに何かを思うよりも早く、鬼は指を鳴らし、その靭やかな腕を腰に構えて敵を待った。
「試験開始だ」
――言うと同時にクロコが弾けた。
地面を蹴り飛ばし背後へと送る。まるで地面が高速で動いているかのように、滑るように鬼へと肉薄した。
腕をふるう。鉤爪が、空気を切り裂いて鬼へと迫った。
顔面に襲いかかる爪を寸でで避ける。頭を下げれば、刃は虚空を切り裂いた。同時に彼女は体勢自体を低くする。初めての先制攻撃に怯む間もなく、手馴れた様子でクロコの懐に潜り込んだ。
その直後に迫る膝先。鱗が逆巻く蹴りが鬼の腹部目掛けて撃ち上げられる。またもや顔面に吸い寄せられる攻撃は、さしもの鬼も予想出来なかったようだ。
握った拳を解いて、前屈姿勢を無理やり崩す。大地に寝転がるようにしてやや仰向けになると、水面に浮かぶような体勢で大地を蹴った。
だが、その行動は”読まれて”いた。
クロコの陰で全力疾走し、命からがら背後に回り込んでいたサニ

ーが木剣を構えて待ち構える。それに気づいたのは、既に無防備な腹に木剣が振り下ろされた瞬間だった。

「ていっ！」

ペチ、と木剣が触れる。

それからややあってサニーの元を通過した鬼は背中を地面に擦りつけて停止した。

ただでさえ静かだった空間が、より静寂になる。

落第組は愚痴ることをやめて彼女らの様子を伺い、息を殺した。

そして鬼は何事もなかったように立ち上がり、身につけている革の胸当てと腰巻についた汚れを軽く払う。彼女は簡単にそうして、やがて二人に対峙した。

「なるほど、作戦勝ち。合格！」

「やったー！」

嬉しそうにぴょんぴょんと跳ねるサニーを微笑ましく見守るクロコは、それから促されるよりも早く彼女を城内へと誘った。その最中に大きく手を振ってくるサニーにジャンは返してから――この上無く大きく息を吐いた。

随分とレベルの高い戦闘のような気がした。

いや、通してみれば相手の油断を誘っただけなのだ。だが、少なくとも鬼を止められるという、実力がなくても相手にそう思わせる態度を示したことが偉大だ。間違いなく強い。彼は認めた。

同時に――なぜよりにもよってあの組の後なんだと、嘆かざるを得なかった。

あの、合格して当然だというような態度。感慨もなく城内へと引っ込んでいった潔い、格好良く思える姿。

こちらは持ち前の体力で五分間逃げ続ける覚悟をしていたのに……決意が揺らぐ。

少しだけ試したくなってきた。

気持ちはいつでも前向きだ。

胸の青銅器を指先で触れながら、自分だけは攻撃を受けていない

と再認識しながらも。
だがここでとち狂うわけにはいかない。負けても勝っても評価につながるのならまだしも、負けた時点で落第だ。個人ならまだしも、トロスを巻き込んで。
許されない。
よし、逃げよう。
彼はそうやって自分を正当化してみせた。こればかりは得意なので、人知れず得意げな顔でトロスの肩を叩いて合図した。
「なりふり構わない。作戦通りだ。いいな、トロス」
「わかってる。君ならそうしてくれると思った」
「落ちても恨みっこナシってのはおれの言い訳だけど、それもいいか？」
「構わないさ。もうこの時点で運命共同体なんだから。姉さんにどやされるだろうけど、もう心は決まってる」
「いいやつだなお前――」
「――私語は謹んで！　最後、来い！」
ジャン・スティールの体力検査は、また三〇分ほどの間隔を開けてようやく開始した。
最後に回してくれたのは、おそらくミキなりの配慮のような気がしてならなかった。
ともあれ、全てを見学できたのは良くも悪くも良い判断材料になったのは確かだったのだが。

前に走りだせば良い。
そう判断して動き出そうとしても、どうしてもあの鬼の機動力故に叩き潰される未来が見えていた。
なら後退するか。
そう考えても、トロスを打ち破って投げて、彼もろとも吹き飛ばされる事態は簡単に予想できた。
自分にできる全てのことが、彼女には防がれてしまう。

彼女と同じ立場にたって、彼はそれをようやく理解できた。
頭の中での作戦が瓦解していく。その音を耳にしたのはその瞬間の事だった。
体力に自信があったはずだが、僅か一分足らずの時間で息が上がっていた。顎が上向く。空を仰ぐ。
そうなる理由は、慣れぬ環境で緊張したせいで動きに無駄が多くなるのが主である。
「スティール！」
トロスの合図。ジャンは勢い良く横転して、頭上から降り注ぐ強烈な殴打を避けてみせる。受身をとって流れるように立ち上がり、すぐさま走りだす。その後を追おうとする鬼の前に立ちふさがるのは勇敢なトロスだ。
「ふらふらと避けて、あんた、それでも騎士志願！？」
騎士になりたいから逃げてるんだよ！
叫びたくてもその余裕が無い。口は今や、呼吸をするためだけの器官と化している。
そしてまた、彼女がそう声を荒げたのは初めてのことだった
理由としては、ミキから随分と色好い評価を聞いたからだと思う。あるいは、あの上っ面の勇敢さを覚えてくれていたからだろうか。
それは非常に嬉しいことだが、こと今回に限っては忘れていて欲しいところである。
「スティール！」
「あい、よ！」
トロスの脇を抜けてジャンへと切迫。息も切れ切れで動きが鈍る。ジャンは振り返り、いよいよかと覚悟した。
木剣を構えて待つ。鬼は拳を振り上げ、流れるような軌道で滑るように彼の眼前、懐に潜るように深く踏み込んだ。
「逃げるなんてするから――」
振り下ろされる拳。そして触れる木剣の腹。それぞれが触れ合い、軋んだ音を立てて、

「くっ！」

木剣は呆気無く、悲鳴を上げて二つにへし折れた。が、拳は未だ勢いを持って彼の胸元へと迫る。ジャンはその振り下ろされる拳に手を伸ばして、触れる。

掴む。

背を向ける。

彼女の足の間に踏み込み、伸ばされた腕を肩に乗せた。

体重が背中にかかる。女性特有の柔らかさは、残念なことに胸当てやらに遮られ、何よりも疲労と緊張と、半ば脊髄反射的な行動ゆえに感じる暇もなかった。

少なくともジャンよりは筋力があるはずだと思っていた。身長は大体同じくらいだが、失礼な話少しだけ彼女のほうが重いと思っていた。が、それは幻想だ。

彼女の身体は簡単に持ち上がる。前屈すると肩に乗せられる腕を視点にして、くるりと一回転した。

身体は重力に則って地面に吸い込まれるように叩きつけられる。背中を打ち、驚いたように目を見開きながら、肺の中の空気を全て吐き出したようにむせ込んだ。

一太刀……ではなく一本。入れたには入れたが、カウントされるかは不明だ。

あまりに無防備すぎる体勢は衝撃故に身体を痛める。だから最後まで握っていた腕を自分に引きつけるようにしてふわりとした着地を促し、それはある程度成功した。

ジャンは腕を離して少し離れる。

彼女は驚いた顔のまま。トロスは意外そうな顔で後ろから、横に並んだ。

彼がしたのは柔術だ。倭国と呼ばれる極東の島国に伝わる徒手、あるいは短い武器を用いて攻防するさいの技法を中心とした武術だ。

やがて鬼は立ち上がり、ぼそりと漏らすように呟いた。

「四分二〇秒……経過した時間は」

「はは、窮鼠猫を噛んだか」
トロスが冗談っぽく言った。
「火事場の馬鹿力でもあるな」
ジャンも冗談っぽく言った。
鬼は、どこか見直したような。だけどどこか怪訝そうな、疑うような目で彼へと手を差し伸ばした。
「合格だ。ジャン・スティール。そしてトロス、だったな」
手を握り返す。視線を交わし、じっと目を見据える。真っ赤な肌に、その琥珀を埋め込んだかのような瞳は妙に綺麗だった。
「わたしはシイナ。今回の試験、合格することを祈る」
「ありがとうございます」
深く頭を下げると、なにやら小さな笑い声が漏れるのを聞いた。
顔を上げれば、微笑ましく微笑みを作るシイナの顔があった。
「このまま城に向かえば女中（メイド）が案内してくれる。日程としてはこれから昼食休憩後、それぞれ個人ごとに適性検査ね」
鈴が鳴るような声。穏やかに彼女は説明して、それからジャンらに背を向けた。
「わたしは落第生の相手をしてくるから、行ってなさい」
そうして、第二次試験は終了を告げ、束の間の休息が開始した。

適性検査

昼食には広間のような場所があてがわれた。

巨人が出入り出来るほど大きな扉から中に入り、メイドに案内されるままに近場の部屋の中へと入る。その客間は数十人が入ってもまだ余裕があるくらいの広さを誇り、その中心には長机が鎮座する。

その机には無数の料理が並んでいた。パンやスープから始まり、蒸し焼きにした肉をスライスしたものや、魚の丸焼き。サラダからデザートのプリン、ゼリー、ケーキ類など、まるでこれまでのご褒美のように滅多にはお目にかかれないそれらがある。

既に中で待機していた者たちは食事を開始しており、ジャンらも入室時にほんの少しだけアルコール分の入ったぶどう酒がメイド達から渡され、それを口に含んでから少しだけ肩を落とした。

気が抜けた、というのが正確かもしれない。

他の志願者がわいわいと試験を忘れたように談笑し、料理に舌鼓を打つのを見ながらほっと息を吐いた。

トロスは既に料理を取りに行っている。対照的に、ジャンは壁に背中を預けるようにしばしの休憩をとっていた。

緊張ゆえの疲労だろうか。大して動いていないのに、妙に疲れてしまった。

サニーもクロコと楽しそうだし、トロスは料理に夢中だ。これで昼食休憩時間分はゆっくり休めるだろう。

「食事はお気に召しませんでしたか？」

リラックスできるようにぶどう酒を渡したのだろう。彼はそれで喉を潤していると、不意に声がかかる。扉付近で待機していたメイドの一人だった。

普通の人間だ。動きにくそうなエプロンドレスを着て、頭には白いレースがついたカチューシャを身につけている。長い黒髪が特徴的な、東洋系の女性だった。

「ああ、いやそんな事はないですよ。ただ緊張と疲れで、喉に通らなくて」
「それでは他に食べやすいものをご用意いたします」
彼女はそう言って丁寧に頭を下げる。背を向けようとするメイドを、ジャンは慌てて引き止めた。
「ちょ、ちょっと！　結構ですよ、結構です。わざわざそんな……」
メイドは振り返る。努めて無表情で、それでも、と食い下がるように言葉を返した。
「第二次試験合格者である皆様方には一時間後に控える最終試験に備えてリラックスしてもらわなければなりません。私たちはそうするための仕事を命ぜられていますので……その、困ります」
言葉が続かないのか、思いつかないのか。彼より歳上であるだろう彼女は気まずそうにやや俯いてそう告げる。メイドなりの世話焼き根性かと思っていたが、どうやら皆が何かを口にしないと怒られるらしい。気難しい職業だとジャンは思う。
究極的にはリラックスしていれば良いのだろうが、そこらへんはさじ加減だ。
ともあれ、何かを食べなければ彼女らの迷惑になってしまうらしい。そこまでして拒否をする理由があるはずもないジャンは、苦笑して頷いた。
「わかりました。手を煩わせたようですみません」
「いえ、こちらこそ……もしよろしければ料理をお持ちします。何がお好みでしょうか？」
両手を前に組み控えめな態度な彼女は、妙に親切にそう言ってくれた。
それは嬉しい提案だったが、ジャンは資金を持ちあわせては居ない。チップを要求されても無い袖は振れないものだ。
「あ、いや。そのくらいは自分でするんで。ありがとうございます」
やんわりと拒否してみると、メイドはそこはかとなく残念そうな顔をした。一体なんなのだろうかと思いながら会釈をして、背を向

ける。目指すは長机だ。

まず空の皿とフォークを取る。ひとまずパンを一つ拾い、それから適当に、彩色を気にしながら、バランスを考慮しながら、サラダ、肉、魚を一通り摘む。青年の昼食にしてはいささか量は少なめだったが、ただでさえ食欲が無いのだから十分だろう。

周囲は依然と歓談を続けている。トロスは遠征して遠いところの料理を漁っていて、やはりサニーはクロコとのおしゃべりに夢中だ。寂しい気もする。だがどこか解放的な、清々しい気分になる。

一人は新鮮だ。

たまには良いだろう。

サニーは既に魔法を自覚しているから合格は確実だし、クロコ、トロスは分からないが……なるようにしかならない。それは自分だって同じだ。

定位置にしつつある壁際に戻って、彼はまずサラダを口に運んだ。グラスは指に挟んで床に対して水平になっているが空だから問題はない。

「んー、まんま野菜だな」

自然の味だ。草というわけではないが、ドレッシングをかけなければ特別旨いというわけではない。ドレッシングをかけ忘れたが、わざわざ机まで戻るのは面倒だ。彼はサラダを食べきり、魚を口にする。

好きな食べ物は最後に残す主義である。が、その魚は思いの外美味かった。程よい塩加減。脂が乗り、疲れた身体に染み込むような味だ。癒される。活力が与えられるようだ。

こちらを残せばよかったと思う。最後に口にした肉は、味の濃いものの後だったせいか、妙に薄味に感じた。ハムよりは歯ごたえがあるが、それだけだ。

「ご馳走だったな……」

一通り食べてみた総評は、まあ美味かった、である。

炭鉱や鉱山での食事はパンや、ウサギや蛇の肉が主だったから牛

は新鮮だったし、中々食べられるものじゃなかった。野菜だって同じだ。魚も。

この街にきても、騎士になるまで資金が幾ら必要なのかわからないから散財は出来無いという理由で、食費は真っ先に削られた。それでもサニーが不服を言わない程度には材料を揃えたし、調味料だって適度に購入した。が、毎日肉を食べられるわけじゃないし、買い物を頻繁にするわけにもいかないから生鮮食品はそもそもあまりなかった。

もっとも、それでも無いなりに食材は買いたしたから、ただこの城での食事は中々お目にかかれない手の込んだものばかりだ、という評価につながる。

だからどうというわけでもないのだが。

ただぶどう酒だけは気に入ったから、できれば愛飲したいものだった。

それから暫くの時間が経過した。

まったりとする雰囲気。

些細なアルコールが回ったせいか、周囲の朗らかさに溶けこむようにジャンは微笑を作る。気分が良かった。

「お気に召しましたか？」

先ほどのメイドが近づいた。

嬉しそうな笑顔でそう訊いた。

「はい。中々食べられないものばかりで、とても美味しかったですよ」

他の機会であればもっと堪能できたことだろう。スープに、シチューやらなにやら。まだ食べてみたいものはたくさんあるが、どうにも食指が伸びない。食べる気力がないのだ。

下手に食べ過ぎて、適性検査で不備が出るという可能性を無自覚に心配しているのかもしれない。ともあれ、こういった立食パーティーのような経験は雰囲気だけでも味わえて良かったというものだ。

「それは良かったです」

彼女はやはり笑顔で頷いた。可愛らしい、まだあどけなさが残る少女らしい顔だ。歳上かと思っていたが、もしかすると同年代かもしれない。もしそうなら、その歳でメイドなんて立派なものだとジャンは思う。

「ジャン・スティール様、でよろしかったでしょうか？」

胸の前で指を絡めるように手を握る。百面相と言うべきか、表情豊かなメイドは、今度は少し不安気に眉尻を下げていた。

「ああ、はい。そうですけど……」

「最終試験、開始致します」

軽く頭を下げて彼女は背を向ける。その最中に無表情に戻る彼女は、その後一言も口にせずに歩き出した。その背中で、ついてこいと言わんとしていることは、さしものジャンにもすぐに分かった。

最後尾が二度あった。しかし最後の最後で、一番最初とはどういう了見なのだろうか。

おそらく適性検査は最初の面接のような形で行われる。そして面接に限るものではないが、試験の順番で最初の人間というのは、判断基準にされる事が多いのだ。

最も大切だろうと思われる最終試験での順番が、最も避けたかった最初であるのは、今回彼にとって良いのか悪いのか、正直良くわからなかった。

――広い廊下を歩き、やがて玄関のフロアにやってくる。巨大な扉から真っ直ぐ続く紅い絨毯は、王座の間に続く道だ。

そしてメイドは、その上を歩き始めた。

左右の壁には扉はなく、向かう先は王座の間。

ジャンの緊張が瞬く間に高まったのは、言うまでもないだろう。

そして思い出す。この試験は、ただの騎士団養成学校入試試験ではないことを。

”王立”騎士団だ。王が、この国が支援し創りだした組織である。ならば責任者は王であることは明白。

その面接官に王がわざわざ出向き、それぞれ品定めをするのは当然の権利である。それを予想はおろか、考えもしなかったのが不思議なことだった。

やがて、自分より一回りも二回りも大きな両開きの、立派な装飾がなされる扉が行く手を遮った。

「こちらの準備は整っております。扉はご自分でお開け下さい」

手を前で組んで、扉の脇に彼女は立つ。おそらく、一番初めに彼が試験を受けることを知っていたからわざわざ親切にしてくれたのだろう。ありがたい心遣いだ。

「ありがとうございます」

「ご健闘をお祈りします」

「……はい」

緊張を隠せず、表情を強張らせた。あの昼休憩で緊張しっぱなしだったら、確実に頬の筋肉がこむら返りしていたことだろう。

コンコン。

ノックをしてみる。

『どうぞ』

男の声が返事をした。

ドアノブを捻り、扉を押し開ける。

彼は重いソレが作りだす隙間に身体を滑り込ませるようにして、中へ侵入した。

「失礼します！」

荒げるように挨拶をする。深く頭を下げ、顔を上げる。

紅い絨毯は長く続く。中に入ったというのに、王座は数メートル先の段差の、さらに先にあった。

先ほどの客間よりも遙かに広い空間、その王座の奥の壁には龍の装飾がしてあった。金でそれを形作る、見栄の権化であるようだ。が、城なのだから当たり前だ。一国の王が住まう城をわざわざみすぼらしく飾るわけがない。

この豪華絢爛が唯一許されるのが、この城というものだ。

そしてその空間は、一言で言えば荘厳だった。
二言で言えば、すごく荘厳だ。
ジャンは歩き出し、段を上がって王の前へ。
二つある王座の内、その一つだけが埋まっている。白髪頭に冠を乗せた、白い顎鬚を蓄える老人。『レヒト・アレス国王』その人だ。
王座のやや手前には、長槍ではなく剣を装備する甲冑姿の男が両脇に二人づつ並んで待機している。
ジャンは、王座の数歩手前で立ち止まり、片膝をついて頭を下げた。
「今日(こんにち)は下賤な民の為、騎士を志す我らの為に時間を割いていただき、大変光栄に存じます」
あまりに打算的すぎただろうか。
だが一番最初ということもあるし、代表として挨拶をして置くのは常識だろう。
それとも言葉が何か間違っていたのだろうか……返答の無い挨拶に、ジャンは不安になってくる。
恐る恐る下げた頭を上げてみる。
王は肘置きに肘を立てて、頬杖をついていた。
目が閉じていた。
王は寝ていた。
「……！」
そうか、試しているのか。
ジャンは直感的にそう考える。
コレをどう凌ぐか、王はその見事な回答を望んでいる。
そういった思考に落ち着いた刹那に、王の頭は頬を穿つ拳から落ちた。
肩がビクリと跳ねて、何が起こったのか理解できていないような眼で周囲を伺う。ソレに倣って、近衛兵は視線をジャンに向けてやる。
「よ、よく来た、少年よ」

そして、寝起きのようなしゃがれた声が彼にようやく返される。
ジャンは心のなかで深く嘆息した。
――この国はこれで大丈夫だろうか。
「ふむ、ジャン・スティールだな。話は聞いている。先日、我が騎士団が駆け付けるまで襲撃犯を抑えてくれていたとかなんとか」
「ああ、いえ。滅相もないです。ただ調子に乗ってやったことなので……」
「勇敢な行いには変わりがない。基本的な心理検査、動機は既に聞かれているだろうし、貴公も疲れているだろう。手短に終わらせる」
「……はい」
思ったよりも適当なのか。あるいは思いやりあふれる行動なのだろうか。
少なくとも今のところ、王の威厳というものはない。いや、確かにあることはあるのだが、いかにも王で、逆らえばもう命はないというくらいに厳格な人を想像していた彼にとって、その存在はあまりにも親しみ易すぎた。
もっとも、外交の面を考えればその方が都合がいいのだろう。国内での信頼度もそうだ。
「十八歳以上で、読み書きができ、心身共に健康。募集要項にはその他に何が記してあったか覚えているか？」
「特殊技能の有無……つまり魔法を扱えるか、否か。ということです」
「うむ、そのとおりだな。基本的に、魔法が使えるか使えないかは先天的なものだ。そしてまた、使える者でも力の存在に気づいていない者も多い……ただ魔法があっても単純な肉体面やその他が未熟であった場合は我が騎士団を諦めてもらいたい所存だ」
「はい」
「貴公がここに居るということは、全ての試験をクリアしたという事だ。騎士を目指すに値する、その最低限の位置には立てているという事だ」

だが一番の問題は、ここからなのだ。

「そして貴公が魔法を扱えれば……その素質があればめでたく、騎士養成学校への入学が許可される。余談だが、学校生活の二年間で魔法が扱えなければ残念ながら騎士にはなれない。最大で二年の留年が許可され、それを超えた時点で退学処分だ。入学するには、また春の試験を受けなければならない」

「……はい」

王が近衛兵に目配せをする。

先ほどの、寝起きのどこか間の抜けた姿はどこへやら、王たる尊厳は果たして保たれている。

合図された近衛兵は跪くジャンの隣に移動し、屈むようにしてジャンに声を掛けた。

「君、これを」

手渡されるのは、白っぽい石だ。石英のようだが、それにしては妙に白すぎる、氷のような石。

手触りは滑るようであり、感触は加工された水晶そのもの。だが自然な、どこか無骨な丸さを見るに加工はされていないはずだ。

そしてジャンは、その石を知っている。

昔みたからというものではなく、仕事で扱っていたからだ。

とある一つの鉱山。特殊な道具を作る場合にのみ用いられる、特殊な鉱物。

――魔石と呼ばれるのは、ちょうど彼が手の中で確認しているその石だった。

色彩は無数にある。環境によって色が異なり、魔石がもつ特徴も色ごとに変わる。

魔石というのは、魔力という不思議な力をもつ石の事だ。古くからある、希少ながらも様々な装飾や道具、あるいは武器に加工して使われている汎用性の高い鉱物。それが使用された道具は全て特殊な効果、効能を持つようになる。

本来肉体に紋様を刻まねば使用できない魔術を、道具に刻むこと

で”一部”を利用できたり、またそういった魔術の効果を持つように魔石を加工し、ただ身につけるだけで身体能力が強化されるなど。

単なるお守りとして使われることも多い鉱物だ。

そしてこの白い魔石の特徴は、魔力伝達に過敏であること。

――魔術は妖精の力を利用して行われると言われている。

一人が一つだけ持つ魔法は、その魔力というものを利用して行われると言われている。

そうなれば、魔法が使える者は魔力を持つのだ。

となれば、その魔力に、魔石が反応する。無意識でも潜在的にそれを持つのならば、石は必ず反応する……それを渡された時点で、ジャンはそれを理解した。

「石が反応した場合、その色によって魔法（のうりょく）の傾向を掴むことが出来る。例えば赤なら炎、熱、青なら水、氷雪……白なら光、あるいは大気を……なのだ、が……」

アレスは明らかに困惑していた。

また、周囲の近衛兵も毎年の光景をいつものように見守っていたのだろうが、ジャンは思わず漏れたのだろう当惑の唸り声を聞き逃さなかった。

そして彼自身も、少しばかり困っていた。

――石は輝いている。

この時点で合格は決定した。

それは嬉しいし、今にも両手を突き上げて喜びたいくらいなのだ。

色なんて、魔法の傾向なんて正直なところ、どうでもよかったのだが……。

「透明の輝きとは……前例に無いな……」

アレスが唸る。

そう、石は透明に輝いている。意味が分からないだろうが、そのままの意味だ。ジャンだって意味が分からない。

ただ、透明だと判断できた理由は――この白い石が白く輝けば眩く直視できないだろうが、今はただ”明るくなっている”としか説

明できない所にある。濁ったような白い魔石が、存在感を示したようになる、たったそれだけの反応。

輝いていることには間違い無いのだろうが……。

「ふむ、面白いな。完全なる未知、何者にも、これまでの全てに染まらぬ新しい力というワケだ。だが例外的（イレギュラー）である分、使いこなすことはもちろん、己がどのような魔法を持っているのか自覚することすら難しいだろう」

アレスは、嬉しそうに口角を釣り上げて、眼を細めて、頬を上げて、顎鬚を撫でた。

それから、周りには近衛兵しか居ないというのに、声を少しだけ小さくして、

「貴公の学校生活、その成績や評価によって考慮しよう。貴公には、何か特別な力がある。そんな気がするのだ」

異人種がこの世界に現れてから生まれた、魔法という力。その時はそんな考えられもしない、ありえない特殊な力に多くの人間が目を白黒させ、あこがれ、称えた。

そして一五〇年が経過した今、その力は希少ながらもごく常識的に存在している。

ジャン・スティールはその中で唯一生まれた、魔法の中でも異例的なものである――より異人種に理解があり知識がある王がそう評した。

お墨付きだ。

誇るべきか、戸惑うべきか。少しだけ困った後、ジャンはまた深く頭を下げた。

「ありがとうございます……ですが、大丈夫です。おれはこの魔法を使いこなし、必ずやこの国の為に尽力致します」

つまりは魔法を使いこなせなければ国のために働けないということだ。

従来通り、魔法を覚えるまで卒業できないという宣言である。

少し遠まわしだったような気がしながらも顔を上げると、それに

応ずるようにアレスは頷いた。
「相分かった。貴公の言うとおりにしよう」
立て。
アレスはそう言うと同時に、自分自身も椅子から立ち上がる。
ジャンは促されるままに前に進み、やがて彼の目の前へ。国王の、畏れ多くもすぐ眼前へ。
「今日から七日後、試験と同じ時刻に城へ来るが良い。入学式を開催する。制服や教科書は三日以内に合格者の住所に配達しておく。服装は制服だ。荷物は特にない」
王が手を差し出す。ジャンは石を持ち替えて、それに応じた。
がっしりとした老人の、シワだらけの手が彼を包み込む。力強い握手を交わし、それから彼はまた椅子に腰を掛けた。
「活躍を期待しておくぞ、ジャン・スティール」
「あ……ありがとうございますっ！！」
この言葉は、あの握手は、一国民としては異例なほどに光栄で、名誉なことのように思う。国というもの、王という存在をあまり知らない彼でさえそう思うのだから、それはそれは凄まじい状況なのだろう。
彼はそう深く頭を下げてから、振り返る。近衛兵に魔石を返して会釈をしてから、扉へ。
また王へと向いて、
「失礼致しました」
そう挨拶をして、彼は王座の間を辞した。

「おめでとうございます、スティール様」
帰りを待っていたメイドは恭しくそう言った。
のぞき見でもしていたのか、あるいはその雰囲気で察して賭けに出たのか。
なにわともあれ自分のことのように微笑むその表情を営業スマイルだとは思えないのは、自分が純粋なお陰なのだろうかと彼は思う。

――呆気なかった。
思い返せばそうだった。
石は簡単に光るし、体力試験だってなんとか凌いだ。身体検査は論外だ。
それにそもそも、合格したという実感が、全く持ってないのである。眠る頃になれば実感も否応無しで湧くのだろうが、それまではなんだか勘違いしているような気分で、複雑だ。
「ありがとうございます。あのぶどう酒でリラックスできたお陰ですよ」
「あ、いえ……そんな事はございません。スティール様の持たれる実力が全てです」
そんな言葉は不意打ちだったのだろうか。彼女は少し言葉につまり、少しだけジャンから視線を逸らしてそう返す。
「そういえば、メイドさんって騎士団の世話もするんですか？」
少し余裕が生まれた。
だから調子に乗って訊いてみた。
彼女は少し驚いたような顔でジャンを見てから、やがて紅い絨毯を引き返すように歩き出す。彼はその後に続こうとすると、それを見た彼女は歩調を緩めて隣に並んだ。
「そうですね。基本的に騎士団の皆様も敷地内の寮で過ごされているので。私は城内の清掃係なので、あまりお会いする機会はないのですが……」
メイドにも役割というものがある。例えば清掃係でも、どこからどこまでの範囲を。配膳係や、買い出し係、王、后、姫の世話係など。庭の手入れには庭師がいるし、厨房には料理人が居る。それでもメイドの負担は割合に大きいというらしい。
「はは、じゃあ騎士になった時はよろしくお願いしますね」
この城に勤めているのならば、少なくとも今よりは会う機会は多くなるだろう。
冗談っぽく、だがその本心をさらけ出して言ってみると、今度は

吹き出すのを抑えるように口元を抑えた。
「自信家なんですね」
「まあ、そうですかね。でもおれはどのみち、騎士以外には興味ありませんから」
騎士になる。今まではそれしか見て来なかった。
だが今でもそれしか見ていない。
これで学校を無事卒業出来なかったとしても、また入試を受けて、入学して……繰り返すだけだ。
「メリィです」
「……はい？」
「私の名前。騎士になったらよろしくお願いします、ですよね？」
「ああ」
手を、ぽんと打つ。
唐突だったが、どうやら仲良くしてくれるらしい。
これまで友達の居なかった彼にとっては嬉しい限りである。
「ジャンです。ジャン・スティール」
「知ってます」
うふふ、と笑う。可愛らしい少女だとつくづく思う。
サニーにあるようでない穏やかな雰囲気を纏う女の子だ。エプロンドレスが良く似合うメイドさんだ。
女騎士たちが持つクールビューティなものとは大きく違う、それとは別の魅力。
新鮮だった。
この街に来てから、多くのものにそう感じていた。
「それでは、スティール様はここでお別れです」
玄関の扉の前で止まると、彼女は平然と言う。惜しくも、寂しそうでもない。いつでも会えるから大丈夫だと言うような風体で、扉へと促した。
「お友達なら、庭園でお待ちください」
メリィはそう言って軽く手を振った。

ジャンも振り返し、扉に向かう。
彼女はまたこういった往復を繰り返すのだろう。やはりメイドという仕事は忙しそうだ。
そう思いながら、扉を開ける。軋んだ音を立てて、中へと漏れる、彼を照らす光の隙間が徐々に開いてくる。
外に出た。
眩い陽光が、突き刺さるようにジャンへと襲いかかって――。
彼は、天高く両手を突き上げる。
「よっしゃ！」
小さな勝利感。
全てはここから始まるはずなのだ。
だが、この合格を、じわりじわりと心の奥から染み出し始める実感を、彼は感じずに居られなかった。
――最終試験を合格に納めて、ジャン・スティールの入試試験は終了した。

順応の日々

新しい環境での一週間とは、ドギマギと緊張に駆られらしく無くもぎくしゃくしながら過ごしていれば、気がつけば過ぎているという、長いようで短く感じるあっというまの期間である。

そしてまた、新しい人間関係が概ね構成し始める一週間でもあった。

「おっはー」「おはよ」「どうよ、昨日の」「あ、あれメチャいいわ」

なんて、相手の出方を探り合いつつも親睦を深め合う、どこにでもあるような若者の会話が交錯する。

登校する道。往来には、妙に堅苦しい白い制服を着る男女が歩いていた。

学校は城の南東、約一キロほどの距離にあり、学生寮は城と学校の通過点にある。だから、そんな楽しげに笑いあう彼らの様子は嫌でも目に入り耳に届いた。

憂鬱ではない。

むしろ微笑ましかった。

彼も皆と同様に制服をまとい、肩にかけるショルダーバッグには今日行われる授業日程に合わせた教科書、そしてサニー特製の弁当が入っている。どれもコレも、今所持しているもの全ては学校から購入したものだ。

サニーとあわせて、まさか資産の三分の二が吹っ飛ぶとは思わなかった。

「ねージャン？　今日のおべんとは頑張ったからおいしいよ？」

不景気な表情を見たのだろうサニーは、心配そうに顔を覗き込んでそう言った。

ジャンは笑顔で頷く。

「ああ、ありがとう。サニーの弁当はいつも美味しくて助かるよ」

買いだめした米がだいぶ残っているのが不幸中の幸いだった。
寮は家賃も無く、水も使い放題。台所もトイレ、浴場は全て共同だし、男子女子で分かれているが、少しでも出費を抑えたい彼らにとってはそれだけでも上等だ。
そして寮生は、一年生三十人のうち、大体半数ほどがそうだった。
ちなみに学年は二クラスに分かれていて、十五人ずつ。奇跡的にサニー、トロス、そしてクロコともクラスは一緒になっていた。
そしてクラスでも、挨拶するだけの者から日常会話を交わす者が多くでき、立ち位置も整ってきた。
全てが順調に来ている。
少しだけ問題なのは、クラスの半数以上が――異人種という事である。
そしてそういった関係で微妙なギクシャクがあるのは、多くが城下町ではなく、その支配下、支援下にある多くの街や村出身の者が多いからだろう。簡単にいえば、慣れていないのだ。
加えて純粋に異人種に好意を持っている人間も少ない。憧れすら抱いているジャンは、その中では珍しい方だった。
「よっ、スティール！」
「サニー、スティールくん、おはよ！」
クマのように毛深く、ライオンのタテガミのような髪型の男が背中を叩き、その後ろからやってきた昆虫の羽根や、蜂のような触覚と腹を持つ女子生徒らが追い抜いていく。
「ああ、おはようみんな」
そうしてわざとらしい早歩きを、されど勘付かれぬようにクロコはサニーの隣にやってきた。
「あ、クロちゃんおはよっ！」
サニーは親しく挨拶する。クロコもそれに笑顔で応対した。
物々しい右半身を持ち、また見た目相応にクールな彼女はあまり感情を表に出さない。さらに口数も少ないから少し心配だったが、サニーには心をひらいているようだ。

やはり同じクラスに居るのだから、誰かが苦痛に感じる環境を作りたくないと思っていたから、これはいい傾向に思えた。

彼がそう、人知れず満足気に頷くと、

「うん、おはよう。二日の休みがあったけど、スティールに変なことされなかった？」

思わず吹き出した。

「な、ど、どういう意味だよ！」

「そのままの意味だ、色魔が」

「クロちゃん、ジャンはそんな事しないよ？　優しいけど、家事は全然できないから私無しじゃ生きてけない身体なだけで」

「お前が元凶か！」

なぜ大して接していないクロコにこんな妙に傷つく誤解を受けなければならないのかと思っていたが、その誤解をもたらす元凶は身近に居た。

思わずその尖る耳を引っ張ると、

「いたたたっ！」

涙目になって必死に抵抗する。振り回す腕はかくしてジャンの下腕に鋭いチョップをかまして、手を離すと同時にクロコがサニーの頭を優しく撫でた。

「サニー大丈夫？」

心配気に彼女を見守る一方で、キッとジャンを睨み返す。

ジャンはさらに何か返そうと思ったが――外壁に囲まれた校舎、その柵のような門が見えてきた。もう無理だと肩を落とし、彼は為すがままで校舎へ、そして教室へと向かった。

校舎は三階建てで、一階部分は食堂や保健室、職員室などがある。二階部分は二年教室が、そして三階部分には一年教室が並ぶ。規模的にはそう大きくも広くもないこの校舎で一日の大半を過ごすことになる。

まず校舎の昇降口から外に出れば、広大な空間がある。授業時間

中は閉ざされる門が見えるそこは屋外訓練場であり、肉体訓練や模擬戦闘などの授業は主にここで行われていた。

さらに校舎から伸びる渡り廊下から向かえるのは、校舎顔負けの大きな図書館と、その近くには人工的な水たまりがある。正方形に大地を繰り抜いたようなそこは『プール』であり、夏場はここで訓練もするという。

そういった具合に、施設は充実していた。

総数百人にも満たぬ養成学校、訓練学校とも呼ばれるここで、およそ十人前後の騎士が毎年生まれているらしい。大半の者は卒業出来なかったり、あるいは過酷さに堪え切れずに自ら騎士への道を辞退するからだという。

「そうか……じゃあ今週から本格的にって感じだろうな」

食堂で集まって食事を終えた後、それぞれ自然的に解散となる。

サニーとクロコは教室に戻って周囲を巻き込んで和気あいあいとお喋りをしている。ジャンは絨毯が敷き詰められている廊下で、校庭が見える窓に身を乗り出すようにしながら、トロスと談笑していた。

「多分ね。スティールなら大丈夫だと思うけどね。姉さんもそう言ってたし」

――授業内容は、教育というものから六年も離れていた彼にとっては退屈以外の何者でもなかった。

ただ座って、話を聞く。数式を解く、数学という授業もただ延々と公式を覚えるまで似たような問題を解かされるのだ。さらに状況訓練という授業では、あらゆる作戦下で、どのような不測の事態が起こるか、誘発されるか、そこでどのように行動するのがもっとも適切なのか。そういった事を学ぶ。

武具の扱いもまずは机上で習うし、騎馬だってそうだ。

まずは理屈からという考えだ。

だが、そのやり方はジャンに良く合っていた。実際にやってみるにあたって、モノがどういった原理でどう動くのか。武器はどういった事を目的に、どう使われるべきなのか。そういった事を理解し

た上で行うのが一番効率がいい。何よりも身体の負担にならない。
そんな事を考えていると、不意に後ろから気配が迫った。
「スティールくん、トロスくん。何してるの？」
振り向くと、チョロリと細く長い舌を覗かせた女子生徒が立っていた。深い青色の髪を持ち、それを薄めたような水色の宝石が如く綺麗な水色の瞳の女性だ。上着をしっかりと身に付けて居るものの、その引き締まる腹部が、へそがあらわになる。
そして彼女はスカートも、ショーツも着ていなかった。
「ああ、委員長」
言葉に、彼女のすぐ後ろでとぐろを巻く尾がちょろちょろと反応した。
そう、彼女の下半身は蛇である。
彼女は蛇族（ラミア）の少女だった。名前は『レイミィ』。これからの学校生活でクラスの代表となる立場にわざわざ立候補した、立派な女の子だ。
「おれは今何もしてないをしているんだよ」
「へえ、よくわかんないけど」
「まあ普通にトロスと話してるだけだしね。レイミィは？」
「あたし？　そうねぇ、貴方に話しかけたってところかな」
てへ、とわざとらしく舌を出す。
打算的な行動だと彼は思う。
「レイミィは学校に慣れた？　結構、周りの女の子たちと話してるみたいだけど」
「うん、まあね。ただちょっとね、ヒトの男の子が怖いかな」
ヒトが怖い。
それは、これまでの経験や聞いた話でよくあるパターンだ。
異人種は人間の多い場所に好んで住み着く。といっても勝手に居住を構える訳ではなく、移民として普通に転居するように街に済むのだ。そして閉鎖的な場所であればあるほどに外からの人間は珍しく、それが異人種となれば珍しいどころの話ではなくなるだろう。

そして幼い子供ならばなおさら、異人種に対する態度は顕著になる。子供というものは、自分とは違う場所を指摘し弄りたがる生き物だ。

そのあとの出来事は想像に難くない。

一言で言ってしまえば、いじめに遭うのだ。そしてそういった環境にあった異人種はそう少なくはない、というのがこれまで聞いてきた話である。

全てが全て、この国内、城下町内のようにうまくいく話ではない。残念な話だが、一五〇年が経過した今でも、異人種の存在が常識的になっても尚、それが受け入れられる環境は決して多いとは言えないものだった。

「やっぱり慣れかな。でもおれもそのヒトなんだけど？」

「あー、なんかスティールくんて、あんまりそういうの関係無いって感じるの。良くわかんないけど、スティールくんって異人種（わたしたち）でも普通の人間みたいに接してくれるでしょ？　ちょっとの動揺も気後れもなしに。ただちょっと、ぼーっとこっち見てくることはあるけど」

「それは見とれてるだけだよ。だってすごいよ、魅力的っていうかね。おれたちに無いものを持ってるから羨ましいっていうか。もっと仲良くなりたいかな」

「スティールって女好きだよね」

「あ、トロスくんもそう思う？　しかもなんか手馴れてる感じしない？」

「分かる、日常的になってるんじゃないかな」

気がつけばそういう話に移行する。

まだ一週間しか経過していないのにそんな不名誉な称号はいただけないものだ。

ジャンはそれらの声を飲み込む程大きな声を荒げるように、話を転換した。

「あ！　ああ、そういえばさ――この校舎の地下って知ってる？」

そしてまた、不意を突くようなその質問に、それぞれが疑問符を浮かべるように彼を注視した。
「地下？　なにそれ」
「僕も知らない」
うまい具合に興味を逸らせたようだと、ジャンは胸をなでおろす。
安堵の息を吐きながら新鮮な空気を吸い込み、勿体ぶらせるように説明を開始した。
「なんでも地下には、『呪い』が封印されてるらしいんだよ」
「呪い？」
「なにそれ」
「まあ、超ヤバめの魔術みたいなもんかな。それが具現化して、ヒトの形で暴走したんだって。それを地下の一室に封印したとかなんとかって話」
この話の出自はシイナ。あの鬼族の女騎士である。
聞いたのは、入学式であり、そこで挨拶をした際だった。なんでまためでたい日に幸先の悪い話を聞かせるんだと思っていたが、まさかこんな所で役立つとは思わなかった。
今では感謝感激雨あられだ。
「へえ、異人種じゃないんだ？」
「みたいよ。権化そのものって感じかな」
細かいところはよく知らない。聞いた話だからだ。
だからそこらあたりは全てジャンのさじ加減、イメージで語る。
どのみち縁のない話だから、どこまで飛躍してしまっても関係無いだろう。
「でも地下って入り口ないわよね？」
「絨毯で隠してあるんじゃない？」
「あー、それじゃあ捜索は無理ね」
と、レイミィは残念そうに肩を落とした。とぐろを巻く尾もそこはかとなく元気がなさそうだ。
「いや、一応委員長なんだから、むしろ止めようよ？」

「委員長なんだから、危険かもしれない場所を確かめておいて、そこから対策を立てるべきだと思わない？」

もっともらしく言ってきた。

たしか委員長に立候補した時も、他に誰も対抗馬が居なかったのにもかかわらず妙に説得力のある言葉でまくしたてていたな、とジャンは思い出す。

頼もしいと感じられるが、突っ込みどころはいくつか隙間を開けるようにある。警戒すべきか否か、迷ってしまう点だ。

「さすがレイミィ、頼もしい」

ひとまずスルーしておくに越したことはない。

彼女もその返答を流すようにうなずいてから、また改めてジャンを見据えた。

「そろそろ授業始まるわ。遅刻しないように教室に戻りなさいね」

「ああ、ありがと」

と言って、彼女はうねうねと尾をうねらせながら滑らかに前進。割合に速い速度で教室の中へと戻っていった。

――順調だ。

ジャンは改めてそう思う。

人間関係も良好。憧れの異人種も身近に多いし、授業にも追いつける。

だが同時に、ここまで都合よく進むことに不安を覚えた。

また何かあるのではないだろうか。直感的にそう思う。

ジャンはまた窓の外へと身体を向けて、空を仰ぐ。晴れ渡る青空は、いつ見ても心が澄むようで、少し気が紛れた。

「気のせいなら、いいんだがな……」

それからややあって、授業開始の鐘の音が鳴り響いた。

春季の疾風

その日の放課後。

春の陽気に誘われて眠りこけていれば、授業が終わった頃に目が覚めた。

「おー、じゃーなスティール」

「まったね、スティールくん」

可笑しそうに笑いながら、獣人、虫族、植物族は挨拶をして去っていく。やがてただでさえ少ないクラスの中には、その半数程度しか生徒が残っていなかった。

ジャンも、特に慌てるようではないが、カバンに教科書を詰め込み帰宅の準備を開始する。

「ねぇジャン、私たちこれからちょっと遊びに行くんだけど、ジャンも行く？」

と声を掛けたのはサニーだが、振り返ればクロコを含む女子二人が群れをなして彼女の背後にたむろっていた。おそらく仲良くなったお友達なのだろう。一人は頭に大きなハイビスカスを咲かせ、スカートのように花弁を広げる植物族の女性である。

仲良き事は美しきかな――さすがのジャンも空気が読める男だ。ここで「行く行く！」と笑顔で大手を振る愚か者ではない。

「あー、悪い。今日はいいや。また今度な。じゃあみんな、サニーの事よろしく頼みます」

言いながら彼女の頭に手を置いて、冗談っぽく頭を下げる。

彼女らはくすくすと笑いながら、「いえいえ」だの「こちらこそ」だのと親切に返してくれた。

「サニーちゃんのお兄さんって面白い人だね」

「えへへ、まあね。自慢のお兄ちゃんです」

妹のような存在だとは思っていた。だがそれでも血は繋がっていないし、そもそもジャンは人間で、サニーは妖精族（エルフ）だ。まず物理的

にありえないことだが、彼女らも”兄のような存在”と聞いてそう口走るのだろう。
彼は思わず少しだけ驚いてから、納得し、軽く手をあげた。
「それじゃ、また明日」
「うん、じゃーね！」

もう寒さに怯えることも身を震わせる事もする必要がない春。
そして労働の必要もない、一日を過ごして僅かな疲弊すらない夕方というのは懐かしすぎて、ある意味新鮮だった。
ジャンは大きく伸びをして道を歩く。やがて近づく寮の前はスルー。

トロスは姉と待ち合わせをして帰ってしまったから残念なことに一人ぼっちだが、ここを敢えて利用して街をぶらぶらと観光するという手が残っている。特に城周辺には店も少なく民家もあまりないが、だからこそ興味深い。
また適当に店を見てまわるのも良いだろう。いかにも暇人で商売の邪魔になるだろうが、なんにしろ今程に落ち着いていて、なおかつ労働が無い日は無いのだから、ただ帰って寝て潰すのはもったいないように思えた。
「ほー。んっとに、いつ見てもすごいな」
やがて城の前にまでやってきて、思わず足を止めた。
清々しい程に巨大で荘厳。縁のない場所のようで、騎士になればここに仕えることになるのだ。これからは飽きるほど見ることになるのだろうが、それでもジャンは、それから少しの間目を離せずにいた。
そんな事をしていれば、やがて風景の中で動く物体に注意が向く。
それが――不意に空へと高く飛び上がって、こちらに向かってくるものならば尚更だ。
「なっ……えっ、ちょ――」
ただの鳥だと思っていたが、その姿異様に大きすぎた。そして近

づくにつれて、それが翼を大きく広げ楽しそうに空を滑空する女性の姿だというのが見えた。その姿が、ちょうど自分の元に突っ込んでくる事もばっちりと。

空気を切り裂いて、まるで重力によって地面に吸い寄せられているかのような滑空。楽しげに頬を上げて笑みを作っているものの、瞳はまっすぐとジャンを睨み、瞬く間に切迫。

息を吐く暇もなく突風と共に迫り、その四本の趾（あしゆび）が彼の顔面を掴まんと広げられて――。

「う、わ――」

頭を抱えるようにして屈み込む。

直後に鳥人は、暴風をまき散らしながら数メートルほど後方の地面に着地した。翼をバサバサと羽ばたかせて体制を整え、ごく優雅な着陸である。

心臓が破裂する勢いでバクバクと激しい鼓動を繰り返す。

思わずへたりこんでその姿を眺めていると、彼女はくるりと楽しげに振り向いた。

肩に届くくらいのライトグリーンの髪を振って、それからジャンにこれでもかと言うほどの笑顔を向けた。

「ごめーん、驚かせちゃった？　でもじっとこっち見てるジャンくんの方が悪いんだからねー？」

と、まるで自然に名前を呼ぶ彼女にうろたえる。

彼女はそれに気づいたように、そういえば、と続けた。

「あたしはアエロ。ほら、獣人（ボーア）の時に居たの、覚えてない？　ミキもシイナも会ってるって聞いて、どうもズルイなって思ってさー」

楽しげにカラカラと笑う彼女は、大きく胸を反らしていた。そしてそこにもフワフワとした羽毛が顔をのぞかせていて、また豊満な胸が笑うたびに揺れていた。

胸の谷間が見えるような穴の空いた、首を包むように襟がある長袖のシャツを着る彼女は、それ故にその鍛えられ引き締まった抜群のスタイルが浮き出ていた。

だからいささか冷静になったジャンにとっては、存在そのものがあらゆる意味で刺激的であり、眼を逸らさざるを得なかったわけである。そうすると、自然的に無言になり、

「ん、どうしたの？　まだ驚いてる？」

なんて、未だへたり込んでいるジャンへと屈み込んで、覗くように顔を近づかせた。

「あ、いや……は、ははは。驚きましたよ、突然飛んでくるんですから」

自分が情けなく赤面しているのを感じながら、精一杯の虚勢を張る。決して動揺せず、平静を装って対処してみるが――無駄だった。アエロはそれから自分の谷間に興奮している事に気づいて、ははん、と鼻を鳴らした。

彼女は趾（あしゆび）でジャンの腹を掴むと、そのまま被さるように乗りつけた。

「へぇへぇ、聞いたとおり、異人種は全然、平気なんだ？」

「へ、平気ったって、この街じゃみんな平気でしょう？」

「そりゃ年季が入ってる人はね。ジャンくんの歳だと、慣れてても親しくお友達ってのは珍しいよ」

「あー、そうですね……」

クラスの中を思い出せば、彼女の言葉通りなのが分かる。確かにある程度の会話を交わしたりはする。だが一緒になって遊んだり、遊びに誘ったりなんて事は今までなかった。

「今日は一人なの？　いつもあのエルフの女の子と一緒に居るけど」

「ああ、サニーは友達と遊びに出かけて、今日は一人ですよ。暇なもんで、街でもぶらつこうかと」

「へー、それじゃあ」

と、彼女は翼をジャンにつきつけ、羽毛で鼻先をくすぐってみせる。

それが妙に淫靡な行動に思えてしまうのは、彼の意識がそちらに偏っているためだろうか。

「お姉さんと二人きりで遊ん――」
アエロがイタズラっぽい笑顔を向けて、そう口にする刹那。
それをものの見事に雰囲気ごとぶち壊しにして声を掛ける輩が現れた。
「お、スティール、奇遇じゃん」
そんな無作法な声に思わず肩を弾ませる。
驚いたように、肩越しに後ろを振り返り見ると、そこには二人の男が居た。人間の、彼と同じ制服を着る生徒だ。
加えて説明すればクラスメイトである。
獅子のタテガミのように逆立たせた髪が特徴的な者や、長髪を後ろで括る者。共通しているのはジャケットを脇に抱えて、ワイシャツのボタンを胸元まで開ける妙に露出度の高い格好をしていることだろう。
そして一週間過ごしてわかったことだが、異様なまでに異種族に差別的である。
「どしたん、そんなとこで寝そべってて。人外に食われてんの？」
男が言うのは極めて差別的の台詞だ。だが心の底から異種族を恨んでそう口にする皮肉的なソレではない。単なるその場でのノリであり、悪ふざけだ。
百歩譲って、人間同士ならまだ伝わる。あまり良い印象を抱いてなければ笑えるし、友達同士なら縁を切る覚悟で制するか、愛想笑いで済ますだろう。
だが異種族には通じない。
誰も、見ず知らずの人間に、外見が違う、故郷が違うという事だけで馬鹿にされれば頭に来るだろう。
ジャンはだから、その刹那に振りまかれた殺意を機微に察知して――足にタップし、アエロに降りてもらって立ち上がった。
やがて目の高さが対等になる。
――頭に来るのは、異種族が大好きなジャンも同じだった。
「なあスティール、たまには人間と遊ぼうぜ？　お前学校に来てか

らずっと人外に付きまとわれてキツいだろ」
「そうそう、今からアクセ買いに行くんだけど、一緒に行かね？」
馴れ馴れしく肩を掴み、組む。
不快な体温が服越しに伝わり、ジャンは思わず嫌悪した。
作法も礼儀も何もない、恐らく義務教育を経て高等教育を受け、以降の六年間をろくに学ばず無為に捨てたのだろう。なぜ合格したのかが不思議な連中だった。
「キツいのはお前らの方だよ」
ああ、言ってしまった。
大した葛藤もなかったが、いざ口にしてしまうと何かが崩れてしまったように思う。
ケンカなんてしたこと無い。だが胸を焼く怒りは久しぶりだ。
これでクラスでは迫害されるだろうが――構わない。学校にはお友達を作りに来ているわけではないのだ。
何が起こったか分からないように、ぽかんと口を開ける男の腕を振り払って彼らを引き剥がす。
「あ？　お前何言ってんの？　舐めてんの？」
「どんな場所にもお前らみたいなのが居るってわかると、嫌気がさすよ。おれはお前らみたいなのが大っキライなんだ。お前らみたいなのを、なんて言うか知ってるか？」
「は、テメェ調子こいてんじゃ――」
「口が臭いんだよ、ド低能が」
食い気味で吐き捨てる、およそ口にしたことのない悪意。
喉が、顎が、四肢が痙攣するように小刻みに震える。自分が何か、とんでもない事をしているような気がしたが、なんだかどうでも良くなってきた。
男がツバをまき散らしながらジャンの胸ぐらを掴み上げる。もう一方で、手持ち無沙汰の青年は振り上げた拳を、何の迷いもなく彼の頬に振り落とした。
衝撃が顔面を歪め、骨を伝達して脳みそを激震させる。

ひどい痛みだ。とても、簡単に決意して相手に与えられるものではない。となれば、彼らはそれに慣れていて、人の痛みを無視して攻撃ができる立派な兵隊なのだろう。

思わずよろけて跪く、が。

「炭鉱マンの体力舐めんなよ！」

立ち上がりざまの殴打。顎を殴り上げれば、タテガミの男は大きくのけぞって、よたよたと後退。のちに尻餅をつく。顎から素直に衝撃を伝達されたがゆえに、彼の眼にうつる世界はぐるぐると回っていることだろう。

さらに長髪の男へと拳を構えるが――。

「やめなさい！」

翼から離れた羽毛が振り上げた腕に絡みつき、まるで縄のようになって動きを止める。

それと同時に、アエロが傍らに現れた。

「一発は一発。それ以上はダメ。それに……」

キッと、先ほどの殺意を込めて彼女は二人組を睨みつけた。

だが、その殺意の源になる感情は、先程とは大きく異なっているのだが。

「あんた達も分かっているでしょう？」

ジャンに言い聞かせるものとは大きく変わる、冷淡な言葉。

そして彼らもソレを感じ取ったのだろう。立ち上がり、衣服の汚れを払う暇もなくバツが悪そうに背を向け、退いていった。

「バカじゃないの？　確かに異人種（あたしたち）に優しくしてくれるのは嬉しいけど、人間は人間と仲良くしなきゃ、ダメなのよ？」

広場のベンチで、ジャンとアエロは隣り合って座っていた。

頬の殴打は大した威力ではなく、口の中を切る事はおろか頬が腫れ上がることすら無い。

「バカって……まあ、感情に流されたのには確かに後悔してますが」

それぞれアイスを口に運びながらまどろむ夕方。

アエロに奢ってもらったのは少し恥ずかしいような気もするが、助かったことには違いない。
「でもお姉さん、ちょっと嬉しかったな。ああいう、男気のあるのは嫌いじゃないよ」
「はは、喜んでもらえれば良かったですよ」
コーンまでを食べきると、アエロは「よいしょ」と立ち上がる。それから腰を曲げてジャンに顔を近づかせると、そのまま舌を伸ばして頬についたアイスを舐めてみせた。
「……っ？！」
「あはっ、こういうのは初めてだった？」
頬に伝わる熱い、柔らかい感触。鼻をかすめる甘い匂いに、その全てに頭の芯が煮えたぎってしまいそうになる。頬が、顔全体が真っ赤になって、彼女は楽しそうに笑った。
「でもね、お姉さん大奮発してもっとお礼したいんだ。貴方みたいな人は初めてだから。あの獣人（ボーア）の時のお礼も兼ねて……ね？」
彼女はそう言って、優しい微笑みを見せた。

「くっ……、あ、アエロさん……もうっ！」
イキそうだ。
凄まじい重力が身体に直接振りかかり、さらに全身を凍えさせるような突風の中で、ジャンの意識は幾度ともなく逝きかけた。
彼は今、地上から遙か高く離れた上空に居た。
腹を鷲掴みにする鳥足が肉に食い込み、そしてそれを成している足の上には楽しげに空を舞うアエロの姿が。
なんでも彼女は今日仕事が休みで、暇を持て余していたらしい。
騎士にも休みがあることに少し安心したが、彼女が暇つぶしのために誰かを誘おうとしていた所にジャンを発見したという経緯だった。
そして思いもよらぬ男気あふれる行動に彼女は気を良くして、空中散歩へと相成った。
聞く話によると鳥人族はある程度の信頼や親密度を築かなければ、

こういった共に空を制するような行動は取らないと聞いたから良いことなのだろうが――。

目が回る。

下を見るしか無いジャンは暫く前から目をつむっていたが、いよいよ自暴自棄気味になってきて目を見開いた。が、景色がまともな景色として彼の脳に刻み込まれることはない。

「どーしたの？　もう限界？　まだ三〇分も経ってないよ？」

「い、一時間経ってます……」

「あはは、そうだっけ？　やっぱり楽しいと時間が経つの早いね。ジャンくんはいい男だし、独占したくなっちゃう」

「は、はは、そりゃどうも」

呼吸が出来る事が幸いかもしれないが、全身に突き刺さるような突風や、速度やらでいい加減グロッキーになってくる。

そもそも掴まれ方からして、捕獲された魚かなにかのようだ。

いくら仲睦まじくなったとしても、これでは恋人同士なんかではなく、獲物と猟師にすぎない。

「でも、いい景色でしょう？　風も、気持ちいい……」

速度をやや緩めれば、空中と飛び交う鳥と同じ速度になる。

肌に触る風は途端に柔らかなものになって、上空からの光景も、いくらか落ち着いて見学できる。

となると、その新鮮な光景はあまりにも広大で、思わずため息が漏れた。その余裕が出てきた。

「うわ、上空から見ても街でかいですね」

――円形のようになる外壁の中に存在する巨大な街。空の上からでもその大きさは随分と目立つものだ。

そこから黄土色の道が草原の中を突っ切り、道の通過点には森が生い茂る。

またその道とは逆方向、城がある近くから外へと伸びる道の先には海があり、近辺には小さな漁村らしき集落があった。

大雑把に見れば森の先にも小さな町があり、上空でさえ小さく、

豆のような大きさに見えてしまう街がさらのその奥にある。それがジャン・スティールが保護されていたコロンという街だ。

あらゆるものが小さく見えるその位置で、ジャンは世界の広大さを改めて認識した。

この広い大地の中で、こんなちっぽけな人間が四苦八苦して生きている。そう考えれば、異種族だとか人間だとか、そういったものが小さく思えてくる。

「はは、アエロさんはいつもこの世界を見てるんですか？　羨ましいなあ」

「でしょ？　いいわよ、空は。小さい事がつまんなく思えちゃうもの……あ、そうだ！」

「どうしたん――」

ポイッ、と。

ジャンの腹を鷲掴みにする痛みが、不意に喪失（きょう）た。

にわかに彼を取り巻く重さが失せたと思うと、身体は大地に吸い込まれるように自由落下する。

風がまた暴風となって全身を嬲り、臓腑が全て浮き上がるような不快感を催した。

「でえええええええええっ！！」

だからそんな間抜けな悲鳴も気にならず、

「ほら、抱きついて！」

目の前に、垂直に降りてくるアエロにさえも、何の感情も抱けなかった。

ただ藁をも縋る思いだ。だから彼女の言葉は既に耳に届かず、ただ手を伸ばし、その細い体躯（からだ）を抱きしめた。

それから少しの間は速度がやや緩むだけで、バサバサと幾度か翼をはためかせれば、ようやく緩慢に落下し始める。

豊満なバストに顔を埋めていたジャンはそこでようやく、己の破廉恥な行動に気がついたが――どうしようもなく、その密着体勢のままアエロを見上げた。

「あははっ、ごめんね？　足が疲れちゃって」
「な、なら降りればよかったじゃないですか……」
どれだけ平静を装っても、激しく高鳴る心臓は彼女に伝わってしまう。そして、それが落ち着いた今でもなぜだか元に戻らない理由さえも。
彼は再び頬を赤く染めて、横を向いた。
「いい景色なんでしょ？　だったらもっと、少しでも長く一緒に居たいじゃない」
まるで空中で直立するような形のまま、彼女はゆっくり回るように振り返る。景色は、海の方向へと転換した。
「これを見せたかったし、ね」
海に大陸が飲まれていくような砂浜。その先には、空の色を写す蒼い海が広がり、その先はにわかに赤くなる。
水平線に身を沈めつつある太陽は、それまで世界を明るく照らしていたソレだった。
今まで見たことのな光景。
水面はキラキラと揺れて光を反射させ、どこか偉大ささえ覚える凄まじい風景だ。
ジャンは思わず嘆息した。
「……すごい」
としか言えない、語彙のない自分がなんだか情けない。アエロに申し訳なくなってくる。
「でしょう？　ヤなことがあったらいつも見に来てるの。でも、今度からはジャンくんを見ればそれがすんじゃうわね」
「な、なぜですか」
「だってこの思い出を共有した相手だもの。貴方を見れば、今日のことを思い出せるし」
と言いながら、彼女はその翼で、ジャンの頭を包むように抱いた。
「何があっても前だけを見るのよ。後ろに夢なんかないんだから」
そうして、ゆっくりと空を惜しむようにして彼らは下降する。

――奇妙なまでに心に残るその言葉を胸に、ジャンは地に降り立ち、アエロと別れて、急ぐわけでもなく、家路についた。

戦闘訓練、開始

「あー、今日は校庭三週したらここに集合だ」
そう告げる戦闘教官の言葉に、校庭に集まっていた各々の表情は徐々に弛緩してくる。
これまで二週間ほどずっと校庭を走ったり、筋力トレーニングをしたりなど体つくりが基本だった授業には無かった発言である。そこからそれぞれが察するのは、『実技』という言葉だ。
実際に木剣を握り、あるいは弓、槍を手にして戦うための訓練。それが、脳裏によぎったがゆえに彼らは喜んでいた。
体力づくりは確かに大切だが、退屈で、さらにしんどい。これが午前中の授業に組み込まれていれば、次の授業に確実に支障が出るレベルの疲弊だ。というのは、ジャン以外の感想である。
そしてまた実技というものが未知である事も、彼らの興奮を助長させているのだろう。単純に「かっこいいから」という理由も、もちろんあるのだろうが。
「ようスティール、良かったなァ？」
そう言って背中を力一杯叩くのは、この間の二人組だった。
タテガミの男は嬉しそうに肘鉄をジャンの脇腹に突き刺して走り去り、長髪の男もその後に続く。
前回、アレがあってから割合に陰湿な嫌がらせもなく済んできたと思ったが――ずっとコレを待っていたのかと思うと、ご苦労様とでもねぎらいたくなる。その意欲を他のことに持っていけば、もっと生産的な生活が出来ると思うのだが、彼らにとっては余計なお世話であり、言っても無駄なことなのだろう。
因縁を買うだけだ。
ジャンも自分のペースで走りだすと、すぐ横にトロスがついてきた。
「さっきの連中と何かあったの？」

「いや、特に何もないけど」
「……相談してくれよ、友達だろ？」
最近のトロスはなんだか落ち着きを持ち始めている。
早くもなんらかの成長を遂げたようで、風によって後ろに流されてオールバックになる彼は非常にナイスガイだった。
童顔かと思っていたが、顔だけを見るとなかなかに渋い。ジャンはそういった意味でも見直し、肩をすくめるように頷いた。
「あいつら一回ぶん殴ってから目ぇ付けられるみたいなんだぜ！」
思い出しながら言えばなんだか心の奥底からふつふつと負なる感情が沸き起こってくる。だから極力元気に振る舞い親指を突き立てると、「誰だお前」と突っ込まれた。
「何か嫌がらせとかされてる？」
「いや。ただ同じ寮だから、部屋の扉思い切り蹴っ飛ばされたり、トイレットペーパーが常に切れてたり、風呂入ってる時に服破られてブレーカー落とされたくらいしかないねえ」
寮は共同住宅とは違い、一軒家の中に自室をそれぞれ作り、台所やトイレ、風呂などを共同に使うようになる。そして彼らも同じ寮住まいであるためにそういった事が起こり得た。
もっとも、上級生も居るためにそうそう目立った行動ではなく、それこそ隠れてこそこそという訳だ。
「うわ、典型的なイジメじゃん。やり返さないの？」
タッタッタ、と教官に目を付けられない程度の速度で五〇〇メートルある外周を走り続ける。
トロスもこの二週間である程度鍛えられたのか、慣れたのか、呼吸を乱さずに会話を続けられていた。
「やり返したって、火に油注ぐだけだろ？」
「そんな事言ったって……」
「だから大丈夫だって。飽きるまでやらせときゃ良いんだよ」
「そ、それじゃあ……多分、異人種グループの空気が悪くなるよ。キミはただでさえ評判良いんだから」

「まあ外交官的な意味だけどな」
クラス内でも異人種から人間へ、直接何かを伝えられることはあまりない。多くはジャン・スティールを介した伝達となり、あったとしても事務的な会話以外は行われない。
そもそも、これが普通の姿だった。
世界から見れば、この国の在り方が少しばかり異常なのだ。
確かに世界的には受け入れられた存在だが、という具合である。
クラス内は見事な縮小図になっている、と言っても過言ではない。
「なんでこんなことになったのやら……」
「ぶん殴ったからだろ？　まあ、キミの事だからどうせ逆恨み的なものだろうけど」
「いや、そっちじゃない」
「ああ、そっちね。まあ、なんでだろう。普通に接してくれるからじゃない？」
とはいえ、人間側だってなぜ普通に接しないのかがジャンにはわからなかった。
確かに見た目のインパクトはあるが、それこそが異種族の特徴だし、そこに魅力さえある。個人ごとに感想は異なるだろうが、一、二週間ほどが経過してその改善が見られないというのは根本的な何かがあるのだろう。
親に「付き合ってはいけません」とでも釘を刺されているのだろうか。
だが彼らとて最低でも十八歳だ。自己判断でどうにかする筈だし、わざわざこの国に来ているのにもかかわらず”異人種は苦手です”なんてもう意味が分からない。
だから、ようするにきっかけが必要なだけなのかもしれない。
となれば――圧倒的なまでに反異人種を掲げる輩は障害になってしまう。
「時間が解決するもんならいいんだけどさ――」

「まあそんな感じで、二人一組になって打ち合ってくれ」
素振りを数回こなし、構え、振るい方を教えた後、教官は適当にそう告げる。
そんな適当な指示に、思わずジャンは食いついた。
「ちょっと、教官(せんせい)！　そんなんで良いんですかッ？！」
「最初だからな」
「さ、最初なら自由時間みたいなもんでいいんですか？」
「まず道具に慣れなくちゃな。身体だって出来上がってるわけじゃないし。まあ経験者は居るが、少ないしな。殆どが高等教育からの入学だから、まずはこういった時間が無くちゃならない。お前だって最初は雑用から始まったんだろ？　それと一緒だ」
「そ、そういう事ですか……」
なんとなく分かる。
彼の言う通りだ。誰もが入学に備えて身体を鍛えているわけではないし、しっかりと出来上がっているわけでもない。彼らはここで肉体を作り、武器に慣れる。そのつもりで入学したのだから。
二年もあるのだからそう急ぐことはないし、ジャンだって最初に覚えた違和感を、今ではあたりまえのように感じている。それと同じで、このヌルい訓練が徐々に厳しくなっていく過程も、慣れてしまうだろう。
そうこうしていると、魔の手が彼の背中を勢い良く平手で撃ちぬいた。
スパーンと小気味良い音が破裂音が響き、背中に鈍い痛みが走る。
そういった行動をした男は、悪びれるでもなく肩を組み、ジャンを誘った。
「なあスティール、一緒にやろうぜー」
やってきたのはタテガミの男だ。
あたりを見渡すと、長髪の男は割と真面目にトロスと打ち合っている。しっかりと反撃させ、ゆっくりでありながらも組手となっているのを見るに、長髪の事は少し許そうかと思った。

「あー、そうだな。ちょうど余ってるし」
言いながら、二の腕を力一杯つねる男にイラついた。
なんて幼稚なんだろうか。
こうやってはしゃいだり、異人種を差別するのも、あるいは――。
それぞれが二人一組になって木剣を振るい、受け、返す中で、やがてジャンとタテガミも対峙した。
「てめぇムカつくんだよ！」
喧噪の中で、辛うじて教官には届かない程度の声音で叫ぶ。そして剣を振りかぶり、力任せにジャンが構える木剣へと叩きつけた。
「スカしやがって、人外が居なけりゃなにもできねえクセしてよ！」
相手にあわせて剣を対面させ、受ける。容赦無い一撃一撃が、剣伝いに衝撃を伝播させるように腕を痺れさせる。攻めに転じる暇のない全力の攻撃に、彼は受けるので精一杯だった。
「クソ野郎が、この、このッ！」
「じゃあなんでお前は、そんなクソ野郎に一々関わるんだよ」
「ムカつくからだよ！」
「ひっそりと暮らしてるだろ。可愛いものじゃないか」
「うっせ、黙れ！」
上段からの振り下ろし。ジャンは本能的に大地を弾こうとするのを防いで、剣を横に、頭上に構える。
やがて衝撃。
体重を掛ける一閃が木剣の腹を力一杯叩き、そして流される。頭上から脇へと剣が移動するのを感じながら振ってやると、タテガミの男は重心を崩したようにそのまま前のめりに倒れていった。
あれをまともに受けていれば、さすがに怪我にはならないだろうが、かなり痛い。そんな事でいちいち激昂されてはジャンとてかなわないから起こした行動だったが、やぶ蛇だっただろうか。
「おれが嫌なら無視してくれ。それがお互いのためだろう？　わざわざ潰して、何が残るんだよ。気持ちの悪い爽快感だけだろ？」
「スカしやがって！　なに余裕ぶってんだよ！」

「スカしてねーって」
「だまれおまえええええッ！」
男の中で何かが切れた……何か、決定的な何かが。
肩肘を張って振り回す剣撃を、ジャンは仕方なくいなしながら受け続ける。
一撃、それはそれは重い一撃だが、腕だけの力で振るうそれらだ。さらに構えもぎこちなく、棒を振り回すのと同じ感覚だ。路上でのケンカと同意義。剣を剣としてではなく、一つの道具として扱う意識。
故に攻撃を防がれた事によって跳ね返る衝撃は、彼の身体に蓄積されていく。これまでの訓練を適当に過ごしてきた青年なら無意識の内に限界は近づいているだろう。
そしてその時は、大した時間も置かずにやってきた。
ジャンが剣を受ける。衝撃が彼に、そして男に伝わり――柄が男の手の中からすっぽ抜けた。
木剣は空中でくるくると回転して、孤を描いて彼のやや背後の地面に突き刺さる。誰にも当たらなかったのは、彼の自棄気味の乱舞に周囲が気づいて、空間を作ってくれていたお陰である。
「て、てめえ……！」
思わず崩れ落ち、上目遣いで睨んでくる男に、ジャンは大きく嘆息した。
「本当ならお前なんか徹底的に無視するんだけど……腕、痛いだろ？　冷やすかマッサージするかしないと明日から響くぞ。医務室行ぶべらっ！？」
格好良く手を差し伸べる。男は呼吸を乱しながら勢い良く、その手に伸ばした拳を振り上げ、ジャンの顔面に叩き込んだ。
ジャンは不意打ちを素直に受け、視界がぼやけるのを見た。
世界が一転し、今まで地面を見ていた筈なのに、気がつけば空を仰いでいた。
どさりと音がして、背中から全身へと衝撃が走る。痛い。受身も

取らずに倒れてしまった。
「は、はっ？　ばっかじゃねーのてめえ？　俺を舐めすぎ、なんだよ。医務室ぐらい一人で行けるっつーの！」
――しかしまあ。
こんな真っ直ぐなヤツばっかなら、やりやすいんだけどなあ。
足音が遠ざかっていくのを聞きながら、ジャンは大きく息を吐いて微睡(まどろ)んでいく。
意識は間もなく、ブラックアウトした。

「ジャンくんって結構バカなのね。カールなんて無視してれば良かったのに」
レイミィはとぐろを巻く尻尾をジャンの上に乗せてそう言った。
結局授業が終わった後に意識が回復し、タテガミの男『カール』も授業を抜けた後そのまま帰ってしまったらしい。ひとまず関わりたくは無いから、向こうから何かをしでかすまで放置で構わないだろう。
そして医務室の寝台に寝かされているジャンを待つのは、サニーとレイミィ、そしてトロスと……。
「あー、どちら様？」
「わ、忘れたの！？　あたしよ、テポンよ！　トロスのお姉(ねー)ちゃん！！」
なんて激昂するのは、いつぞやの深夜にジャンの部屋に忍び込んだ弟想いの姉テポンだった。
「は、はは。冗談っすよ。ただ長い間見なかったんで、ちょっと誰かなーって思ってただけで」
「しっかり忘れてるじゃないのよ。脳みそ発酵してんじゃないの？」
「それ、いいすぎ」
「まあ何にしても話は聞いたわ。いじめられてるなら相談すればいいのに」
「いじめったって……ただのケンカでしょう？　第三者が入るよう

な事じゃないっすよ」
イジメだと言われて思い返してみれば、イジメというのは言いすぎなような気がする。
ただの個人の憂さ晴らしであり、嫌がらせだ。イジメの定義は分からないが、そういったものではないような気がする。
もっとも、ここまでやられて彼を擁護するつもりなどは無いし、その義理もないが――かといって友人らに本人の居ない所でボロクソ言ってもらうのも気が引ける。非常に卑怯で卑劣な感じがするのだ。
そもそも鬱陶しいと思っているだけで、ソレ以上の感情は無いのだから。
無関心といえばぴったりだろう。
更生させるつもりは毛頭ないし、仲良くするつもりも同様。生活が脅かされなければそれでいい。
――グレるキッカケは、こういったものなのかもしれない。
漠然と考えながら、カールに少しだけ同情した。
「まあ話はもう終わりですよ。もうカールが手を出してこなければいいし、来たら来たで話し合います。迷惑だとか、そういうんじゃなくて……こう、おれたちの問題、みたいな？」
しかし、と思って周りを見てみる。
すると、扉の近く、部屋の隅で腕を組むクロコの姿を発見した。
そして気づいたのだが、見舞いに来ているのは全て異人種だった。人間は誰一人としていない。
身体から妙なフェロモンでも出しているのかと疑いながら、彼はそれで自分の立場を再認識した。
「あ、そうだ」
と手を叩くのは、テポンだった。
「うちに来ない？」
と誘うのも、テポンだった。
「イヤですよ」

即答してみる。
腹の上でとぐろを巻く蛇の尾が、なにやら意図的に腹部を圧迫するような窮屈感を覚えた。
「ス、スミマセン……今日はなんだか食欲が無いので……」
「ジャンくん本気で言ってるの？」
レイミィが小馬鹿にするように言ってくる。眉尻を下げ、可哀想なものでも見るような顔だ。
同情されているようで悲しくなってきた。
カールもこんな気持だったのだろうか。
人はこうして、分かり合っていくのだろうか――。
「家で生活しない？　って、先輩はそう言ってるのよ」
「リアリィ？」
「だって居づらいでしょ。他の人の迷惑になるかもしれないし」
「あー、そういう見方もありますねぇ」
尻尾をタップして重量を軽減してもらう。
すると、レイミィはなぜだか腕を組んでそっぽを向いてしまった。
おれが何をしたってんだ。
「ねえジャン、そうしてもらった方がいいよ。せっかくこっちに来てゆっくり出来ると思ってたのに、家でも疲れちゃうよ？　本当だったら私の部屋でいいんだけど、寮長さんが厳しいから……」
「あ！　じゃあサニーちゃんも一緒に家に来ればいいのよ！　家広いし、部屋は無駄にあるしね。トロスはいいでしょ？　それで」
「姉さんの好きにしていいよ。まあ、ジャンの判断が一番だけどね」
「ほらジャンくん、先輩の好意をどうするの？」
尾先がチロチロと揺れる。それを腹の上で見ながら、ジャンは静かに頷いた。
もうどうにでもなれ、というのが正直な所だ。
「じゃ、じゃあ週末にでも、お邪魔します……」
そういう事になってしまった。

お引越し

寮の退去にはそう時間はかからず、事務係から書面を渡され、理由と署名を記してから約三日ほどで許可が降ろされた。

紙製品からなる板状の包装資材を箱に組み立て、荷物を整理しつつ中にぶち込む。蔵書や着替え、教科書など。他に何かあるかな、と部屋の中を漁るが、そもそもこの街に来る前ですら大した荷物がなかったことを思い出す。

やがて約束の週末が訪れた。

二連休の初日。

テポンは荷車を引いてやってきた。

「……これが、先輩の自宅ですか」

「なにを今更、先輩とかガラじゃないわね。いつも通りでいいわよ」

――そこは噴水広場から東に進んだ所にある。

少しばかり進めば、鉄門に蔦が巻き付いたり、その奥には噴水のある庭などが多く見られる館が殆どの、この城下町でも一等地と呼べる区画に入る。彼女の家は、その通りの中心部付近に建っていた。

他と同じように鉄門が侵入者を拒み、外から見える庭には芝生が敷き詰められている、小奇麗な光景が目に入る。そしてその奥にあるのが大きな屋敷だ。

二階建てだが、厳かで、だからといって目立つわけでもない、良くも悪くも他と同様の館と言った風の建造物である。

「さ、入って」

施錠のされていない鉄門は、少しだけ重い手応えをみせてから、滑るように開いていく。錆びているわけではなく単純に重量のせいだろう。彼女はその全てを収納部分に押し込むと、大きく息を吐いた。

「ようこそ、我が家へ」

「お邪魔します、と、これからよろしくお願いします」
「わ、私も来て、本当に良かったんですか……？」
サニー・ベルガモットは不安気に口にする。そしてそれを表すように両手で胸を抑える所作を見せる。テポンはそれに苦笑するように、
「だって兄妹（きょうだい）でしょう？　一人ぼっちは寂しいもんね」
それから優しい笑みを見せて、サニーの頭を優しく撫でた。まるで姉の風体だ。ジャンはそう思いながら、荷車を引いて門から中へとお邪魔した。
――芝生が敷き詰められている庭には、されど噴水は存在しない。その代わりとばかりに、ローズアーチを始めとした多種類の花が庭の一画を占めていて、ちょっとした庭園になっていた。
そこにはジョウロを片手に、そういった花壇などを手入れするつなぎ姿がそこにある。気配や物音に気づいたのか、ソレはゆっくりと振り返り、やがて彼らを視認した。
「ああ、お嬢さん……と、そこの薄汚い小僧と可愛らしい娘さんは？」
頭に被る麦わら帽子を取り、彼はジョウロを置いて歩み寄ってくる。ジャンを一瞥すれば眉間にシワを寄せ、サニーを見ればにこやかな笑顔を見せる、ある意味紳士的な男だ。
「パスカル、話したでしょう？　今日から家に住むことになったジャン・スティールとサニー・ベルガモットよ」
男は腕をまくり、首にさげるタオルで額の汗を拭いながら、やがて彼らの前に止まる。
短髪の頭を掻き毟るようにして、パスカルと呼ばれた男は大きく息を吐いた。
「冗談か何かで？」
「……言わなかったかしら」
「聞いてないっスよ！　大体、住むってんなら昨日今日の話じゃないでしょうッ！？」

「でも、他の二人とトロスは歓迎会の買い出しに行ってるけど……」
「うわあッ、また除け者かよ！」
大げさなまでに頭を抱えて跪くパスカルをよそに、テポンは彼を指さし、ジャンらに紹介した。
「お手伝いさんのパスカル。こんな感じの男よ」
「ど、どうもよろしく……お願いします」
「これからよろしくおねがいしますっ！」
一先ず一礼。これから世話になる相手に、心から深く頭を下げると――既に立ち直り腰に手をやるパスカルは、ふふんと鼻を鳴らしてジャンを見下ろしていた。
「お嬢さんを始めとする女性に手を出したら俺が直々に殺す。いいな？　それから――」
途端にニヤニヤと表情を綻ばせて手を差し出すのは、サニーに対してだ。
下心丸出しのパスカルはそれから声色を変え、咳払いを一つ。
「お嬢ちゃん、何かわからないことがあったり、不便なことがあったらいつでもなんでも言ってくれ。俺はいつでも君の味方だよ」
「……ジャンに悪いことしたら許しませんよ？」
上目遣いで睨みつけて、サニーは彼と握手を交わす。
ぎょっと顔を強張らせてからパスカルはジャンを一瞥し、舌を鳴らした。
「善処します」
「さ、パスカル。業務に戻っていいわよ」
「ぎょ、業務ったって……みんな朝っぱらからどっか行っちゃうから、暇で仕方なくやってたんスよ。俺で良ければ、荷物運びの手伝いでもしますよ。ジャンくんのもな！」
厭味ったらしく強調し、彼はテポンの了解も得ずに玄関へと歩き出す。
彼女はそんな彼に肩をすくめてから、二人を案内するように先を歩いた。

玄関から入って右手側に伸びる通路には窓から差し込む日差しが、心地よく室内を照らしていた。壁には五つの扉が並び、説明によればそこがお手伝いさんの私室らしい。

さらに正面右手側には二階へと続く通路があり、その脇には奥まで続く通路。突き当りの扉はバスルームであり、左手側の壁、そこからほど近いドアはトイレらしい。それより遥か手前の、両開きの扉は大広間に繋がるものであり、主な団欒や食事はここで行われるということだった。

家主の自室は階段の上にあり、正面の壁には私室が。その反対側の壁には、客室が並ぶ。

ジャンらはその中から、扉に打ち付けてある、真鍮プレートに刻まれた自分の名前を探して、そこに荷物を運び入れ――終えて、それぞれの部屋で休憩していた。

「しっかしまあ、おれがこんな所に来ることになるとはなあ……」

夢のようだ、とジャンは思う。

キングサイズのベッドは、部屋の中央壁沿いに鎮座する。扉の近くには大きなクローゼットがその存在を隠すこと無く堂々と置かれて、さらに本棚さえもある。それでも尚、部屋が狭く感じることはない。

レースのカーテンがかかる窓は両開きのガラス戸であり、開ければ半円形のベランダが備え付けられている。そこの近くの壁には、これまた大きな机があって――。

ジャンは思わずため息を付く。

これでもう二桁に上るソレだ。

夢のようだと、心の底から思う。

きっかけはどうであれ、まさか、冗談か何かではないのかと疑いたくなる。

それほどまでに彼は浮かれていて、思わずその良く身体が沈み反発する寝台に寝転んだ。

「にゃっ？！」

刹那、悲鳴が聞こえる。

慌てて身体を転がすと、そのすぐ後ろ、腰の辺りにはもっこりとした妙な感触があった事に、そこでようやく気がついた。その盛り上がりはのそのそと移動して、足元から落ちる。軽い音を鳴らして姿を現したのは、まごう事無き猫だった。

大きさからしてまだ子猫なのだろう。

小さな体躯は一度ジャンに背を見せてから、くるりと振り返って、彼の姿を見る。しっぽをゆらゆらと揺らすその姿は愛らしいの一言に尽きる。

「ネコかー。ネコかわいいなー」

座ったまま前屈体勢になって手を出し、指を揺らす。が、興味なさそうに顔を逸らすと、そのまま悠々とした足取りで扉へと向かう。ジャンはその後についてドアの隙間を少し開けると、ネコはそのまま隙間を抜けて出ていった。

ジャンはそれから、箱を開けて荷物を出す。壁に立てかけたブロードソードはそのままにしておいたとしても、制服やらは早い所ハンガーに掛けてしまわないと皺になってしまう。

それに、荷物整理を後に回しても良いことなど無いのだ。

彼が決意して行動を起こすその瞬間に、ドアは勢い良く開かれた。

「アンタがジャン・スティールね」

扉を全開にして、壁に叩きつける。

黄金色の長い髪を翻すのは女性であり、四肢は毛皮に、手足は肉球に覆われている。頭に、尻にはネコの耳や尾が生えていて――考えるまでもなく、彼女は先程のネコなのだろう。

完全にネコに擬態できるのはかなり高度な技術を要すると聞きかじったが……どうあれ人並の知能を持っているのだ。それを理解した瞬間、ヒエラルキーの下級層に落とされていくのを、彼は感じていた。

「ええ、はい。これからよろしくお願いします」
「つまんなそうな男ねえ。まあいいわ、そんな感じでよろしく。種族はなんなの？」
「種族、ですか。えー……人間、ですかね」
「人間？　ヒト？」
その大きな琥珀のような眼を見開き、縦に長い瞳孔をより細くして彼女はジャンを見る。腕を組んだまま、腰を折り曲げるようにして視線を近づかせる。
「……ビビんないの？」
それから、恐る恐るといった風に、珍しいものに触れるように声をかける。先ほどの、威圧的な勢いは既に失せているようだった。
「いや、おれネコ好きですし」
「異人種よ？」
「そう言われてもなあ……」
困ったように頭を掻いてみせる。
なぜこんな愛らしい姿に畏怖しなければならないのだろうか。
剣を振り回したり、傍若無人な人だったりしたら怯える、恐れるといった感情を抱くのは当然かも知れないが、ただ外見が少し異なるだけでそういったモノを抱くことはない。
これまでがそうだったし、そういった人間に対する理解はあっても、ジャン自身納得はしていない。
そうしてまた、それだけで異人種に自分が評価される事も、しっくり来ないのだ。
ただの感性の違いなのに良い評価をもらう。好意さえ持ってくれる。そんな彼らに、どこか後ろめたさを感じるような気がした。
「へえ、見る目あるじゃないの。あんた」
「はは、ありがとう。えーっと……」
「タマよ。ここでは一応ネコとしてやってるからね」
「タマさんは――」
「呼び捨てでいいわ。ネコに敬称って、気持ち悪いったらありゃし

ない」

身を抱くようにして、冗談っぽくフルフルと彼女は震えてみせる。

美女然としているのに、表現はどこか子どもっぽい。ジャンは思わず微笑むと、タマはキッと睨んできた。

「あに笑ってんのよ」

舌っ足らずのように不平する。

「いや。まあ、その……よろしく」

抑えられない興奮に、思わず頬がゆるむ。手を差し出して握手を試みると――肉球が、鋭くジャンの顔面を殴打した。

表面の、ちょっとした硬さの中にはマシュマロのようなやわさがある。お日様の匂いがして、ジャンは満面の笑みで寝台に倒れていった。

「……なに、こーゆーのが好きなんだ？」

軽々と床を蹴ると、タマは獣人らしい身体能力を発揮して軽々と寝台に飛び乗った。大きく弾み、ついで彼女のたわわに実るバストが揺れるのを見ながら、ジャンはさらに頬をペチペチと肉球で叩かれ続けていた。

「ほらほら……そんなだらしない顔して、そんなに気持ちいいの？」

「あ、ああ……に、肉球！　肉球もっと！」

「うふふ、気持ち悪い……そんなに欲しいのなら、ほら！」

「ああっ、あああああっ！！」

両手の肉球を力一杯顔に押し付けられる。

幸せだ。

もう、人生全ての運を投げ売っているのかもしれない。

理性が潰える、彼はソレが失われるのを感じていて――。

「何やってんの？　ふたりとも……」

テポンの底冷えするような声は、瞬間的にジャンに理性を取り戻させて、また反射的にタマは寝台を弾くようにして床に着地した。

「肉球分を補給してました」

「補給させてました」

「……まあいいけど。わからないことがあったら、いつでも訊いてね？」

「あ、ありがとうございます」

ひどく恥ずかしいところを見られてしまった。

つい理性を投げ捨ててしまう程の事態に陥ったことは仕方のないことだが、自制しなければならないだろう。

しかし、こんな魅力的な存在が身近にいて、果たして理性が保つだろうか？

タマをちらりと見ると、彼女はニッと笑って、八重歯を見せた。

「ははっ、可愛いやつめ」

――新生活は、こうして開始した。

休日謳歌　～その猫に肉球はあるか？～

なんでも、この屋敷にはトロス、テポンの他には三人のお手伝いさんに加えてタマ一匹だけの構成で、両親は不在らしい。亡くなっているという事ではなく、単純に”溝の門扉（ゲート）”の向こう側、つまり異人種の故郷で暮らしているだけであり、完全な放任主義ということだ。

「うぅ……もう、朝……？」

ガラス戸から差し込む陽が床を照らし、その反射がまぶたを照らす。ジャンはそこから意識が少しずつ浮上して、やがて覚醒した。

だが眠気に半身がどっぷりと浸っている状況である。夕べは荷物の整理や、緊張やらで深夜まで眠れなかったこともあるが、なによりも布団が異様なまでに温かいことが一番の理由だった。

羽毛布団は熱を逃さず、さらにジャンの熱を蓄えて身体を温める。さらにまるで人の肌のような抱枕が熱を持ち、心地よい毛皮が身体に抱きつく感覚が酷く心地よくて――。

「ん……？」

抱枕など、この部屋にはなかったはずだ。

ジャンは、己が掴む手を少し動かす。と、彼がこれまでの人生で触れた何よりも柔らかく、最上の弾力を持つ何かがその中にはあった。

薄く目を開ける。

共に、穏やかな吐息が顔に掛かるのがわかった。

――眼前に、タマの寝顔があった。

絹の衣服は既に布団の中で大きく肌蹴ていて、タマはそのままジャンを抱枕にするように抱きついている。抵抗するように体の前に突き出された両手は、それ故に彼女のバストを存分に鷲掴む形となっていた。

「なんという事でしょう」

思わず漏らすと、その声に反応したのか、タマのまぶたがぴくりと弾んだ。
それからややあって、
「ん、ん……っ」
艶やかな吐息と共に声を漏らし、力一杯抱擁するように伸びをする。
タマは、それから眠そうに目を開けた。
「どしたの、ジャー？」
ジャーというのは、タマが勝手に名付けたジャンの愛称だ。実にあざとい呼び名だとは思うが、タマ補正のお陰で特に疑問に思うことはない。ただ、それが伝播してしまったようにサニーまでそう呼んでくるのは、少しばかり恥ずかしかった。
「なんでお前は抱きついて寝てんだよ？」
理性が手を離せと囁いている。
だが、どれだけ理性がフルに稼働して腕力を駆使して彼女から引き剥がそうとしても、本能が許さない。故にたゆんたゆんと、肉球顔負けの弾力を味わうように手の中で揺れるだけであり――幾多の刺激を経て、手のひらに硬度を持った突起が生まれた。
「……ジャーのすけべ」
言って、タマは頬を桜色に染めて、ぎゅっとジャンを抱きしめた。

「という夢を見ました」
「なにそれキモい」
タマは心底軽蔑したような視線でジャンを見下ろした。
「ジャー？　なにそれ、炊飯器？」
「いや、その……」
「大体なんで常に燃費の悪い人型になってなくちゃなの？　ジャンを楽しませるためのマスコットじゃないんだけど」
「おっしゃる通りです」
ネコの姿でカンカンに怒るタマは、寝台の上で正座する彼に対し

て、何度も布団を叩いて、尻尾をパタパタと振って感情を表現していた。

そもそもこうなった理由は、タマが起こしに来た際に布団をひっ剥いで――生理現象を見られてしまったからだ。そこからごく自然的に、「何の夢を見てたの？」という流れになり、現在に至る。

まだその時は怒られてはいなかった。

だが、先日のタマに対する印象があまりに強かったせいで見た夢である。

もっとも、さすがにそんな事は口にできないので、秘密なのだが。

「まあなんでも良いけど。朝ごはん食べるなら、用意してあるけど」

「すぐ行きます」

「もう二度とキモイこと言わないでよね。嫌いになるから」

「はい……あ、最後に一つ、いいですか？」

何か心残りがある。胸の中に感じたそのしこりの正体がわかった所で、ジャンはそう声を上げる。

後ろ姿を見せたタマは、いかにも不機嫌そうな顔でジャンを見る。

「あによ」

ぶっきらぼうに訊いてきた。

――言うか、言わざるか。

されど、後悔するならば確実に告げたほうがいい。何もしない後悔は、何よりも苦しいからだ。

「ごっ、語尾に”にゃあ”だとか”にゃん”は付けないんですか？」

「……あの」

口ごもるように、彼女は続ける。

「もしかして会話成り立ってなかった？　言葉通じてなかった？」

「いえ、大丈夫です。タマの言葉は全て理解できてます。今日も可愛いし」

「フォローすれば良いってもんじゃないけど……真性ね。そんなにネコ好きなの？」

「大好きです。もうタマんねえです」

タマの姿が、不意に消える。
否、ジャンの肉眼で尾を引くように肉薄する陰だけは捉えられていた。
音もなく気配が近づく。僅か一秒にも満たぬ時間の中で、その白に茶色にこげ茶の混じる三毛猫は、地面を弾いて眼前に迫った。
目の前ににネコが現れた。そう認識するよりも早く、振り薙がれた一閃があった。
それから間もなく、タマは軽々とジャンのすぐ近くに着地する。
すうっと、鼻筋から血が線状に三本浮き上がったかと思うと、鋭い痛みが並のように押し寄せてきた。
鮮血が吹き出るわけでもなく、また傷があると教える程度の出血だけがそこにはあったが、痛みは見た目に反して非常に強い。
まず目が開けられない。痛みのせいで、思考がままならない。
タマの声は、横になって悶えるジャンの耳元で聞こえた。
「安心して。消毒してあるから……にゃあ」
ぽん、と頭を肉球で叩く感触を残して、気配は走り去るようにすぐ遠くなっていった。

「お食事はどうでした?」
暑いからという理由だけでキャミソールを来て、腿までがあらわになる短いズボンを履く女性は、それでも体裁を整えるようにヘッドドレスだけは身につけていた。
そんな彼女は顔や肌、足が驚くほどに透き通るように白く――その腕、足、指に細かく吸盤を付け、また太い四本の房を好き放題に背中に流す頭には、されど髪はなく、髪のような触手があるだけである。
彼女はタコ族の異人種であり、この屋敷のお手伝いさんの一人だ。
「ええ、美味しかったです。なんだか、もっと味わってずっと食べていたかったです」
「あらら、嬉しいことを……ふふ」

嬉しそうに彼女は笑う。しかしそんな褒め言葉に頬を紅潮させたり、恥ずかしがったりするようなウブな姿は一切無く、経験豊富な大人の女性の雰囲気を醸し出していた。

「でも、わざわざスミマセン。最後まで寝てたおれを待っててくれたみたいで……」

長く伸びる机には、まだ日が登ってからそう時間が経って居ないであろう頃合いなのにもかかわらず、ジャン以外の顔は無い。彼女の話を聞くに、既にテポンはサニーを連れて買い物に出かけてしまったらしい。トロスは入学してから日課にしているトレーニングに出かけたばかりで昼頃まで帰ってこないらしく、この屋敷に残されたのはジャンと、お手伝いさん、それにタマだけになる。

「いいのよ、別にやることなんてあまりないし。それに、あまり褒めてもらったことがないから嬉しかったしね」

「いや、ホントの事を言っただけですし」

「あまり褒めると、サニーちゃんが拗ねるわよ?」

「ああ、そう。サニーで思い出したんですけど、もしサニーが料理を手伝いたいって言ってきたら、断らないでやってほしいんですよ。あいつ、なんだか料理が趣味だか生きがいみたいで、ずっと料理ばっかしてましたし」

「ふぅん……そうね、なら今夜あたり手伝ってもらおうかしら」

そういう彼女は、どこかイタズラっぽい笑みを浮かべていた。怪しく、何か企んでいそうなソレだが、ジャンには彼女が何を考えているのか皆目見当もつかない。

「それじゃ、オクトさん。ごちそうさまです」

「お粗末さま。あ、ジャンくん。これから何か用事でもあるの?」

「そーですね……特には無いです」

「ちょっとおつかい頼んでもいいかしら? 他のに頼むと、いちいちうるさくってね。もちろんお礼はするわよ?」

「いや、大丈夫です。お世話になっている身ですし。それで、おつかいっていうのは――」

その男はジャン・スティールから注文の内容を聞き終えると、椅子から立ち上がり、その埃っぽい空気をかき乱すように乱暴な様子でカウンターを乗り越えてきた。二メートルほど離れたジャンを睨みつけるようにしてから、わざとらしいと言うよりも、どこか演技がかった動作で、近場の本棚へと向かう。

本棚が無数に並ぶ店内。そして本棚と本棚で作られる通路の、その終着点にカウンターがあった。

胡散臭い口ひげを生やす男は、髪を脂でオールバックにして、片眼鏡を掛けた紳士然とした外観だった。どこか気難しく神経質そうな顔立ちに反して、その”本屋”は客があまり来ないのか、掃除があまりなされていないのか、空気中に埃が漂っている。

くしゅん、と顔を揺らしてタマはくしゃみをして、ジャンはそれに続くようにくしゃみをした。

「いつ来ても最悪」

「まあそう言ってくれるなタマゴウチ少佐。奴らから姿を隠すための隠蔽工作の一種だと、何度言ったら分かってくれるのだ？」

ジャンの肩に乗るタマは不快そうに、店主から視線を外した。

「その名前、わけわかんないし」

「やはりまだ記憶は戻らないのか。やはりガウル帝国の内戦の代償は大きいか……」

店主はそう口にしながら本棚を漁る。

オクトの説明によれば、彼はガウル帝国という、この王国が存在する大陸の向こう側、海を越えた先にある大陸からやってきたという。そこであった内戦から逃げてきたという説明（はなし）だが、タマを、その恐らく飼っていたであろう愛猫と信じ込んでいる。しかしその愛称を完全に拒否していたおかげで、今は間をとってそんな珍妙な名前になっていた。

そしてオクトは、この店を贔屓にしている。理由は単に、品揃えが良いからだ。

どんな理由で本屋を営んでいても毎月新書を仕入れるし、客も居ないというわけではないから経営を維持できている。そしてどれほどマニアックな本でも、古書でも妙に揃っていた。

ジャンとて興味がないわけではないが、今日はおつかいだ。また後日、個人的に来たいと思っていた。

「ったく、なんであたしまで連れてきたわけ？」

「いや、だってオクトさんが、こっちのほうが話が早いって言ってたし」

「もう……ま、”中佐殿”の様子は相変わらずで良かったけど、もう二度と来たくないわ……くしゅっ」

また小さくくしゃみをする。首を振り、前足で顔を撫でるように拭いた。

「中佐殿！　ちゃんと掃除してよ！」

「何を言うタマゴウチ少佐、この古臭さ、カビ臭さが良いのではないか。なあ少年、あながちわからんでもないだろう？」

「え、いや……まあ。こういうところが図書館とは違う、本屋の良いところでもありますよね」

「おお！　さすがタマゴウチ少佐に見初められた男！　分かっているではないか！」

「ですが、せめて簡単な掃除くらいはしたほうが良いのでは？」

「むう、先程からさすがにそこまで言われればしないわけには……っと、見つけたぞ少年！　望みの品はコレで良いのだな？　ははは！　うっかり新刊をしまいこんだから少々手間だったが、見つかって安心だ！」

中佐殿は比較的新しい、革張りの本をジャンに手渡すと、腰に手を当てて豪快に笑う。豪気というのはこの男のためにあるような言葉な気がした。

本のタイトルは『あなたが死ぬまでにやっておきたい一〇〇のこと』というもの。一見自己啓発本のように見えるが、内容は深い恋愛小説らしい。オクトは最近この作者に熱中しているらしく、すべ

ての単行本はこの店で購入し、新刊を心待ちにしていたとの事だ。
「ええ、これで大丈夫です」
本を念のために確認して、中佐に手渡す。彼はそれからカウンターの奥へと飛び上がるように引っ込むと、手早く紙袋に本を入れて、カウンターに置いた。
「お代は既に受け取っているから、このままで大丈夫だ。心ゆくまで堪能するがいい！　っと、少年は何か気になる本はあったのか？」
ジャンはそれを受け取りながら、タマの首の下をくすぐるように撫でる。そうして不意気味の質問に少し驚いてから、首を振った。
「たくさん本があって、まだよくわかんないです。また後日来たいので、その時はよろしくおねがいします」
「ふむそうか……残念だが、待つとしよう。用がなくとも、私はいつでもここに居る。来てくれると嬉しい！」
「は、はい。失礼します」
軽く会釈をするジャンに、中佐は結局本名を教えてくれること無く、敬礼してその姿を見送った。
あらゆる意味で後ろ髪引かれる思いに駆られながら、ジャンはそそくさとその店を後にする。

「でもジャンが居て助かったわ。いつもなら一人だもん」
気を良くしたのか、彼女は人型になってジャンの横を歩いていた。なぜだか衣服は着たままの格好で、四肢はやはり毛皮に、掌は肉球へと変化し、頭にはネコミミ、尻からは尾を生やす。
そして腕を組む、胸を押し付けるということはなく、シャツにデニム生地のズボン姿で傍らにつく。肉球、正確には掌球は、その往来でも構わずジャンの手の中にあった。鷲掴むような形で、他者から見れば手をつなぐように見えているであろうものだ。
「おれもタマと一緒でよかったよ」
「どうせあたしの肉球（からだ）が目的なんでしょ？」
「そ、そういうワケじゃないよ！　タマと一緒にいると楽しいし」

「楽しい……？　可愛いとかじゃなくて？」
彼女はマジマジとジャンを見つめて、首を傾げる。
うん、と彼はうなずいて、わかりやすく説明した。
「まあかわいいよ。ネコでも、人型でも。でもさ、タマと一緒にいると……こう、一緒に居るだけでも心が踊るんだよね。楽しいってそういうことだと思うけど」
「そ、そうなんだ……あ、や、やっぱりジャンって結構変わってるよね。女の子に、みんなにそう言ってるんでしょ？」
いつでも余裕を持っているような彼女は、頬を桜色に赤らめてそっぽを向く。だというのに、指球はぎゅっと締まって指を包んだ。
「別にそういう訳じゃないけど……この街だと、タマが初めてだし」
「は、初めてなんだ。あたしが、初めて？」
「まあ、そうだな」
「へ、へえ。……ねえ、ジャン？」
呼ぶ声に、顔を向ける。タマはそれに応じるように手を離して、その肉球を顔面に押し付けた。
すこし固い角質層の中には、ぷにぷにと柔らかい独特の感触がある。変わらずのお日様の香りがして、ジャンの吐息に、抑えるようなタマの声が聞こえた。
「ジャン、またキモイこと言ったから、お仕置きだからね……っ！」
「た、タマ……こんな、み、みんなが見てる、ところで……！」
「うふふ、肉球って、結構ビンカンなんだからね！」
すっかり上気してしまった顔を隠すようにそっぽを向きながら、また肉球を強引にジャンの顔に押し付けて、足早に往来を歩く。
肉球のお陰で他の事に頭が回らなくなってしまう彼の特性に少しだけ感謝しながら、タマはそそくさとジャンを連れて屋敷へと戻っていった。
ジャンはまた、不意打ちの幸福を堪能して――。
そうこうしている内に、楽しい休日は終わりを告げた。

日常風景

「なんだか、家で上手くやれてるようで僕は安心したよ」
いよいよ春が終わろうとしている季節。街路樹は青々とした葉が生い茂り、青空は澄み渡る。清々しい朝に、共に家を出たトロスは笑顔でジャンの肩を叩いた。
「いや、みんな何だかんだで親切だし、良い人ばっかだしな。環境も持て余すくらいだし、本当に感謝してるよ」
「何言ってるんだよ、僕だって、キミが試験の時に声をかけてくれたから学校でも、試験でも上手くやれたんだ。それに、家だとお手伝いさんの手伝いまでやってるんだろ？」
トロスはそう言うが、手伝うのは食器の片付けや簡単な掃除、庭の手入れくらいしかやれていないし、それだって本当に手伝い程度だ。それが彼らの手助けになっているかは、未だに疑わしい。
――そんな彼らが歩く通りはいつものように警ら兵が街を巡回していて、住民が日常的に歩いている。これから仕事に行くものや、ペットの散歩、井戸端会議をしている主婦層などその様相は様々だが、平和なのには変わりがない。
妙なまでに満たされている感覚がジャンの中にはあって、思わず頬は綻んでいた。
「でもジャン、最近なんだか私にかまってくれない……」
彼らの前でテポンと仲睦まじく、それこそ姉妹のように話していたサニーは、そんな会話が耳に入ったのか振り向いてから、むっつりと膨れた。テポンは宥(なだ)めるように彼女の頭を撫でる。身長差は頭一つ分で、テポンがやや大人っぽいお陰でサニーの外見年齢は如実に下がっているようだった。
「登下校と家、学校で一緒じゃないか」
「ちがうの、だって前ならもっとお話したり、色々してたもん」
「んな事言ったって……これ以上一緒に居たら、一日中ずっと傍に

居ることになるぞ？　お前だって友達とか居るだろ。ほら、クロコとか、なんつったっけ……ハイビスカスの人とか」

「く、クロちゃんとアオイちゃんは学校でいつも遊んでるし、学校帰りで一緒に遊ぶ事もあるし……」

「いつでも会えるおれより、そういう仲良くしてくれる友達を――」

遮るように、トロスが再び肩を叩く。

大人気ないぞ、といわんばかりの表情に、些か無粋すぎたかと己の台詞を思い返した。

だがそれとは全く異なる、思いも寄らない一言は果たして放たれたのだ。

「キミはまだ気付かないのか？」

「……何をだよ？」

「これまでサニーちゃんとずっと一緒に居たんだろう？」

「まあな。それが当たり前みたいなもんだったし」

やれやれ、と肩をすくめるトロスに、ジャンは彼が何を言わんとしているのかをなんとなく悟る。

だから彼は首を振って、

「強調するわけじゃあ無いが、物心ついてからずっとサニーと一緒だったんだ。今更、何かが変わるわけじゃない」

「……ジャンは私の事きらい？」

うつむきがちでサニーが言った。上目遣いでサニーが責めた。

ジャンはいよいよ、なんだか彼女に悪いことをしているような気がして、

「好きだよ。……わかった、一緒に居ればいいんだろ？」

「うん！」

嬉しそうな、子供っぽい笑顔を見て、彼もまんざらではなさそうに微笑んだ。

学校と外との敷地を区別する鉄門を過ぎると、土がむき出しになる訓練場（グラウンド）には人だかりができていた。野次馬とも形容すべきその群

れは円くなって、その中央にある程度の空間を残す。
　互いに剣を、あるいは槍を構えた二者には素人が見て分かるほどに揺らぎがない。子供のケンカという様相は一切無く、今まさに血しぶきが宙を舞い鋼鉄の乱舞が周囲を切り刻まんとする威圧的な雰囲気が、周囲を包んでいた。
「……あの、何が始まるんです？」
　最後尾にて、その巨躯を活かして中を覗き込むクマのような鋭い爪を持つ男に声をかける。また毛皮を肌に癒着させる姿は、まさにクマといった風体だ。
　彼は前を見つめながら静かに告げる。
「いや、それが良くわからねえのよ。俺がここに来た時はもうこうだったし、沈着してるし……ほら、周りを見てみろ。みんな飽きて校舎に入り始めてる」
　促されるように周囲に眼を向ければ、円を作る要素となっていた詰襟の白い学生服の連中、あるいは大きな襟や胸元のリボンが特徴的な制服の女子生徒らは、徐々に数を少なくしている。
　リボンが紅い、あるいはボタンが銀であるのが一年、水色で金なのが二年であるが――そのほとんどは二年だった。残っているのは一年のみであり、よく見れば、声を掛けた生徒は上級生だった。胸元のボタンを外して露出する格好は、野性味溢れる男らしい姿である。
「まあ、いつもの事だろうけど……前からは随分期間が空いてたしなあ」
「いつもの……とは？」
　ん、と反応して男は振り返る。それからジャンらの姿を一見すると、なるほど、と手を打った。
「あいつらは犬猿の仲っつーのかな、良く喧嘩してて、ヒートアップするといつでも得物を出して戦うんだよ。最近はそれを止める奴が居たんだが……どうやら今日は居ないらしいな。だからこうなった。ま、決着がつくか飽きるかすれば教室に戻るだろうよ。お前ら

も、遅刻すんなよ」
男はカッカッカと笑うと、それからジャンの頭を幾度か叩いて、校舎へと戻っていった。
気がつけば野次馬も随分と数を減らし、隙間から中の様子を伺うことが出来る程となっている。
「ねえジャン、教室行こ？」
「ああ、そうだな。見ていても仕方が無いし」
飽きたのか、あるいはそういった闘争を眼にしたくないのか、サニーの提案にジャンは従った。
そうして彼らに背を向ければ、やがて鋼鉄がぶつかり合う音、さらに咆哮が耳に届く。また背中を押すような凄まじい威圧を感じながら、かくして彼らは昇降口へと向かっていった。

――その刹那の事だった。
「唸れ、剣風ゥッ！！」
尋常ならざる衝撃が、振り下ろされた剣から離れて斬撃と変異する。刃状の巨大な旋風は空間を断裂する勢いで男へと迫り、大地を削り深い溝を作りながらやがて接触。構えた槍の穂先が甲高い悲鳴を上げるように、空気が切り裂かれる摩擦音、さらに金属を削る摩耗音を大気に伝播させながら、火花を散らしていた。
だが、勢いは殺し切れない。
間もなく体勢を崩して吹き飛ばされる男は、掻き別れた人波を通過して――迫る。
何も気付かぬジャンの背へと肉薄したその陰は、結局そのままごく自然的に彼を巻き込んで倒れこんだ。
大地に、重なって倒れる二人。が、巻き込んだ張本人は白く染まり上がる長髪を乱したまま、ジャンを弾くようにして横に飛ぼうとして、舌を鳴らす。
「くそ、邪魔くせえ！」
片膝を付いて半身を起こす。そのまま槍の柄を地面に突き刺すと

――得物を握る腕から紋様が浮かび上がり、それが槍へと伝播する。
袖を捲るが故にあらわになる腕、複雑な紋章。紅く輝き槍にさえもソレが刻み込まれ、大地に干渉した。
「空間の障壁（グレイト・ウォール）ッ！」
果たして魔術は発現する。
腕、槍ともに刻まれた紋様が一様に虚空、その槍の手前に弾かれて浮かび上がる。紅い輝きがそれと共に、槍を中心点にした半円形の盾のような障壁を創りだした。
追撃と思しき衝撃波からなる斬撃は、再び大地に深い傷痕を作りながら切迫し――衝突。眼前で空間の中にそこにあるという確かな姿を作って現れた斬撃は、第一打で障壁に決定的な亀裂を入れる。が、破壊されない。
さらにジリジリと押し殺すように剣風は障壁を砕き、無数のヒビを刻み込んだ。斬撃は途絶えず、されど威力は徐々に殺されて、やがて途絶える。吐息のような小さな旋風となって失せた斬撃は呆気無く、共に白髪の男は口角を吊り上げ、この瞬間を待っていた。
全身に流れる心地よい衝撃に四肢を震わせ、一撃のみならず追撃を許して守備に転じた男は、されどこの事態を喜んでいた。
障壁は役割を終えて、間もなくバラバラに、ガラスが砕けるように虚空の中に散っていく。だが、空気中に溶けることはしない。
それを構成していた魔術的要素を持つ破片はそのまま矢尻の形を作って、さらに箆（の）、つまり棒の部分、さらに矢羽を構成する。槍はやがて弓と相成り、弦は同様に穂先と、大地に突き刺さる柄尻とを繋ぐ。
男は手馴れたように矢を手に取り、弦に引っ掛けて力一杯引き寄せる。張り詰めた弦は今にも断裂してしまいそうな雰囲気を纏いながらも、力強く、その威圧をも孕む。
――攻撃を防いだ刹那の出来事。
対する男が、その攻撃手段を理解するよりも早く、やがてその矢は虚空を穿つ。

大気を切り裂く一点の矢は、鋭く、吸い込まれるように男に迫る。
同時に男は、槍を引き抜いて大地を弾いた。
守備から攻撃への、乱雑とも流麗とも受けて取れる流れ。
男は咆哮(さけ)ぶ。
「賢(ざか)あしいんだよ、てめえは！」
「貴様にゃ負ける！」
振り上げられた剣先(きっさき)に、紅い輝きを纏った半透明の矢尻が触れる。
その集中力、判断、対応。その全てが常軌を逸していた。まともな動体視力では反応できるはずのない矢に動き、さらに線から点へと転ずる突きの攻撃を活かして対する。また、障壁を矢へと展開する柔軟性。
異形とも見れる実力は、やはり騎士志願ゆえのものなのだろうか。
単なる才能や努力では決して覆せないであろう印象は、僅か数度のやりとりだけで心に刻まれる。
やがて矢が砕けて、突撃が勝利を収める。
再び距離を縮めた両者だが――。
「何をしとるか貴様らァァァッ！！」
戦闘教官の乱入にて、何らかのパフォーマンスにも似たケンカは、終わりを告げるのだった。

「なんかすごい人たちだったなあ……」
教室で、机をあわせて弁当を展開。
始まる昼食の最中にそう漏らしたのは、ジャン・スティールだった。
多くのクラスメイトは食堂へと向かい、残るのは昼食持参組のみ。
今日はトロスと、クロコ、アオイ、サニーという面々で、それぞれ向かい合わせになって席につく。
残る三人ほどのグループは窓枠に腰をかけるようにして、あるいはその対面の机に腰をかけて、登校時に購入したのであろうパンを食んでいた。

「あ、それ私見てましたよ」
と口にするのはアオイだ。頭に側頭部にハイビスカスを咲かせて、スカート代わりに大きな花弁を腰に纏う、植物族の娘である。ただそこに居るだけでなんだか暑くなるような気がする、常夏気分にさせてくれる女の子は、妙に丁寧にジャンに反応する。
「あんな戦闘、初めて見たんですけど……圧巻でした」
「に比べてお前という男は……」
クロコはわざとらしく肩をすぼめて、鼻を鳴らした。果たして彼女にケンカを売っている自覚があるのかどうか、甚だ疑問である。
「し、仕方ないだろ！　後ろから飛んでくるって予想できないし、対応できないし！」
「でも避けられるだろうに」
「よ……そのとおりだよ！」
「うわ、開き直った」
トロスはサニー特製の弁当に舌鼓を打ちながら、苦笑しつつそう漏らす。
「でもジャンも怪我が無くてよかったよね」
「確かにな、アレで怪我したら笑えないし」
サニーはいいタイミングで助け舟を出してくれる。やはり付き合いが長いだけに、どこで困っているのか、どこで助けて欲しいのかがよく分かっていて、だからこそ大助かりだ。ジャンは手を伸ばして、サニーの頭を撫でてやる。
彼女は嬉しそうに首をかしげて、横に並ぶジャンに寄り添った。
「なんか……どっちかって言うと微笑ましい感じだよね」
「確かに」
「ですね。ほんとの兄妹（きょうだい）みたいです」
ほんわかと、落ち着いた雰囲気。
そういった日常が構成されて、ジャン・スティールは一日の大半、全てと言っても過言ではないほどに、その殆どを異人種と共に過ごしていた。

だからこそ、と言うべきなのか。
「ジャン！　ジャーン！」
妙なことに巻き込まれるのも、割合に多くなっていた。
彼の名を叫びながら廊下を走り、そうして教室に飛び込んできた姿は小さく、四本の足で床を弾くとそのままジャンの後頭部に突っ込んだ。
ネコはそうして頭に抱きつくと、ポンポンポンポン肉球で頭をたたき、どうやら錯乱しているらしい事を教える。
「ど、どうしたんだよタマ？　っていうか、なんで学校に――」
「助けて、しょ、しょ……」
「しょ？」
「触手が……地下から、なんか出てきたのよ！」

地下の呪い　～学校の七不思議1～

まさか、地下室というものが本当にあるとは思わなかった。
ジャンは、及び腰のタマを肩に乗せて、食事が終わり次第教室を飛び出していた。
向かう先は、校舎裏。地面に埋め込まれている床収納庫の扉のような蓋がある、焼却炉から程なく近い場所だ。
今ではその蓋は開け放たれていて、よく見れば『封』と書かれた紙が半ばから黒い炭に変わっているのがよくわかる。
「またなんでこんな所に……」
「だ、だって怪しい匂いがプンプンしてたのよ？　行くっきゃないじゃない」
「ていうか、なんで学校に？」
「いい加減暇だったのよ」
すまし顔でタマが言った。
面倒事を持ってきたというのにこの表情である。手馴れたものなのだろう。
が、ジャン自身興味がないわけでもないし、まんざらでもない。
だからまず教員を呼ぶより、先に自分で確かめたかったからここに来ていた。
護身用に持ち歩いている短刀を腰のベルトにくくりつけて、下りの階段となるその中へと足を伸ばした。
明かりには、魔石を使用した技術の粋である携帯式の電灯がある。筒状になり、先頭に装着した魔石が僅かな光を吸収して増幅、そして切り替え装置によって点灯を操作できる。
人造の石材で塗り固めてある階段や壁、天井は冷たく、中に入るだけで空気の冷え込みを感じることが出来た。ジャンはそれから、ポケットから電灯を取り出して付ける。と、十数段の階段を下りた先にある通路の奥。硬く閉ざされていたであろう鉄の扉が半分だけ、

口を開けているのが見えた。
長い間人が踏み込んだような形跡は無く、通路の床にはタマの足あとだけが残っている。
鼻を突くような腐臭にジャンは袖口で鼻を抑え、階段を降りてから、少しばかりそこで立ち止まった。
――扉の向こう側に、強い気配を感じる。
それが、彼女が言っていた触手なのだろう。
だが、触手があるとなれば、それを操る、その元になっている存在があるはず。しかしなれど、長い間人が寄らないこの地下で、果たして生存していられる生物などが存在するだろうか？
さらにこの、騎士養成学校の敷地内にあるというのにも疑問が生まれる。
封印されていた、と考えられるが、なぜこの場所に。そしてまた、それはどのような姿なのだろうか……。
疑問は重なり、解消されない。
ジャンはその淀んだ空気を衣服越しに吸い込んでから、小さく頷いた。
「行くぞ、タマ。準備はいいか？」
「あたしはできてる」
「よし……！」
タマはジャンの首元に顔をうずめて待機する。
彼は重い一歩を踏み出して、さらに一歩、もう一歩……そうやって、やがて扉の前へと近づいた。
電灯を持つ手で、扉に手を掛けると――。
『だれ……？』
淀んだ空気に鈍く伝播する声音。
声帯を潰されたような、醜悪な声。
だがそれは確かな言葉となって、ジャンへと投げられた。
思わず腰が抜けそうになる。高鳴る心臓が今にも破裂せんとして、ジャンはそのまま扉を掴む腕に寄りかかるように停止した。

――言葉が通じるのか？

臭気がより強くなるのを感じながら、ジャンは考える。

異人種なのだろうか。

人と同じ程度の知能を持つ生物。さらに触手を持ち、長い間地下空間で生きながらう事ができる生き物……少し考えても、それがなんなのか、ジャンの頭の中に該当する存在はない。

しかし異人種だ。人間側からしてみれば、ある意味何でもありのような生物である。

これまで人間界に、表面上でも溶け込んできたのは、この世界にそもそも存在している生物と同化したような異人種だ。たとえば獣、あるいは植物、軟体動物、爬虫類。種類数多で、恐らくまだ見ぬ種族もある。

その中に、こういった生き物がいても、なんら不思議ではない。

この世界の科学が通用しないのだ。ありうる話である。

ジャンは息を飲み、少しだけ考えてから、口を開けた。

顎が震える。足がガクガクと揺れる。これが恐怖ゆえなのか、興奮ゆえなのか、自分でもよく分からない。

「か、勝手に入ってすみません。あの、気分を害したのでしたら、すぐに帰りますので……」

『……だれ？』

果たして言葉に返答はやってきたが、それは会話として成り立たない。

あるいは。

彼は考えて、ようやく告げる。

「ジャン・スティールです。この学校の、一年です」

――言ってから、少しだけ後悔した。

こう言わなければこの場を乗り切ることは出来なかったかもしれない。だが、噂に寄ればこいつは『呪い』だ。名前さえあれば、人を殺すくらいなんでもないかもしれない。そんな存在、権化なのかもしれない。

そうだ。生物である確証などもとより無かった。
魔術によって生まれた意識のある何かなのかもしれないし、科学によって作られた何かなのかもしれない。何よりもこれを生物と断定するにはあまりにも情報が少ないし、早計すぎた。
早まってしまったか……そう考える最中に、扉の隙間から何かの陰が現れた。
ぬるりと粘膜をまとわりつかせる、一本の流線型の何か。くすんだ紅い色はむき出しになった真皮のようだが、鮮血が漏れる様子はない。触手と呼ばれるそれは、その身を起こすとやがてジャンの膝くらいの高さにまで持ち上がった。
『きて……』
鈍い声音は、触手の手招きと共に発される。
それは幾度か頭をさげるように手招いてから、ヌルヌルと蛇が這うように部屋の中へと退いていった。
「行くの？」
首に抱きついて目を瞑ったままのタマは、小さな声でそう訊く。
「行くしか、ないだろうな」
既に選択肢というものはないような気がする。もう巻き込まれてしまったのだ。こうすることは、仕方なの無いことなのだ。
ジャンは大きく息を吐いてから、扉の隙間にその身を滑り込ませるようにして、空間の中へと入っていった。

中に入ると、まず床の感触が途端に変わったことに気がついた。
分厚い苔の上に立つような感覚。不安定で、ぬめり、そして歩けばぬちゃぬちゃと粘液がすれ合う音がする。電灯を床に向けると――肉のような何かが、一面に敷き詰められていることがわかった。
それだけで腰が抜けそうなのにもかかわらず、教室ほどの広さを持つその空間の中央には、巨大な柱のようなものがあった。
包み紙でアメを包んだように、中央部はやや膨らみを持つ。そしてそれは、まるで心臓のように鼓動していた。床は主に肉で埋まり、

また小さな触手が刺激に反応して現れる。いわば、腸絨毛のようなそれらだった。

さらに壁には蔦が這うように、触手や肉がこびりつく。その全ては蠢いていて、呼吸をするように臭気を放っていた。

耐えられない。

あまりにも世界が違いすぎる。

気色が悪いだとか、気持ちが悪いだとか、そういったもので括れる空間ではなかった。

最悪だ。

予想を上回る事態を目の当たりにして、尚、彼の足はその柱、声の主と思しきものへと近づいていった。

『きてくれた……ほんとにきたんだ……』

肉の柱。膨らみを持つ部分には、その空間には酷く似つかわしい姿があった。

透き通るような肌。鮮血のように、その肉と同化するような色のワンピースを身につける、銀髪の少女。四肢は肉に取り込まれるように、まるで磔にでもされているような姿がそこにはあった。

――おそらくこれが外界と接触するための装置と言うべき部分なのだろう。

そう考えれば、この空間内の肉やらそれらが全て、ひっくるめて一つの生物という事になる。

「ご、ごきげんよう……？」

挨拶を試みる。

『ごきげんよう……』

返された。

「お、お名前は？」

『ない……』

「そ、それでは、ちょっと……おいとましようかなぁ、と思います」

言って、ごく自然的に背を見せる。

その瞬間だった。

粘液が音を立てる。肉から剥がれた一振りの触手が、その本体と言うべきソレから振り抜かれて――刹那。彼がその肉薄を理解するよりも早く、触手はジャンの腹に巻き付き、宙に持ち上げた。

電灯が手からこぼれ落ちる。照明は、吸い込まれるように本体へと近づいていく様を照らしていた。

「う、わあああああ――っ？！」

『まって……』

身体が肉塊に叩きつけられる。ぶよぶよとした奇妙な感覚に身体が埋もれた。

『おともだちに、なって……』

タマは引っ張られる最中に落ちたのだろう。その通過点で、口から魂を吐き出すように倒れていた。精神が過負荷に堪え切れずに気絶してしまったらしい。

「お、お友達……ですか……」

『おともだち……』

繰り返す。

そうすると、不意に肉塊の手前から勢い良く触手が突き出るように出現した。

それはうねうねと、見えざる手によって粘土細工が加工されるように、触手はその形を変異させる。

人のように二本で一対の腕が生まれ、五本の指が作られ、また胸には未発達な膨らみ、まだくびれは無く寸胴、そしてぷつりと肉から引き離された触手は、やはり二本の足を生やしていた。

色が変わる。

先ほどの境界面と同様に、人間のような肌を持ち、腰までの長い銀髪を生やす。くすんだ、生気の無い瞳はそのままだが――何も知らなければ、その姿はそのまま人間に見える。人間以外の何者でもない姿だ。

やがて少女は、紅いワンピースを纏って、裸足のままで肉の上に立ち、触手に握られ肉塊に叩き込まれるジャンの姿を見上げていた。

『あげる……がっこうはかよう。おうちは、ここ……』
鈍い声音は続けた。
『おともだち、なってほしい……』
――何が目的なのか。
そもそもコレは一体なんなのか。
その全てが、意識的に彼の頭の中から排除された。
生存だけを考える思考が彼を突き動かし、口を動かす。言葉を紡ぐ。
「お友達に、なりましょう……！」
精一杯に吐き出されたその言葉を最後に、ジャンの意識はぷつりと途切れた。

「ジャン！　ジャーン！」
名前を呼ぶ声と共に、身体が大きく揺すられる。共に、深く沈んでいた意識は呼び起こされて、浮上。
ジャン・スティールの意識はそこで覚醒した。
「……はっ！」
反射的に眼は開き、そして同時に心臓が激しく鼓動する。
彼の視界には心配気な視線を送り、今にも泣き出してしまいそうな人型のタマがあった。
タマはジャンが目を覚ますと安心したように大きく息を吐き、それから見る間に縮んで、猫に戻る。
「もう、死んじゃったかと思った」
「こ、ここは……」
震える声で告げるタマの頭をやさしい手つきで撫でてやりながら、彼は身体を起こす。周囲を伺うように首を回せば、そこは校舎の裏。焼却炉の近くだった。
振り返れば、大地に埋まる蓋は閉まったまま。
彼はそこでようやく胸をなで下ろして、深く息を吐いた。
「良かった、おれを襲う触手はいないんだ……」

そう漏らすと、背後から凄まじい衝突音が鳴り響いた。まるで壁に勢い良く馬か何かが突っ込んだような音に、衝撃。彼は慌てて立ち上がって振り返ると――くるくると、蓋は宙を舞っていた。

やがてそれは角の部分を深く大地に突き刺すと、殆ど同時に、それは着地した。下には何も身につけていない少女は肩までワンピースを翻してから、ゆっくりとしたようすで落ちていくその衣服がやがて地面に触れてから、緩慢な動作で立ち上がる。

くすんだ黒い瞳がジャンを見上げた。少女は裸足で仁王立ちする。

「呼んだ？」

そうして声は、いかにも少女らしく澄んだ声音となって言葉を紡ぐ。

「呼んでません」

「そう。残念。ちなみに、本体から離れられるのは、二時間までだから。過ぎると腐っちゃう。臭くなる」

「頑張ってください」

「ありがと」

慣れない言語を一生懸命使うように、拙くも、彼女は先程よりも遥かマシな声でそう教えてくれる。

もしかすると、この学校の七不思議となる一つを、そして最大級のその不可思議を解けるかもしれない。さらに恐怖さえ忘れてしまえば彼女だって、普通に接することができる。

食われることは……ないだろう。そうだ、あの地下で生きて行けるのだから、食事やら何やらは不要なはずだ。

ならば大丈夫。

おれは大丈夫。

彼は頷き、自分を納得させる。

「ま、そういう、事だから。よろ」

……どこでそんな言葉遣いを覚えるのだろうか。

台詞に関してはまだ本体のほうが可愛げがあったかもしれない。

手を差し出す彼女に、ジャンは対応してその小さな手を握り返し

た。
「よろしく、ノロ」
「ノロ？」
首を傾げる彼女を指さすと、彼女は自分で自分を指さした。
「ノロ？」
「そう、君の名前だ」
名前の由来が呪いだと知られたら、本格的に殺されるかもしれない。
そう思いながらも、口をついて出てきてしまった以上引き返せない。時間程度を巻き戻せない自分を不甲斐なく思った。
ジャンが言うと、彼女は僅かに、口角を吊り上げた。
「わたしの、名前」
「そうだ。名前がないと不便だからな。それじゃ、ノロ、悪いがおれはこれから授業だ。帰るからな」
「うん、わたしも準備が必要。学校は来週から」
「そいつは良か……残念だな。それじゃあまた今度！」
「うん」
畳み掛けるようにして、ジャンはタマを強引に肩に乗せてから、ノロに手を振り背を向ける。
なんだか奇妙な罪悪感に苛まれながら——ジャンは教室に戻る。閑散とする、誰もいないその様子から、既に時刻は放課後を過ぎていることを理解するのは、それから数分後の事である。

遠征　～学校行事～

程なくして『図書館には”出る”』という噂が広がり始めた。
何が出るのかと言えば、この世の者ならざる存在、いわば幽霊の類だ。
ジャンは校舎裏でない事にいささか疑問を感じたが、出会うたびに語彙が増えるノロを見れば、その理由をなんとなく察した。彼女なりの努力なのだろうと思えば、可愛らしくさえ見える。
しかし結局、来週から学校に通うと断言していたノロは、一週間待てど二週間待てど、入学する様子はない。さりげなくごく自然的にクラスに紛れ込んでいる様子もないからわざわざ、あのどう我慢しても気持ちの悪い『肉の部屋』を訪問して、本体に訊ねてみれば、『めんどうくさく……なっちゃった……』
まるで最近の若者じみた台詞が返ってきて、ジャン・スティールはなんだか安心したような、どこか残念なような心持ちになる。
そんなこんなで時間が経過して――新たな月を迎えた。
季節は初夏に移り変わり、気がつけば入学してから初めての学校行事が催される頃合いになっていた。

まずはじめに、武器適性という検査が行われた。
といっても、それぞれ個人が武器を扱い教官がそれを判断するわけではなく、戦闘訓練の授業過程で判断した適性ある武器を生徒に手渡すだけである。もっとも、既に武器を所有している者は持参することが許可されているために、ジャンとサニーは、それぞれ自前の剣と弓を装備していた。
ドワーフ族の特製装備。剣は肉体に紋様を刻まなくとも魔術を使用することが許され、弓は――未だ使用されていないために、効果は分からない。だが恐らくは同様のものなのだろう。
そういった中で、生徒の多くは剣や槍を装備する。

三十分にも満たぬ時間で準備の整えた白い制服姿の集団は、されど集団とも言えぬような三十人余りの団体だ。

「はぐれるなよー！」

先頭に立ってそう告げる戦闘教官は、街の門から下級生総員を引き連れて出発する。

――この学校行事は、『遠征』と呼ばれるものだ。

内容を簡単に説明すれば、ここから十数キロほどある森まで行進し、昼休憩を経てまた街へと戻るというもの。

簡潔に言えば遠足（ピクニック）だ。

しかしそれでも一日の授業がなくなり、また珍しい外の世界を歩けるという新鮮さもあって、各々の興奮は最高潮となる。

だからこそと言うのだろうか、出発時に構成された列は瞬く間に乱れて好き好きに並んび、会話を交わし談笑しながら、それでも辛うじて動きが緩慢にはならずに行進する彼らには、教官らも少しばかり眼をつむっているのだろう。

そんな連中のしんがりは、女騎士のシイナ。鬼族の娘だ。そう考えれば、今回の行事に対する安全対策と言うものは出来る限り考えられているのだろうと思われる。

ジャンはその最後尾付近でいつものメンバーと共に行進し、背後（うしろ）のシイナの機嫌を伺いながら、されども緊張など微塵も必要のないこの状況に、思わず表情を弛緩させた。

「ねえジャン、こんなの久しぶりだよね」

肩に矢筒を担いで、また同時に弓を収めた細長い専用のケースを担ぐ。傍らで、ジャンはパンパンに膨れた荷を背負い、腰に剣を提げていた。

「確かに。前はちょいちょい散歩に外歩いてたけど、最近は全くないよな」

「うん。だから嬉しいかな」

「そいつは良かった。今でこそたまにしか無いが、時間があったらまた、近場でも散歩するか。今日は楽しむって程の事はないが、下

見感覚なら面白みもあるだろ」
「ジャンは冷めてるね。私これでも結構楽しいんだけど」
「そいつは良かった」
にしても、だ。
ジャンは穏やかな日差しの下、そういった大した速度もでない遊覧とも言える緩慢さで歩きながら、またサニーと会話しながら、あるいはクロコやアオイらの会話に耳を傾け微笑みながら、内心は少しばかり焦りが生まれている。
考え出せば、少しでも計算してしまえば分かってしまう破産までの日数。
特にこれといった出費がないし、テポンの所で住まわせてもらっているからなんとか生きながらえているが、それでも資金は心許ない一方だ。下手に本を数冊、あるいは一週間でも昼食全てを外食で済ませれば、財布は空になる。
ならばアルバイトでもしてみようとも思うが、どこで募集しているのか、その応募を周囲に知らしめているのかが分からない。既にこの街に来て三ヶ月にもなるが、手がかりをつかむことすら無い。
そういった事に行動しない、積極性のなさが一概に要因と言えるのだが――流石に、いよいよ行動せねばならないだろう。
帰ったら調べよう。
彼はひとまずそう考えるも、不安は胸の中に渦巻いたままで不快感は募る一方だった。
「それにしても――」
「これより九〇分の昼休憩をとる！　分かっていると思うが、森には入るな！　あらゆる意味で危険が多いし、さらにあまり離れすぎるな！　時間厳守で、守れなかったものは連帯責任として貴様ら全員に罰則を強いる！」
舗装された道は、やや木々が生い茂る周囲から、途端に薄暗く緑を鬱蒼とさせる自然のトンネルの中へと続いていた。
彼らはまだ林にすらなれない草原の中で立ち止まり、整列する間

もなく戦闘教官は声を張り上げて注意した。
言葉はそれで終わりであり、「解散！」の声から、各々は好き好きに散らばり始めた。
「もう着いたのか……」
ジャンは腰に手を当て、されど一切の疲労を覚えない肩や腰を確認しながら息を吐いた。
「もうって、結構歩いたよ？　歩きっぱなしだよ？　疲れたよ……」
「そうだな。なら早速昼食にするか……ん」
どこか適当な場所は無いか、そう周囲を見渡してみれば、既に草原の小丘に立つクロコ、アオイ、トロス三名の姿があり、それぞれは彼らを見て、気づいたのを確認してから手招いた。

重箱は、三段重ねで量、種類ともに随分あったものだが、五人でつつけば見る間に量を減らして、やがて空になった。
満腹になった腹をさすってトロスは草原の上にそのまま横たわり、シートの上ではサニーら三名が水筒からお茶を出して飲み、団欒とする。
「それじゃちょっと、腹ごなしに出てくるよ」
ジャンはそう残すと、地面に寝かせた剣を拾い上げて腰に携え、大きく伸びをした。
辺りは、年甲斐もなく追いかけっこをしたり、またトロスのように寝転がりひなたぼっこに興じていたり、あるいは組手や、剣術のおさらい、紋様を持っている同士で程度のごく軽い魔術のお披露目会など、様々な暇つぶしが行われていた。
時間にして、まだ一時間近く残っているのだ。
何かをするには、この環境では十分な時間だ。
「さて、ちょっと森――」
「頂けない発想だな」
「の周りでも走ってこようかなー」
振り向かずとも分かる異様な威圧。凛とした声に、ジャンは逃げ

出すように走りだした。
　が、素早く、足が動くよりも早く背後から腕を掴まれた。
「ちょいまち」
「な、なんですか！」
　振り向けばまず視界に入り込むのが赤い姿だ。
　胸の形に型を作ったような胸当てに、革製の腰巻には独特な刺繍が施されている。破廉恥な姿だが、さらに背中にはナマクラ以下の、鉄の塊と形容できる巨大なソレを背負っていた。それらをひっくるめれば異様な姿と言える。
「あれを見ろ」
　振り向くと同時に、シイナは彼が向いていた方向へと腕を伸ばして指をさす。その先には、道が飲み込まれていく森が広がる、その光景があった。
　そして、まるで吸い込まれるように中へと入っていく二名の姿。それは人間ではなく、毛皮を身につける獅子のような勇ましい姿の男に、鳥のようなトサカにクチバシをつける二人組だ。
「クラス代表に頼もうかと思ったけど、頭でっかちタイプの人間だし。君のクラスの代表は女の子だし、隣のクラスを巻き込むのもどうかなっと思って」
「……おれは、その隣のクラスの、しかもただの一般生徒ですが……」
「君は実績があるから。えーと、カールくんだっけ？　もう仲直りしたの？」
「ぎこちないですが、こちらから話しかけたら返してくれる程度には。挑発したのはこっちですし、九分九厘おれが悪いんですけどね」
「まあそれなら別にいいけどね。そういうわけだからお願いしたいんだけど」
　と、彼女はジャンを掴む腕を離して告げる。軽く腰を曲げるようにしながら両手を顔の前で合わせ、お姉さんからのお願い、といった風体で頼み込んでいた。

さすがに彼女も周囲から自分がどう見られているか分かっているだろうから、この体勢を長く続かせるわけにもいかない。ヘタをすればジャンが、周囲からこの成り行きを妙な噂として流される立場にさえなってしまうのだ。

だから思わず、

「分かりましたから、頭上げてくださいよ」

そう返してしまえば、

「そ。ありがと」

彼女は豪快にジャンの頭をポンポン、と叩くと、そのまま促すように背中を押した。

木々から生い茂る葉は幾重にも重なりあって、自然のカーテンになる。その隙間を掻い潜る木漏れ日は薄暗い陰の中に鮮やかなコントラストとなって、風によって踊る葉と共にその明かりも揺れた。

思ったよりも明るい森の中は、教官らが脅していたほど危険は少ないように見えた。

ガサガサ、という草木を掻き分ける音と共に、木々の脇から道路へと飛び出してきた陰があった。小さく、足元を横切るのは薄茶色い野うさぎだ。森だから居てもおかしくはない小動物を見て、さっそくあの二人を見つけたかと期待したジャンは少し肩を落とした。

それからそう間もなく、同じような物音と共に、今度は狐がその後を追うように飛び出し、反対側の草木へと飛び込んでいく。

ううむ、自然の摂理。たぶんあのウサギは捕食されてしまうだろう。これが弱肉強食だ。

そうやってどこか憂いげのある眼差しを、舗装もされていない、無造作に自然生い茂る方向へと向けていると――これも運命か、それとも直感か。そのやや奥側、道よりもさらに暗がりとなる位置に例の二人組を発見した。

おそらく、趣味が狩猟か何かなのだろう。

狩りというものは命を弄ぶというイメージが根底についてしまっ

ているから、ジャン自身あまり良い印象がない。が、それは彼自身がやっていたこともあって、それを咎めることは決して出来なかった。

彼らがここで狩った動物を持ち帰れば、毛皮を剥いで衣類にするも良し、煮て焼いて食うもよしでなんでもござれだ。放置しても他の小動物が血肉に変えてくれるだろう。何も悪いことばかりではないし、殺される小動物に一々「可哀想だ」だのなんだのと口をだすほど善人でもない。

そもそも、今回は彼らを森から引きずり出すだけだ。シイナが、あの時点で連帯責任を発生させなかっただけ感謝するべきだろう。

ジャンは大きくため息を付いてから、大きな一歩で、茂る藪の中へと入り込んでいった。

「おーい！　ふたりともー！　帰ってこーい！」

手を口に添えるようにして叫ぶと、彼らは大きく肩を弾ませるて、それから一様に振り向いて走りだす。彼らはその場から離れて、さらに奥へと入り込んでしまった。

「何やってんだよあのバカ……」

泣きそうになる。

頭を抱えたくなる気持ちを抑えて、ジャンは足場も環境もくそったれな位悪い森の中を走りだす。藪をかき分け、名前も知らない葉に肌を切られないよう気をつけながら草木をより分け、踏み倒し、たどり着くのは彼らが先ほど居た場所だった。

大きな樹木。その幹の根元には――。

「……ッ？！」

まだ血なまぐささが残っている。

内蔵を引き摺り出され、いたずらに首を切断された狐の死骸は幹に磔（はりつけ）られていた。

血糊がべったりとついた安物の果物ナイフが近くに落ちていて、雑貨屋で打っていそうな数種類の釘の詰め合わせケースが置いてあるのを見る。

ジャンは思わず漏れてしまうため息をそのままにして、屈み、幹に叩きこまれた釘を引きぬく。まだ子狐だったのだろうその四肢、愛おしい肉球はズタズタに切り裂かれて見るも無残だ。

皮膚が裂け、手が血だらけになるのも構わず、彼はやがて素手で穴を掘り、そこに子狐の死骸を置いて、埋める。簡単な墓だが、この樹木が墓標となってくれるだろう。

ポケットから取り出したハンカチで手を拭ってから、彼は改めて嘆息した。

さて、バカは何処に行ったのやら。

「狩猟なら、まだ自分のためにもなるんだけどなあ……」

野生動物はなかなかに手強い。

まず、確実に殺気を察知して、音や気配に敏感で、あの特有の身体能力がクセモノだ。

だからそれを狩るためには、単に殺すための技術を高めるだけでは獲物を捉えられない。気配を殺すこと、あるいは罠を作ること、ナイフの振るい方や、まず根本的な歩き方など。その様々な技術があって、初めて獲物を捕らえることが出来る。

狩猟が趣味ならばまだ許そう。

しかしこの悪趣味過ぎる事が目的だったならば……。

ジャンは剣を引き抜く。金属が鞘の金具に擦れる、小気味良い音を鳴らして白刃を晒すと、彼はそのまま柄を両手で握りしめたまま、大地に突き刺した。

――刀身に紋様が浮かび上がる。それは明るく、太陽のように眩く光を放ち始める中で、ジャンは命じた。

「投獄しろ……大地の怒りっ（アース・ビック）！！（はし）」

ブロードソードに鈍い衝撃が疾り、両腕に伝わる。彼の強い意思を読み取った魔術は大地に立つ、彼が対象とした二つの足音を聞き取り読み取り位置を把握した後――彼らが何かが起こったとしか認識し得ぬ刹那的な速さで大地が錐状に変異して突出し、彼らを囲い込んだ。

うろたえるような悲鳴、喚き声、悪態がやや近くから聞こえる。
轟音と共に巻き上がった土煙が、同時にジャン・スティールに彼らの居場所を教えてくれた。
ジャンは剣を引き抜くと、数十メートル離れた森の中に、不意に出来上がった出来損ないの牢獄へと切っ先を差し向ける。
再び紋様が輝いた。
魔石から創られたこの武器は、あらゆる魔術を可能とする。
もっとも使用者の技量や知識に干渉して発動するため、ただ媒介となるだけの剣が全てを可能とするわけではない。が、大地や風、そういったある程度の”属性”は、触れるだけで発現出来た。
「疾(はし)れ、剣風」
剣を引き、右腕で身を抱くように構える。左腕は顔の位置まで引き上げ――交差する諸手を勢い良く広げれば、その刹那に刀身からの鈍い衝撃が大気を伝播し、一つの真空波(かまいたち)となって大地の牢獄へと迫る。
やがて音もなく通過する真空波は、それから瞬く間に形を崩して疾風となる。
天をつく勢いでそびえた錐状のそれは、やがてズズズ、と半ばからズレ始め、鈍い衝撃音を響かせながら、その半ばから切り裂かれたように崩れていった。
――ジャンがそこを覗き込めば、縮み上がって頭を抱える二人の姿があった。
剣を収め、中へと飛び込む。
男達の怯えるような悲鳴に、少しだけ胸が痛んだ気がした。
「一つだけ訊いていいかな」
極力穏やかな口調でジャンが言った。
彼らは、その威圧的な風貌が嘘のように、こっくりこっくりと、壊れかけのブリキ人形のように頷く。
「さっきのは解体がメインだったのかな？」
二人が揃って頷く。

「狩猟がメイン？」
全く同時に頷かれた。
「言葉通じてんの？」
こくりこくりと返事をする。
依然として言葉はない。
これで彼らは、どちらにせよ反省したのだろうが――これではただ単に、暴力で黙らせただけだ。
根本的に、ああいった死を侮辱する行為はいけないと教育できていない。
あれでは、子供が好奇心のままにアリを潰したり、カエルを風船のようにふくらませて破裂させたり、そういったものと全く同意義ではないか。
良し悪しすら区別できていないのならば問題だが、果たして……。
絶えず零れるため息を最後に、ジャンは近くの、脇ほどまでの高さの錐を手で押した。すると、たったそれだけでも牢獄を作る要因となっていたソレはボロボロと、まるで水気のない砂でなんとか形を維持させたように崩れていった。
そう、脆いのだ。
土に固められた大地を、岩石のように硬く構成しなおしてアース・ピックを発動させることは、今のジャンの技量では到底ムリ、不可能だ。
だからこれが有用なのは、石畳の上など元々堅い場所。岩なども可能かもしれないが、下手をすれば変形することすらなさそうだと思えてしまう。
だからこそ、あの剣風だって当たれば痛い程度。濡れた布で叩かれた程のダメージしかない。
「殺すことを怒ったわけじゃないんだ。馬鹿にするわけじゃないけど、野生動物は捕まえるのも難しいし、素直にすごいと思う。だけど、死骸を遊びに使うのは良くないと思うんだよ。極端な話になるけど、お前らだって自分の死後に解体されてハリツケにされたら嫌

だろ？」

なるべく諭すように言ってみる。

その頃になると、彼らは錐状に変化したそれらを見てハッタリに気づき、それからやがて冷静になったのだろう。

変わらず口を利いてくれないが、その頷きには確かな理解の意が汲み取れた。

――面倒に口答えされなくて良かった。

以前の出来事、いざこざから少しだけ学んだジャンはそう安堵して、彼らに背を向けた。

「なら戻ろう。いい加減、教官に気付かれるかもしれないからな」

また草木を踏み分けて歩き出せば、ソレに倣って動き出す気配を感じることが出来た。

それから程なくして、こっそりと森を抜ければ――。

「……ようやく戻ったか」

威圧的な、どこか怒りさえ孕むような声が響く。

戦闘教官が、腰に手をやり待っている姿がそこにはあった。

「一足先に帰ることにしよう」

まず教官がそう提案した。

既に背負っていた鞘から抜いた両手剣（ツヴァイハンダー）を軽々と片手で持ち上げ、肩に担ぐ。その姿は、鬼族のシイナよりも鬼らしかった。

教官の言葉に三人は背筋を伸ばして居直る。それからまず教官の出方を伺っていると――大剣は、ジャンの額の薄皮をにわかに切り裂いて振り下ろされた。前髪がパラパラと舞い散る中で、鼓膜を突き破る怒号が響く。

「何を止まっている！　さっさと俺を先導しないかッ！」

『は、はいっ！』

声は重なり、行動も全てが同時に、彼らは振り返った。

「走れ！　全速力だ！」

『はいっ！』

返事をするが早いか、背中目掛けて大剣が振り下ろされる。彼らは途端に死の恐怖を感じ取ると、死に物狂いで大地を弾き、緊張故にまともに可動しない関節や筋肉をそのままに、来た道を、来た時の穏やかさや楽しさなど嘘のように走りぬいていく。

――なぜおれまで。

ジャンは巻き込まれたからどうのこうのなどと言い訳する事も思いつかず、されど被害者根性だけは胸の奥底で燻らせて走り続けていた。

そう時間も置かずに、彼らの影は小さくなる。

シイナは申し訳なく思いながら、されどなんだか愉快なまでの理不尽に飲まれたジャンが可笑しくて、口元を抑えて笑いをこらえながら、その姿を見送った。

「帰るまでが遠征だからね！　気を抜かないでよ！」

集団の先頭を務めるのは、来る時とは違ってシイナだった。

女性だからか、あるいは新鮮だからか、下級生一同の呼び掛けに対する返事はより元気で、列も乱れない。

歩き出せば少しばかりズレが生じるが、イイところを見せたいという本能に近い部分が働いて、談笑は続くながらも、軍隊の行進とあいなるそれらは、結局街に着くまで続くことになった。

図書館

放課後。

ジャン・スティールは渡り廊下から図書館へと渡った。

あと一ヶ月も経てば定期試験が始まる。まず授業ごとの筆記試験があって、戦闘訓練では実際に一人二組になって出来栄えを披露する。彼は今のところ、後者に対する自信は持ち合わせていたが、どうにも勉強というものに自信が持てなかった。

理解ができないということではなく、単に不安だ。だからこそこれまでやってきたように、それを努力することで満たして補う。

――という事もあるし、いい加減ノロの事も気にしてやらなければならないだろう。

今日はサニーもクロコと近くの服屋へ寄ってから帰ると言っていたし、トロスは他の友人に誘われるがままに帰っていった。何はともあれ、いつものグループ以外にも行動できる者がいるというのは良いことだ。

「……おれ、なんか距離置かれてんなあ……」

異人種間で、『キレたらヤバいヤツ』の異名が伝わるのに、決して長い時間は要さなかった。

気がつけば腫れ物を触るような扱いを受けていた。それは人間も同じであり、辛うじて普通に声を掛けてくれていた連中さえも、最近では目も向けてくれない。異人種も同じだ。

どこで間違ったのやら……ジャンはため息を吐いて、図書館の重い扉を開けて中へと入った。

円形の建物は、その内部も円形に形作られている。

まず内装として最初から存在している本棚は、壁にそってぐるりと中を一周していた。本は余すことなくジャンル分けで詰め込まれていて、ちょうどその上に沿うようにして備え付けられている吹き

抜け状の廊下には、それと同様に本棚が壁に埋め込まれていた。さらにそこに収まり切らない本は、その本棚に重なる棚に並べられていて、取るためにはキャスターのついたハシゴを使用する。

入り口の正面には階段があり、また内周の本棚から直角に、棚は本屋のように鎮座し並んで、狭い通路をつくりだす。

試験が近く、また放課後ということもあって利用する生徒の数は割合に多いようだった。

入ったすぐ右側にはお手洗いの扉があり、その脇に壁に沿うような半円の受付カウンターがある。

自習用の長机は、階段の手前に多く並んでいた。

「あ、スティールさん……？」

聞きなれた声に振り向くと、そこには幾冊かの本を胸に抱くアオイが居た。既に夕方近いからか、頭のハイビスカスは心なしかしぼんでいるようだった。

唯一まともに接してくれる内の一人に、ジャンは少しだけ胸を撫で下ろすようにして向き直る。

「アオイも勉強？」

「うん、はい。そろそろ試験も近いですし、万全を期したいので。レイミィも居ますよ？」

そう言って彼女はジャンの背後に視線を配る。彼は促されるままに自習机の方へと顔を向けると、既にこちらに気づいていたレイミィが大きく手を上げて主張して見せている姿が見えた。

「行きましょうか」

「おれも良いのか……？」

「……みんなの事を気にしてるなら、私達の間には要りませんよ。お友達じゃないですか」

「そう、だな。ありがとう」

「それじゃ、行きましょう？」

手を伸ばしてくる彼女の手を握り返すと、そのまま連れられるままに、ジャンは長机へと向かっていった。

ハイビスカスは、なぜだか綺麗に咲き誇るのを見ながら――ジャンはやがて席についた。
「や。秀才二人に勉強を教わるなんて光栄だな」
「嫌味ね、ジャンくんなんて他人のことなんて興味ないクセに」
「失礼だな。いつもヒトの目気にしてビクビクしてるっていうのに」
「だったらもっと表面に出してくれれば、まだ可愛げもあるってものよ？」
レイミィは会うなり机に頬杖を付いて、もう片方の手では指先でペンを弄繰り回してそう口にする。が、純粋に悪く言っているというわけではなく、単なるコミュニケーションとしてのソレだ。
だから隣に座るアオイも、それが分かっていて微笑んでいる。
幸せな空間だ。
「奇遇。勉強？」
そう考えていると、不意に現れた声。教科書を取り出していたカバンから顔を上げて振り向けば、そこには赤いワンピース姿の少女が立っていた。
思わず驚き身体が弾むが、ジャンはそれをなかったコトにして大きく息を吐いた。
「ああ。試験があるからな」
言葉を返すと、少し遠慮がちにアオイが袖を引いた。
「……スティールさん、この方は？」
と、そこで気がつく。
そういえば彼女を知るのはジャン以外では、タマくらいしか居ないことに。
「まあ、ノロ。座りなさい」
「御意」
靭やかに伸びる白い腕を上げて、勢い良く振り下ろすと――腕は紅く変色し、そしてにゅるりと伸びた。それからレイミィの隣の席の手前に手をつくと、力を込めて跳躍する。ノロは軽々と高く宙を舞ってから――もう片方の腕を触手にして椅子を引き、着地すると

同時に腰をかけた。
……心臓に悪いという以前に、嫌なものを見たという感じだ。今が朝でない事を感謝するばかりである。
そしてまた、慣れたと思っていたジャンでさえこうなのだから二人もさぞかし大変なことになっているだろう。そう思ってアオイ、レイミィに目を向ければ――やはり異人種。反応が違った。
「まあジャンくんの友達に人間なんて居るわけないと思ったけどね」
レイミィは得意げに鼻を鳴らし、アオイは何かを口にすることは無いが、困惑した様子もなく平然とノロに微笑んでいた。
「私はアオイと申します。スティールさんのクラスメイトです。趣味は、お昼寝です」
「わたしはレイミィ。同じくクラスメイトよ。そうね、好きな事は魔術の勉強、かしらね」
と、ジャンが紹介するよりも早く自主的に名乗り、簡単に自己紹介する。さすが出来ている人間は違う。そう思いながら、ジャンは手でノロを指し示した。
彼女はジャンに身体を向ける。
「彼女はノロだ」
「……です」
「というわけだ」
「……よくわからないけど、よろしくね。ノロちゃん」
「よろしくお願いしますね」
両者の微笑みは、どちらかと言えば迷子の幼子に向けるようなソレだった。
ジャンはその間にノートと教科書を展開し、カバンを椅子の下に流す。ノロはと言えば、二人のちょっとした質問、たとえば趣味や好きな食べ物やらの無難なそれらを、意外にも適当に流していた。
彼女はそうしながら、服の下から数冊の革張りの本を机に置く。
「――それじゃあ、今度一緒に洋菓子屋さんに行かない？」
「それがいい」

「あ、この前見つけた美味しい所があるんですよ。そこで良いですか？」
「それでいい」
なんて、無愛想にも程があるだろう返しにも関わらずしっかりと会話をして、あまつさえあそびに誘ってくれる彼女らはなんて親切なのだろうか。親心に感動しながら、自然的に除け者にされたジャンは適当に教科書をめくった。
「ノロちゃんって、どんな本読むの？　それとも試験の勉強？」
やはり学校の敷地内に居るという事だから、ここの生徒という事を前提に話しているのだろう。服装や外見などは二の次というらしい。ジャンとしてはもう少し言及して欲しいところだったが、わざわざ口出しするのも無粋というものだ。
「いまは、魔術書を。言葉は、元から知っている……から」
「随分と古い本ですねえ……装丁ボロボロですよ、これ。ちょっと良いですか？」
「ご自由に」
アオイはノロがどこからか取ってきた本を手に取り、左腕に背表紙を乗せてパラパラと開く。どれもこれも黄ばんで、紙の端が欠けていたり虫が食っていたり、外見以上に中身は風化していた。インクも薄く、表紙のタイトルさえ読み取れない。否、それ以前に現在の言語ではないようにさえ思えるのは、あながち間違っては居なかった。
中の文章を読み解こうにも、同様に読めない。
仮に古文だとして、これが原本だとして——彼女は一体、どこからどうやってコレを持ちだしたのだろうか。そう思って最後のページを見れば、やはり貸出不可の紙が貼付けられているのが見えた。
そこで頭が、無意識に切り替わる。
アオイは微笑んだ。
「む、難しくてよくわかんないです。すごいですね、ノロさんは」
彼女はそれを読まなかったことにして、ノロの前に本を置いた。

ジャンはそれを横目に見ながら、ノートに魔術の原理を簡単に書き写し――中々に賢明な判断だ。そう思った。彼女は長生きをするだろう。

依然として、ジャンへと身体を向け視線を投げながら会話するノロが気になるが。

「言葉より、文字はムズい」

アオイにとってあまり触れたくない事をノロが吐く。

レイミィが「あー、やっぱり詠唱より陣はねぇ」と勘違いして話を逸したことに、彼女は心底感謝して胸をなでおろした。

「詠唱か魔法陣、どっちかすれば魔術発動するけど……ぶっちゃけ魔法文字（ルーン）とかワケわかんないもんねぇ」

「だから、刻む」

「そうそう。身体に刻んだり、魔石使ったほうが簡単だもんね。昔の人は、詠唱とか魔方陣を未だに使うけど、便利な方がやっぱりいいもんね」

「愚か。手間ゆえに、意味がある。見る……？」

「え……？　うん、まあ。でも危なくない奴をお願いね？」

「了承。詠唱開始。『地の底より出でし魔性の権化、邪悪なる神の御心なるままに吐き出されたる憎悪の残渣――』」

なにやらブツブツと、妙に流暢に話だす姿は初めて見る。ジャンは目も向けずに、ただ声だけを聞いて考えた。趣味が合ったようでいい事だ、と。

つらつらと綴ると、そう時間もかからずに魔術学の試験範囲を大体押さえてまとめることが出来た。ざっと教科書を見返してノートをながめれば、存外に範囲が狭かったことを知る。

良し、案外なんとかなるかもしれない。

ふんふんと満足気に鼻を鳴らすと、またアオイは袖を引いた。

「ん、どうし……どうしたんだ？」

顔を向ければ、彼女の顔面は蒼白になっている。思わず言葉に詰まってから改めて口にすると――視界の端に、妙な紫の光が見えた。

視線を向ける。
そこには、両手を胸の前に合わせるようにするノロの姿。触れていない手との間には、その輝きの原因。紫色の禍々しい光球が、凄まじい魔力を周囲に放出し、さらに圧縮しながら徐々に大きさを増していく。
ノロの口は小さく動き、詠唱を止めることはない。
やがて空間が歪んでしまうような錯覚に陥った。この図書館全てに満ちる圧倒的な魔力は、一体どこから漏れ出したのか、発されたのか理解しようとする以前に、理解しようとする考えに至らない。
「す、スティール、さん……。彼女は、いったい……？」
アオイの言葉も耳に入らず、ジャンは思わず机に身を乗り出して腕を振り上げていた。
「こら」
鋭いチョップがノロの頭部に叩き落される。
直後に集中が、詠唱が途切れて――魔力は空気中に霧散し、輝きは溶けるように消えていった。
「痛い」
「なに発動させようとしたんだ？」
「標準的な消滅（ブレイク・スタンダード）」
「効果は」
「触れた物質は対消滅を起こし、質量が衝撃（エネルギー）となって周囲に放出される。相手は死ぬ」
「お、お前身体こっち向いてたじゃねーか！」
「……凡ミス」
飽くまで無表情のまま、されど声と風体は少女そのものだというのだから、その存在には凄まじい違和感を覚えてしまう。
もう慣れたとはいえ、改めてマジマジと見れば、やはり改めてそう思わされてしまうのが悲しいところだった。
「まあ今日は被害ないから良いけど……今度はアレだ。基本的には魔術禁止だからな」

「御意」
「それとな――」
「む」
小さく声を上げて、ノロは右腕を引き上げたかと思うと、その手首をマジマジと見てから頷いた。
椅子を引いて立ち上がり、その背に回りこんで机に押し込んでいく。それだけで、やはりここには頻繁に来ているのだと分かる。ある程度のマナーは、周囲を見て学んだのだろう。
「時間がない」
「あ、何か用事？」
と訊くのは、あんな目にあったのにも関わらず好奇心が失せないレイミィだ。
ジャンは周囲の、いかにも迷惑気な視線に深く頭を下げながら、ノロに注視する。
「腐る」
頷きながら口にした。
「臭くなる。臭いのはイヤみたい、だから」
それで分かりやすくなったと思っているのだろうノロは、何故だかここで誇らしいように少しだけ口角を吊り上げた。何か大きな仕事を成し遂げたような表情だ。思わず頭を撫でてやりたくなる。
「帰る」
別れの挨拶もなしに、ノロは床を弾いて一直線に、虚空を穿つ矢が如き速度で、扉から外へと飛び出していった。

「一ヶ月出禁になってしまった……」
あの魔力の暴走は周囲になにか実質的な破壊をしたわけでも、あるいは障害を起こしたという事は無かったが、それでも迷惑になったことには変わりがない。あんなのは、大声を出して騒ぎ立てるようなものと同じなのだ。
司書から勝手にノロの保護者扱いを受けたジャンは、そんな事で

そういった処分を下された。
夕暮れ、買い物帰りや帰宅の姿が多くなる通りで、ジャンは先程の面々と共に帰路についていた。
「それじゃ、もし良かったら今度はウチで勉強しない？」
レイミィは胸に手を当てて提案する。
「あ、いいですね、それ。サニーちゃんと、クロちゃんも誘って」
「ね。試験一週間前くらいで良い？」
「はい！　なんだか、今からでもちょっと楽しみになってきました」
「あは、本末転倒にならないようにしなきゃね。ジャンくんもよ？」
「……なぜに？」
自分で自分を指さして、首を傾げる。
まさかここで名前を呼ばれたり、誘われたりするとは思わなかった。
「勉強なんて一人で出来るぞ」
今日がそうだった。
なんだかんだで、彼女らが談笑している間に終ってしまったのだ。
他の教科に手をつけようとしたところで追い出されてしまったのだが。
「あ、そっち？　いやだって、出禁になったって話題から、家で勉強って言うんだから分かるでしょ？」
「さすがに盲点だったなー。あー、でもなー」
「なんで？　みんなで勉強すると捗るわよ？」
「大勢の中で除け者にされるのはイヤだから」
「なーにスネてんのよ」
肘で脇をつつく。ジャンは身をよじって彼女から離れると、すぐ隣のアオイの肩にぶつかった。
「おっと、ごめん」
「大丈夫ですよ。でも、本当に来ないんですか？」
心配するような声色。
ジャンは思わずたじろいで、首を振った。

「行かないとは言ってない」
「……捻くれてるわ。根性ひん曲がってるわ」
やれやれと、レイミィは肩をすくめて首を振る。
「ヒネてない」
「まったく……あ、私達ここまっすぐだから」
大通りから、やがて噴水広場へと到達する。
「また明日、です」
「ああ、じゃあな。ふたりとも」
「まったねー」
大きく手を振るレイミィに、慎み深く手を上げ別れを告げるアオイ。ジャンはそれに応対して――家路につく。
大きく息を吐きながら今日の事を思い出すと、随分と自分が恵まれていることを再認識できた。
仲良くしてくれる連中がいる。
幸せなことだ。
できれば、こういった時間が少しでも長く続けば良い。
真っ赤に燃える空を見上げながら、ジャンは切にそう願った。

はぐれの襲撃

「喰うこともせず、ただ殺し、イタズラに散らかして埋める。これには何の意味があるのだ？」

人工的な盛り上がりを見せる樹木の下、死骸が埋まるそこを見つめながら呟くのは女性だった。

透き通るような声音で、熱はなく、限りなく無感情で漏らすように呟いた。

鋭い爪を持ち、仙骨から伸びる球を連結させたような尾は、サソリのソレだった。

「死ねばいいのに」

その言葉だけは、声にならない声で呟かれたが、その中で唯一確かな熱を孕む言葉だった。

「ヒトの子よ。その愚かな行い、死を以って……」

身体の内側から、酷く硬質な細胞が浮かび上がる。身体が闇に飲まれるように黒く染まり上がって、ついなる腕が、気がつけば大きなハサミへと変化していた。

興奮を表すように尾はいきり立ち、その万年筆の先のように尖る先端からは、黄色い液が滴って――じゅう、と音を鳴らして、地面に積もる葉が溶けた。

「死を以って、償わせてもらおう」

彼女は振り返り、歩き出す。

既に死骸は腐り、その惨事が幾日も前であることを教えていたが――構わない。彼女がそう決意する理由は、これだけではないからだ。

今回がきっかけに過ぎない。

喰うなら許そう。野生動物が血肉に変えるならばまだ許せる。

だが――。

彼女は冷たい目で森の中を見渡してから、静かにそこを後にした。

その日は学校が休みだった。
だからこそ、街が少し慌ただしいことに気づくことができていた。
「ふふっ、なにを見ているんですか……？」
街の外から巨大な鳥――それはアエロだった。彼女が空を舞い、外壁の向こう側から城へと向かうのが見えた。ベランダから身を乗り出して往来を眺めれば、通常よりも数人は多いだろう警ら兵が待機しているのが見える。その中に、大きな戦斧を担ぐ、ねじれたツノを頭の両脇に備えるミノタウロスの女騎士が混じっているのを、彼は見逃さない。
「いや、街が……」
「なーにをしてんのよ、っと」
背中に飛びつくようにするのはテポンだった。
彼女はいつしか、いつかの深夜に見たスタイリッシュを取り戻して、ジャンに飛びかかる。元気なのは良いことだが、彼にとっていい迷惑なのには変わりがない。
首の後ろからにゅっと顔が生えてきて、テポンはジャンと一緒に街を見る。それから「なーるほどぅ」と頷くが、その軽快な発言から、事態をしっかり認識しているかは甚だ疑問だ。
「定期的な軍事訓練かしらね。ほら、今の御時世なにがあるかわからないし」
――広大な海の向こう側では紛争が繰り広げられる地域があり、この大陸、国の隣国では今にも内戦が始まりそうな雰囲気だ。
そしてその国と、海の向こう側の紛争地域の国とはにらみ合いが続いており、紛争さえ治まれば火の粉はこちらに降り掛かってくる、というような恐ろしい状況に囲まれている。
世界は平和だ、という言葉を、最近聞いたことがない。
そりゃそうだ。平和じゃないんだから。
だから、魔法を持つ騎士が求められる。魔術がより簡易に発動できるようになって、争いは被害を大きくする一方である。科学技術

より、はるかに有用性の高い魔法、魔術が割合的に多い戦は、それ故にそれまでとは大きく異なる被害をもたらすのだ。

そして科学は衰退していく。

世界は、異人種を迎えてから大きく変わろうとしていた。

「だと良いんだけど……」

「戦争とか、無いよね？」

いつのまにか、下から潜り込んでジャンの脇から外を見るサニーがそう呟いた。

ジャンの部屋に集まった各々、トロスやクロコ、レイミィ、アオイも同様にベランダに集まる。

無数の建造物を隔てた向こう側に辛うじて見える、路地とも言える往来。

そこは街の人間の目が、あまりつかない場所だ。そんな所に警ら兵が居ることも不思議だが、さらに騎士が居るという事が疑問を増やしていた。

「だとしても、僕たちは見習い以下で一年だ。戦争が起こっても参加することはできない……と思う」

「だと、良いんだけどな」

そう返すと、不意に背中を力一杯叩かれた。肺の中の空気が全て吐き出されて、その勢いで思わずベランダから落ちそうになる。彼は両腕でベランダの柵を掴んで身体を支えてから、怪訝な表情で振り返った。

「な、何すんだよ！」

「ジャンくんはみんなを不安にしたいわけ？　ふつう、男の子ならたくましくて頼り甲斐のあること言うでしょ？」

叱責するのはレイミィで、どうやら背中を叩いたのはその尾っぽらしい。常ならば渦巻いている尾が今は足元まで伸びているのを見れば、そう理解するのに時間要らなかった。

「まあどうせ何も起こらないんだから、少しくらいそういう雰囲気を楽しんだっていいだろ？」

「ダーメーよ。怖いのは嫌いだもの」
テポンは背中の、縮小する羽根をパタパタとはためかせながら注意する。
「浅はかな貴様にはわからないと思うが、他人を気遣うというものは重要なんだ」
クロコが続けるように言う。
ジャンはバツが悪そうに肩をすくめて、「わかったよ」とベランダから離れて部屋へと戻っていった。

『――皆様に、お知らせがあります！』
声は幾度かそう繰り返してから、続けた。
『この街に、”はぐれ”が近づいています！　危険ですので、再び”放送”があるまでは決して外に出ないでください！　この街に――』
広場から響く声は、拡声器を介して街中に響いていた。
柱の根元にある専用の装置に声を吹き込めば、音声を増幅して拡声してくれるその機械は、そうそう使われない。使う必要な時が無いのだ。
だから、その必要がある状況とは――。
「まさか、ね」
テポンが脂汗を額に滲ませる。
勉強会は、その声のせいで一時中断となって、されどそれぞれは何も出来ずに部屋の中で立ち上がっていた。
はぐれが近づいている。
だが、以前の獣人の際であればこういった放送は行われなかった。
ならば、今回に限ってなぜそれがなされるのか。
その敵が、今回初めて街を襲いに来るから。あるいは、既に交戦してはるかに格上であることが判明したから。または、途方も無いほどの集団を率いているから。
以上のどれかであり、以上のそれらでもある。飽くまで、一つだ

けである可能性などは無いし、そう希望的観測ばかりしていられるほどの状況などではないのかもしれない。
特に異人種は、そういった緊張や状況を過敏なまでに感じ取っていた。野生の勘、とでも言うのだろうか。
故に何よりも緊迫して動けずにいるのは、ジャンを除く全ての友人らだった。
「姉さん、これは……」
「大丈夫よ。騎士が動いてるんですもの」
「そうだよ。おれたちは養成学校の学生だけど、それだから戦えって訳じゃない。国を守る人がいる。おれたちはその人たちを信じるだけでいいんだ」
隣に座っていたサニーの頭を撫でながら、ジャンは無責任にそう告げる。
もしかしたらとんでもない軍団が襲ってくるのかもしれない。”はぐれ”というのは嘘で、隣国からの進軍かもしれない。あるいは、伝説とも謳われる凄まじい実力の持ち主が敵対しているのかもしれない。
考えればキリがないそれらを、まずは払拭しなければならない。ジャンはまずそう思って、飽くまで落ち着いた様子で涼しそうに口にする。
「どちらにしろ、おれたちには何も出来ない」
一番不安そうに眉をしかめていたアオイに目を配りながら、できるだけ優しい口調にする。
クロコは、応じるようにそれに続いた。
「正確には、足をひっぱることしかできない、だがな」
「ははっ、耳が痛いな」
「……確かに、そうかもしれないけれど」
「不安なのはおれたちだけじゃない。この街に住むみんながそうだ。だから……でしょう？」
言い聞かせるような言葉に、テポンはまるで仕方なく納得したよ

うに肩をすくめて、椅子へと腰をかけた。
「まだひよっこ以前の、卵だものね。今はただ燻っていましょうか」

首まで丸い首襟が伸びる綿の衣服一枚を纏う女性は、薄い紫がかった髪をそよかぜになびかせながら、深い溜息をついていた。
側頭部で対になる、ねじれるツノが特徴的な女性はミノタウロスと呼ばれる牛族である。その持ち前の怪力とタフさが強みであり、どれほどの小柄でも彼女が背に担ぐような身の丈ほどの戦斧は容易に扱える。
「あなたは、いったい誰なのでしょう？」
見知らぬ来訪者は殺気立っていた。
不躾に、この一ヶ月の間に森に来た者を全て差し出せと告げてから、彼女の鋭い眼光はミノタウロスの女性に張り付いて離れない。
エクレルはそう訊いてみると――背後に控える五人の警ら兵が一様に剣を構えた。
両手にハサミを持ち、パールのような尾を持つ女性。衣服は質素に、胸を隠す布を巻き付け、無造作に腰に布を巻くだけの格好だ。が、それ故だろうか。
むき出しの野性味が、十分すぎるほどに肌に感じられた。
”はぐれ”はだからこそ強い。
この世界に来てから徐々に忘れつつある野生というものを持っている。そして本来の鍛え方で維持しているその戦闘能力は、下手に型通りに鍛錬した騎士や警ら兵を、容易に超越する場合がある。
だからはぐれは厄介だ。
この世界に馴染めないのに、この世界に居座っている。
エクレルは答えない彼女に、深い溜息を漏らした。
「アナタの要望には答えられません」
そう答えれば彼女はどう動くだろうか。
それは、想像するまでもなかった。

「自然を穢すヒトを出せ。さもなくば……」
ハサミを、まるで拳を構えるように持ち上げる。尾はいきり立ち、頭部を超えて前面にもたれかかってきた。
――サソリの怖いところは、その尾から注入される猛毒にある。それは変幻自在に変異する打撃技、あるいは鞭のようにしなやかに力強く、素早く捕食対象に迫り、そのハサミで捕らえて突き刺すのだ。
一度ハサミに捕まれば逃げることなどほぼ不可能。その上、ダメ押しとばかりに毒に侵されれば……。
「同種であろうとも、わたしは戦闘をも辞さない」
「なら……」
彼女に応じるように、エクレルは背負う戦斧を背中から引きぬいて肩に担ぐ。同時に、それは背後の警ら兵たちへの抑止にもなるような姿だった。
「私がアナタの目論見をはずしましょう。みなさんは、どうか手を出さないでください」
得も言われぬような威圧が、それまでの温和な様子からは想像もできない程に放たれていた。剣を構えた彼らはそれぞれ顔を見合わせてから、声も出さずに剣を収め、身を引く。それはこの状況ではどちらにせよ、足を引っ張ることしかできないだろうと考えたが故でもあった。
だが、果たして彼女を傷つけぬままで退かせることが出来るだろうか。
彼女はにわかに不安になる。
はぐれだから強いが、はぐれだから悪だという方程式は存在しない。そういった存在が村や街を襲う理由は、彼女が口にしたように、人間による自然破壊を許せなかったりした場合が多いからだ。これぱかりは生きていくことに必要なものだから防げないし、どうすることもできない。
だからどうにかして、一旦退避してもらいたいのだ。

どうにかして話し合いの場を設けられさえすれば……彼女の考えは、ごく平和的なものだった。

たとえソレが、途方も無い夢物語だとしても。

「どうしたのです？　わざわざここまで来たのに、待つつもりですか？」

斧、と言っても典型的なバトルアックスではない。柄の両脇に半月の刃を備える武器ではなく――それは片刃の剣のように、あるいはカマの刃を折り曲げて柄に沿わせたような外観を持っていた。

樹木の幹をそのまま使用したかのような柄には、まず先端に大きな箱状の金具が叩き込まれる。そうして装着される刃は柄の半分よりやや短い程度の長さを持つ。峰打ちたる部分は台形状に広がり、槌（ハンマー）のように扱える。

それを構えるだけで威圧感が尋常ではないというのに、大きく振り上げれば、どれほど使用者の身が無防備に晒されようとも、踏み込めば己の上半身が吹き飛んで居るような錯覚を覚えてしまう。

だが――サソリの娘は大地を弾いた。

瞬く間に肉薄する彼女に対して、構わずエクレルは戦斧を振り下ろす。

虚空を切り裂いて、間もなく大地を砕く。

衝撃は腕に伝わり、やがて四肢に伝播して全身を震わせた。大地に亀裂が入り、すぐさまその巨体ゆえに前方の視界が遮られた。

斧の影から、土煙を切り裂いて不意気味にハサミが切迫する。

エクレルは予想通りの行動に思わず頬を緩めながら、

「はっ！」

まるで重さなど感じさせぬ動きで斧を、横薙ぎに振るう。共に槌の部分で横腹を穿たれたサソリ娘は、身体をくの字にへし折り、確かな手応えをエクレルに与えながら吹き飛ばされていく。

だが、彼女もただでは食らわない。

その最中に翻る尾は鋭く木製の柄に突き刺さったかと思うと――焼き尽くされるように煙を上げ、腐食するように黒く変色し、柔く、

脆くその部分が重さに耐え切れずに砕けて、斧の部分は振り抜いた柄に置き去りにされていた。

彼女と共に減速しながら大地を抉り、その影に巻き込んだ女性を潰しきる事もなくやがて止まる。

弾くと、されど持ち上がること無く反転して、鈍く大地を叩いて倒れた。

サソリの女性は、その表情に怒りを携えたまま、されど侮ること無く、確かにエクレルの実力を読み取っていた。

「アナタはなぜ我々を襲うのです？」

武器は失せた――わけではない。

今度は柄を棍棒のように構えて、対峙する。

「ヒトはあまりにも穢し過ぎた。そう思うのは、なにもわたしだけではないだろう」

紅く染まる瞳でエクレルを睨み続けたまま、一拍、息を吸い込む間だけを置いて、彼女は続けた。

「このままならばいずれ、立ち上がる者も居る。国を利用する者さえもな。わたしも、そうすることはやぶさかではない」

「共存を諦めたならば、溝の門扉（ゲート）から帰れば良いでしょう？　アナタはわざわざ気に食わない世界で生活をして、気に食わないからと自分の思うように変えようとするのが正しいと思っているのですか？」

彼女はたまらず反論した。

穢していると感じるのならば帰れば良い。

もとより、この世界はヒトの地だ。彼らの世界を、彼らがどうしようと構わない。それが例え、滅亡や破滅に傾く事になったとしても、口添えすることが出来たとしても強制的に、その決定に干渉する事は異人種には許されない。

あくまで訪問者である限り、共存を目的としている限り、その存在が完全に許されない限り、そうする事はできない――というのが、彼女らの暗黙の了解でもあった。

「その考え方、身を滅ぼしますよ」
低く、底冷えするような声が大気を震わせる。
サソリの女性はそれを受けて、短く舌打ちをした。
「黙れ。懐柔された貴様らに何が分かる。ヒトの政治などに翻弄され、ヒトの争いに巻き込まれ、ヒトに侮蔑されながら後ろ指さされて生きながらえ、寿命や、異質な力のせいで畏怖され――なぜそれでも貴様らはこの世界に固執する。滅んだほうがいい。我々が、新たに作りなおせば良い。違うか？」
「慢心、環境の違いですね」
話にならない、とエクレルが肩をすくめて嘆息する。
それと同時に、敵は再び駆け出した。
エクレルも応じて大地を駆け、棍棒と化したそれを肩の高さまで引き上げて、弦を引いた矢のように後ろへと大きく引き、解放。投擲された棍棒は、その刹那に尾から吹き出した黄色い液体に触れ、飲み込まれて――醜悪な腐臭を発生させながら、変色し、溶けていく。
にわかに動きが緩慢になるエクレルへと、踏み込んだサソリの女性が鋭くハサミを振り上げる。
その刹那。
彼女が、エクレルが動いたと認識するよりも早く、その手は力強くハサミの元となる腕を掴んでいた。構えるハサミも同様にして、怪力ゆえに反抗できず、動けない。
ピクリと、頭の後ろで弾む尾を見るや否や、エクレルはそのまま足の側面で彼女の足を纏めて払うと、瞬く間に姿勢は崩れて地面に沈む。
うつぶせにして、両手を後ろで組ませて馬乗りになる。慣れた様子で組み伏せたエクレルは、大きく息を吐いて、額から流れる汗を拭った。
「アナタも、ヒトに迫害された口ですね？」
乱れた赤髪をそのままに、サソリの娘はそっぽを向いて黙り込ん

だままだった。
「アナタなら、迎えてくれるヒトが居れば、わかってくれるでしょう。今の私の……私たちの気持ちが」
「ヒトと、共存しろと？　このわたしにッ！？」
「応じなければ首を折ります」
そっと首筋に手を添わせると、びくりと肩が大きく弾んだ。
どれほど強気な態度をとっていても、やはり怖いものは怖い。彼女はそれがわかって、どこか安堵したように微笑んだ。
「ふ、ふざけるな！　わたしは――」
「口答えするなら腕を折ります」
「ひっ……わ、わたしは……ッ！」
「腰折りまーす」
「わ、わ――わかった……言うとおりに、すれば良いんだろう……？」
怯えた声で、すっかり全身を萎縮してしまった彼女はぐったりと倒れこんで、そう告げる。
彼女の尾も今やいきり立つこと無く、身体に乗っかるままに乗っているだけだった。
「はい。十分ですよ。あ、もちろん強制するつもりはないので、ひとまず一ヶ月ほど一緒に生活するだけでいいです。それでも本当にダメなら、しょうがないって事で」
「……一応訊いてみたいんだが、しょうがなかったらどうなるわけだ？」
「一応反乱未遂ってことで、軽く二、三〇年くらいは牢屋暮らしですねー」
「さ、さんじゅう……。わたしは何よりも、貴様が相手だったことがこの人生の中で、一等の不幸だと思う」
今にも泣き出しそうな顔になって、泣き言のように彼女は言う。
先ほどの啖呵や何かを叫んでいた彼女の姿は一切無く、今の格好は何かの冗談のようだった。

エクレルは穏やかな笑みを保ったまま、思いついたように口にする。

「そういえば、お名前ってなんですか？」

「名前……わたしは――」

日が暮れ始める時刻。西の空は既に赤らみ、空からは太陽が姿を消していた。

全身から吹き出る汗に不快感を覚えながら――エクレルは、思いも寄らない拾い物をした。

そう思いながら、まず最初に報告をしようと、ポケットから小さな白い魔石を取り出して――大事になりそうだった任務は、あっけなく終了を告げた。

はぐれの入学

「――わ、わたしの名前は」

緊張した面持ちで、紅く長い髪の先を指先でくるくると弄る女性は教壇に立っていた。傍らでは、作業服のようなそれを着るこのクラス担当の教員が腕を組んで教室全体を眺めている。

伏し目がちの赤い瞳は教卓をじっと見つめながら、控えめに自己紹介を続けた。

「リ……イヤ、ちがう。クリィムだ。よろしく、頼む」

淑女らしく、慎み深く告げた後、彼女はそのまま口ごもる。

教室内が奇妙な緊張感に包まれるのをジャン・スティールは感じながら、休みに入る前までは隣に居た獣人の男が窓際の方に行ってしまったことに疑問を抱いていた。そして、彼の隣には不自然に空席になった机が置いてある。

教室の真ん中の列、その最後尾に至るそこは目立つことはなかったが、それでもそこに誰が座るかが容易に想像がついてしまうために、多くの視線が集まりつつあった。

「えー、クリィムは騎士さんのエクレルの親戚らしくてな。試験も見事にスルーして転入することになった」

担任が渋い声で補足する。

思わぬ騎士の名前にあたりは騒然として、静寂は果たして破られる。ざわざわと騒ぎ始めるその中で、手を上げて彼女に質問をする者が現れるまでそう時間は必要なかった。

「質問でーす！　趣味はなんですかー？」

そう訊いたのは、人間の男だった。特に目立つ特徴は、腰辺りから生えるサソリの尾だけであるためにあまり気にはしないのだろう。それにこういった控えめな女性というのはあまり居ないから、彼らにとっては新鮮で嬉しいのかもしれない。

異人種がどうとか関係なくそう接してくれると、なぜだかジャン

も嬉しくなってきた。
彼は微笑みながらクリィムを眺める。
しどろもどろになりながら、「特にない」と答える彼女と眼があって――心臓が不意に高なった。
「好きな男性のタイプは？」
「え、あ……の、つ、強い人かな」
――彼女の言葉に、クラスが静まり返る。ぱっと、まるで示し合わせていたように多くの視線が、途端にジャンへと集中した。振り返り、一斉に彼を注視する姿は異様で、ジャンは思わずすくみあがった。
「な、なんだよ……」
「お前、戦闘訓練の成績良いよな……」
空席とは反対側の男が、ぼそりと漏らすような、それはジャンに言ったと言うよりは、思わず零れたような台詞だった。
「アイツ倒さなきゃか……」「険しい道だな」「いばらだ」「俺やめとくわ」
どこからともなく、そんなネガティブシンキングな言葉がぼそぼそと聞こえてくる。
不平不満のように聞こえて、ジャンはいたたまれなくなるが――戦闘訓練の授業で、それほど良い成績を収めた記憶などは無かった。ただそつなくこなしている自覚はあったが、組手の際は相手を圧倒すること無く合わせていたし、徒競走も真ん中辺りの順位を守り抜いていた。
だから目立つわけなど無かったのだが、彼らはどうやら以前の森の戦闘以来、”強いから手を抜いている”という妙な勘違いをしているようだった。これが良い意味で、羨望というものを得られるのならばよかったが、身を引かれるという悪い意味で影響を与えられているのならば、願い下げたい評価である。
「あー、他に質問が無いならいいな。クリィム、お前の席は今注目受けたヤツの隣だ。あの空席な」

「わ、わかりました」

（――あのエクレルとか言う女さえ居なければ、今頃また森に戻って自由気ままな快適生活を続けられていたのに）

クリィムは幾度ともないため息を心の中で漏らしながら、着慣れない制服に窮屈感を覚え、また見慣れない大勢の視線を一心に受けながら受け答えをしていた。

緊張のせいで、頭の中が空っぽになる。

もしかするとこれがある種の尋問や拷問で、へたな受け答えをすればすぐさま嬲り殺されるのではないか……そう思うとどうしようもなく身体が震えてしまう。エクレルから刻み込まれた恐怖が、未だに忘れられずに居るのだ。

（やつは……恐ろしい）

アイツだけには逆らってはいけない。

まさか、騎士というものがこれほどに強い相手だとは思わなかったが、仮に油断していなくとも勝てたような気はしない。

教壇を降りて、席へと向かう。

既に在籍している生徒からの好奇の視線を一心に受けて胸くそを悪くしながら、いつか心労で倒れてしまうのではないかと自分を心配する。

やがて席に到着すると、人間の子が隣の席で、こちらを見ていることに気がついた。

「よ、よろしく」

先制攻撃。

先に挨拶をしたことによって有利な状況を作り出せる。

クリィムはそう思って、引きつった笑顔を見せてやる。これで更に、こちらは余裕だぞという威圧さえも与えられた。

相手は畏怖して跪くだろう。

彼女は浅はかに、訳のわからぬ自分ルールを展開していた。

「ああ、よろしく。おれはジャン・スティール。わからない事があ

ったらなんでも訊いてくれ」
――その効果は望めなかった。
クリィムは肩を落として嘆息してから、思わず緩んだ心で返答した。
「黙れヒトの子が」
「……はい？」
「っ……忘れてくれ」
ちょっとした問題発言にジャンは少しだけ意表を突かれながらも、まあ緊張してたんだししょうがないか、と受け流す。
ちょっとだけぶっきらぼうで、釣り上がった目尻に、大きな瞳は威圧的な雰囲気を孕むが、緊張指定せいなのだろう。そんな、典型的な軍人のような淡白さを伺わせる無駄のない動きに、制服を着ていても分かる、絞られたスタイルの良さも、彼女の努力の結晶なのだろう。
夏休み前の試験直前という、そんな不自然な転入は、おそらく家庭の問題かもしれないから、あまり深く訊かないようにしよう。
ジャンはそう考えて、間もなく始まる授業へと挑むことにした。

まさかこの歳にして学園なんぞに通うはめになるとは思わなかった。
エクレルからこう名乗れと強制された『クリィム』という偽名も甘ったるく貧弱で気色悪いし、授業も、本当に同じ言語を用いて説明しているかすら判然としない程に、不明瞭。わけがわからない。これを、机上で一体なにをどう学習するつもりなのだろうか。
学ぶだけなら野生で十分だ。今までそれで生きてきたし、これまでもそうだったつもりだった。
この五年近くは少なくともそうだったし、またわざわざ人里に降りるつもりなども、毛頭なかったのだが……。
担任とは違う教員がやってきて、黒板にチョークで奇っ怪な図形を描いて、数式を加える。最初は魔術か何かかと思って眺めていた

が、どうやらそうではないらしいことを、彼女は理解した。
『えっくす』がどうとか、『このさんかくかんすうの』がどうとか、うわ言のように口にする、神経質っぽい男は度の強い眼鏡をくいっと上げて、生徒の中から一人を指名した。
「はい君ィ！　視線を逸したね、この問いを答えてみなさい！」
この街にはあまりない近代的な洋服、白衣を羽織る男は大げさな動作で腕を振り、指で相手を指し示す。
クリィムはその指先がこちらに向いた気がして驚き、思わず身体が椅子から引き剥がされる勢いで弾んだが――気だるげな様子で後頭部を掻きながら、椅子を引きずる音を立てて立ち上がるのは、傍らの男だった。
「えー、と。十三メートル、ですか？」
「そうそう、よくできているね。この問いはつまるところ……」
ごきげんに男は笑みを作って、また黒板にチョークを走らせる。
ジャンはほっと息を吐いて脱力するように席に座り込んだ。
「良くわかったなぁ、俺さっぱりだったよ」
そう言うのは、彼の隣の、人間の男だ。
「お前は教えてもわからないからな。まあ得手不得手ってのはあるもんさ」
「そんなもんかね。なんにしろ、試験が心配だよ」
「おれもだよ。授業だと分かるんだけど、テストとかだとさっぱりでな」
こそこそとするごく日常的な会話。
自分とは圧倒的なまでに異なる平和的なそれらに、クリィムは思わず嘆息した。
そんな吐息に気がついたのだろう、ジャンはふと視線を向けて、小さく声をかけた。
「クリィムさんは大丈夫？」
「……わけがわからない」
高等教育レベルの授業内容だと、エクレルが説明していたのを思

い出す。
義務教育過程はなんとかスルーしたクリィムだが、それ以降の記憶はない。あまりの待遇の酷さに血反吐を吐いて胃を穴だらけにして、死ぬ気で人里から逃げ出してから、まともな生活などはしていなかったような気がする。
捕獲されてから、まさかの翌日に転入だ。
あまりにも突然すぎる展開に目を回すだけだったが――ここに来て、いよいよ他人ごとではないのだと理解する。
ここで一ヶ月を過ごして、ヒトに慣れなければならない。そうするにはあまり目立ちすぎず、気の良い風体を装わなければならない。
苦痛だ。
クリィムはにわかに頭痛を覚えて、頭をかかえた。
「試験も近いから大変だけど……遠慮無く訊いてくれて構わないよ？」
「そう、だな……」
エクレルは、今学期の成績は反映されないだとかなんとか言っていた。
おそらくこの夏休み前の期間は飽くまで”体験”に過ぎないのだろう。これから夏休みに入り、次の学期の一ヶ月が本番だ。
なんにしても、どう考えようともこの憂鬱な気分が晴れることは無かった。
ただ、この漠然とした絶望の中で陽の光のように接してくる、妙に馴れ馴れしい人間の姿はあったが。

途方のない時間が過ぎたと思われた。
十分間の休憩時間を挿し込んで、幾度かの授業を繰り返す。内容はそれぞれ異なったもので、最も困惑した数学を筆頭に、戦術・戦略だの、物理がどうのといった授業が終了した。
そうしてまた休憩時間が始まると思うと、
「終わったー」「今日もしんどいねぇ」「やっぱ休み明けってキツ

いな」

だのと、緊張が弛緩するように各々は大きく伸びをしたり、友人らと会話を交わし始める。それはいつもと変わらないが、異変とも言うべき状況は――クラス内の、そう多くない生徒たちがおもむろに教室から出ていったことだった。

半数以下しか残らない教室では、それぞれ集まって惣菜パンを食んだり、あるいは机をいくつかくっつけて、その上に四角い箱をそれぞれ用意する姿があった。

ぐぅ、と腹の虫が鳴るのを聞いて、彼女の脳内で間もなく合点がいく。

昼食休憩なのだと、彼女はエクレルの説明を思い出して頷いた。

「……まいったな」

つい先日は、街を襲撃したお祝いにウサギの皮を剥いで、いつもならば干し肉にして保存食とするところを、丸焼きにしようと血抜きをして放置してきた。

そう、放置してきたのだ。

森の中で。自分の住処とする、樹木が作る自然の穴蔵の、ちょうど入り口付近の枝にひっかけて。

調味料は調達して、面倒な事は先に済ませておくタチだから、火打石と燃えやすい枯れ枝と、焚き火の材料は全て纏めておいた。

捕まった後はそんな事を忘れてしまったし、夕食はエクレルの自宅で、牛の肉を頬張った。さすがにミノタウロスの身で、この上なく美味しそうに牛肉を口いっぱいに頬張って、厚い唇に脂を塗りたくって艶やかさを増すあの彼女はどうかと思ったが――エクレル自身も、この昼食のことをすっかり忘れていたに違いない。

なんだかんだで用意周到だったのにも関わらず、この事にだけは触れられなかった。

（やろう、帰ったら怒ってやる）

そう決意すると間もなく、後頭部を鈍器か何かで殴られるイメージが過ぎったが――払拭するように頭を大きく振ってから、彼女は

立ち上がった。
（なんにしろ、ここから離れよう）
こんな所にじっと居ては、まるでお誘いを待っている引っ込み思案の女の子のようだ。あるいは乞食か、なんにせよ、良いイメージには転換できない。
どこに何があるか、見学して回るのも良いだろう。少なくとも一時間は時間があるのだ。学校内を回っても、まだ時間が残る。
そうなれば……その時に考えよう。面倒になって、彼女はやや出遅れた形で教室を辞す。
否、それは退室しようとした、というのが正しいのかもしれない。
「ねえ、クリィムさん」
男の声が彼女を引き留めた。
恥ずかしながらも淡く期待していたこともあって、彼女は戸惑うこと無く足を止める。体を捻り、そのまま振り返ると、好青年の微笑が彼女へと迫ってきていた。もはや見慣れたとも言える、ジャンのそれだった。
「もしかして、お昼は学食？」
「ん、いや……それ、なんだがな」
学食という言葉を聞いて、そんなシステムの存在を知る。
が、無念。金がない。
ヒトの世界は金が全てだから、彼女はそういう手もあるんだなあと考えてから、思わず短く嘆息してしまう。
「お昼は無い、とか？」
「その通りだ。だが気にするな。おまえに施しを得るつもりなど毛頭ない」
「相変わらず堅苦しい言い方だけど……残念だな。ちょうど弁当が一つ、余ってたんだけど……このままだと無駄になっちゃうしなー」
――実際には余っていない。ただいつものようにジャンの弁当は大食漢並の量があるから、半分程度で済むのだ。サニーの許可ももらって今はすっかり、蓋と弁当箱とで中身が分けられている。弁当

箱の方がいささか惣菜が豪華であるのは愛嬌だ。
サニーを始めとする、半身を鱗や鉤爪で構成する蜥蜴人（リザードマン）や、花弁でスカートを作り、頭に赤い華を咲かせる植物族、下半身を蛇にする少女や、背中からコウモリのような羽根を生やす……ともかく異人種が、机をくっつけてジャンらの行く末を見守っていた。
異人種ばかり。
人間は、この男のみ。
極めつけは、女性が四に対して男性が二人だ。圧倒的な女性率。
ハーレムである。
「悪いな、ヒトの食い物は喉に通らないんだ」
ぎゅるるる～、と腹の虫が空気を読まずに断末魔を響かせた。
「事情はなんとなく把握した。安心しろ、ウチの料理番は生粋の妖精（エルフ）族だ」

「米を食べたのは七年ぶりになる」
もしゃもしゃと、旨みを味わいながら彼女は冷静に告げる。
「これは旨い。まず味があるという所に注目したい」
これを見れば、あの食生活がどれだけ悲惨なことだったかよくわかる。便秘気味の時に野草を食べたあの思い出を蘇らせれば、涙さえ溢れてくる。
油で上げた白身魚に、表面がきつね色になる鶏肉。にんにくの香りはぬるくなってもまだ口の中に香ばしく広がって、咀嚼しながら唾液が溢れてきた。
ご飯を掻きこみ、彩り良く並ぶ数多の野菜をフォークで突き刺す。喰う。飲み込む。
「栄養がよく考えられている弁当だ。おまえは、この弁当を喰えるありがたみをもう一度考えたほうがいい。まともに食事ができる喜びを噛み締めるべきだ」
「あはは、ここまでほめられると、照れちゃうなぁ」
サニーが頬を桜色に染めて笑う。

クロコはいつものように、愛らしい少女の頭を撫でながら、器用に食を進めていた。
そんなクリィムに、まずレイミィが疑問を投げる。
「クリィムさんって」
「敬称は要らない」
「……クリィムって、エクレルさんの親戚ってきいたけど、エクレルさんの所に住んでるの？」
「その通りだ」
首肯し、返事をしながらもくもくと、がっつく様子は無いが、手を止めること無く食事は続く。
「あの、今まではどこに居たとか……訊いても大丈夫ですか？」
控えめに、だが突っ込んだ問いをアオイは投げると言うよりは手渡した。
クリィムは同じく頷き、もしゃもしゃと咀嚼しながら答えてみせる。
素直に答えてもよ良さそうだったが、エクレルに殺されるのも嫌だし、彼女がわざわざ嘘を付いているのにも理由があるはずだ。彼女はそう考えて、仕方なく”乗る”ことにした。
「とある国で、とある人と共に外交を主として働いていたのだが、その人が亡くなって身寄りがないために引き取られてきた。」
そのとある人が居て、亡くなった、という以外は全て嘘だ。
この街に来るというそれ以前の、ヒトに確かな殺意を覚えたのはそれがきっかけだった。亡くなったというのは正確ではなく、逃がすためにその場に残ったのだが――とても生き残っているようには思えない。
今となっても未だ悲しいが、どちらかと言えば惜しい人を亡くしたという感情のほうが強い。
精神年齢は高いほうだと自負しているから、早熟なのだろう。年齢は、目の前の彼らとそう大きく離れているわけでもない。
彼女は申し訳なさそうに目を伏せるアオイを一瞥して、

「気にするな。下手に同情されるのは好きではない」
「ご、ごめんなさい……」
「あ、それじゃあ勉強とか出来るの？」
そう訊いたのはトロスだった。
「最低限の教育は受けている。義務教育、だがな」
「あー、それじゃキツいだろうな。後期の授業は専門的なのが多くなるけど、前期は高等教育のおさらいみたいなもんだし」
「……後期は、あの奇っ怪な授業がなくなるのか？」
「ああ。少なくとも数学だとかは無くなる」
「命拾いだ」
「ははっ、特にダメそうだったもんな、クリィムは」
「おまえは、つくづく遠慮というものを知らないな……」
馴れ馴れしいジャンに、クリィムはわざとらしく肩をすくめてみせる。
それからフォークを弁当箱の中に落とし、空になったそれをサニーに手渡した。
「ありがとう。美味しかった」
旨い上に、腹が膨れるというのは最高だ。伊達に三大欲求の一つとして食欲がランクインしているわけではないようだ。
「えへへ、どういたしまして。良かったら、明日も作ってこようか？」
「あ、いや。ありがたい申し出だし、断りたくは無いが……わたしが君にしてやれる事がない」
「もう、友達なのにそんな事、気にしないでよー」
「む、友達？」
「あ、嫌だった？　ご、ごめんね。勝手に舞い上がってたみたいで――」
そんな響きが、心のなかに染み渡る。
友達、友人。自分の中では、いつしか忘れられて失われていた言葉であり、存在だった。

最後の友人は、いつしかクリィムを裏切って守る側から攻める側へと転じていたのを思い出す。あれが彼女の処世術なのだから、自分には攻める理由などないのだが……あれは堪えた。人生の中で、五本指に入るショッキングな出来事だ。

そんなちょっとしたトラウマがあるから、もし友達ができたらどうしようだとかを昔考えていたが――ここまで育ててくれた人がいた。そいつのお陰で、ようやくその心配が出来る立場になった今では、冷静に対応できていた。

「いや、嬉しい。こちらからお願いしたいくらいだ」

――この学校ではいくらか上手くやっていけるかもしれない。

そうだ。ヒトに慣れるのも、この気のいい友人らの中で、なんだか妙に中心的な位置にいる、この男からにするのもいいかもしれない。

この瞬間に出来た多くの女性、加えて何の種族か不明瞭な男性一人から祝福の言葉を与えられながら、クリィムはジャンを一瞥する。

彼はどこか超然とした、一歩引くような態度でその様子を微笑んで眺めているのが、良くわかった。

もしかすると、彼はこうなることを望んで声をかけたのかもしれない。そのきっかけをわざわざくれたのだとしたら……。

「手強いな……」

ヒトは思いもよらず思慮深い。

彼女はそう思いながら、ぎこちなく笑みを作って、その昼食休憩を満喫した。

「今日はそんな一日だった」

薄紫の、ウェイブがかった髪をタオルで拭きながら、綿で出来たガウン一枚になるエクレルに一から説明した。

今日の出来事。何時に何をして、何が起こったか。初日だけど友達ができて、お弁当を分けてもらっただとか。放課後は、友達に誘

われるままに街を見て回って、どこから逃げ出せるかなど考えた、なんてうっかりと零してしまうのは愛嬌だ。

ふかふかの寝台の上で足を組み、程良く肉がついた太ももにはまだ水滴が滴っている。艶っぽい、女性という部分が特出した女性らしい女性だった。

「そう、良かったです。『リサ』が学校に馴染めるようで」

「昨日から疑問だったが……なぜわざわざ偽名を使用する？　わたしの名前など、誰も知らないのに」

「一応、ですよ。少なくともアナタの育ての親は、ごく有名でしたから」

「……調べたのか？」

膝を折って床に直接敷いてある布団の上に座り、膝に両手を突っ立てて肩を張る。自然的に上目遣いになると、まるで睨んでいるようになるが、エクレルは気にせず頷いた。

「少し後ろめたかったけど、ね。だけど、アナタも”その人”の最期を見ていないなら、まだ分からない。アナタさえ良ければ、今後も捜査を続けられるけれど……どうします？」

悪戯っぽく、どこか意地悪そうな笑みを浮かべるエクレルに、彼女は短く舌打ちをした。

「すまないが、頼む」

もしアイツが生きているならば――恐らく決してありえないことだが、仮に命がまだあるのならば、言いたいことが残っている。この人生の在り方というものを教えてくれた人だから、アイツだけは、どうしても諦め切れないのだ。

辛気臭くうつむくと、エクレルがわざとらしく「それでぇ？」と口を開いた。

空気をぶち壊す発言に、彼女は短く舌打ちをしながら、「何がだ？」と訊き返す。

「ジャンくんは、中々気のいい人間（ひと）でしょ？」

「あいつは、貴様の差金か……ッ！？」

くそ、騙された！　思わずそう叫びそうになるが、彼女の自制心がそれを力一杯抑えこむ。

またヒトに、この短時間でにわかに心を許しそうになった自分を恥じながらも、彼女は精一杯、エクレルを睨んだ。

「ち、違いますよ、人聞きの悪い。あの子は、私達のお気に入り、みたいなのでね。平凡なんだけど、出会い頭がちょっと頼もしかったから、それがきっかけになって……」

「要領を得ないな。奴は特別なのか？」

「そうじゃないですよ。でも、優しいし、なによりも妙に異人種（わたしたち）に気に入られるタチらしいです」

「……特殊なフェロモンかなにかでも出ているのか？」

「さあ。ただ異人種に、普通に接してくれるからってだけな訳じゃないだろうに、おかしいですよね。普通の、本当に普通の人間なのに」

彼女は心の底から不思議そうに、顎に指を指すようにして考え込んだ。

説明しようにも、言葉を挙げれば挙げるほど理由が出てこない。生まれるのは疑問ばかりだ。

騎士志願の中では、あの学生の中では案外実力があるし、勇気も十分。幾度か修羅場をくぐったような目付きには、彼の過去を照らしあわせれば理由がわかるが――もしかするとその経験からなる少し大人っぽい様子が、全ての理由なのかもしれない。

それに加えて恐らく、ジャンを助けたというケンタウロスの女騎士と、エクレルの友人でもあるケンタウロスの女騎士である『ユーリア』は同一人物なのだろうが……彼女が接触したがらないのにも、理由があるのかもしれない。

いかんせん、頭が沸騰しそうだ。

エクレルは大きく息を吐いて、立ち上がった。

壁に備えてある照明のスイッチを押して、辺りを昼間のように明るく照らす照明をオフにする。魔石は空気中から魔力供給を停止さ

せて、間もなく部屋の中を黒い闇に塗り固めた。
「彼はいい子ですよ。ヘンに勘ぐらないで、普通に接してみるのもいいかもしれませんね」
飛び込むように寝台に寝転がると、弾力のあるマットレスが幾度か彼女を弾ませて、ガウンをはだけさせた。
「リサ、おやすみなさい」
「……ああ、おやすみ」
おいしいご飯に、ぽかぽかお風呂。暖かい布団でぐっすり眠る。こんな素晴らしいことが他にはあるだろうか。
――生活レベルはぐんと上がって、リサ、あるいはクリィムと呼ばれる彼女にとっては最上級層並の生活をしているような感覚だ。まるで、この間までの野生の生活が嘘のようだと、彼女はつくづく思う。
どうあっても、どれだけヒトが憎くとも、この生活ばかりは手放せなくなりそうだ。
彼女は布団に潜りそう考えるも、数秒と待たずに、今日一日の疲れもあってかすぐさま夢の中へと滑りこんでいった。

期末試験

クリィムの転入がちょっとした騒動になってから一週間が経過する。
その頃になると、クラスは再び落ち着きを取り戻し――正確には、取り戻さざるを得なかった。
期末試験。
今日がその、初日だからだ。

一ヶ月前から準備をしてきた用意周到のジャン・スティールの傍らでは、試験が開始してから十分ほどで頭を抱えて机に突っ伏したクリィムが居る。
やや前方、先頭から一つ手前に座るサニーは意外にも詰まること無くペンを走らせ、アオイやクロコ、レイミィも同様に余裕を持った表情で解答用紙に答えを綴っているようだった。
――今は初日の三時限目で、今日の日程最後のテストだ。
さらに明日と明後日で筆記試験は終わりになり、次の日に戦闘技術の実施試験になる。
それが終わると、翌日に終業式を執り行って――夏休み突入だ。
「残り十分。氏名と、解答欄がズレてないか、確認しとけよ」
作業服姿の担任は、気怠そうに椅子に身体を預けて足を組み、腕を組みそう告げる。
ジャンは既に幾度も繰り返した確認の作業を、担任の言葉に倣ってもう一度だけ繰り返す。問題用紙の余白には残ったままの計算式と、くだらない落書きが今更になって恥ずかしく思い、その上にペンをぐちゃぐちゃに走らせて塗りつぶす。
大きく欠伸をする。
時間が、その流れがいつもより緩慢な気がした。
退屈だ。

何よりも、思ったよりテストの内容が簡単だったことに驚いた。
これなら案外、これ以降のテストもなんとかなるかもしれない。
そんな思いを馳せながら――担任の、終了の合図を聴いた。
すぐに弛緩する空気の中、それぞれはぼやきながら、ジャンは席を立って解答用紙を回収する。そうしてから席へと戻ると、その後ろに着いて来ていたクリィムは深いため息を漏らして、席に着いた。
「どうした、大丈夫か？」
「……こ、肯定しよう」
搾り出すように彼女は口にする。ぐりん、と机に当てていた頭を回して、怠惰なままに突っ伏したままジャンを見た。
「いいなあお前は、優秀で」
「冗談言うなよ。おれだって頑張ってんだ」
「そんなの、頑張っても出来ない奴に向ける言葉じゃないぞ」
「基礎が出来てないのに応用からやろうとするからだ。卵焼きも満足に作れない奴が、いきなりシチューとかビーフシチュー作れるかよ」
「なんでシチュー限定なんだ……」
「例えだよ、気にしないでくれ」
むう、こいつは恐らくシチューが好きなのだろう。
クリィムは話の流れなど関係なしにそう思って、担任の適当な報告やらを聞き流す。
大した連絡もなく、ただ明日も頑張れだの、赤点はオレ的に勘弁な、だのと無責任極まりない言葉をいつも通り吐きちらしていく。
平常運転だ。
そうすると間もなくそれも終わって、担任は教室を後にして、教室内は途端にざわめきだした。
つまり――放課後になった。
「もし良かったら勉強するか？　今日は、みんな個人で勉強するみたいだし、おれも暇だし」
「なぜ二人っきりなんだ。みんなが居る時でいいだろう？」

「まあ、イヤなら良いんだ」
と彼は言いながら、ごそごそとショルダーバッグの中に手を突っ込んで何かを漁る。目的の物を掴むと表情がぱっと明るくなり、彼は口元に笑みを携えて、三冊のノートを引き出した。
ジャンはそれを彼女へと差し出して、好青年の様相で告げる。
「明日の教科だ。割と読みやすいと自負してる。良かったら使ってくれると嬉しい」
「……そうなると、お前はどうなる？」
クリィムが怪訝な表情で訊くと、彼は得意げに側頭部を指で叩いてみせた。
嫌味な表現に、思わず本能的な嫌悪が背筋を走り、サソリの尾がぴんといきり立った。
「頭の中に入ってるから大丈夫だ」
「くっ、気持が悪いな！」
シャー、と今にも唸りだしそうな尾を必死で抑えながらクリィムが叫ぶ。
なぜこれほどまで得意げなんだ。恥ずかしく無いのか。ヒトには羞恥心というものが無いのか。なぜ平然と、こんな赤面モノの発言が出来るのだ。
気持ちが悪い。
クリィムは彼の手からノートをひったくってから、数歩だけ後ろに下がった。
「好意には応えよう。だが期待はするな」
「せめて卵焼きくらいは作れるようになれよ」
「お前の好物など知るか。ともかく感謝するぞ、スティール」
彼女は素直に礼を言って、丁寧すぎるまでに丁重にノートをカバンに詰め込んで、それを両手で提げる。長い赤髪を翻しながら、彼女は徐々に尾の立つ角度を鈍角にしながら、またジャンへと振り返った。
「わたしは帰宅する」

「ああ、じゃあな」
「お前はどうするんだ」
「おれ？　みんなはもう先に帰ったし……まあ、先に帰ってて良いって言ったからな」
クリィムのための時間を取るだろうから、なんて恩着せがましいことを冗談っぽく言ってみようかと思ったが、彼女はこう見えても生真面目だ。本気にして、妙なまでに仮を返そうとする。
ジャンには少しばかり手厳しいコミュニケーションを図る彼女だが、そんなこともあって、ジャンは本気でクリィムと関わりたくなど無い、と考えることは無かった。むしろこれから親密になって、他の友人らと同様に歯に衣着せぬような関係になりたいとさえ思っていた。
もちろん下心など無く、また腹黒い計算のもとではなく、その気持は混じりっ毛のない純粋なものだった。
「ま、おれも帰るよ。ふつうに」
「そうか。わたしの家は、北区なんだが」
北区、というのは噴水広場から北、つまり城がある方向だ。ちょうど帰宅途中に通過する地点でもある。
南区は商店が主に集中する街の出入り口部分であり、借家や宿屋なども点在する、いわゆる商業区だ。そして東区が居住区であり、西区も、一応居住区だ。
「家が近そうでよかったな」
彼女が何を言わんとしているかわかっている。
素直にお礼は言えるのに、そういったお誘いだとか、自分から行動を起こすことに関してはとことんダメ、不得手である。だからジャンはちょっとした悪戯心と、クリィムに慣れさせようとするおせっかいな親切心も相まって、そんなわざとらしい対応をしていた。
クラスメイトが、いつもの組み合わせだとチラチラと見てきてから視線を外す。
彼女も今ではすっかり、とまではいかないが、クラスに馴染んで

きている。その中でもこの組み合わせは――飼い主と犬といった関係だと認識されていた。

「そうだろうな。お前は、どこをどう帰るんだ?」

手提げかばんを提げる彼女をよそに、ジャンはショルダーバッグを肩にかける。授業がない上に弁当も無いからひどく軽いソレは、それ故にバッグの存在を忘れてしまいそうになる。

「こっから通りに出て、城の前を曲って広場に出て、東区に行く感じだな」

「奇遇だな。わたしも、広場に出るまでの道が一緒なんだ」

「そうなんだ。家は近いのか?」

「ああ」

彼女は首肯した。

「なによりだ」

なにがだ。

彼は自分の言葉に疑問をもちながら、いつものように笑顔を向けてクリィムに背を向けた。

「少し待て、待とうじゃないか」

頬から鼻先までを真っ赤に染めて、震える手を握りこぶしに変えて震えを抑える彼女は、回りこむようにしてジャンの前に立ちはだかった。

ぶっきらぼうな口調だが、しっかりと感情がある。むしろ、抑えているだけで喜怒哀楽などは、他人よりも豊なのかもしれない。というのは、彼女自身も無自覚なのだろうが。

「おう、どうした」

「奇遇だな。わたしも、広場に出るまでの道が一緒なんだ」

「ループしてんぞ」

「つまり、だ」

「おう」

「わたしが言いたいこととは、だな……」

意気込むように、胸いっぱいに息を吸い込む。

何をこんなに緊張する必要があるのだろうか。教室で、いつも一人で本を呼んでいるような子でもここまでは緊張しないぞ、とジャンは思いながら、微笑ましく見守る。

そんな中で、悪魔がささやいた。

そしてささやいたままに、口に出してしまった。

「帰り道が同じなら、一緒に帰らないか？」

――その刹那。

ジャンは、驚いたように目を見開いて見つめてくるクリィムの顔を見て、時間が止まったのを実感した。

が、それも束の間。

彼女は顔をうつむかせて、わなわなと怒りを表現するように肩を震わせる。

しまった、とジャンは思った。

「しまった」

つい悪戯心が先走ってしまった。

「おまえ、わたしが何を言いたいのか、ずっとわかってて……ずっと、からかっていたのか……？」

右腕が黒く変色する。そう認識した時点では既に、その指先は結合して、鋭いハサミの形になっていた。

「ちょ、ちょっとまて落ち着こうぜ。右腕がファンタスティックなことになってんぞ？」

「おまえと言うヒトは……せっかく、わたしが頑張ってヒトに慣れようと、頑張ってるのに……嘲笑って……！」

「ち、ちがうって！　嘲笑ってないって！　つまり、あれだ――」

クリィムの視界から、不意にジャンの姿が消える。だが野生で鍛えた動体視力が容易く彼を見逃すはずも無かったが……膝を折り曲げ、額を頭にこすりつける姿には違和感を覚えずにはいられなかった。

「ごめんなさい！　つい、クリィムがちょっとあの、アレでして。出来心で！」

いわゆる降参の合図だと、動物でいう腹を見せる体勢であるのだと、エクレルが言っていたのを思い出す。

だが、腑に落ちない。

降参されたからって、自動的に怒りが収まるわけではないのだ。

「アレってなんだ」

「クリィムって良く見ると可愛いなって思いました」

――ぼん、と爆ぜる音が聞こえた、気がした。

怒鳴られる事を覚悟して吐き出した言葉に何の反応も返ってこない事が逆に恐ろしく思えて、彼は意を決して顔を上げる。と、顔を真赤に染め上げたクリィムは顔の前にまで垂らす程に尾をいきり立たせていたが、手は、いつものようなしなやかな指を作っているままだった。

「まだやってんの？　お前」

膝についたホコリを払って立ち上がる。そうする中で声を掛けるのは、金髪をタテガミのように逆立たせた人間の男だった。名前をカールという、今では割と声をかけてくれる人間の一人である。

「まあな」

「物好きだな。とことん」

「んな事言うとハサミで真っ二つにされんぞ」

「ははっ、おっかねえな。んじゃな、また明日」

カールは言うだけ言って冷やかすと、そのまま背を向けて教室を後にする。

と、そこには既にクリィムとジャンしか居ないことに気がついた。

クリィムは何かの冗談のように、全く動く気配がない。サソリ族とは、立ったまま気絶する習性でもあるのだろうか。

ジャンはだんだん面倒臭くなって、結局は腕を引っ張って帰ることにした。

――そんな日々があと二日続いて、いよいよ筆記試験が終了した。

ごく平和な日々だった。
何事もないし、クリィムともだんだん距離が縮まっている実感がある。ノロも最近ではちょくちょく顔を出すようになったし、最近ではタマと街を歩いている姿も見る。
全てが良い方向に動き出していた。
問題は、あと資金の工面がつくことだけだろう。
しかし、どうにも自分に出来るような仕事が見つからなかった。
商店でのアルバイトを考えてみるが、学校があるから中々時間の都合がつかないし、ならば警備などのソレはどうかと考えるが、まず募集していない。
その時点でもう手詰まりだった。
「そこまで！」
戦闘教官の、砲撃のような大音声が轟いて、対峙していた二人の生徒は同時に動きを止めた。
グラウンドの中心で行われていた戦闘技術の実施試験の最中である。その二人組は、ちょうど最後から数えて二組目だった。
「二人共、入学時よりは随分と成長しているな。その調子で頑張るがいい」
『ありがとうございました！』
声を揃えて頭を下げて、二人は木剣を持ったまま、ジャンの方へと近づいてくる。
うち一人は、数歩分の距離を開けたままそれをほうり投げてみせた。木剣はくるくると空中で回転しながらジャンへと迫り、彼が手を伸ばせば、ちょうど柄が手に触れる。掴んで、振り下ろせば勢いもいい具合に流して殺せた。
「最後（トリ）だ。がんばれよ」
木剣を投げたカールが激励する。
ジャンは軽く手を上げて、隣で木剣を渡されたトロスを一瞥した。
「おれって、こういう順番はいつもついてない気がするよ」
「今回は僕だってそうなんだから、あまり嘆かないでくれよ」

「最後ォッ！　さっさと出てこい！」
教官の声に二人は肩をすくめるようにして、生徒らが円を作るその中心へと躍り出る。
男女混合の中で、注目される試験に少しばかり緊張するのは当たり前だったが――それが最初や最後だったならば、尚更だった。
「はじめ！」
適当なタイミングでの合図に、されど既に準備を整えていた両者は射程からやや離れた距離を保って、剣を構えた。
――考えてみれば、トロスと打ち合うのは初めてだ。
出会ってからは随分仲良くやらせてもらった。彼が居るのが、当たり前のような感覚に、今ではなっている。
穏やかで、だが力強い。初対面ではせっかちと言われていたが、今では落ち着きある、年齢よりも遥かに穏やかな物腰で全てに対応している。
甘いマスクだ。
生え際が黒くなりつつある金髪も、短くして染め直せば中々に渋い男にすらなる。
羨ましい限りだし、成績だっていい方ではないが、無難。戦闘技術も中の上程度だ。学校が始まってから開始したらしい自主トレーニングのおかげも相まって、この授業での成績は実績に加えて努力も評価されているから、随分といい具合になっているだろう。
「ねえ、スティール」
そういえば、いつの間にか呼び捨てになっていた。
それが気にくわないわけではない。
むしろ心地良かった。
「今日は、本気で頼むよ」
真剣な面持ちで告げるのは、試験だから適当にやりすごそうという提案ではなく。
「なに言ってんだ」
自分の実力を試したいという純粋な願望と、

「おれはいつだって、本気だよ」
親友と認める友人と、本気でぶつかり合いたいという欲望だった。

はじめに動いたのはジャン・スティールだった。
大地を弾くように走りだし、真正面からトロスへと向かう。
同時に動き出したトロスは、されど走りだすことはなく、飽くまでジャンの攻撃を待っていた。
俊足故に距離は瞬く間に縮まり、残り数歩分という距離でトロスが動く。腰を落とし、腰に構えた剣を力強く閃かせる。当然、それはジャンがそのまま突っ込んでくるという確信を持つがゆえの行動だし、そうすることしかできないと、常識では考えられた。
が、居合いと呼ばれるその剣戟は、ジャンには当たらない。
剣先（きっさき）は何かに触れることもないままに、虚空を切り裂き――。
「……ッ！？」
ジャンの姿が、周囲から消えている。
トロスがそう理解する間に、彼の姿は足元から浮かび上がるようにせり上がってきて、
「これで終わり、だな」
木剣の切先が、優しく喉元に触れた。
――敗因は行動を読まれていたことと、構えからすぐにどう出るか理解されてしまう攻撃手段しか持ち得なかったことにある。
攻撃速度は十分だし、居合いという技も素人のソレではなかった。
そして、彼自身ジャンとまともに打ち合って勝てるわけがないと決めつけていたことも敗因の一つだろう。
「そこまで！」
教官の声が轟く。
そうしてあっという間に、期末試験の最後のテストが終了した。

冒険者ギルド　～初めての仕事～

「サニー……すごく、言いづらいことなんだがな」
夏休みに入ったその翌日。
空になった布袋の口を逆さにして軽く振りながら、ジャンは不景気な口調で重大な事実を告げた。
「資金が底を尽きた」
つまり、だ。
「今月のお小遣いはナシだ」
それは、夏休み初日の出来事だった。
「私まだ銀貨十枚残ってるから大丈夫だけど……これからどうするの？」
寝台に座ってうな垂れるジャンの背中に手を添わせながら、サニーが心配そうに声を掛ける。
ジャンはそれから壁に立てかけられている、革の鞘に収まったブロードソードに目をやって、
「なんでも、ギルドってヤツがあるらしい」
「ギルド……？　なにそれ」
「まあ、ギルドって言葉自体は、組合って意味なんだけどさ」
諸国には、職業別にそういった組合が存在していて、海を挟んだ国同士でも組合として繋がりを持つことが出来る。主に占めているのが商人のギルド、つまり商業組合であり、他にも工業などの生産系統の組合が次に多い。
そうして次点が、冒険者によって建設されたギルドだ。街に最低一つは存在し、種類はいくらかあって統合はされていない。そこでは相互援助という形で、その街を中心にする無数の仕事が集まっていた。
探しものや、おつかい、あるいは知能を持たぬ――異人種ではなく、異種族と呼ばれる怪物（モンスター）退治などの種類を選ばぬ仕事だ。そのギ

ルドに登録して仕事を委託してもらえれば、依頼主を介してギルドで仕事を請け負う事ができる。
拘束期間は仕事を請け負って完了するまでであり、長い間ギルドに行かないからといって強制的に登録内容を抹消されることはない。
だが仕事が簡単であればあるほど報酬である給金は低く、一度の仕事で大量に資金を得たいのならば、命の危険すらある高難易度の仕事を請け負う必要がある。もっとも、ある程度以上の難易度の仕事は信頼性が必要であるために、新人が行うことは決して出来無い仕様になっていた。
「……それで、これから登録しに行くってこと？」
あらかたの説明を終えると、サニーは頷き、訊いてくる。
ジャンは静かに首を振った。
「登録はしてあるんだ。この街に来たときに、一番最初にしておいた……けどさ」
多分、自分がやるとしたら、仕事の大半は外に出て怪物退治に勤しむことになるだろう。それが自分を高めることに繋がるし、これまでしていた仕事を考えれば、身体も動かせて一石二鳥なのだ。
だから、危険を伴う。
黙って行っても良かったが、サニーに心配はかけられなかった。
「怪我するかもしれない。あんまり、サニーに心配ばっかかけてられないからな」
「もう、ジャンも、私の心配するまえに自分の心配もしてよね。ジャンがちゃんとしてれば大丈夫だし――怪我をしても私が居る。大丈夫でしょ？」
「ああ、そうか。そういえば、確かに」
盲点を突かれたようにジャンは微笑んだ。
サニーは魔法を持っているし、その力を自覚して自分でしっかりと扱うことができている。
彼女の魔法は、端的に言えば治癒だ。怪我を治し、あるいは壊れてしまった物も、その破損具合がある程度ならば直すことが可能で

ある。

忘れていた、とジャンは手を打ってから、いつものように彼女の頭を撫でてやった。

サニーはくすぐったそうに首をかしげて微笑んで、ジャンはそれを見ながら立ち上がる。

「さて、それじゃ行ってくるよ」

人が渦巻く噴水広場を南に抜けて、少し進んだ所に広めの路地がある。組合の軒がひしめくように並ぶ、専用とも言ってもいい道がそこにはあって、店の間に馬車を待たせる姿や、ちょうど品物を運んできたのであろう荷揚げ場には屈強な男達が半袖から図太い腕を見せて荷物を運んでいる姿がある。

それぞれギルドは、創設者によって建物の外観が異なる。地方の人間が建てたものならば、その地方色が色濃く出るのが、ギルドの良いところでもあった。どの国に行っても故郷の空気を感じることができるというのは、それはとても嬉しいことなのだ。

ジャンが見つけたのは、その中では割合に一般的で、大して近代的も無い、この街にはどこでもありそうな建造物だった。

石段を上がり、獅子が噛み付いているノッカーを掴んで幾度か叩く。が、どうにも中のざわめきのせいで音は通らず、訪問者に対しての返事はない。

いくら夏休みだからとはいえ、今日は休日だ。こういった何でも屋の役割をする冒険者ギルドは片手間で仕事をこなす人間が多いから、このギルドという建物に留まる機会はあまりないはずなのだが……。

ジャンは首をかしげながら、勝手に扉を開けた。

薄暗い室内に、外からの陽の明かりが挿し込むように入る。途端に外へと逃げ出す空気の流れが巻き起こって——濃厚なアルコール臭が鼻腔に突き刺さった。

「うっ、くっせ……！」

思わずそう漏らして手で鼻と口を覆う。
腰に剣を下げたまま、せめて外套でも羽織ってくればよかったとジャンは思いながら、訪問にすら気付かぬ連中など気にせず中に侵入した。
――内装は、板張りの床に、幾つかの円卓や、長机が並ぶだけのものだ。一番奥には酒場のように長いカウンターがあって、入って右側の壁には掲示板がある。そこにはいくつもの張り紙がなされていて――その張り紙自体が仕事の依頼書となっている。
登録者はそこから自分で仕事を選び、カウンターに居る主へと提出し、吟味の末に承諾されれば、そこでようやく仕事に向かうことができるのだ。
仕事が終われば、その証明を出来るものを持ち帰り、マスターに提出。報酬はそれから後日、依頼者からギルドを介して渡される。
いつもは閑散としている筈の館内は、まるで早朝から酒を振る舞っているかのように酒臭い。
そして円卓はどこも満員で、そこかしこの椅子に腰掛ける半分ほどは、旅人風情の連中ばかりだった。
ジャンはそのまま掲示板へと向かおうとすると、マスターがジャンに気づき、軽く手を上げるのを見た。
「おう、久しぶりだな。登録してから一向に姿を見せないから、冷やかしかと思った」
ジャンが歩み寄り、カウンターの前に立つと、彼はまずそう言った。
恰幅の良い男だ。頭髪にはまだいくらかの余裕はあるようだが、額はますますその面積を広げている。愛嬌のある笑みを浮かべて、その人当たりの良さが心地良かった。
「一応学生でね」
「ああ、養成学校の、だっけか。エリートコースまっしぐらだな。はは、俺のギルドから騎士が出るなんて、何年ぶりか。アイツらはお高い所に止まって、自分で金を稼ぐって事を知らないからな。お

前さんのような苦労者は大歓迎だよ」

すこし筋肉質の腹を豪快に叩いて笑う男は人間だ。だが、ギルドには構わず異人種も多い。他国ではあまり見られない光景なのだろうが、やはりありがちな差別が水面下にすらない所が、この国のいいところだった。

「むしろ働かずに金が入ってきたら怖いですよ。ただより高いものはないですからね」

「がはは！　全くだ！」

「それで」

とジャンが話を切り出した。

おもむろにポケットから取り出したのは、財布に使っていた布袋だ。今では悲しいくらいに薄っぺらく、中身がないために軽い。重さを忘れてしまった財布をカウンターの上に出すと、マスターは途端に神妙な面持ちになってジャンを見つめた。

「金貨五枚ほどの仕事は、ないですかね」

金貨五枚。

その価値は、簡単にいえば――銀貨にして約五〇〇枚の価値。銅貨にして、約五〇〇〇枚の価値だ。

それだけあれば共同住宅で半年は金の心配をせずに居座れるし、毎日外食しても足りる金額である。

もっと簡単に言えば、魔術仕様の武具が一つだけ購入できる。何もない一般的な武器ならば、警ら兵御用達の装備一式が揃えられるはずだ。

つまり、それがあれば今年は心配せずに過ごせるはずであり、思わぬ出費に対応できるのだ。

もっとも――ジャン・スティールが六年間貯めた資金がわずか三ヶ月で底を尽きたところを考えれば、そうそう楽観的に考えられるものではないのだが。

救いなのが、入学金と学費が一度に二年分払込だったことだった。

「そうだなあ。コロンの鉱山で働いていたんだろ？　この街もあそ

この装備は贔屓にしてるから、お前の実力がお墨付きってのもわかるんだが……正直言って厳しいな。戦闘経験が足りなさすぎる」

「んー、ですと、どの程度の仕事なら出来ますか？」

「その前に、お前が使用可能な魔術によってかなりランクが変わってくる。そのブロードソードは魔術仕様だと聞いたが……」

「まあ一応、一通りの属性に対応できますが、威力に不安が残ります」

少なくとも、直撃したとしても怪物を一撃で倒すことはできないだろう。その程度の威力だ。

「他に紋様だとか、詠唱や魔方陣は覚えているのか？」

「あー、まあ。一応」

彼は言いながら、肩から背中に手を回して、軽く叩いてみせた。

「詠唱は本番では使えないレベルですが、背中に魔方陣が刻んであります」

魔術の発動を簡易化した紋様ではなく、それはその形や魔法文字さえ正確ならばどこでも魔術を発動できる魔方陣だ。

そして簡易化、省略可されていないために紋様よりも発動にはいささかタイムラグがあり――だが術者の成長に比例しない、刻んだ者の魔術が威力をそのままに刻まれるから、どれほどの弱者でも、幼子でも、魔術師が最高練度のそれを刻んでやれば、誰でもそれを再現することができるのだ。

彼はそれを背に持っていた。

鉱山に居た、というか定期的に訪問してくる魔術を嗜む旅商人によって与えられたのだ。

身を守るために、と魔術の専門家である魔術師を目指していた彼がくれたのは――今のジャン・スティールでさえ手に余るほどの魔術だった。

「へえ、珍しく古臭いやり方だな。陣を少しでも間違えば台無しだろうに」

そう、魔方陣を正確に複製できなければ魔術は発動しない。

魔方陣はそれぞれの魔術によって異なるが、例えば『大地の怒り（アース・ピック）』ならばそれ専用の陣が存在する。が、その魔方陣を形成した術者によってその威力は異なるのだ。

それを肉体に刻むというのは、それ故にリスクが高い行為である。

持ち歩きの為に紙に記すという、巻物（スクロール）と呼ばれる魔術道具もあるが、魔術の発動に耐え切れずに破損してしまうために、実質使い捨ての道具であった。

だからと言って、肉体に直接魔方陣を刻む例は決してそう多いわけではない。

そこで採用されているのが、肉体の成長や熟練度と共に変異する”紋様”だ。これには特定の形というものは無く、魔力を込めて特殊な方法で刺青を入れるだけなのだ。故に失敗というものはなく、成長を実感できるために多くの者がそれを手にしていた。

「まあ、鉱山は危険が付き物ですからね。何より自分を守るのは自分ですし」

「そうだな。それで、その魔術はどういったものなんだ？」

「えーと、最後に使ったのが一昨年なんでちょっと不安なんですが――純粋に肉体強化ですね」

肉体に魔力を流して筋力や反射神経などに強制的に干渉し、強化する。

仮に鉱山が崩れてきても、一時的にそれを発動させることで生き埋めになる前に脱出することも可能だし、上手くいけば瓦礫をかき分けて自力で脱出することも可能だ。もちろん、活性化する肉体はそれ故に傷も回復させるから、負傷の心配がない。

その代わりに、無茶な機動や力の発揮で反動が来てしまう。

筋肉痛程度で済めば良いのだが、鉱山では無茶が祟って骨が砕けてしまったドワーフも居たのを思い出す。

マスターは彼の言葉に何かを思案するように顎に手をやりうつむくと、うーんと唸って、指を鳴らした。

そうすると、掲示板に貼付けられている一枚の紙が引き剥がされ

て、ふわりと宙に浮かび、無風の空間内で風に乗るように、ゆらりと揺れながら、やがてカウンターへとやってきた。
「お前以上の実力者がもう一人居れば、この報酬が金貨三枚の仕事があるんだがな……」
「二人で分けて、金貨一枚に銀貨五〇枚ですね。学生には十分な金額ですが……」
これを資本にして、地道に仕事をこなすのであれば、十分すぎると言えるだろう。
だが、ジャンが口ごもるにはそれ以外の理由があった。
「身勝手な危険ごとに、あまり友人を巻き込みたくないんですよねぇ」
どうにかなりませんか、と無駄だとわかりながら食い下がるように訊いてみる。
が、やはりマスターは毅然と首を振った。
「仕事内容は一般的な怪物退治。最近はなんでも、農産物や畜産が被害にあっているらしい。そいつの巣は街から西、海への道の通過点にある洞窟だ。それでも仕事を受けるつもりか？」
「ええ。そのつもりでここに来ました」
剣の柄に手をやって微笑むと、彼はそうか、と力強く頷いた。
「仲間に心当たりが居ないのならば、こちらで手配しても良いかな？」
「よさそうな人がいいです」
「んー、ま、一応プロだからな。ウマが合うかわからないが……おーい、ラァビ！　暇ならこっちこい！」
大きく叫ぶと、不意に空間が静まり返る。
しん、と静寂に包まれ始めた館内は妙な緊張をはらみ始める。ジャンは確かに、その異様な空気を肌で感じて、思わず振り返ると――それと同時に、椅子の足が床を引きずった、その摩擦音が響き渡った。
長机で一人、ビンから直接酒を飲んでいた姿が立ち上がっている

のが見えた。
　頭から長く伸びた対なる耳は、その半ば辺りから脱力するように垂れている。外套を肩から羽織るような格好だが、その袖の部分は肘辺りから図太くなって、その先端の部分には巨大な鉤爪を直接に装着していた。
「なぁによ、ヒトのくせに。都合の良い時ばっかあたしを呼んでぇ！」
　にわかに身体が沈む。
　その直後に、「ふっ」と息を吐いたかと思うと――彼女は見る間に天井高く跳躍して、そうして床へと近づいてくる。軽々とした様子で着地し、ウサギのように踵が長く、ややつま先立ちのようになる姿は、さらに太ももまでを黒い毛皮に包んでいた。
　しなやかな姿。鍛えられた、野生の動物を彷彿とさせるたくましい雰囲気には、強い酒気がまとわりついていた。
「うはは！　ま、話は聞いてたんだけどね。ヒマだから。どうせヒマなのよ」
　平たい酒瓶を口に咥えたまま、外套の下では胸を抱くように腕を組んでいる。そんな彼女は、うさぎ族の女性らしかった。
「金貨三枚だってね。いいよ、受けるよ。相棒（バディ）はこの子でいいんだね？」
「一応注意しておくが、報酬は働きぶりに関わらず半々だ。いいな？」
「なによぅ細かいわね。知ってるわよそのくらい」
「ま、それもそうか。それより、貯蓄はあるんだからいい加減タダ酒はよして、代金を払ってくれないか？」
「……さあ君、一緒に冒険しよっか」
「あ、おい！」
　マスターの制止も聞かずに、ラァビと呼ばれた女性は力一杯ジャンを抱き上げたかと思うと、また大腿筋に力を込めて――跳躍。
　重力の縛りを吹っ切って宙に舞い上がり、そして床に吸い込まれ

るように引っ張られる。視界は瞬く間に移り変わって、静かな着地と共に、鈍い衝撃をジャンは覚えた。

「さ、自己紹介はあとにして。主様（マスター）の愚痴を聞かされる前にちゃっちゃと行くわよ！」

酔いのせいか、高い体温が彼女の頬をにわかに赤くさせて、ひどく酒臭い息を吐きかけながら彼女は手を引いて、さっさと館内を後にした。

ジャンはそんな、何かの冗談のような展開に思わずため息をつきながらそのラァビについていって――初めてのアルバイトが、不意に爆発的に溢れ出した不安の中で、かくして開始した。

閑散とする、というよりはやや小汚い格好の住人が目立つ西区を抜けると、出入り口同様に巨大な門扉が街を塞いでいた。門番に、ラァビがギルドを辞す際にちゃっかりと奪い取っていた依頼書を見せて、その門を開けてもらう許可を得た。

南の門から出てこちらに向かうことも出来たが――なにぶん、街が大きいために厄介なまでに時間がかかるし、無駄な労力になる。だから、これが適切な判断といえた。

そこから舗装された道を歩くと、やがて道の両脇に芝生が生い茂る草原にまでやってきた。

「――それじゃあ君は、この仕事が初めてって事？」

草原には、野放しにされた牛が雑草を食んでいる。その向こう側には牛舎があって、近くには納屋らしき小屋もあった。

「ええ、お金がなくなったっていうのが、なんとも情けないきっかけですけどね」

ジャンは肩をすくめるようにして息を吐く。彼女は外套の下から薄く湾曲した銀色の水筒を取り出して、喉を鳴らして蒸留酒を飲み下す。

より酒気が濃くなった吐息を漏らして、彼女は背中を丸めるように嘆息した。

「でもいい傾向じゃないの？」

「そう、ですかね……」

「そうそう、だからマスターもあたしを呼んだわけだし」

力一杯大きく何度も頷いた後、ラァビは不意に吐き気を催したように顔をしかめて口元を抑える。

頬がにわかに膨らんだかと思うと、ごくりと喉を鳴らした音がする。彼女は酷く気分が悪そうな顔でまた蒸留酒を口に含むと、無理にそれを飲んでみせた。

ラァビは僅か一分にも満たぬ時間で顔色を悪く、青白く変色させてから、少しばかり機嫌が悪そうにうな垂れる。
「どういう事なんです？」
「あたしが一番酔いが浅かったのよ」
酸っぱい吐息が鼻腔に突き刺さる。
彼女は眉をしかめて、舌に残る最悪な後味を覚えながら、簡単に答えてみせた。
「実力面は信頼して良いんですか？」
どうにも心配になって訊いてみる。吐き気を催して吐瀉物を飲み込んだり、それを酒でごまかしたりなどどう見ても酔っぱらい同然の行為に、ジャンは不安を禁じ得ない。
もしかすると一人のほうが良かったのでは、とさえ思えるのだ。
この人は、いったいなんなのだろうか。
「う、うはは！」
胸をそらしてぎこちなく笑ってから、彼女はジャンの頭を叩いて、
「舐めんじゃないわよ？　あたしは強いんだから」
別にいいけど。彼女はそこで一区切りにするように、肩を回して身体を解すように軽い体操をした。
――暫く歩くと、潮の香りが風に乗って届いてくる。
それに反応した彼女が足を止めると、間もなくジャンの視界から消えて、
「海、ちょっと見てみる？」
後ろから抱きついて、また沈むように屈む。
「ちょ、っとまっ――」
制止も聞かずに、ジャンは全身に過負荷を覚えながら大地から足が引き剥がされる感覚を覚えて視界が瞬く間に高くなっていくのを見ていた。臓腑が浮かび上がるような不快感は、以前に一度だけ経験がある慣れない感覚だ。
空が近くなって、日差しが強くなったような気がした。
芝生が、地面に塗料でも塗りたくったような風に変化して、その

向こう側に集落を見た。陽光によって反射する浜は白く輝いて――その向こうには、鮮やかな蒼い海が広がっていた。

空を飛ぶよりは遥かに低い位置から見る海だ。

だが、以前見た時よりも遥かに近いソレだった。

世界の広さを、改めて理解する。実感する。そうすると、身体の中から暖かく火照るような熱が生まれるのを、彼は感じていた。

ふっ、と意識が遠くなる。気絶するのではなく、自分の存在が、今よりも小さくなってしまったかのような認識。白昼夢でも見ているような錯覚に、ジャンは思わず呆然とした。

だから着地したことにも気付かなかったように、虚空を見つめて、ラァビによりかかったままだった。

が、彼女はそこまで優しくはなく、ジャンをそのまま押しのけて前に突き飛ばした。

「おわ……っち！」

そのまま顔面から地面に飛び込みそうになる体勢を、ステップを踏むようにして何とか整え、そうして跳び上がるように大地を弾いて、空中で回転。振り返って着地するまでの過程は、ダンスでも踊っているかのようだった。

「な、なにすんですか！」

「あたし、馴れ馴れしいのは嫌いなのよね」

「……そうですね」

ジャンは他にも何か言いたげに眉をしかめたが、結局口にしたのはそれだけだった。

むすっと、拗ねた子供みたいにそっぽを向いてジャンは踵を返す。前へと向き直ると、彼はラァビを置き去りにするように進み始めた。

ラァビが困ったように肩をすくめて、急ぎ足で彼の横につく。

冗談も通じないのか、と首を振ってから、仕方なしにご機嫌伺いとばかりに声をかけてみた。

「そういえば、君は戦えんの？」

「……えぇ……まあ、一応」

「なにそれ、煮え切んないわねぇ」
「いや、実戦経験ってもんがあんまり無いんで。身体は鍛えてきたんですけどね」
腕を叩いて筋肉を主張してみせるが、これがイコール戦闘能力に変わるわけではない。
戦闘で最も重要になるのは、センスと経験だ。確かに身体能力が圧倒的に劣っていれば先制を受けてしまって攻撃に転ずるまでもなくなってしまう可能性があるが、それでも経験があれば、行動を先読みすることができる。センスがあれば、どう動けば良いか、その直感が良い方向に、自分の流れを作り出すことが出来る。
だが、ジャン・スティールの実力とは未だ未知数。命をかけた戦闘は、まだ未体験だった。
「ま、そこら辺は追々教えてあげるわ。君は、今日は見学なさい」
「いえ、足手まといにならない程度には頑張ります」
「そう出来ればいいけど、ね」
「腐っても騎士志願ですから」
さて、と。彼女は立ち止まる。道はそのまま海岸へと続く道と、草原を突っ切って林の中へと伸びるものとの分かれ道が目の前に現れた。
「さ、こっちよ」

林の中へと入る。
その手前に、怪物（モンスター）は居た。
――モンスターは異人種と共に、溝の門扉（ゲート）から現れた、いわゆる”向こう側”の生物だ。この世界の動物と似て非なる、圧倒的な戦闘力を誇る存在だ。だから、ある程度の実力を持たなければ、その姿を見かけた際には相手に気付かれぬように逃げなければならない。
モンスターの多くは好戦的だ。
そして常に飢えている。
故に、戦闘はより必然的に起こるのだ。

「ふふん、君は下がってなさい」
外套の袖に両手を通して、彼女は巨大な鉤爪を諸手に装備する。
対峙するのは、一頭の狼だ。牙は鋭く上顎から突き出て、爪は長く伸びて地面に食い込む。威嚇するように鳴る喉は恐怖を煽るように唸り続け、獰猛な瞳は既に彼女らを捉えていた。
一触即発の、張り詰めた空気の中。
ジャンは思わず口走った。
「そいつを、殺すんですか……？」
「……はあ？」
イラついたようにラァビが返す。
「それはどういう意味？」
モンスターから決して視線を外さず、言葉を交わす中でも隙を伺い続ける彼女は、敢えて会話を続けるために膠着を選んだ。
ジャンは頷く。
「そいつは、おれ達がここに来たから、多分……その、住処を荒らされると思って抵抗しようとしてるんですよ。なのに、それを殺すのって……」
「なら君は殺さずに殺されればいいわ。ったく、何を言い出すかと思えば――失望モノだわ。じゃあ何、君はあたしに死ねって言う訳？」
「そ、そういうわけじゃないですけど……」
――ジャンは困惑していた。
モンスターを見た瞬間に思い出したのは、森の中でイタズラに動物を殺してはいけないと。
ならば、自分が今しようとしている事は何だ？　人のエゴやなにやらで、生きるために必死になっている動物を殺そうとしている、この現状はなんだ？
そう考えるが、彼が本心からソレをそう思っているわけでもない。

自分がそうに、今まで取り繕っていた姿と――今の、金のために命を散らす行動。そこに矛盾を見出して、混乱した。

おれはどれを通せば良いのか、どうすればいいのか。

気がつけば声が震えているのに気づく。

自分の取り繕いの思考を自分で論破できてしまうのにも関わらず、思わずでてしまった言葉に、にわかな後悔を覚えていた。

自分というものを見失い始めている。

たかが、モンスターと対峙しただけで。

仕事を与えられた時点で、こういう状況が来るということが分かっていたのにも関わらず。

――考える間に、ラァビが動いた。

狼がそれに大して反射的に跳び上がる。鋭い爪と爪とが振り薙がれて一閃が走り、二つの影が交差する。

ほぼ同時に両名は着地して、直後に切り裂かれた腹部から鮮血を吹き出して、脱力するように狼が倒れた。

一瞬の出来事だ。

先程まで生きていた狼が死に、そして血に濡れることすら無い速度で振られた鉤爪を腕からはずして、ラァビは再び袖ごと垂らし、腕を組む。

死骸を目の当たりにするジャンへと彼女は振り返って、明らかなまでに嫌悪感を表す表情で、彼を睨みつけていた。

「わかったわ、君は八方美人タイプね。誰からも嫌われたくないから、誰にでも良い顔見せて。差別なく接するからある程度は仲良くなるけど、誰も持ちあげないからそこで終わり。つまんないヒトね、君は」

「……」

沈黙し、俯くジャンに舌打ちが響く。

さらに追撃が来た。

「そんな甘ったるい事考えてんなら、今すぐ剣を置いて国に戻りなさい。学校なんてやめて、平和主義唱えとけばいいわ。あの国だか

ら二、三人は賛同してくれるでしょ」
ずかずかと大股で歩み寄り、狼が作った血溜まりを踏みつけて水の弾ける音を鳴らして、ジャンの目の前に立ちはだかる。無言の彼の胸ぐらを掴み上げて、息が掛かる近さまで顔を引き上げさせた。
「君の剣は、まさか”誰かを守るため”なんて馬鹿ったらしい事を理由(わけ)にして腰に提がってるわけじゃあないわよねぇ？」
全てを押しつぶすような威圧に、心がまっ平らになってしまうのを彼は感じていた。
「お、おれは――」
食い下がるように、彼女は言葉を遮って額をぶつけた。
「剣は飽くまで何かを傷つける、打倒するための道具に過ぎないわ。誰かを、何かを守るなんてのは結果でしか無いし、それは剣じゃなくて使い手にすぎない。どう？　ちがう？」
あと一押しだと思う。
彼の中で、あと一度だけ背中を押してもらうようなきっかけが必要だった。
今の経験は凄まじく自分を変えてくれる。
彼女の言葉が全て図星なだけに、されどそれまでの自分を捨てるにはあとは行動するためのきっかけが要るのだ。
ジャンは軋む首を何とか動かして頷く。
ラァビは乱暴に彼を突き飛ばすと、腰に手をやり、見下すようにジャンを見た。
「どこまで甘ったれてんのよ」
冷たく突き刺さる言葉に、ドクン、と心臓が高なった。
まるで心を見透かされているような気がして、頬が熱くなるのが良くわかった。
羞恥だ。そして同時に、自分がどうしようもなく軟弱で情けないのかが理解できる。
「きっかけは自分で作るものよ。さあ、今”すべきこと”と”どうしたら良いか”、君はわかるでしょう？」

――濃厚な血の匂いが広がり始める。
それは空気に乗って、林の中へと入っていったのか、ラァビは背後に強い気配が現れたのを覚えていた。
一つという単体ではなく、三つ以上の複数の気配。殺気。
歩くたびに、どすんと地面を揺るがす質量に巨体。
それは恐らく、今回の目的たる敵だろうと、振り向かずに彼女は認識した。
「お、おれは――」
腰の剣に手をかけ、こなれた手つきで白刃を閃かせる。
声は震える。
自分のしていることが正しいのかわからないし、心が本当に、今の行動に賛同しているかも不鮮明だった。
だが、今すべき事はこれである。
それだけは、決して間違えては居なかった。
「おれは、戦います」
「住処を荒らされて、怒って抵抗している罪のない動物よ？」
悪戯っぽくラァビが訊いた。
ジャンは首を振って否定する。
「無理が通れば道理が引っ込む。おれはそれを両立させる事はできないし……何も傷つけないで生きていくことなんて、おれには出来ない」
綺麗事で生きていけるほど、この世界は綺麗じゃない。
裸足で歩いて無事で済むほど、この世界は安全じゃない。
自分で理解していたことだ。経験したことだ。
ただ、そんな理不尽に悲しい出来事を忘れて――否、忘れようとして、彼は自分の中に決定的なまでに綺麗なものだけを残そうとしていた。
今それを完全に変えることはできないし、今の決意も、いずれ揺らいでしまうかもしれない。
だが、今は戦うと決めたのだ。

ならばせめて、その今だけはそれに従おう。
ジャン・スティールはそう考えた。
ラァビは少しだけ表情を緩めて、踵を返す。
振り向いた先に居たのは、彼女より遥かに大きい――クマの姿だった。

クマの咆哮。
ビリビリと肌を震わせる衝撃の中で、ラァビは大地を弾くようにクマへと肉薄した。
鉤爪による一閃。大地に這う程に深く沈んで、地面を蹴り飛ばして懐へと飛び込んだ。
「グオォオォオッ！」
刹那。
無防備に攻撃の予備動作に移行した彼女へと、およそ通常のクマよりも遥かに俊敏に動く右腕が影に目掛けて振り下ろされた。
が、彼女も反射神経で攻撃へと転じていた左腕を引き上げて鉤爪を腕に叩き上げる。間もなく腕は弾かれて、打ち合った故に生じた衝撃が腕を震わし、動きを鈍くさせる。
その最中に、左腕が振り上げられた。
懐に飛び上がったラァビを切り裂かんとして――彼女は空中で力一杯足を伸ばした。そう思うと、足は伸び切らずにつま先が何かに触れて、蹴り飛ばし、さらに飛び上がってクマの頭上へと飛び上がった。
機敏な機動。
頭の上で逆立ちする彼女は、そのままクマの首筋に鉤爪を当てて、軽く掬うように腕を引く。
引き締まった筋肉と、頑強な骨の抵抗を覚えながら、ミチミチと肉が引き裂かれる音がして、鮮血が迸る。切り裂かれた喉元からはあふれた血が泡となって吹きこぼれて、首は中途半端に半ばまで引き剥がされたかたちで、ぶらりと垂れた。

彼女は倒れかけるクマを蹴り飛ばして体勢を整えて、すぐ背後に回り込んでいた敵へと切迫。

意表をつくように鉤爪を振るい、一閃。冷たい刃は優しく鼻先に触れて、食い込み、抉る。すると鼻の皮膚は肉ごと豪快に引き剥がされて、

「ゴオォオォオォオォオ――ッ！！」

断末魔。

それは衝撃を伴って、眼前のラァビの腹に突き刺さった。

「……るさいっての！」

全てを喰らい尽くすように大きく口を開ける顔へと、頭上から腕を振り下ろして強引に口を閉ざさせる。鼻を切り裂いた手を振るって喉を穿ち、彼女はまたクマを蹴り飛ばして、それからようやく着地した。

大きく息を吐く。

やれやれと、額に浮かぶ汗を拭うような所作の中。

ジャンの遥か前方。そんな彼女の、すぐ後ろで、その巨体は未だに本領を発揮できていないその図太い腕を振り上げていた。

「ラァ――ッ」

声をあげようとして、それが無駄だと悟る。

もう間に合わない。声が届いて、彼女が背後に気づいて、それから反応して……それではとても間に合わない。あの位置、既にクマの射程圏内で、背を向けている為に致命傷は避けられない。

”どうすれば良いか”――考えるまでもなく、彼は殆ど無意識に、ソレを発動させていた。

「発現（めざ）、め、ろぉぉぉっ！」

衣服の、背中の部分がはじけ飛ぶ。

そうしてあらわになる背中いっぱいに刻まれた魔方陣は眩く閃光を放ち、そうしてそのすぐ後ろに、波紋するように同様の魔方陣を重ねてに出現させた。

――その直後に、全ての動きが緩慢化した。

感覚が鋭敏になる。
クマの、腕を振り下ろす行動が止まって見えて――ジャンは大地を蹴り飛ばし、加速した。
風を切り裂き、見る間にクマとの距離が縮まるのを感じる。今までの全てを挽回するように、やがてジャンは、気がつけば敵の目の前へと回り込んでいた。
「うおお――」
切り上げる一閃。
だがソレは、殆どクマの目に映る事無く攻撃が終了した。
腕は半ばから切り裂かれて、未だ血も吹き出ずに切断面はまだ肉をあらわにし、綺麗な筋と骨の断面を見せていた。
「――おおおおっ！！」
さらに一閃。
跳び上がり、その頭部から縦に振り下ろす剣戟。
斬り伏せると言うべき行動だったが――。
ジャン・スティールのしたこの上なく信じる正しい行動が終えた瞬間に、彼が体感する時間は通常通りに流れ始めた。
鞘を収め、クマを前にした彼が、
「……っ！？」
そのモンスターの頭が、腕が不意に爆発したのを見たのは、その直後のことだった。
魔方陣の輝きは失せて、効果は消え失せる。反動として肉体には既に立っていられるはずもないくらいの疲労が襲いかかっていたが、ソレよりも、目の前で爆ぜた対象に彼は目を奪われていた。
クマにとっては一瞬の出来事だ。つまりはそれほどの速度で腕を切り裂き、頭を打ち砕いた。全ては斬撃だったが、その威力は砕き散らす爆撃に等しかった。入刀する一閃がの衝撃がその体内で伝播し、肉体は耐え切れずに破裂したのだ。
ジャンは全身にクマの返り血を浴びてから、ややあって跪く。
まさか今日に限ってこの魔術を発動させるとは思っても居なかっ

たが――そのおかげかも知れない。
色々と吹っ切れた。
彼は確かに、それを感じていた。
「頑張ったじゃない」
水筒を傾けて蒸留酒を口に含んだラァビは、まるでこうなることを知っていたかのように告げた。
「これでも本当に殺すのがイヤだとか言うのなら、世界を変えなさい。できないなら自分を変えるの。わかった？」
「はい、もう、十分なほどに」
「君はもっと世界を知ったほうが良いと思うのよ。騎士になるんだったら」
「あの……」
「ん？」
袖で顔を拭い、なんとか四つん這いから中腰へと体勢を引き上げた。
見上げる形でラァビを見れば、先ほどの怒りはどうやら消え失せてくれているように見えて、ほっとジャンは安堵する。
「また、一緒に仕事を受けてくれますか？」
「……うははは！　君はヘンタイ？　あんだけ怒鳴られて、それでもあたしと仕事したいの？」
「おれ、もっと頑張りますから」
「ははははっ！　いいわね、いい目になってるわよ。どうせヒマだもの、ヒマだから、君が誘ってくれるならいつでもいいわよ」
ポンポン、といつもジャンがそうするように、ラァビは知らずに彼の頭を叩いてみせた。
それから彼に背を見せるように歩き出して――歩けぬほどに疲弊してしまっているのを知ってか知らぬか、数歩ほど離れた所で立ち止まった。
「早く帰らないと、陽がくれちゃうわよー」
「ちょ、待ってくださいよ……」

ガクガクと膝が震え、歩こうとすれば足が動かず、前のめりになって倒れてしまう。また起き上がろうにも、腰が痛くで半身が起こせない。

今すぐにでも眠りにつきたい。そう思いながらも、彼は歯を食いしばり、唸りながら立ち上がると――不意に腹に違和感を覚えて、そうして身体は大地から引きはがされた。

視線の位置が高くなる。

ジャンは、ラァビに担がれていた。

「たく、これで報酬が半々なんだからやってられないわよねぇ」

すっかり酔いが覚めてしまったように、彼女は深々と嘆息した。

「ごめんなさい……」

「いいわ。それじゃ、ギルドのツケを払ってくれる？」

「い、いくらですか？」

「金貨一枚と、銀貨五〇枚くらい」

「……いくらなんでもふざけんな！」

「うはは！　これで愛想笑いで済ませたらどうしようかと思ったわよ」

なんだか妙なまでにご機嫌に彼女は笑って――街に到着するのは、ちょうど西の空が赤く染まり始めた時刻だった。

「最近、ジャンくんが妙な女と歩いているのをよく見るわけよ」
「ほうほう、くわしく」
「いいわ、よく聞いてなさいね」
猫は尻尾をぱたぱたと揺らして床を叩きながら、目の前で膝を立てるように座る赤いワンピース姿の少女に告げる。
そこはジャン・スティールの私室であったが、彼が夏休みに入って以降ヒマになったタマとノロの溜まり場と化していた。週三程度で彼は日中は外出して夜まで帰ってこないので、その事実を部屋の主は知る由もなかった。
ふかふかの寝台の上で、タマは布団を叩いて抗議でもするように興奮気味の口調で説明した。
「あの女！　あれのせいでジャンくんが最近構ってくれないのよ！　カリカリくれないし！　べちゃべちゃの魚は美味しくないのよ！」
「ほうほう」
ノロは言いながら、蓋の開いたツナの缶詰をタマの前に取り出して、そのままフォークで掬い、持ち上げる。タマは誘われるように器用に二本足で立ち上がって、不安定な動作で空中を掻き毟る。だが、頭上のフォークには前足は届いていなかった。
彼女は反射的に餌を追い求めてしまうタマを弄びながら、この上なく興味がなさそうに訊いてやった。
「その女とは」
「あ、そうそう！　なんかねェ、こう、頭にウサギみたいな耳くっつけて、下半身が立ち上がったウサギみたいな毛皮の、あたしみたいに完璧な獣人化も出来ないくそったれなウサギよ！」
「それで？」
「ジャンくん、家にいる時より楽しそうな顔してたのよ……っと！」
布団を弾いて跳び上がる。が、反射的に腕を引くと狙っていたフ

ォークはタマの眼前から消え失せて、そのままノロを飛び越えて背面に着地する。短い舌打ちを鳴らすタマの頭を撫でながら、ノロは飽くまで表情を変えぬまま、頭を撫でてやりながら目の前に缶詰を差し出した。

ぱあ、っと先ほどの憤怒が嘘のように表情が明るくなる。

さすが猫。

彼女はそう思い、ガツガツと缶詰に顔を突っ込んだタマを見下しながら、顔に軽くかかった長い銀髪を後ろに流した。

「わたしも、近頃構ってもらっていない。友達なのに、無責任」

「これは由々しき事態よ。あの思わせぶりの馬鹿に鉄槌を下す時が来たわ」

「作戦、開始」

「サニーも起こしていくわよ！」

ヒマなのと、無駄なまでに積極性の強い事も相まって、壮大な勘違いのもとで行動は果たして開始した。

「いい加減、酒飲み過ぎなんじゃないスか？」

ギルドを出てからすぐに平たいの水筒を口につけるラァビに、ジャンは呆れるように言った。

かれこれ一週間、彼女に鍛えてもらいながら仕事をこなしてきた。街の中で、体の不自由な老人のために買い物をしてきたり、あるいは届け物をしてきたり。あれ以降の戦闘は無かったが、それでも今までには無かった体験は、彼にとって貴重なものになっていた。

自分の知らない、住民の生活が垣間見える。それが妙にうれしくて、自分が世間と関わっているという証になるようで楽しかった。

「いいのよそんな量ないし。というか、今日はもう仕事もないし、帰れば？」

彼女は、ほっと胸から大きく息を吐き出して肩を落とす。

最近ろくに仕事をこなす人間が居ないという話だったのだが、ジャンらが熊（グリズリー）を三頭退治してみせてから、そういった怪物退治の仕事

が増えたのだが――それを待っていたとばかりに、館で待機していた旅人がこぞってそれを奪い去っていったのだ。

それでもそうそう間を置かずに来てみたのだが、やはりろくな仕事はない。

資金も溜まってきているから、無理に仕事をする必要もないのだが……今日で一週間目だ。いい加減、あの時の情けない姿を払拭したいと、ジャンは思っていた。

「そんな寂しいこと言わないでくださいよ。むしろ、仕事も無い日に、初めて会ってるんですよ？」

「別に好きで会ってるわけじゃないけど」

いつものように外套の下で腕を組むラファビは退屈そうに言ってから、静かにその言葉の後を追った。

「じゃあ、君を育てたお礼に何か奢ってくれる？」

今まさに思いついたような台詞だった。

そこで同時に、そうか、とジャンも手を打った。

今日は仕事もないからどうしようもないが――ならば日ごろの礼という手があった。

ここで、決定的なまでにどうしようもない糞ガキだと思われているイメージを、なんとか変えられるかもしれない。

「そうですね、ちょうど昼頃ですし……でもおれ、ここら辺の店ってあまり良くわからないんですよね」

「そうねえ、街並みはすごいけど都市って感じじゃないからあたし自身もこの街をあまり見回らなかったから知らないんだけど――あったわ、一つだけ、とっておきの」

「ラファビさんが良ければ、そこに行きませんか？」

「うはは！　そうねえ、いいかもねえ！」

誘ってみると、ラファビは嬉しそうにジャンの頭を撫でるように叩いて、歩調を早めた。

ジャンはそんな喜んでいる彼女にほっと胸をなでおろしながら、強い日差しの中、額に浮かぶ汗を拭いながらラファビの後を追うよう

についていった。

「ほら、アイツよ」

タマは物陰から、仲睦まじく往来を歩く二人の姿を指してみせた。

妙に艶艶しい肌で傍らに屈むノロは、つい先ほど、制限時間的な問題で選手交代してきたがためだ。先ほどとは違うノロだが、記憶と意識は共有されているためになんら問題はない。

「ラァビか」

「あんた、知ってるの？！」

「聞こえた」

「……すげぇ役に立つじゃないのよ」

飛び上がって、タマはノロの肩に乗る。

サニーは既にクロコやアオイと出かけてしまった後だから誘えなかったし、テポンは新しく買ってきた魔術書にかじりついていて、お手伝い三人衆も相手にしてくれない。トロスが唯一の希望だったが、彼も彼で家には居なかった。

だから、この追跡は二人と形容すべきか、二匹と形容すべきかわからぬ両名のみで行われることとなっていた。

もちろん、その対象二名には気付かれては居ないが、その微笑ましい組み合わせは通りすぎる人々には良く目立っていた。

彼女らはそうとはつゆ知らず、まさに自分たちは透明になったつもりで、影に隠れながらその後をついていった。

「あんて会話してんの？」

舌っ足らずっぽくタマが訊く。ノロは頷き、聞いたままに口にした。

「『おれ、ラァビさんと出会ってから世界がかわったような気がします』『へえ、じゃあもうあたしナシじゃ生きていけないくらい、骨抜きにされてるわけね』……など」

「にゃんですとぉっ！？」

「『……まだ昼間ですよ。いくらなんでも早いんじゃないですか』

『いつもそうじゃないのよ。ソレに、今日は君がもてなしてくれるんでしょう?』……だとか」

「やっろぉ……もう、そんな不快、もとい深い関係に……」

もふもふの毛皮を逆立たせて、倍近くに膨らんだ尾は針金でも入れてあるかのようにいきり立っていた。彼女の興奮は隠せるものではなく、鋭い爪はノロの肩に食い込んでいたが——肌は切り裂かれること無く、逆に腕をそのまま飲み込むように、柔軟化していた。

そして対照的に、ノロは楽しんでいた。

表面上にはひどく冷めた様子だが、敢えて切り切りに台詞を紡ぐことに寄って、タマは面白いように情報を鵜呑みにしてくれる。滑稽だ。ジャンはからかえなかったが、彼女は違う。

もっともその行為は悪意に満ちたソレではなく、結局のところ、タマも本気で憎んでそうしているというわけではないことを知っているから、ならば自分も少しくらいは楽しもうという思考のもとで行われていた。

「あたしの事は遊びだったんだ！　あの泥棒うさぎめ！」

「はっは、ゆかい」

「面白くにゃいわよ！」

「ははは」

それから南区の大通りから、ちょっとした路地に入る。

二人はそれを見送ってから、タマはあんぐりと大きな口を開けて、二人が入り込んだ店の看板を見上げていた。

木で出来た、店先に飾られるソレ。看板たる板にはグラスから内容物の液体が溢れている絵が刻まれていて——それは酒場であることを教えていた。

「酒場じゃん！」

「そうです」

「なんか、休憩用の宿屋かと思ったのに！」

「脳みそ不純物で、出来てる」

「っさいわね、ヘンな会話聴かせるからよ」
「理不尽」
バンバンと両手で素早くノロの頭を叩いてから、前に居直って扉を指し示す。
「中に入りなさい」
馬鹿だ。
思わずそう零れそうになった。
「馬鹿だ」
思わずそう口にしてしまった。
「なっ、あたしに何の恨みがあるのよ……」
「目立つ格好。気付かれるのは、確定的に、明らか」
ここは酒場だ。
明らかなまでに子供の容姿であるノロがその中に入る事自体が異様なのに、さらに目立つ赤いワンピースにサンダル。透き通るようにきらめく銀髪。その上で、何かの冗談のように肩には三毛猫が乗っていて……そんな少女が店に入れば、酔っぱらいはいよいよ幻覚が見えるほどに酒が回ったかと思うだろう。
いくら感情的になっているからとは言え、そこまで頭が回ってもらわねば命取りだ。
彼女が魔法を持たず、あるいは持っていたとしても、騎士の学校に入学していなくてよかったと思う。こいつが騎士になったら国が滅びてしまうだろう。
かなり頭が馬鹿だ。頭脳的な意味で。
ノロは酷烈に、タマをそう評していた。
だが嫌いじゃない。同時にそう思った。
こいつは楽しめる馬鹿だ。ネコだけど。
「そっ、それじゃ、どうするの？　あんたが考えてみにゃ、さいよ！」
「ここで、ジーニアスなわたしは考えた」
ノロは得意げに人差し指を立てる。と、その指は瞬く間に赤黒く

変色して、うねり、粘土細工のようにうようよ見えざる手で加工されているように伸びて、触手状に変異した。

手を扉に向けると、地面と扉とのほんの僅かな隙間に、ねじ込まれるように触手が中へと忍びこむ。彼女はそうして扉の脇の壁を背にして膝を立てて座ると、タマはそのまま膝の上に乗ってきた。

「ノロってなんでもありだよねェ……」

「照れる」

タマの喉を掻くように指先で撫でながら、暫く待機。

そうすると、ややあってから、ノロは自主的に口を開いた。

「声を認識した」

「聞かせて！　レッツ！」

「ストーカー気質」

「いいから、レッツ！」

ノロは珍しく小さなため息を漏らす。

そうしてから、仕方なしに聞こえてきた言葉を伝えてやった。

「やっぱり、蒸留酒だけじゃ飽きるわね」

ラァビはご機嫌な表情で樽のようなジョッキを傾ける。中身はぶどう酒であり、蒸留酒よりアルコール分が低くて飲みやすいソレだった。

小さな円卓に向かい合わせになって座る二人は、それぞれ軽食じみたパンや干し肉、それにちょっとしたサラダを並べて、それぞれぶどう酒を煽る。

周囲は、ギルドをひと回り小さくしたような空間であり、満席ではないものの、客が多く賑わっている。

その中でラァビはポケットから出したメモ帳を広げて、筆記した。

――さっきからついてきている子はだれ？

「確かに、会ってからは他の酒を飲んでる姿を見たことないですし」

干し肉を咥えながらペンを受け取り、下に綴る。

――ノロっていう、友達です。ちなみに肩に乗ってたネコは獣人

です。
「でも、ここのぶどう酒は特に美味しいのよ。ほら、君もたんとお飲み？」
――君に用なんじゃないの？
「ええ、頂いてます」
ゴクリ、とわざとらしく喉を鳴らしてぶどう酒を一口飲み下し、大きく息を吐いてからペンを手に取った。
――たぶん、ラァビさんとの関係を何か勘違いして、ストーキングしているみたいです。遊びみたいなものですよ。
芳醇な甘い香りが鼻から抜ける。
確かに、城で飲んだものよりいくらかレベルが高そうなソレだった。
彼はそのままサラダにフォークを突き刺して頬張ると、ゴクゴクと天井を仰ぐようにぶどう酒を飲みながら、手元を見ずに文字は綴られた。
――勘違い、ねぇ。
それから言葉を交わしながら、食事を進める。筆談はそれ以降行われず、彼女が一体何を聞きたかったのか、何を考えたのか、結局のところジャンにはわからなかった。
やがて皿が空になる。
何杯目かになるぶどう酒も、そのジョッキの中身が空になって、ラァビは腹をさすって満足そうに息を吐く。微笑を浮かべ、また天井を仰ぐように口を開けた。
「美味しかったわぁ」
「ええ、軽食だと思ってましたけど、食事も結構美味しいですね、ここ」
「それで、お腹もいっぱいになった所で――」
「『――デザートとして、君も食べちゃおうかな』と言っている」
「ファック！　我慢ならないわ！」

タマは牙を剥いてノロを足蹴に、力一杯空中に飛び上がったかと思うと――不意にその四本足が伸びて胴の部分にメリハリのある起伏が生まれ、四肢が肉球をそのままに巨大化する。

彼女は瞬く間に人型へと変身すると、ノロが静止するよりも早く、酒場の扉に足を向けて、膝を胸に引きつける。そうしてからすべての力を解放すると、足先は力一杯扉を蹴破って――凄まじい破裂音のような破壊音が周囲に響き渡った。

扉を固定していた金具がひしゃげて、その巨大な板は空中をくるくると舞って床に叩きつけられる。

酒場のざわめきが、一瞬にして消え失せた。

彼女が大股で中に入ると、まず目に入ったのが、

「ジャーンッ！」

しなやかな指先で顎を掴まれ、その息のかかる程の距離に顔を近づかせているラァビとジャンの姿だった。

「あんた、あたしにちょっと期待させておいて、こんなトコでにゃにやってんのよ！」

ズカズカと大股で円卓に歩み寄り、そうしてテーブルに両手を突く。バン、と盛大な音がして、木で出来た食器がにわかに弾んで机を叩いた。

「なんだ、タマか」

「にゃあ！」

迸る一閃。

肉球は、ジャンがその切迫を認識するよりも早く、意識の外から顔面に叩きつけられた。

少し硬度のある角質。そしてその中には、程良く柔らかい脂がクッションになっている、独特の感触。お日様の匂い。

麻薬的な効果によって、ジャンはこの状況でも尚自分を見失うことができていた。

「うわあ、肉球……」

「駄目だ、話にならないわこのバカ」

腕を引き剥がし、茫然とするジャンをよそ目に、今度はラァビへと目を向ける。キッと睨みつけると、席に座りなおしていた彼女は偉そうにふんぞり返って、足を組んで、頭の後ろで手を組んでいた。
「あんた。あんたでしょ、ジャンをたぶらかしたの」
「たぶらかしたって……随分と人聞きが悪いわねぇ」
「泥棒(どろぼ)うさぎ！」
「それじゃあ、アナタと彼は、男女の関係として付き合っていた訳？」
「そ、そうじゃないけど……」
思わぬ反撃に、彼女は言葉を失った。
突かれたのは一番の弱点だ。ここを見抜かれてしまえばここに来た事に対する正当性が失われてしまう。
残るのは、ただ思い上がった一匹のネコだけだ。くすぶり、あらわになった嫉妬にひたすら羞恥するしかなくなるのだ。
そんな事、許して良いのか。
そんなことさせない――させてたまるか。
百グラム程度の脳みそが、その時点で最大限に思考を回転させていた。
言葉が溢れるように生まれでて、選択し、文章を構成する。整合性を以てして判断し、適切でなければ切り捨て。再選択。
刹那の刻。
心臓が一つ鳴るその最中に、タマは反撃した。
「うるさいビッチ！」
それは全てを終了させるのに十分すぎる言葉だった。
悲しきかな、人の肉体でネコの脳みそを持つ彼女には、深く思考するに値する質量を持ち合わせていなかった。もっとも個人差はあれど、彼女は特に感受性に特化した造りを持っていたが故である。
「……くっ」
小さな、うめき声にも似た何かが聞こえた。
その直後だった。

「うははははッ！　おっもしろい娘じゃないの！　いいわねえ君は、こんな娘に囲まれて生活できて！」

いかにも愉快気に腹を抱えて笑うと、目尻に浮かんだ涙を払い、立ち上がっておもむろにタマの頭を撫でる。警戒するように尾がピンと逆立ったが、妙に手癖のいい慣れた手つきに、理性とは別に、本能が彼女をリラックスさせてしまった。

尾が垂れる。

そうして徐々に、頬が赤くなるのを隠すようにタマはその身体をどんどん縮小させていって――やがてネコに戻っていった。

ラァビは構わずタマを抱き上げて胸に抱え、喉を撫でる。ゴロゴロと喉を鳴らしたタマを眺めて、ジャンは嘆息しながらも、微笑むことしか出来なかった。

なんだかなあ――そう思いながらも、心が満たされていくのを感じていた。

確かな充実感。体を動かし、自分が強くなっていくのを実感するのとは大きく異なる、そんな幸福感が胸の中に広がっていた。

ラァビは良く面倒を見てくれるし、戦闘面でも良く鍛えてくれる。そしてこれまで出会った多くの人も、随分親切だ。

「そろそろ、腐るから」

いつの間にか酒場に入ってきていたノロは、脇から不意にそう声をかけた。

「ああ。なんだか、タマが迷惑をかけたみたいで悪かったな」

取り繕う程度の謝罪をすると、ノロは首を横に振る。銀髪は薄暗い照明の中でも鮮やかにきらめいて、その顔立ちは品の良ささえも伺わせていた。

「構わない。楽しかった」

「そうか。そりゃよかった」

「今度は、遊んで？」

ジャンを指さして首を傾げる。彼はソレに、小さく頷いて笑みを作った。

「ああ。今度遊びに行くよ」
「ぜったい？」
「もちろんだ」
「じゃあ」
彼女は軽く手を上げて別れを示す。ジャンもそれに応じて手を振ると、そそくさと、静まり返る酒場を後にした。
そうしてジャンもざっと酒場の中を見渡してから――タマに夢中になるラァビをよそに、カウンターへと向かって、無言で金貨一枚を差し出した。
「扉の修理代、これで足りますかね」
「ああ、気にしなくてもいいのに」
気の良さそうな中年男性は困ったようにそう告げながらも、カウンターに置かれた金貨に手を伸ばし、それをポケットの中に収めた。
マスターたる人間はどこかクセがなければやっていけないのだろうか。彼はそう思いながら、それ以上面倒なことに巻き込まれない内に、とノロの後を追うようにその場を辞した。
タマが全身の毛を滅茶苦茶なクセを作って帰って来たのは、その日の深夜の事だった。

おつかいとご褒美

「オクトにおつかいを頼まれたのでしょう？　なら、私（わたくし）のおつかいも頼まれて当然でありながら、断る道理などありはしない筈です」

もう一人のお手伝いさんである彼女は、稲妻のような黒い刺青を額から鼻筋と流し、また十本もの白い触手を頭から生やし、ひとつだけの眼球でぎょろりとジャンを睨んでいた。

身体は辛うじてヒトのようなものだったが、下半身から癒着する袋のような皮膚は、蛇族のように下半身を飲み込むようにして居た。その姿は、やはりヒトというよりはイカに近い。そんな彼女は、やはりイカ族の女性だった。

移動方法は主に触手を利用しての歩行だし、多くの行動はそれに重点を置いている。始めてみた時はさすがに度肝を抜かれたが、今ではずいぶんと見慣れている。

「構いませんが……」

「なら頼まれてください。本屋さんに行くのでしょう？　ついでにこれから頼む本も買ってきてください。お代はこれです」

彼女は指先でピン、と弾いた銀貨を、落ちてくる最中に叩き落すような手さばきで手中に収める。ジャンの手をとってそれを押し付けると、次いで説明した。

「少年が少女と出会って世界を救うお話です。タイトルは、なんとかオブなんとか」

「……困ったなあ」

「あー、たぶんあの中佐殿なら分かるでしょう。若い世代向けに執筆されてる、文章も、登場人物の頭の中身も軽い感じの本です。最近流行ってるみたいで。文化が進んでる地域から届いたと聞きました」

「まあ、わかりました。それじゃあスクィドさん、行ってきます」

「ええ、健闘をお祈りします」

パタパタと言った風に、肘を曲げて上げた手を子供のように大きく振りながら、口調や外見に似つかわしくない所作で、ジャンを見送った。

「なんであたしがあんたなんかと、こんな所に来なくちゃいけないわけ？　まじであんたキモいんだけど、離れてくんない？」

タマはアレから悪態をつき続けていた。

肩で、前足を内側にたたみ込んで箱のようになって座るネコはずいぶんと器用にバランスをとっていたが、耳元で吐き出され続ける悪意にはさすがに頭が痛くなってくる。

だからポケットに突っ込んだ紙袋から小石の様な大きさの、香ばしい匂いのするソレ、猫用のドライフーズを手にとって、彼女の口元に押し付ける。

「ふにゃあ！」

そんな間抜けな声を上げながら、ぺろぺろと舌で掌を舐めつつ餌を拾い上げてはむはむ、と食べ始めた。

そんなこんなで、本屋の前につく。

常時開放されている扉からやや薄暗い店内へと入ろうとする中で、囁き合うような、なにやら妙に物騒な雰囲気を孕む声が奥のほうから聞こえてきた。

「肝心な時に作動不良だ。ったく、これだから複製品（コピー）は信用ならんのだ」

中佐殿の、珍しく苛ついたような声が耳に届く。タマとジャンは、それからにわかに顔を見合わせるようにしてから、慎重に、音を立てずに中へと入っていった。

「仕留めきれなかった、くそったれ。やろう、覚えておけよ。まずだな。”まず手入れをした”、が、そこで見つけたぞ、軍曹（サージェント）。まことに言いづらい事だが撃鉄（ハンマー）にヒビが入っていやがった。わかるか？　”ヒビ”だ。お嬢さんのワレメじゃない。人を殺す気か？　慎重に起こしたのに、怒ってへし折れちまった。ありゃなんで出来てい

るんだ？　紙か？　紙粘土か？　お前らは、簡単な手入れすら怠るくそったれなナマケモノやろうなのか？」

中佐殿は激怒していた。

声は荒げないものの、言葉そのものは下品極まりなく、口調が荒い。今にも手を出してしまいそうな勢いでまくしたてていた。

言い訳など許さんぞと言った勢いで、それゆえに相手は萎縮してしまっているらしい。

やがて本棚を抜けると、カウンターに置かれている机上用の小さな照明が辺りを照らしていた。そうして見えるのは、カウンターの向こう側で眉をしかめて、無表情で睨む中佐の姿。

それに、対峙するのは見たこともない外套……どこかの国の近代的な服装、養成学校の制服も似たいわゆるスーツを着込んでいた。頭には、円筒状の帽子を被る、珍妙とも言える格好の男だった。

が、恐らく彼は外国から来たのだろう。

およそこの国には無いであろう格好だった。

そして脇から見えるのが、箱型の手提げかばん。それはカウンターの上で、展開されていた。

「魔石などの魔力（エネルギー）を利用から、ようやく火薬（パウダー）の爆発力（エネルギー）を利用して実用化することができたんです。装薬（かやく）と、実際に対象に推進するものを弾丸と呼び、それらを含めたものを弾薬と呼びます。これが生まれたのが、ちょうど五、六年前。だからまだ”銃”というものは高価なんです。無茶を言われても、困ります」

「”困る”だとぉ？　困っているのはこっちだぞ、死にかけたんだ！　なんであんな……くそったれ、思い出すだけでも怖気が走る！」

「シロアリの一種ですよ」

「ごっ……」

中佐は喉に何かが詰まったように言葉を止めて、カウンターに両手を叩きつける。バン、とやくざが脅すような盛大な音がして、彼はその渋い顔を、及び腰の男へと迫らせた。

声は震えて、殺気篭った言葉を紡ぎ始めた。

「あの黒くて、てらてら光って妙に足の早い、気持ちの悪い触覚をゆらゆら揺らして無力な人間の魂を揺さぶり畏怖させる恐怖の象徴を、そんなものと一緒にするんじゃなーいッ！」

「……あの鬼神が。聞いて呆れますよ」

「ふざけるなよ、あんぽんたん。貴様はな、バカにしていいことと悪いことの分別をつけろ。食器（ごき）をかぶらせて撃ちぬくぞ！」

「ええ、ええ。わかりましたよ。というか少しは掃除したらどうなんです」

わなわなと全身を震わせる中佐をよそに、男は慣れた風にあしらってみせた。それから振り返り、店の内装をざっと見渡してから、肩をすくめるように嘆息する。

まるで国立図書館のようにところ狭しと本が並んでいて、整理整頓もしっかりとしてある。なぜ増え続けているのに本棚から本が溢れないのか疑問になるほどだ。が、この狭さは図書館のソレとは大きく異なる。妙な威圧感さえ感じていた。そして妙に便意を催してくる空間だった。

「掃除はした。隅から隅まで、タマゴウチ少佐が怒るからな。だから今では、埃一つない。なあ軍曹（サージェント）、掃除はいいものだぞ。綺麗になれば、心まで綺麗になったような気分になる。本を揃えるだけでは満足できなくなってしまった」

「昔から、銃器はいつでもピカピカですもんね」

「銃は己に与えられた唯一の女性だと学校で習わなかったのか？確かにみすぼらしい格好の美女もそれはそれで映えるが、やはり美女は着飾っている格好が一番映える」

「根っからの軍人ですね。まあ、分かりました。銃は持ち帰って修理します。それまで、こっちを持っててください」

彼は面倒そうに話をぶつ切り、それから赤いクッションが敷き詰められたかばんを指した。そこには、なにやらL字型の道具が埋め込まれていて、中佐はそれを引きぬいて慣れた手つきで構えてみせた。

持ち手は木製で、ちょうど親指と人差指を建てたような形だ。人差し指以下の指がある位置には、その接合部分に半円のフレームがあって、接合部分からは棒のような突起が伸びている。

持ち手ではない部分は、先端に向かうに連れて先細り、ついには細い、中身のないペンの外装を突き刺したような形をしていた。

「他国で創られた銃で”ワーサー”というメーカーです。回転式弾倉（シリンダ）ではなく、こちらの箱状の弾倉（マガジン）に弾薬を詰める形となっています。最大装填数は八発で、撃鉄を起こしてから弾薬を抜いて、また一発を弾薬に込めれば最大で九発になります」

「ほう。これも９ｍｍか？」

「ええ。この国では弾薬の入手は難しいと判断したので、同規格を用意しました。やはり科学より魔術が発展している地域は、これに疎いですからね」

「だが、その分平和とも言える。いい街だぞ、ここは」

「ええ、わかりますよ。血の味を知らない街です」

「こいつも必要にならなければいいんだが――本格的に魔術でも覚えようかと、たまに思うよ」

「いつか科学が魔術に通じなくなる日がくると思うと憂鬱になりますよ。なんでもありじゃないですか、アレは」

「わはは！　軍曹（サージェント）、よくきけ。魔術が発展する。科学が発展する。良い事じゃないか！　どちらにせよ生き残るのは、強いやつだ。結局は魔術も科学も関係ない！　そこが面白いんじゃないか！」

「強い人はみんなそう言うんですよ。ぼくらみたいな小石みたいに溢れる中の凡人には、とても」

自信満々に、意気揚々と高笑いする中佐に対するのは肩を落とした軍曹と呼ばれる男だ。

彼はそれから、堅い外装で出来たかばんを閉じると鍵をかけて、それを手に下げて帽子を脱いだ。

男はどこか礼節をわきまえたような態度で、丁寧な動作で帽子を胸に当てて頭を下げると、それから帽子をかぶって踵を返した。

「戻るついでに国を覗いてきます。中佐殿も、お元気で」
「ああ、無事を祈る。達者でな」
「それじゃ、失礼します」

「あ、ありがとうございます」
軍曹が店を出てから、素知らぬ顔で入店しなおしたジャンは素知らぬ顔で頼まれた本を中佐に渡した。表紙には『恋愛を始める前の五つの約束』と書かれて、ど真ん中にはハートが描かれている小説だ。
オクトが、転生したユウキが前世で恋人だったユキと出会って記憶を引き継いで云々の最終章だと言っていたから、おそらくずっと楽しみにしていたのだろう。
そして次いで、もう一冊の『たった一つのぼくのやり方』と書かれている本。
最後に、スクィドから頼まれたのは妙に可愛らしい少年少女が表紙に描かれているもので、紙の表紙であるためにずいぶんと安い。
代金を払って、紙袋に入れられたそれを受け取ったジャンは軽く頭を下げて背を向けた。
その瞬間だった。
中佐は、恐ろしく自然なまでの動作で彼の肩を掴んで行動を制止していた。
「少年、見ていたのを知っているぞ。なぜ隠れていた?」
底冷えするような低音。殺気すらも孕んでいるような声音。彼は思わず、背筋を凍らせる。
ギギギ、と途端に首の骨が錆びてしまったように、彼は強い抵抗を覚えながら首を回した。振り返ると、無表情の中佐が彼を見つめていた。
もう彼の口ひげには、胡散臭さなど感じられなかった。
「な、なんの話ですかねー」
「誤魔化しても無駄だ。私は、タマゴウチ少佐と隠し事には敏感な

タチでな」
「な、なんであたしなのよ」
「わはは、今日も絶好調だな、少佐は」
「……いつもどおり意味分かんないわね」
肩から立ち上がって、ぴょんと軽く飛ぶと彼女はそのままジャンの頭の上で座る。絶妙なバランスを維持するのは彼の役目になった上で、暑苦しさが倍増したような気がした。
「まあいい、だが君等には嫌われたくないから事情を説明しよう」
中佐は手を離す。彼はどこかつかれたような顔で短く息を吐いてから、振り返ったジャンへと顔を上げた。
「私は退職したのではなく、逃げ延びただけなのだ。今では逃げる原因となった内戦は終わったが、反政府武装勢力はまだ私を探している。他の残党も。彼らが敗残兵だというのにな。国から散った弱者をいじめることしか、彼らにはできんのだ」
「……じゃあ帰ればいいじゃないですか」
「うっ……」
彼はわざとらしく、大げさに胸を押さえて演技がかった動作で見を弾くように退いた。
後ろの壁に背中を打ち付けて、絶望的な表情でジャンを見る。
「なんて正論を撃ち出すんだ、少年（きみ）ってやつは」
「だって」
「残酷だな。命からがら逃げてきて、身を隠すために書店を営んだらなんだか儲かって、楽しくなってきた私の身にもなってくれ」
「うわー、同情の余地無いわね」
「だが気にするな諸君、この街には優秀な騎士がいる。たとえ”やつら”が来たとしても追い払ってくれる！」
「すごい他力本願」
「もういいじゃないか。今日は帰ってくれ」
「自分で引き留めたのに……」
今度は背中を押す中佐に、忙しい奴だと思いながら彼らは程なく

して書店を後にする。
新しく増えてしまった無駄すぎる知識にため息を漏らしながら、二人はそうして家路につくことにした。

「やればできるのですね。お釣りはお駄賃でいいですよ」
頭の触手で頭をペチペチと叩きつつ、スクィドは本を受け取り胸で抱きながら、そう告げた。
「あ、ありがとうございます」
「さて、昼食はオクトに任せるとして、ずぶんとざぶんと物語の世界に浸ってくるとしましょうか」
「オクトさんは今日、ちょっと友達と出かけたみたいで夕方まで帰ってこないって言ってましたよ」
「……安心なさい。パスカルが居ますよ」
「居ませんよ。彼は彼で出かけてますし」
スクィドは大げさに絶句した。
そういえば、彼女が調理に手を出しているところを見たことがないのを思い出した。
あんなパスカルでも一応は手伝っているというのにも関わらず、スクィドは横柄な態度でテポンと談話しているのが殆どだ。
お手伝いとして見るのは掃除をしている場面ばかりだし、確かにシーツを取り替えたり、部屋を掃除してくれていたりはするのだが……料理はできないのだろうか。
というか、ここまで逃げていればそれは明らかだった。
「あー、じゃあサニーとか呼んでお昼食べに行ってきますよ」
「こら」
ペチン、と触手が頭を叩いた。
「私はお手伝いさんです。このお館で生活する人たちの手を煩わせないようにお手伝いするのが存在意義です。家にいるのに、わざわざ外食するなんて……お手伝いさん魂が穢れます」
「……サニー呼んで来ましょうか」

「お願いします」
どちらにせよ住人に手をわずらわせているのだが……彼はそう思った言葉を飲み込んで、自室で学校から出された課題をこなしているであろう彼女を呼びに、階段を駆け上がっていった。

結果として、その行動は不正解といえる。
サニーに全てを任せるか、外に食べに行くかが正解だったのだろう。

今から過去にもどって、この選択をした自分を殴りたい衝動にかられながら、ジャンは目の前の黒い異物を見つめていた。
どろどろの、インクでもかけたかのような黒褐色の炒め物。ご飯。汁物。

もやしと豚肉、それとニラが入った炒め物は香ばしい、食欲をそそる香りがしている。この時点で美味そうだと思えるのが本当なのだが、見れば黒い。黒すぎる。
ご飯は、インクと一緒に炊きこんだのだろう。流石黒い。
汁物はもはやインクなのだろう。すごく黒い。
だが、サニーなどは隣で目を輝かせて居た。タマは、少し離れた所でドライフーズにがっついていた。目の前では、なにやらしたり顔のスクィドが評価を求めるような視線でジャンを見ている。
確かに香りは美味そうだし、見た目はともかく美味いのかもしれない。
だが、今頭の中には黒いという感想しか無い。言葉を考えようにも思考はすこぶる停止中だ。
「あー、その、ですね」
息を呑む。
ええい、ままよ。
「この黒いのって、なんなんですかね？」
「ああ、豚肉と野菜の炒め物です。味付けは塩コショウで、ガーリックを効かせて見ました」

「こ、この黒いのは……」
「倭国から輸入してきたブランド物の米で、評判のいいものです。炊くときに”みりん”をちょっと加えて甘みを増して、つやも良くなるので美味しいですよ」
「あの、黒いのって……？」
「顆粒（かりゅう）だしですが、ちょっと濃い目にして味を際立たせて見ました。ご飯に合うと思ってベルさんに教わった手順でつくってみたのですが……具は豆腐に、ネギとわかめです」
ベル、というのはベルガモット……つまりサニーの事だ。意固地になって下の名前を呼ばないために、妥協してそうなっていた。
駄目だ、意図的なまでに本題が回避されている。
肩を落としたジャンの横で、言いたいことを感じ取ったサニーが補足した。
「この黒い”ソース”は、万能調味料だって」
「ば、万能？　つか、これソース？」
「うん。えっとね、なんとかって言う栄養素が体に良くて、旨味があるから結構な料理にあうらしいよ。でもなんでもかけるとオクトさんが怒るからって、最近はあんまりかけてなかったんだって」
禁止されていた分、反動として吹き出しまくったのか。
彼は妙に納得した気になった。
なら美味しいだろうと、無理やり自分を思い込ませた。
「いただきます」
だから、理性がそれを疑いだす前に箸を手に取り、まず炒め物をつまんだ。途端に箸先が黒く染まったが、ジャンは気にせず口に運ぶ――と、にんにくの香ばしい香りにズバンと脳みそを殴るような旨味、塩の辛い味付け、こしょうの塩とは違う辛さがうまい具合に合わさって、絡みつく。
いつもサニーが出してくれたソレに似ていたが、少し違うスクィドの味付けは、どこか新鮮なようで美味いと感じられた。
ジャンは驚いたような顔で料理を見て、もう一口食べてみる。

おかしいぞ、うまい。
彼はそうしてもう一口ほどを含んでから、茶碗を持ち上げて飯を掻き込んだ。
――そんな様子を見て、スクィドは少しばかり意表を突かれたように動きを止めてから、どういう原理か、自然と頬が上がってくるのを全力で抑えていた。テーブルの下で、ぐっと喜びを表現する握りこぶしを足に押し付けて、大きく息を吐く。
すると、嬉しそうにスクィドを見ていたサニーと目が合った。
「な、なんでしょう？」
「やっぱり、自分で作った料理を美味しいって食べてくれると、うれしいよね？」
「作った甲斐があるとは思いますが、品が無いですね。せっかく作ったのですし、もう少し丁寧に上品に食べてもらいたいものです」
「ふふっ、スクィドさんは頭が良くて物覚えがいいから、私が教えるとすぐ自分の物にしちゃうよね。だからすぐ上達すると思うよ？
試しに、今夜もお夕飯作ってみる？」
「め、滅相もございません。いくらお褒めの言葉をいただいても、とても一日の食事のメインを張る夕食はダメです。いけません、というか、作った本人はいいのですが、とても人に食べさせるのは……」
「そう？　ジャンに食べさせるために作ったのに？」
「す、スティールさんは……放っておくと残飯でも漁り出すほど、飢えた犬っころのような方ですから。家にそんな方がいるのはテポン様方にとっても非常に恥となるので、どうせならと作ってさし上げたまでです」
ふぅん、とサニーは彼女らしく無く含んだ相槌を打つ。
スクィドもいつもの強気な態度はすでに忘れ去られてしまって、攻めに攻められて顔を真赤にしていた。ぎょろりとした目は伏し目がちに、それから視線は、サニーからジャンへと移る。
ジャンは彼女の視線を感じて顔を上げた。

――結果として、あの選択は大正解だった。
全てが美味い。
どちらにせよ、とても豪華と言えない料理だというのに、それぞれを最大限に生かした料理となっていた。だからこそ妙に豪勢に思えてきて、食えば喰うほど胃が大きくなる。空腹度は、食事中なのに増大していた。
「あの、おかわりお願いできますか？」
「え？　あ、ああ……はい！」
冷たい表情、全てに関心がないような顔はいつしか崩れていた。
ほのかな、薄い笑みがジャンに向けられる。あの強い眼力は無く、優しげな視線で彼女は頷き、触手ではなく手で差し出された茶碗を受け取った。
彼女はそそくさと台所まで引いていき……食事を進めていたサニーが、ジャンに微笑んだ。
「美味しい？」
「ああ、すごく美味いぞ」
「あ、私が教えたから、とか言わないんだ？」
「まぁな。味付け違うし、手順だけだろ？　サニーには悪いけどさ、これはスクィドさんの料理で、この料理は美味い。それだけだ」
「うふふっ、なんだか、ジャンはいい方向に成長したね。前だったら、絶対に私も一緒になんとか褒めようとしてたのに」
「成長、か。そう見えるんなら、おれも頑張った甲斐があったってもんだ」
彼は言いながら、いつものように彼女の頭を撫でてやる。
そうすると、顔には表さないものの、ごきげんな様子でスクィドが山盛りのご飯を持ってきて――。
まるで家族のようだ、と彼は思う。
家庭というものにコレといった記憶はないし、最も近い集団生活は物理的にサイズの小さい中年男性とのソレだった。だから、家族というものにピンとは来なかったのだが……もしこれがそうならば、

非常に幸せだと思えた。
居るだけで優しい気持ちになれる。癒される。
彼はそうして、また食事を再開させた。
やがて食事も終えて、解散となって自室に戻っていく。
ジャンは既に寝台で眠っているタマに誘われるがままに昼寝と洒落込み、サニーは課題の続きを再開させて——結局その日、スクィドは買ってきてもらった本を開けずに、自室で眺めては、昼の出来事を思い出してニヤニヤとすることしか出来ずにいた。

血の嵐　上

その日はいつもより蒸し暑い午後だった。

降雨があって湿度が高く、服を着ているのも嫌になるような気候に、少年は胸ぐらをパタパタと服をはためかせて新鮮な空気を取り入れる。だが湿った大気には、とても心地の良い清涼感を与える効果を望むことは出来なかった。

そして何よりも――部隊（パーティ）の雰囲気は、この上なく最悪だった。

現在、隣国との関係は最悪なものであり、対立とまではいかぬものの、それぞれどう対処しようかとあぐねいている中で――敵国から凶暴な異種族（モンスター）の軍団が放たれた。

それとはまた別の隣国であり、まったくもって対照的に交友関係にあるアレスハイム王国に援助を求めようとの声も上がるが、戦部隊長がそれを却下。まず始めに先遣隊を出し、異種族の軍勢を把握する作戦が執行された。本隊は情報を受け次第、二日行程に無茶を利かせて十分な装備と潤沢な援助のもとで半日で駆け付ける手筈になっていた。

――異種族の進軍は、先遣隊が到着した直後に行われた。

総数十二名は騎士の称号を冠する。魔法を持ち、戦闘能力は極めて高いと国から認められた存在だ。

しかし、一万余りの軍勢は、その進行を足止めするので精一杯だった。

命を削り、命を絶やす戦い。腕が飛ぼうが視界が暗転しようが、彼らの決死の戦いは続き――五日あまりが経過した頃。異種族の総員は既に半数以下へと変わり、元より飢えによって駆り立てられていた戦意は恐怖に飲まれて喪失し、やがて散り散りになって野生に帰っていった。

同時に、気がつけば先遣隊の総員は五名になっていた。

戦傷、疲弊、欠損。既に空腹感は麻痺し、肉体の可動を彼らは自

覚できぬまま帰路をについていた。
「なあ、人の肉って……喰えるらしいぜ」
誰かがそう口にしたのがきっかけだったのかもしれない。
少年は、その直後に共に戦い命を助け合った仲間の、狂気をはらんだ視線が全身を貫く感覚を覚えていた。
――彼はまだ幼かった。
齢、僅か十六にして騎士に就くという異例さは、その先天的に与えられている特異能力である魔法の熟練度もそうだったし、何よりもその年齢にしての才能（センス）が、周囲を認めさせていた。
だが、疲弊し息も絶え絶えで歩く彼は、現状況に於いては足手まとい他ならない。体躯は華奢で、少女のよう。加えて戦闘能力は高いが、筋力は成人男性のソレに劣る。
そして何よりも、その若さや人望は、一定以上の年齢で騎士となっている連中には嫉妬の対象となっていた。
そして――彼は、国に見捨てられた、騙されたという精神的ショックによって魔法の発現すらままならない。
ゆえに格好の的だった。
少年に、その後の記憶はない。
気がついた時、彼は見知らぬ土地にいて――荘厳にも思える外壁に、口を開ける門を眺めながら、利き腕が喪失していた事を理解した後に、意識は再び深淵へと転がり落ちていった。

アレスハイムでの怪我の治療や病気の対処は、城からほど近い修道院で行われている。
ジャン・スティール自身それを知ったのはついこの間の――他国から来た負傷兵の存在を知ったのがきっかけだった。
少年が門の前で倒れていたところを発見し、運び込まれたのはつい二日ほど前の出来事で、旅人が多く賑わうギルドでは今やその話題で持ちきりであり、ジャンもそこで大まかの話を聞くことが出来

た。

隣国、砂漠の境目よりやや内側にある森の中にあるような、自然の豊かさが特徴的な『エルフェーヌ』。そこは、溝の門扉（ゲート）の向こう側にあるとされる妖精郷（エルフヘイム）と呼ばれる桃源郷をモデルにして、百年ほど前にその外観を大きく改築した国だった。

あまり多種多様な異人種は移民して来なかったが、それゆえに妖精族（エルフ）は国民の三分の一程の多さとなっていた。

エルフェーヌは公国であり、どこかの貴族が遥か昔に建国したというものだった。

軍事力はアレスハイムよりやや劣る程度だが、純粋な魔術戦闘や、魔術を活用した技術はエルフェーヌに分がある。交友的な関係を保ち、今までで争いが起こったことは無いという話だった。

「だがなぁ……異種族（モンスター）ばら撒くって、頭おかしぃんじゃねえか？」

外の国から移住してきた旅人は、この手の、”外”の話に興味津々だ。今までジャンが目の前の、頭にツノがついた帽子を被るドワーフの中年男性と話していたというのに、気がつけばその長机には多くの人間、異人種問わず集まっていた。

「というか、あんなの一万もどこからとっ捕まえて来たんだか……なあ？　領外の連中は、まったく、頭があがらないぜ」

ご苦労なこった、と小馬鹿にするニュアンスを孕んで軽く笑った。

「つぅか、エルフェーヌの隣ってどこなんだ？」

「……お前話を聞いてなかったろ」

誰かが呆れて、誰かが発言者の頭を叩いて、誰かが笑い、誰かが答えた。

「エルフェーヌのやや南西に進んだ位置にある共和制の国、『ブリック』。強固な砦が特徴的で、そもそも砦の中にあるような国だ。街みたいな、小さい国でもある」

強大な軍事力があるわけでもない。異人種も、エルフェーヌに比べて酷く少ない割合だ。

ならばなぜそんな二国が争っているのか――その説明はすでにさ

れていた。
　それは傲慢な国交の結果だという。
　原因はブリックにある、と目の前のドワーフは、その腫らせたような赤鼻をフンと鳴らして言った。
　ブリックは数年前に政権交代した。首相となった男は、簡単にいえば己の好き嫌いで政治を執り行うような男だったという。そうして友好的なエルフェーヌはそれでも交友関係を保とうと試行錯誤を繰り返していたが――きっかけはいざ知れず、気がつけば関係は最悪なものとなっていた。
「というかよ、良くあんの砂漠を渡ってきたよな！」
　興奮気味に男が言った。
　ジャンは付き合いで飲んでいたぶどう酒を口に含みながら、確かに、と頷く。
　と、誰かがバカにするように笑い始めた。
「お前、知らねぇのか？　あそこには”フネ”があるんだぜ？　常識だよ」
「……船？」
　ジャンが顔を上げて振り返ると、そう口にした男と目があった。
　彼は頷き、得意げな顔で説明する。
「あの砂漠の熱とか、そういうのを利用して砂の上で船を走らせてんだ。かなり広い砂漠だからな、船がなけりゃとても渡ろうとは思えねえ。その、エルフェーヌの騎士もそうしたんだろうよ」
「ああ、あの船主は、そんじょそこらの女より随分とサービスが良いからな」
　ガハハ、とその台詞を皮切りにするように、程良く酔いが回った周囲の男達は大げさに笑い始めた。
「ったくよ、これじゃあこっちまで巻き込まれて、マイン・アバンにそっぽ向かれちまうよ」
　そんな中で、誰かが嘆くように呟く。が、それは豪快な笑いの渦によって瞬く間に飲まれてかき消されていった。

――マイン・アバンとは砂漠をわたらずに東にひたすら歩けば存在する都市だ。巨大な岩石が自然にひび割れ、出来上がった谷部分に人々が住み着いた事がきっかけで、今ではそこで採掘される希少な鉱物や魔石、そして長年で培ってきた加工技術を駆使した武具の製造や加工品などを輸出することで、生活を営んでいた。

この国の装備も大半が輸入品であり、その半分以上がマイン・アバンからの提供だ。もしそれが断たれたとすれば、中々の痛手となるだろう。

そうして、目の前のドワーフはいい加減鬱陶しそうに周りを見渡しながら樽のジョッキを傾けて中のぶどう酒を一気に飲み干した。

席を立ち、視線をジャンに合わせたまま、言い聞かせるような口調で、

「国のいざこざは出来事じゃない。〝現象〟だ。お前さんは無茶をする気質にあるが、この件にはあまり首を突っ込まないのが得策だな。金にもならないし」

銅貨を数枚ジャンに手渡してから、軽く手を上げて彼はその場を後にした。

ドワーフの男の退室を契機（きっかけ）にするように、集まっていた男達はバラバラと自分が陣取っていた自分の席へと戻っていく。

ジャンもそろそろ出ようかと席を立った所で、この街に来て二ヶ月ほどになる流浪の男は、彼の肩を叩いた。

「この国が平和すぎるんだが……あのおっさんの言う通りだ。騎士サマは国に騙されて仲間に殺されかけて哀れだが、彼の処遇は国が決める。その気はないと思うが、あんまり関わるなよ」

「ええ、分かってますよ。とてもおれの手に負える問題じゃないですし」

「そうか、ならいいんだ。じゃあな」

「はい、おつかれでした」

昼下がりの空はどんよりとした灰色の雲が広がっていて、二、三日前から続く雨が飽きること無く今日も続いていた。

ジャンは雨具に持ってきていた革製の外套を羽織り、頭巾（フード）をかぶって外に出る。

――今日聞いた話は、自分とは関係のないことだ。

彼はそう認識していたし、この国に何かが起こるわけでもないと確信していた。

その負傷兵の母国は、ジャンがこれまで育ったコリンの街よりも遥かに遠い場所にある。コリンでさえここから結構な距離があると思っていたのだから、恐らく途方も無い場所なのだろう。

そしてここに来る時点で多くの致命傷を負っていたという話だから、もしかすると国は既に死亡したという扱いをしているかも知れない。

全くもって現実離れした話である。オクトにでも聞かせれば、眼を輝かせて食いついてくること請け合いだ。

だからこそ、ジャンは関わるというわけではないし、釘を刺されたから関わるつもりも毛頭無かったが、もう少し話を聴いてみたくなった。野次馬根性とでも言うのだろうか、良く言えば、外の世界に興味が湧いてきたのだ。

以前もラファビに、外の世界を知ったほうがいいと言われたこともあって――ジャンは気がつくと、街の正門の前へと足を運んでいた。

「ん、どうした？」

門の前で立ち止まると、警ら兵の一人が近づいてくる。槍を構えたまま、甲冑姿で、凄むわけでもなく、単に話しかけるような口調だった。

「ああ、いえ。この間、エルフェーヌの騎士が運ばれてきたとか聞きまして」

「その話か……つっても、俺も又聞きだし、その状況しか知らないんだが。それでも聞きたいのか？」

「参考までに」

そうか、と男は嘆息混じりに肩を落とした。
顔の部分がくり抜かれたような兜を被る彼は、顔に降りかかる雨滴を指先で払ってから口を開いた。
「それはソレは、酷い有様だったそうだ。左腕が無いし、身体中傷だらけで、横っ腹には途中からへし折れてる矢が刺さってるわ、糞尿垂れ流しだわ血まみれだわで、綺麗な顔がぐちゃぐちゃでよ。慌てて助けて修道院に運んだんだが、その時点ではもう息がなくてな。それでどうしようかってトコで、ウチの騎士さまが登場よ」
男はどこか楽しげに、身振り手振りで説明する。あーだこーだと、まるで見てきたかのように嬉々とする姿はどこか不謹慎のような気がしたが、ジャンは構わず相槌を打ちながら話を聞いていた。
「その騎士さま、なんと魔法で見る間見る間に傷を治しちまうわけよ。シスターが慌てて胸に耳を当ててみると、とくん、とくんと心臓まで動いてきやがる。口から血を吹き出して、蘇生完了ときたもんだ」
パン、と手を打って傾奇者（かぶきもの）のようなポーズを取る。
いや、しかし……と、調子に乗り始める警ら兵を他所に、ジャンは考え込んでいた。
――いくら魔法とは言え、死んだ人間を生き返らせることが本当に出来るのか？　いや、できるからこそ魔法たる所以なのかもしれないが……底知れない。
思った以上に、自分は魔法というものを侮っていたことを彼は理解した。
ならば、その魔法を持つ騎士が十人かかっても倒しきれない一万の異種族（モンスター）の軍勢は、やはり途轍もない脅威なのだろう。そもそも、この周囲の異種族はただでさえ凶暴で戦闘能力が高いと言われているのだ。
だからこそ国と国との間で争いをする隙がないと、彼は学校で習っていた。
「そこでまず目を覚ますまで保護してるみたいだが……もう二日が

経った。続報はないし、生き返りはしたが、眼を覚まさないんじゃねえかって話が出てるくらいだ」

「もし本当にそうなったら、どうなるんでしょうね？」

「ま、最終的にはエルフェーヌに送還するんじゃねえか？　鎧にエルフェーヌ特有の浮彫（レリーフ）があるから隠せるもんじゃないし……ま、あんたが心配するようなことにはなんねえから、坊主は安心しておうちに帰んな。あの獣人の襲来だって、またいつ来るかわかんねーしな」

「そうですね。ありがとうございました」

丁寧に説明してくれた男に深く頭を下げると、気を良くした彼は大きく手を振ってジャンを見送った。

血の嵐　中

時間は少しだけ戻って――早朝。

（ぼくは、本当に国に騙されたのか？　なら何故？　むしろ、一万の軍勢を焼き尽くせという命ならば、この命を賭す覚悟くらいは容易なのに……）

見知らぬ天井を見つめながら、少年はそう考えていた。

眼を覚ましたのは数分前。周囲を伺えば、殺風景な個室である事以外の情報は得られなかった。

彼が横たわる寝台は窓際に設置されていて、身体を起こそうとすれば全身に鋭い痛みがひた走る。呻く体力さえ無く寝台に沈み、その折に、左腕が失くなったことを思い出した。

（ぼくは、頑張ってきたつもりだった……）

だが捨てられた。任務は半ば成功したも同然なのに、仲間にさえ襲われて命からがら逃げてくれれば、気がつけば見知らぬ土地だ。恐らく、あの門から、その向こうがわの城を見るかぎりではアレスハイムなのだろう。

ここでは生かされている。

ということは、まだエルフェーヌから抹殺命令が出ていないというわけだ。そう考えれば、恐らくあの国はこの命が尽きていると信じてやまない筈だ。魔法や戦闘のセンスは高いと自負しているが、体力と筋力は人一倍無いのだから。

思い出が、走馬灯の様によぎる。

苦難の末に騎士になれた。努力が実ったように、多くの人たちが迎えてくれた。嬉しかった。最上の幸福だと思えた。

だが、今はどうだ？

理由さえわからぬ作戦に投入されて、なぜそんな、と思うほどに突発的に放たれた、どこから来たかもどうやって捕縛されていたかもわからぬ一万の異種族（モンスター）に奮闘し、仲間が頭から食われるのを、囲

まれて全身に牙や爪を突き立てられるのを、口から吐き出された炎に飲まれるのを為す術もなく見ながら、剣を振った。

頑張ったのだ。そのお陰で五人生き残ったし、負傷だって怪我は多いが致命傷はなかった。疲れきっていて、仲間の喪失に国の本意がわからずに精神が不安定だったが、それでも任務達成の充実感は確かにあった。

あとは凱旋して、歓声の中を照れながら歩くだけだったのだ。

彼は思い描いた理想と現実との格差に、思わず目頭が熱くなった。誰かのために悲しんだり、怒ったりすることは出来る。だが、やはり何よりも、自分の不遇や理不尽には流石に堪えた。

瞬きをするたびに視界がぼやけて、やがて目尻から熱い液体が流れ落ちた。

少年は残った手で顔を覆う。

（こんな思いをするなら……）

長い間使用されていなかった口が、癒着してしまったような抵抗を覚えながらゆっくりと開いた。

乾いた唇が動き、水気のない声帯は掠れた声を紡がせた。

「死んでいれば、よかった」

今があまりにも辛すぎる。

いったい何のために生かされたのか。

もはや、喪失感が大きすぎて怒りすら生まれない。仮にこの国が復讐に手を貸してくれると言ったとしても、恐らく首を振ってしまいそうだ。

あんな仕打ちを受けても尚、少年は母国に帰りたいと思っていた。

――ガチャリ、と金具が音を立てた。首を横に回すと、扉が開くのが見える。足音を鳴らし、やがてその隙間から姿を表すのは、一人の女性だった。

白い外套を翻し、その下には胸当てと、脚甲を装備する格好。スカートの下から伸びる足には太ももまでの黒い靴下を履いている、鮮やかな姿。透き通るような金髪は陽光にきらめいて、腰に提げる

剣はその柄にまで装飾が丹念になされていた。
彼女は騎士だ。
少年は本能的にそれを悟った。
「生存権はキミに委ねられている。生きるも死ぬも好きにすればいいが――それが望んだものであれ、望まぬものであれ、ここまで保護してやった恩を押し付けるというわけではないが……事情を説明してくれるくらいは、しても良いと思うんだけどね。一応、キミは他国の人間（ヒト）だし」
腰に手をやり胸をそらす彼女は、凛とした風体も相まって、その言葉が鋭利な刃物のように感じられてしまった。
穏やかな口調で、微笑すらある彼女なのにも関わらず、少年の眼には全てが敵に写ってしまっていた。
だから思わず顔をひきつらせる。そうすると、彼女は困ったように微笑んで、頭を掻いた。
「まいったな。怖がらせるつもりなんて、なかったのに」
りん、と鈴がなるような声。だが、芯の通った強さを感じられるそれは、ただそれだけで彼女がかなりの実力者であることを教えた。同じ騎士だというのに、同じヒトだというのにこれほどまで違うのかと――少年は天井に向き直って、眼を閉じた。
「事情って、何を話せば良いんですか。アレほどの戦いだ、知らないわけでもないでしょうに」
流石に一万の軍勢を相手にした戦いは、それを悟られぬように叩かる代物ではない。だから、噂でもなんでも、旅人からでも情報は入ってくる。この国は流通はさほど活発ではないものの、多くの人間、異人種がやってくる土地だ。それを知らぬはずがない。
「まあ、確かに」
彼女は壁に立てかけてある折りたたみの椅子を展開して、寝台の手前に置いた。腰から剣をはずして椅子に持たれかけさせると、そのまま腰を落とす。
ちょっとした動作でも顔にかかる長い金髪を掻き上げながら、だ

がな、と彼女は口にした。
「真偽を確かめずにここで死ぬか、確かめた結果、生存を知られて殺されるか……キミはどちらかを選ばなければならない。生きている限り、ね」
「もしすべてを知った上でまだ生きていたら、この国で保護し続けてくれますか？」
「ああ。しかし、この国で生きていくためには働かなければならない。キミには騎士としての実績があるが……養成学校からやり直してもらうことにする。体の傷が治っても、心の傷は深いだろうからね。なんでも、今年の新入生には期待のルーキーが居るみたいでね、異人種が随分と贔屓（ひいき）にしているから、近々会ってみるのもいいかもしれない」
「学校、ですか。ぼくの知らない世界だ」
目をつむったまま想像してみる。聞いたことがある施設名だ。確か、子供が色々なことを学ぶための施設だと記憶している。
わいわいと椅子に座って、教鞭をとる教師を前にして、それぞれ集中して話を聞く姿、集中力が切れて近くの友達にちょっかいを出す姿、居眠りしている姿……色々なそれらが浮かんで、なんだかそれが夢物語のように感じられた。
自分とは違う世界だ。
果たして、これから関わることがあるのだろうか。
令嬢のように行儀よく、どこか儚げに膝に手を置いて少年を見つめていた騎士は、短く息を吐いて首を振った。
「知らないことをそのままにするのは、ヒトとして死んだも同然さ」
「ならぼくは死んだ。あの時にもう死んだんだ。こんな苦痛しか無い世界ではもう、ぼくという存在は消し飛んだんだ」
「言っただろう、死ぬのは勝手だ。だが事情を話せ、って」
「事情ってなんだよ。ぼくは知らない。何も知ることができない。結局本隊が来なくて、なんとか異種族（モンスター）追い払って、飢えて狂った仲間に襲われて……それだけなんだ。国が何をしたかっただとか、ぼ

くが知りたいくらいなんだよ」
ヤケ気味の口調で吐き捨て、彼は首を壁の方へと向ける。
騎士はそれを見て、まるで駄々をこねる子供のようだと思いながらも、決して軽視できぬ背景を思い浮かべてやや複雑な心境になった。
彼はヒトだから同じヒトであり、また接し易いであろう女性が来るべきだと思って立候補したのだが……やはり戦場というものを良く知っている者の方が良かったかも知れない。
彼女、『クレア・ルーモ』は無力げに肩を落として、立ち上がった。
（いや、しかし彼はまだ子供だ。そこを配慮すれば……）
少し強気に出てみよう。
彼女は表情をキッと締めなおしてから、少しだけ緩める。
その中で――窓の向こうにある緑生い茂る木に、一羽の黒い鳥がとまった。
小雨が続く朝の空はどんよりと気分が落ち込むものだったが、まるで追い打ちをかけるように、そのカラスはやってきたのだ。
静かな様子で枝を揺らさず、葉が音を立てずに揺れる中で、そのカラスは窓の中に居る女性を見た。彼女はそれと、確かに目が合ったと認識した。
（……なんだ？）
そしてカラスが首を傾げる。視線はやや下に落ち、寝台へと移った。が、カラスはまだ首を捻る。
どうやら寝台の上の人物を見ようとしているのだが、ちょうど死角になってよく見えないらしい。カラスはばさりと対なる黒い羽を広げると、枝を弾いて窓へと寄ってきた。だがそれはぶつかること無くガラスの手前で停空飛翔。じっと、その鳥は寝台を見つめて――。
「カァー」
何かの合図のように、カラスは空を仰いでそう啼いた。

カラスはそのまま勢い良く浮上すると間もなく視界から消え去って――クレアが、その行為を防げずにむざむざとカラスを返してしまったことに後悔するのは、それから数分後のことであった。

「ねえジャン、変な予感とか、敏感なほう？」

結局、ジャンはあれから中佐の本屋で適当な歴史小説を購入して帰宅。みんなは居間に集まって団欒している所で誘われ、ソファーに腰と落として読書に勤しむ最中。

膝で丸くなっていたタマは、顔を上げてそう訊いてきた。

「予感、か。どうだろうな、考えたことも無かったけど……普通じゃないか？」

本から視線を引き剥がして栞を挟んで閉じる。肘置きに小説を置いて片手でタマの頭を撫でながら、

「そう。じゃああたしが、悪い予感がするって言ったら信じてくれる？」

彼女はお手伝いさんを巻き込んで談笑するテポンやサニーらを一瞥してから、じっとジャンを見つめた。彼は、なんだか神妙な面持ちであることから気軽な質問でないことを悟って、小さく頷いた。

「もちろんだ。おれが一度でも、タマを疑ったことがあるか？」

「思わせぶりなことをして、裏切ったことはあるけどね」

「うっ……」

決して邪な気持ちではなかったのだ。

だが、それを突っ込まれれば少し胸が痛くなる。少なくとも無意識に、そう勘違いさせることをしていた自分に反省しなければならないのだ。

タマはそれから、ふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「なら良いのよ」

意図が読めない質問に首をかしげてから、ジャンはサニーらの方をちらりと一瞥してから、その変わらぬ様子を見て、また本を手に

取った。

「おおい、すまないが、開けてくれないか？」

同時刻。

警ら兵が鬱々と振り続ける雨に嫌気がさして、革のポシェットから紙で巻いたタバコを抜き、火をつけて咥えて居ると――気配もなく現れた影があった。

黒い外套を被る影。それは明らかなまでに不審な姿であったが、妙に気安い声に、男はさらに警戒して構えた。

「どこから来た？　流浪か？」

「おおい、やめてくれよ、物騒だなぁ」

槍の穂先は天から男へと向き直る。と、彼は大げさに両手を上げて無害を示した後に、外套を翻すように背中の部分を身体の前面に引っ張り上げた。するとあらわになるのが、金の装飾、妙な、魔術ではない紋様。それがエルフェーヌの国章であることに気づくのに、そう時間は要さなかった。

男はそれから仕方がない、といった風にフードを引き剥がした。

「濡れるのって、あんまり好きじゃないんだけどな」

「ああ、エルフェーヌの。あの幼騎士（おさな）を引き取りに来たのか？」

「いや、アイツは駄目だ。だって生きて帰れなかったからな。……あのさ、勘違いされたらイヤだから一応説明するんだけど」

「ん……なんの事だ？」

「いや、ウチが無茶な任務に新米騎士を追いやって見捨てたって。今回はブリックのバカが異種族一万とか訳分かんねーことするから公になったけどさ、これはいつものことなんだよ。明らかに成功不能な任務に、新米だけで行かせるってのは」

男は鬱陶しそうに雨に濡れた髪を掻き上げる。黒髪は艶艶しくなって、長いまつげは際立つように、その目を大きく見せた。

一見は優男だ。とても、こいつが騎士であるようには思えないだ

ろう。

「これは一応国家機密でもあるんだけどさ……ま、いいよな。オレたちが迷惑かけたようなもんだし！」

落ち込むように肩を落としていた男だが、何かを考え吹っ切れたのか、表情には笑みが戻って諸手を大きく広げるような、大げさな所作が目立ち始めた。

「お、おう」

警ら兵はそんな彼に戸惑ったような返事をする。

男は微笑んだ。

「エルフェーヌは、軍事力がそう高いわけじゃないから、実力主義なんだ。騎士は特にな。だから、新米に命からがらで任務に行かせて、帰って来たやつを正式に採用する。今回は四人だったが、途中まで五人だと一人から聞いた。その一人が『ラック・アン』、今回、この国に来たガキだ」

「……そんな事やってたのか。にしても、それだとその新米が人間不信になったりしないのか？」

「ま、今回は新米の量も敵の量も異例だったからな。本来は、全員生還で無事って事が殆どなんだ。一種の儀式みたいなものでさ。今回は少し、期待しすぎたし……やりすぎた。そして血の匂いを垂れ流しながらこんなトコまで来るのも予想外過ぎた」

男は鬱陶しそうに顔の雨滴を拭ってから、大きく息を吸い込んだ。

警ら兵は結局のところ、少年がどんな処遇になるのか、そしてこの男が本当は何を言いたいのかわからずに、眉をしかめたままで男を見る。

そうすると、彼は目を伏せて申し訳なさそうに頭を下げてから、少しして、顔を上げた。

「アイツが流した血はこんな雨でも流れずに染み込んでる。ここら一帯の怪物共は人間の血に興奮して、その匂いをたどり始めている」

彼は指を二本ばかり立ててから、言葉を続けた。

「早くて二時間。奴らは本能を醒まして、ここに来るぞ」

底冷えするような、まるで刃物を喉に突き付けて脅し掛かるような声が、まことしやかに真実として、男の口から語られた。
「だから」
そうして、途絶えることなく続く。
表情はいつしか極まるほどに緊張したもので、だが先程のソレと比べるとどこか気楽に言葉を紡いだ。
「匂いの主人を餌に異種族（モンスター）をおびき寄せて、”オレ”で対処する。あんたらには申し訳ないが、念のためにここの警備を強化しといて欲しいんだ。もちろん、謝礼は弾むつもりだ」
なんでもないように男は言って、だから、と繰り返した。
手招きするような、あるいは駄賃を催促する子供のような手は、
「生きてるなら丁度いい。ラックを連れてきてくれ」
まるでそうするのが当然だと言わんばかりに、少年の命を握ろうとしていた。

「ちょ、っと！　困りますよ、他の患者さんだって居るんですよ！」
今にも泣き出してしまいそうな声で、まだ十四、五の少女は修道服に身を包んで、強引に押し入ってきた黒い外套姿の男の胸板を押し返していた。
「悪いな、可愛いお嬢さん。オレは今あんたに構ってやれるヒマないんだ」
蒼い瞳が涙で潤む。少しばかり後ろめたさを覚えながらも、男はそれを見ながらしっかりと修道服が頭まで包まれている彼女の頭を、布越しで軽く撫でながらいなした。
少女には何が起こったのか理解出来ないだろう。素早くなめらかな体さばきに、彼女の抵抗は見る間に打ち崩されて行き、気がつけば男は背後に。前へと押し返す力は虚空に飲まれて――バランスを崩して、額を勢い良く床に打ち付けた。
きゅう、と鳴き声のような声が聞こえた気がした。動く気配がないのを見るに、打ちどころが悪く気絶してしまったのだろう。
「……まあいい、これが終わったらフォローしよう」
「まずフォローはこの現状からにしてくれないか？」
肩をすくめて歩みを進める男へと、背後から声が降りかかった。
されど、驚く様子もなく、むしろこうなって当然待っていたぞ、と言わんばかりの余裕さで踵を返し、外套を翻す。そうすると右手側にはどんよりとした空が見える窓、右手側には個室の病室が並ぶ壁。その通路の、数歩分先の位置に、甲冑姿の男が立っていた。
特別な格好でも何でもない。市販の一式。見る限りでは騎士ではなく、警ら兵のようにもうかがえた。
「不躾なのは後で改めて謝罪する。だが、これはこの国のためでもあるんだ。ここら一帯は、”溝”が近いだけに異種族（モンスター）の強さもひとしおだ。だから、出来るだけ遠くで引きつけたい」

「舐めるなよ、小僧」
しわがれた声は怒気さえも孕んで威嚇した。
立派な顎鬚を蓄える妙齢の大男は、腰に大ぶりのナイフを備えて、威圧するように表情に怒りを伝播する。
「問題が領内に持ち越された時点で、既にこれは我々の問題でもある。既にこちらの騎士は動き出したし、俺たち警ら兵も緊張を高めている。そしてまた、これが悪い問題ばかりとは言えない」
言いながら、にやりと男は不敵な笑みを浮かべた。
不意すぎるそんな不気味な表情に男は思わず身構えたが、落ち着けと言わんばかりに両手を振る所作に、男は一歩だけ退いて立ち直る。
「アレスハイムでは、騎士を学校で育てている。二年制の学校でな。その中から将来性の高い生徒をクラスで一名、総数四名連れて寄越す。二年には実際に戦闘に加える予定だ」
「……まだ騎士でもない子供に？」
「そうだ。お前たちが、騎士になって間もない子供にそうしたようにな」
「……ああそうかい。そりゃ助かった……だが、異種族は染み付いた血をたどっている。オレたちが今外に出向いたとして、その全てを対処できるとは限らない。確実にいくつかの漏れを出すはずだ。これぱっかりはわかってくれ――オレは本気で、被害を出したくないんだ。身内のミスは、せめて身内の力でなんとかしたいんだ」
身体が熱くなる。男はそれを感じていた。
懐かしい感覚だと思う。これほど焦っているのは、一体いつぶりなのだろうか。
恐らく、今から来る異種族は多くて五、六〇〇程度。まず始めに魔術で面で攻撃を行い集団を個別に分けて、各個撃破していけばとても無理とは言えない数だ。むしろ、遠隔から魔術のみでの撃破さえ可能な実力を持ち合わせている。
だが確実に、と言うのならば、やはり直接戦火に身を晒さねばな

らぬだろう。
　警ら兵の一軍を纏める男、『エミリオ』はその言葉を受けて、今度は威圧するものではない、むしろ好意を表現するように微笑んだ。
「了解した。だが、少年……ラック・アンは今、この国にとって、エルフェーヌからの客人だ」
「……ああ、そういうことか」
　わかったよ、と男は大げさに諸手を広げた。
「自国を貶めないように、オレはラック・アンを丁重に扱おう」

「ねえ、スティールさん。学校の先生がお見えですよ」
「学校……？」
　スクィドは来客に対応したかと思うと、そそくさと居間にやってきて、そう告げた。
　そんな彼女の台詞に、オクトが笑い、テポンがイタズラに口走った。
「あはっ、成績不良じゃないの？」
　なぜかトロスが吹き出した。
　彼は飲みかけのオレンジジュースを瞬く間に毒霧に変えてむせこみ、それから涙目になってジャンを見る。
「す、スティールに限ってそんな……」
「なんでもいいから、早くお出になってください。お客様を待たせています」
「あ、ああスミマセン。今行きます」
　読みかけていた本を閉じた所で、栞をはさみ忘れたことに気づく。思わず動きが止まったが、彼は諦めて膝の上のタマを脇にどかしてソファーから立ち上がり、そそくさと玄関へと向かった。
　――そこに待っていたのは、平服姿の戦闘教官だった。
　そんな彼に思わず意表を突かれて言葉を失っていると、彼は淡々とした口ぶりで用件を告げた。

「ジャン・スティール。今からちょっとした課外授業だ。剣を持って来い」
「なっ……成績不良、とかじゃないですよね」
もしかしたら、これからみっちりしごかれるのだろうか。外は雨だ。こんな中で戦闘訓練なんてされたら明日には風邪を引いてしまうかも知れない。
身体は強い方というのがちょっとした自慢だが、疲れきった身体にこの蒸し暑さは堪えるし、汗を掻けば冷えるだろう。ちょっと、というかかなり遠慮したいのだが――。
教官を除けるように、一人の少年が前に現れた。
「へえ、お前がジャン・スティールか」
鮮やかな自然を彷彿とさせる、深い緑の髪が目立つ少年だ。鋭い目付きはまるで威嚇するようなソレであり、ジャンよりもどこかひ弱に見える体つきは頼りなさげに見えた。腰には三本の棒が並んで備えられており、その中の一本には槍の穂先が付属していた。
「……誰だ、あんた？」
「俺は隣のクラスの『ルーク・アルファ』。お前と同様に、選ばれた一人だ」
「選ばれた？　そりゃまた、いったい何の話だよ」
「知らないのも無理は無いな。俺だって聞いたばかりなんだし。実はな――」
「やかましい！　アルファは口を慎み、スティールは武器を取ってこい！　五秒以内だ！」
「っ、はいっ！」
無駄口は果たして教官によって遮られ――ジャンは肉体強化の魔術を発現するその直前までに追い詰められながらも、なんとか時間の経過を十秒以内に抑えることができていた。
「しかし、今年は災厄もなく無事に一年を過ごせると思ってたのだ

がな……」

少年は、抵抗する間もなく一方的に事情を聞かされて、今は熟練（ベテラン）騎士の男の背に乗っていた。

日常を過ごす街は、雨のせいか少しばかり活気がない。そしてそれに加えてそそくさと忙しなく動く警ら兵の姿が、住人に少なからずとも不安を与えているように、少年、ラック・アンは捉えていた。

男の傍らで言葉を漏らしたのは、下半身に馬の肉体を持つ女性だった。ケンタウロス族と呼ばれる女性は、この鈍く灰色に塗りたくられている空の下でも鮮やかな黄金色の髪を、頭の少し高い位置で一つに括っている。

馬の身体には薄い下着が着せられていて、周囲を鉄の佩楯（はいだて）で覆う鎧を着込んだ姿で、女性は一つため息を漏らした。

「だが、私が戻っていて良かった」

「ほう、それは、あなたが仲間を信じていないから？」

男は意地悪な笑顔で訊いてみる。だが同様すら無く、彼女は首を振って、顔も見ずに答えてみせた。

「私は外に出る仕事が多い。他の仲間に、負担ばかりかけているからな。こういった大変な時は助けてやりたいと思っている」

そうこうしている内に、やがて門をくぐって外に出た。

待っていたのは長い白髪の男と、短く刈り込んだ燃えるような赤い髪が特徴な学生だった。二人はわかりやすい制服姿で、それぞれ漆塗りの黒い槍に、装飾も何もないシンプルな刀剣を装備して、外壁に寄りかかっていた。

他には、今回共闘するミノタウロスの騎士であり、彼女はさらにもう一人居るだれかと話していたかと思うと、彼女らに気づいて、ようやく来たかと顔を上げた。

「待ってましたよ。敵の気配は、まだ少し遠いです。そちらの……えっと」

エクレルが男を指して、なんと呼べば良いのかと戸惑って口ごもる。それを察した彼は、満面の笑みで胸に手を当てた。

「ドラゴです。どうぞよろしく」
「あ、はい。そのドラゴさんが言ったよりも、少しばかり進行は遅いようです。烏合の衆ですし、内輪もめもあるのでしょう」
「そうか。まだ一年組も来ていないし、ちょうど良いんじゃないのか？」
「ですね。あと……ほら、自己紹介なさい」
じっとエクレルの影に隠れていた、やや色素の薄い赤髪の下に宝玉のように大きな赤い瞳を持つ少女は、背中を押されて、居心地が悪そうにうつむいた。
彼女はいきり立つサソリの尾を頭頂から生やしながら、ぎこちなく震えながら顔を上げた。
「あ、あ……り、リサ……です」
「……リサ？　……彼女は？」
突然の紹介に戸惑ってケンタウロスの女性が顔を上げてエクレルに救いを求めると、彼女はどこか嬉しげに笑って、リサの肩を抱いた。
「もう、『ユーリア』さん、忘れちゃったんですか？　報告した、あの”はぐれ”の子ですよ。いまは学校に通って、だんだんとヒトに慣れてきてます」
「ああ、彼女か。それは何よりだ」
ユーリアと呼ばれたケンタウロスが微笑むと、なぜだかリサは萎縮しきってエクレルの背に隠れてしまった。何か後ろめたい事があるのかと思ったが――そういえば彼女は、街を襲撃しようとしていたのだ。そして確か、騎士はエクレル以外には出会っていないと言うのだから、それも仕方のない話だ。
そんな事を考えている脇では、ドラゴとラックは会話を交わしていた。
「正直、こんな失態をしたお前は、国では擁護できないぞ。いくら精神的に追い詰められていたとしても……食われそうになったという事実を上げて、あいつらを処分するくらいしか、な」

「ぼ、ぼくは……」
「ま――もしこの事が国に知られてたら、の話だけどな」
「え……？　ちょ、ドラゴさん、どういう事ですか？」
「今、国ではお前は行方不明扱いになってるし、捜索を任されたのはオレ一人。んで、国を出てからまだ一度も戻ってない。わかるか？　わざわざオレの友達（カラス）まで使って探したんだ。国に戻ったら感謝してくれよ？」
「あ、ありがとうございます！」
背中に力一杯抱きついて、少年は涙目になる顔をそのまま背中に埋めた。
彼は困ったように肩をすくめると、そこでようやくユーリアの視線に気がついた。
「な、なんですかその目」
視線は微笑ましく見つめるソレではなく、どこか訝しむようなものだった。
だからそんな視線に思わず気後れして、ドラゴは動揺を隠せずに口にする。と、彼女は肩を落とすように嘆息して、声を低く元気のない口調で告げた。
「アレスハイム側が彼を擁護しなければ、有無をいわさず処分するつもりだったのだろう？」
「……はっ、はは。じゃ、邪推がすぎますねえ」
「嘘のつけない男だ」
ユーリアはわざとらしく肩をすくめた。
「はあ……だが、その少年がエルフェーヌで騎士として復帰できる可能性は？」
「余裕でありますよ」
男は言いながら、指を重ねてバツ印を作った。一応、背中に居るラックに配慮した表現だろう。
「なら良かった」
なるほどな、と思いながら、感情も何もない風に言葉を返す。

彼が騎士に復帰できない理由……それはエルフェーヌ自体が彼の治療や心の治癒を待ち切れないからだろうし、そもそも片腕がないから戦闘はできないと決めつけて判断しているからなのだろう。国が少し遠いだけで随分と変わる考え方だが、それも仕方がないものだった。

だが、このアレスハイムならどうだ？

彼女は考える。

異人種をまず受け入れて、さらに女性も騎士の大半という事態となっているこの国で、ある程度の成績を納めればたとえ片腕だけだとしても、この少年は立派に騎士を冠することが出来るのではないか？

少し大臣と相談をして――今回の謝礼として、彼を保護することはできないだろうか。

彼女はまたラックを一瞥すると、

「待たせたな」

半袖半ズボンという格好の中年男性が、二人の少年を引き連れてやってきた。

「こっちの目付きが悪いのがアルファ。こっちの要領のよさそうなのがスティールだ」

「どうも」

「よ、よろしくお願いします」

――今回は見学という位置につく、養成学校の一年組が軽く会釈し、あるいは深く頭を下げて挨拶をした。

その場に居る全員はそれぞれ適当にそれに返して、やがて二年組もその集まりへと寄ってくる。

「レイ、クラン、そっちも準備はいいか？」

いよいよか、という面持ちでユーリアが訊く。

白髪の男が、そして赤髪の男がそれぞれ頷いた。

リサはジャンの隣に移動して、戦闘教官がさらに脇に付き――ユーリア、エクレル、ドラゴ、レイ、クランに背負われるラックを加

えた六名は、ただ簡単に顔を合わせた直後に、言葉も無く進行し、その場を辞した。

「ま、気楽にしてろ」

教官が、事も無げに言った。

一応の説明を聞いていたジャンだが、混乱したままの展開には正直追いつけない。自分が関係してしまったようでいて、まったくもって部外者の扱いをされている事もあるのかもしれないが。

しかし動き出してしまったこの流れは――恐らく今年最大の波乱になる……ような気がした。

草原に挟まれた、どこにでもあるような平坦な道。

数百メートルほど前方に、異種族（モンスター）の群れが見えた。

もはや血の匂いを辿ると言うよりは、血の匂いをきっかけにして街の方向を知り、ついでに人間を食べてしまおうと画策して突撃してくるような、迷いのない特攻の姿だった。

まずユーリアが先頭についた。両脇にはエクレル、ドラゴが待機する。背後に控えるレイとクランは、既に武器を構えて指示を待っていた。

――圧倒的な存在感。

だが畏怖はない。怖くない。どこか、呆気なささえ感じられた。

ユーリアは久しぶりの乱闘に短く嘆息してから、槍を構える。

「私がど真ん中に一発入れる。エクレルとレイ、ドラゴとクランで左右に分かれて各個撃破だ」

それぞれが緊張を顔に出す。表情を引きつらせて、脇で為す術もなく震えているラックはこんな心境だったのかとにわかな共感を覚え始める頃、気後れした声は、ドラゴから上がった。

「ちょっと、一応侮れない集団なんですけど？　作戦とかないんすか？」

「……貴様は何を言っているんだ？」

彼の言葉に、ほとほと呆れた、とユーリアが一睨み。彼は思わず背筋を凍らせるようにしながら、松葉杖で辛うじて立っていられるラックを一瞥した。無意識の救いを求める視線だったが、彼は既に異種族に釘付けで、見えていないようだった。

「作戦とは弱者に残された最後の望み。相手をいかに騙しいかに術中に嵌めるか、力がなくとも圧倒的な強者に勝利する唯一の可能性を持つ手段だ。だが我々はどうだろうか？　相手は、圧倒的な力で、畏怖するべき存在か？」

「……なるほど」

「一時間とせずに終わる。安心して戦え……行くぞ」

槍の穂先を天に向けた形から、やや横に傾ける。そうして柄を握る手に、彼女はもう片手を静かに重ねた。

――彼女の肉体から、形容し得ぬ激しい威圧が溢れ出す。それがいわゆる”魔力”だという事を、彼らは理解していた。

紋様は輝かない。

つまり、彼女が今出そうとしているものは、魔法だった。

ユーリアは後ろ足で大地を蹴り続け、その馬蹄が音を鳴らす。今にも駆け出しそうな、そのための勢いづけるような動作に、言葉はなくとも周囲は少しだけ彼女から距離を取った。

敵は既に百メートル圏内に入り込んでいる。

動きの少ない、されど威圧の高まるユーリアに、誰もが集中し、緊張し、不安を抱く――が。

次の瞬間だった。

何の予兆もなく、光の粒子がどこからともなく現れて彼女の肉体に張り付き包んだと思うと、全身は眩く輝き、ユーリアは穂先を前方に向けた。

「行くぞ……ッ！」

大地を弾き、いよいよ彼女は走りだす。馬の加速は見る間に進んで一気に集団との距離を縮めて、馬から生える人の部分は、ブレること無く低姿勢で槍を構えていた。

「発現（めざ）めよ――雷撃疾走（ストライク）ッ！」

肉体から輝きが放出した。全身から火花が火花が乱れ飛び、輝きと共に暴風が排出された。

眼前の異種族の陣形がにわかに崩れ、進行が止まる。

それが彼女の覇気のせいか、暴風や輝きに驚異したのかは定かではない。

だが少なくとも――その隙が、決定的なまでの命取りだった。

彼女の速度はさらに加速する。それは既に視認どころか、馬蹄の音すらもまともに聴き取ることさえ不可能な速度だった。

電撃疾走――その名の通りに、彼女の肉体は電光と相成った。

加速する肉体。加熱する大気。構えた槍は、その速度に、衝撃の伝播に早くも悲鳴を上げていた。

やがて先頭の獣の腹に切先が触れた。

その瞬間に穿たれた腹部は間もなく焼き尽くされて穴を開けて――集団内に電撃が走る。それは複雑な経路よろしく余すことなく全体に、頭部を鈍器で殴られたような鋭い、脳髄を揺さぶるようなより直接的で効果的な衝撃を与えていた。

圧巻だった。

敵の土手っ腹に食いついたユーリアは自身に触れた異種族をその伝導熱で焼き尽くし、近づいた者を電撃で焼き尽くし、そして既に柄に致命的なまでのヒビを入れた槍に触れた者を刳り抜いた。ソレはやがて消し炭となり、焼け焦げた大地へと崩れてゆく。

そんな特攻の中でも、息を飲むような槍捌きは失われない。

薙ぎ払う一閃で数個体を腹から切断し、抉り貫いて連なる三体を絶命させ、振り下ろす一撃はもはやその槍は大剣なのかと錯覚するほどの衝撃を以て、切断と形容するよりもはや爆撃、その個体、集団の四散を目的とした攻撃手段だった。

流れた鮮血が沸騰し、蒸発する。されどただの熱湯となるそれらもあって、周囲には鮮血が霧にもならず、ユーリアの勢いに伴って凄まじい暴風雨のように吹き荒れていた。

――彼女が集団から抜ける頃。

五〇〇からなる軍団は既に二〇〇近くを喪失しており、電撃の後遺症によってその他は皆動きを鈍くしていた。逃げることもままならず、呆然とする四名は、それからはっとなって指示された通りに、両断されたそれぞれへと駈け出していく。

失速したユーリアは同時に全身からの電気も失って、疾走から歩行へと変わる。酷い倦怠感を覚えながらも少しだけ目をつむり、深呼吸を繰り返す。

そうして最後に彼女が大きく息を吐いてから振り返ると――悲鳴や断末魔をあげながら地面に崩れていく異種族の姿が多かった。

飛び散る火花。魔術の輝き。巻き上がる血の嵐。

見る間に敵の数は減っていき、

「はぁっ！」

ドラゴの一閃。

それを最後に、ついに集団の全ては呆気無く、手応えも見せずに殲滅された。

その頃になるとユーリアの体力はすっかり回復していて、対照的に四名は、緊張故か随分と疲れきったような顔で跪いていた。

「さすがユーリア殿。特攻隊長（トップアタッカー）の実力は未だ衰えぬ……か。現特攻隊長のシイナに劣らぬとは、正直驚いた」

軍務大臣は正直に感服した、と息を吐いた。

円卓にただ一人座る彼に、ユーリアは謙虚に首を振る。

「いえ、仲間が居たので。残党の危惧をする必要がなかったので、余すことなく全力を出せたお陰です」

「特攻隊長の実力とはそれこそなのだが……まあいい。これ以上褒めても、貴殿はまず答えを聞きたいだろう」

「……申し訳ございません」

「かまわんよ」

男はカップの紅茶を一口含んで、味わうように飲み下す。
――あの戦闘から二〇時間が経過した。
怪我人はゼロ。ドラゴはその日の内に手配した馬に乗ってラックと共に帰って行き、また周囲の被害も大地の”焦げ”を除けば問題はなかった。
「エルフェーヌ国王から、即日で返答が来た」
「……その内容は？」
「申し訳ないことをした。貴国の要望はもちろん、公道の修繕や謝礼は後日遣いの者と共に寄越す……といったものだ」
「そうですか。関係の者が無事なら良いのですが……」
「あの国王に限ってそれは無いだろう。どちらにせよ、我々には関係のないことだ。他国の内情に関わりすぎても良いことはない」
「それはもちろん、重々承知しています」
「だろうな。貴殿のお陰で異人種の偏見はここら一帯からは薄れてきているし、その手腕から国交も安定している。そろそろ、騎士から離れて本格的な外交官として働いてもらいたいのだがな……」
男はそういって、また紅茶を口に含んだ。
だが、それまでと同じように、彼女はその言葉に対しては断固と首を振った。
「私には、最近楽しみが出来ました」
女性としての可愛らしさも無い口調だったが、それは凛とした声で紡がれた。彼女の声から穏やかささえ感じられたのは、長らく彼女と関わってきた大臣も久しぶりと感じるほどのものだった。
「私はある少年の人生を変えてしまった。強くなれとは言ったものの、来てほしくはない道に来てしまったのです。だけど不思議なことに、私はその男を待ちたいと思っている。どの世界でも、どの職業でも、ここに来てしまったからには、いずれ肩を並べたいと……そう考えているんです」
再開した時の少年は、あの時と変わらず真っ直ぐだった。身体も大きくなり男らしくなっていた。無茶を承知で、弱者の立場だとい

うのに作戦もなく特攻していたのには目も当てられなかったが――下手に小狡くなっているよりは良いと思えた。

学校では上手くやっているらしい。なんでも、ヒトより異人種の友人が多いというのはどうかと思ったが……なんだか、それに嬉しくなったのは、彼女の中では秘密だった。

「ならもしその少年が、外交官になるのならば？」

「……そうですね。大臣の手を煩わせるのも申し訳ないですし、私が教育しましょう」

「なるほど。なら、その少年の名前を伺ってもよろしいか？　当分の間、貴殿程の逸材は、正直失いたくないからな」

「ええ……その少年は――」

ジャン・スティールは結局のところ、自分がなぜあそこに呼ばれたのかが理解しきれずに居た。

アレから夜を迎え、帰宅し、眠り。そして目が覚めた今でも疑問を抱く。

確かに遠目からでも凄まじい迫力や雷光は理解できたが、詳細な戦闘が見えるわけでもなかった。たった一匹の漏れも無く、門の前で待機するばかりで、何かの勉強になったわけではない。

「なあタマ」

「ん？　どしたの」

「……頭痛い」

腹の上で丸くなっていた彼女に声をかけると、微睡んで居たのにも関わらずやけに機嫌がよさそうに返してくれる。疑問に思って頭をあげようと思うが、妙なまでに関節が痛く、その気になれなかった。

「ああ、どうりでジャンの身体が温かいと思った。熱があるでしょ」

腹から胸元をたどって、口元に前足を置いてまたぐように額に肉球をやる。

「やっぱりね」
彼女は軽く笑った。
「バカでも風邪ってひくんだ」
結局――あのケンタウロスの騎士にも声をかけられなかった。
忘れられてしまっているのだろうか。
彼女のお陰で今の自分がいる。彼女が居なかったら、恐らくは今もあの鉱山で働いているだろう。
何も進展せず、妙に筋力をつけながら生活が続き、成長し、老いる。何のためにあの中で救出されたのか、その意味も意義も見いだせぬまま死に至る。
そんな生活を繰り返す事を回避出来たのは、一概にやはり彼女のお陰だ。
一度くらいは礼が言いたい。だがここまで来たら、むしろ騎士になってから会ったほうが良いのではないか、とさえ思える。
つばを飲む。
気管に入った。
「ごほっ、おえっ、えほっ、おほっ」
「うわ、きたなっ！」
「うう……タマ、悪いが誰か呼んできて……」
「じゃあ金貨一枚ね」
ジャンは無言で手を伸ばし、タマをどかす。と、彼女は腕の中で大きく暴れてから、何故だか怒気混じりに額を叩いた。
「もう、冗談よ。でも今度、何か奢ってね」
「ああ……元気が出たらな」
「まったく、一番何もしてないジャンが風邪をひくなんて。帰って来た人たち、誰も怪我してなかったわよ？」
「ぶくしゅっ！」
どことなく心配げな様子で見つめてくる彼女に、勢い良くツバと鼻水を撒き散らす。
ジャンは我慢できずにくしゃみをしてから彼女の鋭い爪を覚悟し

たが――予想した惨劇は来ずに、強くつむった目を開ける。すると、そこにはわなわなと震えているタマの姿があった。

「一瞬だけ殺意を覚えたわ」

「すまん」

「もう、お風呂入ってくる！」

彼女は寝台から飛び降りるとそのまま人型に変身して――。

オクトが眠そうな目をこすりながら薬を持ってやってきたのは、それから五分と経たずの事だった。

――窓の外はまばゆいばかりの陽の光が差し込んできていて、久しぶりの青空を眺めながら、ジャンはその日一日は寝台の上で過ごすこととなった。

帰郷

夏休みも、残り数日にまで迫り始めた頃。
八月二五日はサニー・ベルガモットの誕生日であった。彼女はその日を決して忘れること無く楽しみにして居ながらも、それを決して悟られぬこと無く、その日を翌日に控えた昼下がりも、素知らぬ顔で自身のベッドに座ってジャンと他愛もない雑談をしていた。
明日は友人らと海に行く予定だ。ただ遊ぶためだけにそこまで遠出するのは初めてだったし、同年代の友人とそういったことをするのも初めてだったからこの上なく楽しみにしていたのだが――。
「サニー、明日はコロンの街に行こう。たまには帰って来いって、ヴェンさんから手紙が来たからさ」
事もなげにジャン・スティールはそう告げる。
そんな彼に、サニーは思わず言葉を失った。
「え……あれ、だって明日は……」
「ん？　何か用事でもあったのか？」
「明日はレイミィとかアオちゃんと、クロちゃんとで海に行こうって。ジャンも一緒に行こうって誘ったのに……」
「あー、そうだったな……。どうする？」
「んー、もう、ジャンも早く言ってくれれば良かったんだけど」
サニーは困ったなぁと眉をしかめながらも、嬉しげな笑顔を作ってぴょんと寝台から飛び降りた。
隣のジャンは諸手を広げるようにして、
「どうするんだ？」
「みんなに言ってくる。行き先を変更したいんだけど、って」
正直なところを言えば、みんなと遊んだその翌日に行くことも出来たのだ。
「サニーの故郷ね。すっごい楽しみよ」

にこにこ笑顔でレイミィが告げる。尻尾の先をパタパタと振るのを見ながら、アオイは微笑んでそれに同意していた。

「確かに。私たちはこの街か、比較的近くの街出身ですが……コロンは森の向こうですものね。遠足より、ずっと遠くですし」

しかし思ったよりも、彼女らは随分と喜んだ上に、海に行くよりも強く賛同してくれた。

ジャンは再三、異種族（モンスター）が出て危険なものになると言って聞かせたのだが、結局各々はおざなりの武器を装備して集まっていた。

クロはいつもどおり閉口しているが、何も言わずもしんがりを努めてくれるという頼もしさを持っている。ジャンが知るかぎりでは、この集団の中では一番の実力者だからいちいち注意をする必要もないだろう。

トロスとテポンも誘ってみたのだが――さすが姉弟。二人揃って課題を終えていないという現実を目の当たりにして、四苦八苦していた。

それ故に彼らはその五人組で南の正門までやってきたのだが……。

「すいません、門を開けてもらいたいんですけど」

「あー、悪いけどダメなんだ」

甲冑姿の男はジャンの要望を聞くなり、指でバツ印を作って顔をしかめた。

「どうしてです？」

首を傾げるジャンに、警ら兵は肩をすくめる。

「この間の戦闘があったろう？　あれからどうにも異種族（モンスター）どもが興奮しているらしくてな。ギルドの任務（しごと）か、俺より上からの許可がないと開けられないんだ」

「そうですか……」

口を固く結んで、困ったようにジャンは振り返る。すると、他の四人も同様に顔をあわせていた。

まさかこんな所でつまづくとは思わなかった。たしかに、最近は警戒の頻度がやや多いかな、と感じていたし、仕事で外に出るとき

も何も言われなかったから疑問にさえ感じなかったが、一般人にしてみれば確かに危険なものだろう。

溝よりやや遠い場所ならば、命からがらでも逃げきる可能性はあるが、溝に近ければ近いほどに異種族の戦闘レベルは高くなる。だからこそエルフェーヌでは実力重視だし、この国では学校を設立(つく)って素人でも戦える教育を行なっているのだ。

いくらジャンが自力でコロンからアレスハイムまで来たとはいえ、学校での教育がなければそれまでと同様に苦戦を強いられていただろう。自分の、自分なりの戦い方というものさえも知らずに非効率的な戦い方をしていた筈だ。

「どうしようか」

どうにもできない問題でもある。

国がそう決めた時点で抜け穴はないし、ここでそれを破る程のリスクを踏む価値はない。

ただ最もここを抜けられる可能性の高い手段を用いるのならば、わざわざギルドに仕事を申請して受諾されるのを待つ事だが――それでもいつまで掛かるかわからない。

ならば出なおすのが一番だ。

目配せをすると、サニーは困ったように笑って、小さく頷いた。

「しょうがないよ」

「あら――何がしょうがないのかな？」

徐々に背景から近づいていた姿は、やがて後ろから無防備なサニーを抱くようにして現れた。

長く白い耳をぴょこぴょこと跳ねさせながら、彼女は若干沈む雰囲気にそぐわぬ笑顔をジャンに向ける。

「ああ、ラァビさん」

「今日はタマちゃんは一緒じゃないのね？」

残念、と彼女は軽くウィンクをしてみせた。

レイミィらは不意の闖入者に、加えて見知らぬ人物であることに目を白黒させながらジャンに視線で紹介を要求する。ジャンは頷き、

彼女に手を指した。
「ええ、まあ。紹介します。いま抱いてるのはサニーで、そっちから順にレイミィ、アオイ、クロコです」
「わお、両手に華ってやつ？　例のクラスメイトでお友達ね？」
言いながら振り向けば、それぞれが緊張したような面持ちで頭を下げる。
「サニーです、いつも兄がお世話になってます」
「レイミィです。よろしく」
「あ、アオイです。よろしくお願いします」
「クロコだ。よろしく頼む」
そんな各々に微笑みかけながら、一周回って彼女はサニーを離してジャンの肩に手をかけ、くるりと回る。
胸に手を当て、自分を示した。
「どうもラァビです。一応、ギルドでは彼の相棒（バディ）やらせてもらってます」
口を開けば酒の臭気が鼻を突く。そしてよく見れば、手には酒瓶が握られたままであるのがうかがえた。
また酒を飲んでいたのだ。というか、彼女が酒を服用していない場面を見たことがない。
ジャンは呆れたように嘆息しながら、それでどうしたの？　と首を傾げる彼女に簡単に言った。
「ここから出られないんです」
「あら。それじゃあ今からあたしと部隊（パーティ）を組まない？　ちょうど近くの村までお届け物があるし」
彼女は否応無しでジャンを横切り、そのまま大股で片手を外套の外側へと回す。そうしてポケットに突っ込んでそのまま一枚の紙を引き抜き、やがて警ら兵の前に突き出した。それは任務が委託された証書である。
「それじゃ、そういうことでいいでしょう？」
男は苦笑を漏らしながら、

「そうだな。構わないよ」
一応それで門を開けられる。彼はそう軽く笑ってから、カラクリ仕掛けの門をボタン一つで開けてみせた。

ラァビは出てから程なくしてある分かれ道で別離した。
もとから戦力に入れてなかったから異種族と対峙した場合を考えていなかったが、簡単な助言を元に隊列を構成し、そして出来るならば倒しきらずに逃げるのが一番だとも言われたことを胸に刻んでいた。
敵を倒しても一銭にもならないし、毛皮や肉を剥いで持ち帰ったとしても、毛皮はともかく肉は悪くなってしまう。そして解体の技術がなければ毛皮も上手く剥げないし、そもそも荷物を多くするのは得策ではない。
仕事でない限りあまり遭遇したくない連中だよ、と以前愚痴っていたことをジャンは思い出した。
――異種族（モンスター）はその本能的に備える高い戦闘能力に加えて、圧倒的な量にその強みを持っている。倒しても倒してもまるで消耗品を補充するように増えるし、ヒトが手を加えていない場所では常に集団で行動する。単体で出会えれば、それがまず幸運であると言えるだろう。
だから厄介だし、昔は殲滅を軍が掲げていたらしいが、いまではその”せ”の字も聞かない。そんな事に尽力するならば、死傷者を少しでも減らすために軍事力を高めようと言うものに成り代わっていた。
そしてそれを元にして創られたのが、騎士という部隊だ。魔法を持ち、実力の高い精鋭部隊。それを量産することで、今はそれらに対処している。
「ねえ、ジャン？」
「ん、どうしたんだ？」

隊列はやや崩れて横に広がっているが、ジャンとクロコに三人が挟まれていることに変わりはない。
「レイミィが、お昼ごろにはつくの？　って」
「ああ」
ジャンが振り返ると、レイミィは疑問そうに頭をやや傾けた。
「どうなの？」
「そうだな……大体半日くらいだった気がするが」
「ならお弁当持ってきてよかった」
「ですね。早く着いたら、勿体無くなっちゃいますもんね」
背負った荷物に視線をやって、アオイが微笑む。
そうだな、とジャンも同意して――それから暫く歩いて異種族の気配も無く、森を抜けた見通しの良い平原で、昼食の提案をした。

具材が豊富なサンドイッチ。おかずが多様なおにぎり。それらは、意外にも緊張していたお陰か、それとも久しぶりの遠出だからか随分と空腹していたお陰で、ものの数十分で平らげられてしまった。
出発は短い食休みの後だったが、腹ごなしの運動はその直後に強制参加させられる羽目となる。
「まったく――幸先が悪い」
ジャンが悪態をつくように腰から剣を抜く。同時にクロコは構え、レイミィとアオイは即座にクロコの近くへと退避した。
彼らが待機した場所より十数歩分手前に、狼の群れが現れたのだ。しかしそれは単なる狼ではなく、より凶暴でより獰猛でより凶悪な異種族のそれだった。
総数五体。
より一般的に確認される平均的な群れの数だった。
「グルルルル……」
唸り声が耳に届く。
サニーは弦を弓に張り、手早く弓を使用できる状態に構成した。
背負う矢筒から三本の矢を引き抜き、その内の一本だけを構え、力

一杯弦を引く。
狼は彼らの姿を認知し、左右に散りながら、その中の一匹が正面か大地を駆る。迫る。肉薄する。
ジャンは軽くサニーの頭に手を乗せながら、短い深呼吸を促した。
「狙いはそのまま。おれがこのまま走りだすから、思い切り横に跳んだ”瞬間”に放せ。クロコは左を頼む！」
「了解」
ジャンは簡単にそう告げて走りだす。クロコの返事が聞こえたのは、早くも彼女らから数歩分遠ざかってからのことだった。
――走りだしてから距離が縮まるまで、そう時間がかかるわけではない。
時間にして僅か数秒といったものだ。だから、ジャンは目の前の狼へと走りだしたその直後に、右方向へと力一杯大地を弾いて回避した。狼は大口を開けて牙を向き、強い酸性の唾液をまき散らしながら襲いかかった。が、その口は虚空を噛み砕き、勢い余って前方へと体勢を崩した着地をする。
その頃になるとややずれたタイミングで穿たれた矢が飛来し、間髪おかずに狼の眉間に突き刺さった。サニーは構え、さらに発射。発射。発射。ひるんだ狼へと、総数五本を叩きこむ。四肢に、右前足の付け根にある心臓へのダメ押しは、果たして効果的だった。断末魔を挙げることもままならず、狼は唾液を粘り気の強い鮮血に変えて大地に沈む。
生体反応は、完全に失せていた。
よくやったと、ジャンは魔術反応に刀身を輝かせ唸らせながら、胸の中で褒め称えた。
随分と成長したものだと思う。
先ほどの狼同様に頭を丸呑みできそうなほどに大きく口を開ける狼の、その口の中に切先を突っ込んで切り上げる。すると高速振動する刃や骨の抵抗などまるで無いものとするように完全に無視し、手応えなく切断。背半ばまで飲み込まれた刃は、そのまま肉を裂い

て骨を断ち、毛皮を引きちぎりながら大気にその身を晒した。
「以前は、あんなに怖がってたのになぁ……」
鮮血が辺りに撒き散らされる。それでも構わず畏怖せず本能のままに、背後に回りこんだ狼は高く跳んで首筋へと飛び込んだ。
ジャンは振り上げた剣をそのまま頭上に突き上げ、姿勢をやや崩してそのまま背後へと倒れこむ。剣戟は半円を描き、間もなくその血に濡れた刀身は超振動しながら迫る狼の頭頂部に叩きこまれた。
まるで溶けたバターのように頭部は肉の焦げた匂いを振りまきながら真っ二つに両断されて、頭が縦に別れて崩れる。内容物は、狼がジャンの脇の地面に倒れたのとほぼ同時に零れ落ちた。
「やれやれ、おれも少しは強くなったかな……？」
振動する剣を振り払って血糊を飛ばす。それから魔術を止めれば、手には振動の痺れがやや残るのが良くわかった。
狼の毛皮で血を拭き取ってから鞘へと剣を収める。
振り返れば、同様にクロコも戦闘を終えたばかりらしかった。
辺りは血の臭気が一層濃い。このままでは、この匂いに興奮した異種族がさらに寄ってくることだろう。足の遅いそれらならまだいいが、今回のような狼などならばややキツい。
ジャンは短く嘆息をして、
「助かった、クロコ」
「構わん。それより……」
「ああ、そうだな。少し急ごう、あと二、三時間で到着する行程だから少し無茶が利く」
ジャンの平然とした冷静な指示に各々は頷き、歩みを進める彼の後をついていった。

帰郷？

結局その後も幾度か戦闘を交えて、街に到着したのは三時間後の事だった。

そう多くはなく敵の数も少ない戦いだったが、初めてであったり慣れていなかったりしていた彼女らだから、それだけでも随分と疲弊してしまったらしい。わかりやすい疲れた顔をして、街についた途端にわざとらしく肩を落としていた。

――コロンの街は、アレスハイム領内でほぼ中心近くにある。それ故に、観光と言うよりは通過点として、補給所として多くの人間が立ち寄り栄えているし、近くの鉱山から採取される魔石や鉱物の加工品が主な名産品として販売されている。

街の造りは一般的なもので、大きな通りの両脇に宿や武具店、道具屋、土産屋を始めとして様々な商店が並び、山に寄り添うように創られたこの街の奥まった場所は鉱山となっていた。

ジャン・スティールとサニー・ベルガモットが世話になっていた鉱山はそこであり、今回はその経営者である一人のドワーフの手紙をきっかけに帰郷したことになる。

まだ昼下がりという時刻。西の空には未だ赤みさえ見えず、青々とした快晴の空が広がっていた。

「さて、まだ日は高いし、見物でもしてみるか？　おれはこれから、ちょっと知り合いの所に行くんだけど……」

「うん。じゃあ私がみんなを案内しようか？」

ジャンの提案に、サニーが躍り出る。

うん、と頷きながら彼は少女の頭を撫でて、

「それじゃ頼んだぞ」

その場はそのまま、一時お開きとなった。

まず始めに立ち寄ったのは、二年間だけだったが生活を支援し学

校にまで通わせてくれた保護施設だった。つまり、簡単にいえばいわゆる孤児院である。

資金面の援助や入学手続きは全てユーリア……あのケンタウロスの女騎士が行なってくれたのだが、それでも育ててくれたのはこの施設だ。まずは学校に顔を出してみようと考えたが、特にこれといって良い思い出もなかった場所であるのを思い出し、首を振った。

結果、気がつけばここに来ていたのだ。

小さな鉄門。その向こうにある小さな広場には、幼い子供たちが元気に走り回っていたり、ボールを投げ合ったりなど楽しげに遊んでいる姿が見えた。

一階建ての、長屋のような建造物は白い塗料で清潔に塗られていて、清潔感が溢れている。どうやら最近、改装した様子が見えた。

――男の子が一人、ジャンに気づいて建物内に引っ込んでいく。

ややあって、袖を引っ張って職員を一人連れてやってきて、鉄門の前で佇むジャンを指さした。促されるように、妙齢と言うよりは歳をとっているし、最後に見た時よりも老けてしまっているようだが、それでも随分と若く見える女性は顔を上げた。

既に四〇代近いというのにシワひとつ無い顔に、鮮やかな桜色の長い髪は一つに括られて右肩に垂らされている。

彼女はジャンを見るなり驚いたように目を見開いて口元を抑え、それからおっとりと、危なげな足取りで門の近くまで駆け寄ってきた。

「あらぁ、ジャンくんじゃない……！　すっごく、久しぶりねえ。もう、幾つになるんだっけ？　街を出てから、結構経ったようにも感じるけれど、まだ、一年も経ってないのよねぇ？」

垂れ下がった目尻に、薄く開かれた目。やや丸めの顔には愛嬌があって、高い鼻が特徴的だ。

琥珀色の宝石のような瞳をくりくりさせて、遥かに歳上であるのにも関わらず小動物のような雰囲気を纏い、彼女は指先で毛先を巻いた。

「ええ、お久しぶりです”クリスティン”先生。おれはもう十八になりますよ。というか、この街を出るときに挨拶に伺ったじゃないですか」

錆びた音を立てて門が開く。まるで無防備な様子で、彼女はエプロンで身体をタイトに絞めつけた出立ちで出迎えた。柔らかで、背丈はそう変わらないが小さく見える華奢さだ。

いかにも大人の女性という彼女から、やはり保護者という観念を拭えずにいた。

しなやかな指をからませて手を組み、クリスティンは微笑んだ。

「ええ、そうだったわねぇ。どうせなら、お仕事中もたまには、遊びに来てくれればよかったのにって、思ってたけど。でもこうして遊びに来てくれると、嬉しいものねぇ」

「ははっ、そう言われるとおれも嬉しいですよ。適当な土産しか買って無いんですが……」

肩から背負っていたバッグから包装された箱を取り出す。ずっしりとした重さが腕に伝わり、その分、肩からの重量が失せた。内容量を重視した、王道な土産物である。どこ産でどうとか言うものを一切を無視したチョコレートだが、ここら一帯ではチョコレートの原材料であるカカオは採れず、その多くは輸入頼りだ。故に、そのぶん値段は高くつく。

「みんなで食べてください。お茶にあうかはわからないんですけど」

「あらあら、まあまあ。嬉しいわねえ、いい男にもなったし、気遣いもできるし」

うふふ、と笑いながら彼女は手を伸ばす。その手は暖かに優しく頭を包み込むように撫でてみせた。

彼女の熱が頭髪越しに伝わる。その暖かさが、直に心を温めて、穏やかにしてくれるようだった。

――母は居ない。

しかし居たとするならば、こんな気持ちになるのだろうか。

「さあ、それじゃあ一緒に上がってお茶にしましょう？　ちょうど、

あの子たちもお昼寝の時間だし……」
「ああ、すみません。これから他に行くところがあるんで……もしよろしければ、その後でも良いでしょうか？」
「行く所？　あの、ドワーフさんたちの所かしら？」
「はい。多分、今日は泊まることになると思うので」
「それじゃあ、まず始めに私の所に寄ってくれたのね？　嬉しいわぁ、ほら、いつもみたいにギュッとしてあげるわ」
両手を大きく広げて、彼女は抱擁するような仕草を見せる。ジャンはそれに思わず紅潮し、顔が熱くなるのを自覚したが、それを抑えこんで一歩踏み込む。
自分の腕を脇から後ろに回して、小さな背を軽く抱く。それと同時に、彼女の手もジャンの広い背中に回された。
吐息が耳にかかり、彼女のやや熱っぽい体温が衣服越しに良く伝わった。その女性特有の柔らかさも、まるで代わりなく感じることが出来たのだが、正直に喜べず複雑に彼は微笑んだ。
「サニーちゃんとは仲良くやってるの？」
出迎えの抱擁から一歩離れて、彼女は訊いた。
「ええ。今日も一緒に来たんですよ。ここに居た時より、ずっと楽しそうにやってます。友達も出来たし、一緒に遊んでくれて、おれも一安心ですよ。サニーは頭もいいし可愛いから、多分これからも大丈夫だと思いますよ。おれの用事が終わった後で、その友達も一緒に連れてきます」
「うふふ、楽しそうでなにより。私たちも変わらず元気よ。また来てね？」
「はい。明日にでもまた」
「絶対よ？　なんだか、嫌な予感がするから、念を押すのだけれど……」
「嫌な予感、ですか？」
「うん。だけれど、ごめんなさい。あまり、気にしないほうが良いかもしれないわ。ほら、いつも、私の勘ってあてにならないじゃな

い？」

言って、彼女は指を立てる。それはひとつ、というわけではなく単に空を指しているものだった。

確かに、とジャンは頷いた。

彼女が雨が降りそうだと無根拠で告げる時は確実に晴天になる。逆に、晴れそうだという時は降雨があるわけではなく、どんよりとした曇り空だ。そういった事をはじめとして、彼女が口にする直感めいた言葉には一切の信ぴょう性がない。それはほとんど、彼女を知るものならば周知の事実と言えるだろう。

「それじゃ、頭の隅にでも置いときますよ」

「あら、ありがたいわ。ジャンくんは、いつでも私に付き合ってくれるものね。小さい頃から。立派だと思ってるわ」

「ま、それがおれの処世術みたいなものですし。それじゃ」

「ええ、行ってらっしゃい。今回だけじゃなくて、たまにでもいいから、また帰ってきてくれるとうれしいわ」

「はい。休みのたびに帰ってこようと思っていますよ」

軽く手を上げて、それにクリスが手を振り返すのを確認してから踵を返し、街の奥へと足を向ける。

それから当分の間背後の音に注意していたが――結局、鉄門が錆びた音を立てるものが聞こえることはなかった。

暫く歩くと、寂れた木造二階建ての宿舎が見えた。

さすが手先が器用であるように、最近なされたであろう目張りは目立たずに、されどその真新しい綺麗な板をしっかりと隙間に叩きこんでいた。

「変わらないな、ここは」

目の前には木々もない断崖。その麓には大きな穴が開いていて、そこからはレールが吐き出されていた。トロッコはいくつか止まっていて、そして適当な所で山になる石炭は無造作に鎮座していた。

トロッコが稼働していないということは、もう仕事を終えている

ということだ。そもそも鉱夫の仕事は朝っぱらから昼下がりまでだから、それも当然だろう。夜遅くまでやる必要は、今はないのだ。

「おや、やあやあ！　まさか、いや、奇遇だな！」

そんな風に、妙に感慨深く辺りを見渡していると、宿舎から一人の男が出てくるなり、彼の存在に気がついて大きく手を振った。格好は旅人然とした、そう清潔そうではない布の衣服に外套姿だった。

そしてその傍らには、どこぞの令嬢かと見紛う少女。透き通るような柔らかな黄金の髪をそのままにして、色素の薄い肌に強い日差しが突き刺さる。腰までの長い髪をそよかぜに流しながら、薄く開かれる瞳は珠玉（ルビー）のように紅く、美しい。

まるで人形か何かのような美貌だが――事実、彼女はある意味で人形であった。

「まったくよ、偶然にもほどがあるぜ。今、帰ってきたのか？　学校は休みで？」

――この男は、ジャンの背中に魔方陣を刻んだ武器商の男だ。魔術を齧っていると言っていたが、そのレベルはとても齧っている程度のそれではない。立派に魔術師を名乗ることが出来るものだ。

そして彼は、この大陸ではない世界から来ている。異人種が文明にそう大きく影響をもたらしていない、西の大陸だ。あの古本屋の”中佐殿”が居た国がある大陸である。

「お久しぶりです、ウィルソンさん。ええ、ちょうど夏休みなんですが……あと少しで終わりなんですよ。今日はちょっとヴェンさんに呼ばれてきました」

《――例の騎士学校にはご入学出来たのですか？》

胸に、『自分を励ます一〇〇の言葉』という自己啓発本を抱いた女性は、自然な人の声にやや機械的なノイズを混じらせた声音で訊く。

ジャンは頷き、照れくさそうに頭を掻いた。

「はい、お陰様で。順調でやっていけてますよ」

『ウィルソン・ウェイバー』はとある商業組合に属す一人の商人

である。その中でも特に武器を扱う者を武器商人と呼んでいて、それを託されるということはつまり、ある一定以上の信頼と戦闘面での実力を認められているということだ。

そして彼女、『タスク』はその商業組合で創られた人型移動式の倉庫である。

科学技術、そして魔術を組み合わせた特殊仕様によって擬似脳と呼ばれる、独立して人間のように思考するものを創りだした。もっとも、完全なオリジナルというわけにはいかず、その思考や発言、行動理念は開発者あるいは開発者がモデルとした人間に偏っている。

人工的な筋肉。人工的な瞳、神経。その多くは魔術を頼りに構成されており――その腹部にはなんでも”亜空間”だとか”異空間”に繋がる魔方陣が刻まれているらしい。

武器を主として、あらゆる販売道具やらなにやらはそこに収まっていて、販売する際にはそれを展開。虚空に虚像（イメージ）を浮かび上がらせて表示するという。

彼女ら移動式倉庫は一般に人造人間（ヒューマノイド）などと呼ばれているが、武器倉庫としての名称は主として人型移動用武器収納倉庫（マクロ）というものになっていた。

技術の粋だ。

到底、ジャンの住む世界とは大きく異なっているし、途方もなく高い位置に居る。

《――ともかく主人（マスタ）がどうこう言った所で、この嘆かわしい経済状況が覆るはずもないのですが》

「や、やかましいんだよ！　少し黙っとれ！」

《やれやれ、世界は悪意に満ちてますね》

「俺は個人的に思うんだが、その思想もある悪意の一つだと思わないか？」

《そんな事を言える余裕の一つでもあれば、早く武器の一つでも売って資金をこさえてもらえませんか？　餓死したいのなら構いませんが》

「くそ、観光人さえ居れば……！」
冷徹そうに無表情で言葉を投げるタスクに対し、心底嘆くようにウィルソンが頭を抱えた。
話を聞く限りでは、どうやら資金の工面に苦労しているらしい。
彼らは、この一帯ならば異種族（モンスター）にも手間取るし、武器も必要になるだろうとやってきたのだろう。以前もそう話していたのを思い出す。
だがこの街には、既にそういった店が存在する。しかも、彼らが販売する魔術仕様の武器ではないものの、一般人が自衛のために用意するならば上等なそれらが格安で販売されているのだ。わざわざ高価なそれらを、持て余すとわかっていながら購入する物好きが居る筈もなく。
故に彼らは頭を抱える現状に至っていた。
「ああ、ならウェイバーさん？」
なら貢献ついでに、何かを買おう。彼はそう考えた。
「ん、どうした？」
「ペンダントか何かあります？　今日、ちょうどサニーの誕生日で。たぶんヴェンさんも、そのお誕生日会のために呼んだみたいなんですよ。一応適当なものを用意していますが――」
《……アナタは愚かしいですね、スティール様》
やれやれと頭を抱えてタスクは首を振った。
その所作に合わせるように、ひざ下まであるフリルのついた黒いスカートはゆらりと揺れて、胸を張れば人形だというのに柔らかなバストが衣服に押されてやや形を崩すのが見えた。
彼女は、よく聴け、と言わんばかりに指をさす。
ジャンは、彼女のそんな姿に思わず息を飲んだ。
《女の子に”適当なもの”？　何を言っているんです、妹と形容してもおかしくはない幼なじみに、それでよろしいのですか？　ただでさえ好意的で、あんな可愛い子なのに？　正気ですか？》
「う……いや、それは……」

《ただの他者（プロ）の思考（グラム）にここまで言われて、悔しくはないのですか？
アナタはここまで言われて、どうしたのです？》
彼女は言いながら、胸を締め付ける仕様の、衣服の胸元、その紐をほどき始めた。ゴシック調の衣服は西の文明のものであり、こちらの大陸ではやや着るのも難しく面倒そうな造りだったが――彼女はいとも簡単に胸元をあらわにして、バストの大事な部分にだけ衣服を重ね、その輪郭を見せびらかした。
ついで現れたのが、水月付近に刻まれた魔方陣であり、
《これを、これが……》
おもむろに、その魔方陣へと腕を突き刺す。すると肉は裂けず皮膚は破けず、だというのに腕は体内へと飲まれていった。
《欲しいのではないですか？》
そして、なんでもないように慣れた様子で腕を引きぬく。
そうすると、それまで何も持っていなかった手には、ジャラジャラと鎖のついたハート型のペンダントが握られていた。
彼女ははしたない姿のままでそれをジャンへと突き出した。
《アナタの気持ちを読み取り、相応しいものを与えましょう》
ジャンは促されるままに手を出せば、その上にペンダントは音を立てて落ちて、乗る。
次に手を差し出したのは、タスクの方だった。
《金貨二枚で手を打ちましょう》
彼女はこの上なく上等な営業スマイルで、ぼったくりレベルの価格を交渉する間もなく要求した。

「えげつねぇ」
それがウィルソン・ウェイバーの感想だった。
《いいのですよ。結局、主人（マスタ）もこのあとスティール様の背中の魔方陣を調整するのでしょう？　その手間賃も取っておきました。まったく、愚直……いえ、バカなご主人を持つと倉庫は苦労します》
「言い直す必要ねぇだろ……まあいい。街に出るぞ。倭国帰りで、

この文化をもう少し見て回りたい気分だ」
《結局、目的のものは手に入りませんでしたけどね》
「まあ、な。黄金の国と呼ばれるくらいだから期待したが……ま、神話時代のシロモノだ。俺たちが二本も所有してる事が奇跡なんだよ」
《しかし我々は単なる武器商人。ただ特殊な技術を用いているだけに過ぎません》
「そうなんだよなぁ、ただの商業組合（ギルド）の一人ですったって、権力がなさすぎる」
《……いいですね、素敵ですね、騎士って響きは。ああ、わたしの騎士様はいつお迎えに来るのでしょうか》
胸元の紐を通して結び直して、それからわざとらしいため息を吐いた。彼女はじっとりと悪意を孕む視線でウィルソンを舐め回し、そしてあからさまに肩を落とす。
《甲斐性のない主人（マスタ）を持つと苦労します。まだスティール様のほうがからかい甲斐もあって、可愛いですのに》
「やっかましい！　さっさと行くぞ、日が暮れたら店が閉まっちまう」
《はいはい》
ぽんぽん、と拗ねるウィルソンの頭を軽く叩いてやりながら、二人は宿舎へと向かうジャンに背を向けて、そのまま街へと歩みを進めていった。

帰郷　？

「ただいま戻りました」

室内は、やはり寮母のがんばりのお陰で清潔が保たれていたが、少しばかりの喧噪故にその様子を明確に認識することは出来なかった。

入ってすぐは、一般的な酒場のような空間が広がっている。円卓に長机。その奥には寝室やらが並ぶ通路とを隔てる扉があって、右手側の壁には台所に繋がる扉。

扉を開けるなり、慎ましく酒を煽る十数人の鉱夫が一様に振り向いた。

「……誰だお前」

まず開口一番がそれだった。

一番手前の、一番若いドワーフの青年が神妙な顔つきでそう告げた。

ヒトが、既に五〇近くの中年男性と寮母くらいしか居ないこの空間は既に凍りついたように静まり返って――ジャンは迷わず、バッグから土産物を机に投げた。今度はチョコではなく、酒のつまみになる牛の干し肉の袋詰めを幾つか。

すると打って変わったように表情を明るくして、男は立ち上がって勢い良くジャンを抱きしめた。

「良く帰ってきたなぁ！　おめっとさん、無事でなによりだ！」

もはや慣れたとも言えるが、しかしラァビとは違う男臭さの混じった酒気に懐かしすら感じた。

ジャンは抱擁の後、男と強い握手をかわしてから、あたりを見渡す。するとみな同様に立ち上がり、ジャンの帰郷を我が子の帰郷のように喜び破顔し、タイミング良く寮母が持ってきた酒瓶を掲げてグラスに注ぎ始めていた。

中身は蒸留酒だ。ジャンの苦手な種類の酒だが、彼らはそれを知

っていても構わず木で出来たジョッキにそれをいっぱいに注いで、押し付けてきた。

暫くして、酒が皆の手に回る。随分と手馴れた速さに改めて驚愕しながらも、また少し呆れて、だけど相変わらずの様子に思わず笑みが零れた。

「それじゃー、ジャンの帰宅を祝して……かんぱーいッ！」

「カンパーイ！」

こいつらはただ何かを理由にして酒が飲みたいだけなのだ。いつも酒をあおっているクセに、何かイベントがあれば興奮ゆえに酔いが早いからとわざとそうする。

ジャンは変わらない連中を見ながら、各々が一気に酒を飲み干す姿を眺め、ジョッキを口につける。途端にクセの強い香りが鼻腔に突き刺さり、ジャンは勢いで一口含む。すると辛い以外の味を覚えることが出来ず、彼はそのまま飲み下した。

「ふぅ……」

マズイとまでは言えないが、あまり進んだものではない。

ジャンは飲みかけのジョッキを近くの机に置くと、不意に背後に迫った強い気配に気がついた。

「ジャン、良く帰ったね。まさか、こんなに早く帰ってくるとは思わなかったよ」

振り返れば、恰幅の良い女性がそこにいた。長い髪を三つ編みにしてまとめ、頭には三角巾をつける彼女は寮母としてこの宿舎を切り盛りしている、無くてはならない存在だった。

差し出された手に手を返し、力強い握手を交わす。

早くも懐かしく感じる姿にジャンは素直に笑んで、頷いた。

「ええ、飛んできました。それに、今日はただの日じゃないですしね」

「ああ、なんだ。良かったよ忘れられて無くて」

豪気に笑って、彼女は力一杯ジャンの肩を叩いた。彼は強い衝撃に思わず顔をしかめながら、抵抗することなくそれを受ける。

彼女は続けた。
「安心しな。ケーキも用意したし、今夜は豪勢だ。来れたらクリスも来るっていってたし、あの胡散臭い武器商の二人も参加するらしいし」
「そりゃ良かったです。あと、友達を三人ほど連れてきたんですけど……」
「んな心配は要らないって。こんな野郎どもでも腹や口を抑えてもまだ有り余るくらいの量は用意してるんだから」
「ははっ、なら安心しました」
「――おーい、ジャン！　ババアなんかと話してねぇで、こっち来い！」
「こらアンタ！　お前は明日の弁当ナシ大決定ね！」
「はっは！　そりゃひでえ！」
既に酔いが頭の芯にまで回ってしまっているのだろう。そんな事を言われても男は手で顔を隠すようにして、大きく笑った。まるで知性の”ち”の字もうかがえない空間だ。脳の要領を、ほんの僅かでも使っていないだろう。本能で生きている連中だ。
懐かしい。
喧噪を肌に纏って、ジャンは自ら飛び込むようにその中へと入り込んでいった。

結局その騒ぎがある程度落ち着くと、いつものように親しい者同士で円卓を囲む形となっていた。
特に誰と誰が仲が悪い、ということはないが、言うなれば特に相性がいい者同士だ。
ジャンが座ったのは、経営者であるドワーフ族のヴェンと呼ばれる八〇過ぎの男の席であり、そこには中年男性のヒトが一人に、手持ち無沙汰になった寮母が腰をかけていた。
しかしドワーフ族の平均的な寿命は二〇〇歳近く。だから見た目もまだ若いし、ヒトにしてみればここに居る中年男性よりもまだ若

い風貌を持っていた。
加えて、そこには最初に話をかけた青年が眠りこけるように、机に突っ伏していびきをかいている。
「ははは、いつもみてぇにうるせぇだろ。やっぱ、育ちのいい学校に慣れてからここに来ると、さ？」
口ひげを生やした、作業服姿の男。彼は倭国から流れてきた技術者だったが、いつからか居着いて今では立派な作業員となっていた。
「いや、まあそうですかね。でもやっぱり懐かしいっていうか、ここは良いです。落ち着きます」
「そう言われると嬉しいねぇ」
「ははは、確かに。お前さんの故郷はここだからな。いつでも帰ってきてくれてもいい」
「ええ。そう何度も帰っては来れませんが、長期休暇があればまた来ますよ」
「ああ、それがいい」
二人のヒトはそう言いながら酒をあおる。
そうすると、寡黙だったヴェンが酒の手を止めてついに口を開いた。
「にしてもなァ」
長らく聞いていなかった声が聞こえて、ジャンはそちらに顔を向ける。
立派な顎鬚を蓄えたヴェンは、図太い腕を魅せつける下着姿のままで、一口分だけ残っているジョッキを口に運んだ。
ごくりと飲み干し、寮母に次を催促すると、円卓に何本も置いてある内の一本の瓶を投げられた。
彼はそれを受け取り、蓋を捻り、ジョッキに注ぐ。
まるで一仕事終えたように嘆息してから、ヴェンは鋭い目付きでジャンを見た。
「まさかお前程度の実力で試験をスルーできるとは思わなんだ」
「まあ、おれが入学できるくらいだから皆さんも余裕でしょう。な

んたって、おれに戦い方を教えてくれたのは皆さんなんだし」

――ドワーフ族は一般的には戦闘が得意な種族ではない。ただ手先が器用で、魔法を持つ者は少ないがその特殊な加工技術故に無数の特殊な道具を創りだす能力に秀でているだけなのだ。

その気になれば、文明的にやや遅れ気味のこの大陸でも随一の技術を見せる事ができるが……彼らはそれをしない。理由は簡単に、そうする必要がないからだ。つまり現状で満足しているから要らない、といった所だ。

しかし、ジャンはそんな彼らから戦い方を学んだ。

もっとも、主な訓練方法は組手であり、その多くは倭国人の『イワヤ』か、ヴェンだったし、イワヤはその無駄のない修練されたまさに”サムライ”といった動きで苦戦を強いられ、ヴェンはその無茶苦茶な機動に馬鹿力によるゴリ押しで一度は死にかけた。

今生きていられるのは、養成学校に入学できたのはそのお陰とも言えるのだが、外に出て、あらゆるモノを体感してみて、知る。そして思った。

ジャンは彼らの、そのあまりの実力の高さを理解して、そのケタ違いの強さを再認識させられて、まだ彼らを相手に勝利することは難しいだろうな、と考えていた。

「ま、俺が直々に鍛えてやったんだから問題はなかろうかと考えては居たがな」

ヴェンはふふんと誇らしげに鼻を鳴らして、蒸留酒を一気にあおる。

それから寮母に麦酒を催促する。どうやら円卓の上には出ていないらしく、彼女は面倒そうに肩をすくめてから席を立つ。

酒を待つ間に、ジャンが腰に下げている、己が与えた剣を指さした。

「んで、そいつの具合はどうだ？」

「ああ、すごく良いですよ。最近はなんだかんだで振動剣（バイブ）モードが一番使いやすいですが、地属性も風属性も、まんべんなく扱えるし。

使いこなせているかといえば、閉口ものですけどね」
「お前は性格的に力任せってのは似合わんのだが……まあ、魔術ナシの接近戦タイプなのには代わりがないな」
「……？　力任せじゃないのに、接近戦タイプなんですか？」
「そう。正確に言えば、相手の力を利用して、あるいは隙を誘ったりするのが得意そうってんだ。違うか？」
「……そう、ですかね」
先ほどの狼との戦闘。そして思い出される、夏休み前のトロスとの実施試験。ギルドの初仕事ではそのまま力任せだったような気もするが、アレは魔術のお陰であり殆ど戦闘技術は不要だった。
戦闘をするという事自体あまりないから実感は無いが、その傾向にあるのは否定できないだろう。
ヴェンは台所から投げられたラベルが貼ってある麦酒のガラス瓶を軽々受け取り、指先だけでその金属製蓋（ボトルキャップ）をはじき飛ばした。
途端に飲み口から泡が溢れて溢れかけ、それを楽しそうに見ながら蒸留酒の香りが残るジョッキへと注ぎはじめた。
「でもまだ成長過程だからな。経験を積めば積むほど、そういった面が顕著になるだろうが――ま、お前は結局、騎士にゃなれねぇだろうが」
「はは、久しぶりに言われ――」
「冗談で言ってるわけじゃあないぞ？」
言葉を遮り、食い下がるようにヴェンは言った。
真顔で。真剣な眼差しで、ジャンを見据えながら。
だからジャンは戸惑ったし、なぜそんな事を行ってくるのかわからなかった。
当惑する少年に、ヴェンは一つ、と指を立てた。
「お前には色々なことを教えたし、このあまりにも厳しすぎる世の中を確実に生き抜くための力も与えた。だが騎士になるというには、お前にはある一つの才能が無かったんだな、コレが」
「じょ、状況判断能力……ですか」

「違う」
きっぱりと彼は切り捨てた。
「魔法だ」
そして、ためらいもなく、まるでそもそも周知の事を改めて伝えるように彼は言った。
「な……何を言っているんです。おれはちゃんと、あの白い魔石に魔力が反応して、ですね。それで受かったんですが――」
「――そりゃあ反応するわな」
ヴェンとは違う声が、脇から乱入した。
背後から掛かる声に振り返れば、そこには席に着いたばかりらしいウィルソンの姿があった。隣にはもれなくタスクの存在がある。
そうしてウィルソンは、ジャンが反応するよりも早く指を鳴らし、タスクに手を差し出す。すると、先ほどと同様に胸元から一つの石を取り出した。白く濁る魔石であり、それは魔力の伝達が限りなく高い種類の――入試試験で渡されたソレだった。
彼はそれをジャンに見せびらかすように掲げ、一つの文句を垂れる。
「魔術と魔法は、同じ魔力を根源にして行われるのが難点だな。そう考えれば、お前が受けた試験はとんでもねェザルだったって事がわかる」
魔法を持つ人間は、体内から魔力を生み出す能力を持つ。それは遺伝的なものでは無く、仮に親が魔法を持っていたとしても子が持たぬことがあるし、その逆もある。
魔術は体外にある魔力を利用して発現する。
それが魔法と魔術の、まず一つ目の大きな違いだった。
ならば特殊な施術によって、体内から魔力が感知されればそれは魔法が扱える事になった――そういう判断をしても良いのかといえば、違う。後天的な覚醒（めざ）めは本来無いとされるからこそ、魔法は魔法たらしめているのであり、そして施術によって行われる”魔法”は決して”魔術”の域を出ることが出来ない。

「ど、どういうことなんですか？」
「まあ、まずは服を脱げ。簡単に説明してやる」

「俺のした施術は、つまり肉体に魔力を流して、常時発動を待機状態（スタンドバイ）にしておく副作用がある。もっとも、そうしとかないと魔方陣を発動させた際に、肉体に慣れない魔力介入が激痛を与えるし、発動も随分遅くなっちまうからな」
半裸になって座るジャンの背中を、ウィルソンは撫でながらそう説明した。
引き締まった身体。効率的についた筋肉。その背は広く、頼もしくさえ感じられた。
少年と言うには立派すぎる肉体だ。これから実戦を幾度となくかわしていく中で、彼がどう成長するのか――彼自身が本来目的とする、商業的なものではない己個人の欲望とは別に、純粋に興味が湧いた。
彼は性格的に好敵手（ライバル）というモノを今後多く作っていくかも知れないが、あるいは一人もできないかも知れない。その代わりに出来るのは頼りになる友人あるいは、師だ。
人には、特に強くあろうという人間には良い師が重要になる。
この環境ではあまり望めなかったからこそ、ウィルソンは興味をひいた彼に少しばかりの手助けといった風に手を出したが、それが吉と出たか凶と出たか、学校に入学した今、それを推し量ることはできない。
ウィルソンは背中に強く念じて、己の右掌に刻んだ魔方陣を発動させる。ジャン同様に肉体内でくすぶる魔力が燃えて、陣が陣たる役割を果たさせてくれる。
「少し、我慢しろ」
掌が光熱を孕む。眩く輝き、その手はまるで太陽を掴んでいるのではないかと、炎を宿しているのではないかと錯覚するほどの熱を帯びた。

「ぐぅっ？！　な、何を――っ！？」

輝きが灼熱を放ち、肉を焼き肌を焦がす。するとジャンの背中に刻まれた魔方陣の一部がソレに飲まれ、魔方陣は一瞬にして”出来損ない”へと姿を変えた。

ウィルソンが手を離し、即座に氷嚢を準備していたタスクがそれを布で包み、患部に優しく押し当てる。

「な、何を、したんですか……？」

怯えたような声色で、背中越しにウィルソンを眺める。それと共に、体内から呼気と共に何かが抜けていくのを感じていた。体力が減ったわけではなく、それはまるで筋力トレーニングの直後のように、身体に力が入らなくなっていくようだった。

全身から力が抜ける。身体は不抜けたように体勢を維持できず、ジャンは思わず円卓に寄りかかった。

「お前の魔方陣を破壊した。こいつは刻まれてる限り半永久的に魔術を作動させる一方で、一部でも破損すれば使い物にならなくなるっつー、脆弱な存在でな。一部を肉体ごと焼ききった。安心しろ、怪我も治すし、魔方陣もお前にあわせて適度に強化しておいてやる」

「そ、それで、その目的は？」

「お前の肉体から力が抜けた。そういった自覚はあるか？」

言われてから、手を目の前に挙げれば無意識に震えてしまう疲労感と、全身にべったりとまとわりついた気持ちの悪い不安、無力感を認識する。

ジャンが声もなく頷くと、

「それはお前の身体から魔力が抜けた証拠だ。本来、肉体に潜む魔力が魔術の作動と共に爆発的に増幅されて肉体を強化するんだ。肉体内にあるだけで、発動時よりは程度も低いが、そういった影響は及ぼされている」

つまり、身体から魔力が失せた時点で、それが本来のジャンの身体能力となったわけである。

もっとも、その疲労感はやけどのせいもあるし、魔力を体内から

排出するという事象に体力を随分と要した事が原因になる。それは自然な現象なので、それを抑えることはできないから、初めてであれば戸惑うのも仕方がない。

「……つまり」

ごくり、とジャンはツバを飲む。

喉が鳴った。

「今、その魔石を持てば……本当に魔法を持っているか、否かが、分かるんですね……？」

「ああ、その通りだ」

ウィルソンはタスクに魔石を手渡し、彼女は口を閉ざしたまま、ジャンの前にやってきた。

《――どうぞ、お取りください》

掌を上に向け、魔石はその上に鎮座する。一方的に渡すのではなく、手に取る、否、の選択肢を彼女は与えていた。

ここで取らずに、拒否して逃げることも出来る。腰抜けだと罵倒されても、まだ自分の中には魔法が存在するかも知れないと信じることが出来る。それが僅かであろうとも。

しかし、意を決して取って、そこで真実を見て、これからの生き方を変えることも出来る。どのみち魔法を自覚し扱えるようになっていることが卒業の条件だ。魔方陣ではその存在を露呈してしまうし、隠し通して騎士になることはできない。

仮にその試験を合格（スルー）して騎士になったとして、そんなインチキな存在で騎士になれて、自分が心から喜べるはずもない。常に自分で魂に刻んだその卑怯（チート）の烙印を抱きながら、ビクビクして生きていくことになる。

それでいいのか？

満足できるのならば――おれは、この魔石を手に取らない。

手をこまねく中でも、ウィルソンは、タスクは、ヴェンは、イワヤはそれを促さないし、煽らなかった。

鼓動が高鳴る。

頬が、紅く熱を持つのを自覚した。
「お、おれは……」
思わずタスクを見上げた。
誰かに背中を押して欲しい。この石を掴む、真実を見る勇気を、少しでいいから分けて欲しい――無意識にそう考えた刹那に、ラァビの言葉が蘇った。
甘ったれるなと、彼女は言った。
きっかけは自分で作るものだとも。
その言葉で、ジャンは己の精神的な脆弱を垣間見た。認識した。理解した。納得した。自覚した。
――そうだ。おれは、もう自分で決めるんだ。
「頼む……！」
手を伸ばす。腕は情けなく、小刻みに震えていたが――それでも力強く、彼女の掌にある魔石を力強く掴み上げた。

帰郷　？

「サニー、お誕生日おめでとう！」

それから数時間。観光から戻ってきたサニーらを迎えたのは、ホールに掲げられた横断幕に描かれたそんな歓迎だった。

円卓、長机には無数の料理が並ぶ。西洋、東洋、中華。種類は多様に、そして豪華絢爛に。ホールの中央に配置された円卓には、三段はあろうかという巨大なケーキがそびえ立っていた。チョコレートで出来たプレートには、ホワイトチョコレートのソースで”ハッピーバースデイ”と描かれて、ケーキ本体にはイチゴのソースでニコニコマークが彼女を迎えていた。

盛大な歓迎。鉱夫共の酒臭い「おめでとう」「おかえり」の嵐に困惑していたサニーは、暫くあっけに取られていたが、その全てが自身に向けられた好意だという事を理解して、思わず涙腺を崩壊させた。

クロコの胸に抱きつくようにして泣き、それから改めて始まる誕生会。

レイミィは興味津々に料理に足を運び、アオイはいつプレゼント披露会が行われるのか辺りをうかがいながらソワソワとあたりに目を配る。クロコはサニーと共にケーキを食べて――。

「やっぱり、大人ね？」

壁際で、ヴェンが強引に手渡してきた料理が山盛りになる皿を片付けていると、ふとクリスティンが簡単なドレス姿でやってきた。主役をとらない慎ましい、水色のワンピースドレスは、年甲斐もなく膝から下の生足を披露させていた。

「ええ、サニーも昔よりずっと大人っぽくなりましたよ」

ジャンは変わらず微笑んだまま、そう言った。

するとクリスは指を振り、違うわよ、と少し不平そうに否定する。

「キミよ、ジャンくん。だってアナタ、すごくうれしそうな顔して

る。サニーちゃんのこと、自分のことみたいに嬉しいんでしょ？」
「ええ、妹がこんなに歓迎されてると嬉しいですよ。これまでがキツかった分、サニーには幸せになってほしいもんです」
「でも、サニーちゃんが年上になっちゃったわね。ジャンくんは兄じゃなくて、弟くんだわね？」
「はは、そこ言われると痛いですね。でもまあ、サニーが慕ってくれる限り、おれはどうあれ兄で居るつもりです」
照れくさそうに頭を掻くと、クリスは笑みを絶やさぬまま、じっとジャンを見つめる。
その視線に気づいたジャンは思わずどきりと胸を高鳴らせたが、それでも平常心を保って、疑問を呈した。
「なんです？」
「いやあ……わたしも、もうちょっと若ければっていう、ね。ちょっと本気でそう、思っちゃったかも」
「クリスさんは随分若いですよ。見た目なんて、まだ二十代前半もいいとこなじゃないですか」
「それじゃあ、もしわたしがジャンくんに迫ったら、いいの？　責任取れるの？　三八のおばさんなのに？」
「おれはまだ未熟だし、自分のことで手一杯だから断言はできませんが……クリスさんなら誰だって大丈夫ですよ」
「うわー、なにげにスルーされたー」
子供っぽくそう嘆きながら頭を振って髪を振り乱し、喧噪の中に飛び込んでいった。
よくわからない言動にジャンは軽く肩をすくめてから、肉片を一つ口に含んだ。
――料理を咀嚼している時は良い。表情が無くなっても、誰かに取り立てて指摘されることが無いからだ。
ジャンはお祭り騒ぎの室内を眺めながら、一つ嘆息する。
どうにも食欲がわかない。舌が鈍くなっているのか、料理の味をよく感じられない。

やはり気にしないふりをしていても――どうやら心底ショックらしい。

――果たして魔石は輝かなかった。

鈍くすら、体内にほんのかすかに残っているだろうと考えていた魔力すら感知されていなかった。

ジャン・スティールは魔法を持たない。

すなわち、騎士になる資格がない。

それが判然とした。

他国へとわたり市民権を得ればまだ話は別だが、アレスハイム以外で騎士になるつもりはさらさら無い。

だから、この後自分はどうするか……それを、自分で決めなければならない。

既に学校には二年分の学費を支払ってあるから皆が卒業するまでは籍を置くつもりだし、学べることは全て学ぶ予定だが、問題はその後だ。

ジャンはそこまで考えて、逆に、と思った。

かえって、早めにそれを知ることが出来てよかったかも知れない。

覚悟する時間があって、せかされること無く、時間的圧迫感に迫られること無く自分自身で決められて、逆に良かったのだ。

意地汚く料理を頬張るウィルソン。変わらず酒を浴びるように飲む面々に、それにしかめっ面をしながらも笑う寮母。

少なくともこの空間は幸福に包まれているのだ。

個人的な感情で、自身の不満をあたりに振りまく自己満足で、これを台無しにするわけにはいかない。

だからジャンは頬の筋肉を張って、料理を飲み下すとすかさず微笑んでみせた。

――ヴェンが言うには、既にこの歳になれば魔法を持つ人間はそれを自覚し、ある程度は扱えるという話だ。

魔法を後天的に覚醒することは今まで例が無いらしいし、ヴェンは行く先がなければいつでも来いとも言ってくれた。

ジャンは背中のやけどの鈍い痛みを意識しながら、もう一度だけ深く嘆息した。

《その程度で落ち込んでいるということは、挫折を知らない小童ですね》

無自覚にうなだれていたのだろう。気がつけば、自分の視線が足元に向いている事に気がついた。

顔をあげれば、グラスになみなみと注がれた黄褐色の液体。もしかしてオイルなのでは、と少し期待してみたが、香りからしてまず酒だった。

《蒸留酒（テキーラ）は嫌いです。麦酒（ビール）はもっと嫌いです》

彼女は言いながら、手の中のグラスをジャンに押し付ける。

彼はそれに苦笑しながら受け取り、仕方なく半分ほどを一気に飲み下した。

胸が焼け、頭の芯がじんと熱くなる。眼球が圧迫されたように息苦しくなって、血液の温度が数度ばかり高くなったかのように全身が熱を帯びた。

これがやけ酒か。

思いながら、タスクへと視線を戻す。

《ついでにこれも渡しましょう》

彼女は、ジャンの強張った笑顔が少しだけ緩んだところを確認してから、ついで鞘に収まったジャンの剣を手渡した。

「……なんです、これは？」

《一般にブロードソードと呼ばれる種類の剣ですね。幅広剣と呼ばれていますが、レイピアが主だった際に生まれた故に、レイピアよりは幅広だ。なら幅広剣（ブロードソード）だ、ということからそう名付けられたという説が主で――》

「違います、違います。この剣じゃなくて、これを渡した意図を聞きたいんですが……」

《ちょっと表に出ろ小僧試してやんよ》

低い声で脅し掛かるように、彼女は深く一歩踏み込んで睨みつけ

る。

そうしてまた退くと、変わらぬ無表情で背を向けた。

《というのが主人（マスタ）の伝言です。スティール様の力量を再び推し量り、背の魔方陣を再構築するための情報を取得します》

「ああ、なるほど」

《念のために裏口から出ます。この騒ぎなら、少し騒いでも勘付かれないでしょう》

外は既に夜の帳が落とされていて、薄暗かった。何も見えぬ程ではないし、戦闘に支障は出ないだろうとジャンは判断する。

彼女が担ぐ木槌を巨大化させたようなそのトンカチは、槌の部分だけでゆうに一般的な樽ほどの大きさを有していた。

底の部分には”天”、その逆には”誅”と深く刻まれ、溝には朱漆が流されていた。

《――肉体制限（リミッター）を二〇パーセントに変更、自衛魔術の発動を全面禁止（ロック）。……武器が大木槌なのはまず謝罪しますが、これが主人（マスタ）の要望です》

「見るかぎりでは、ヴェンさんの戦闘態勢（スタイル）の模倣というようですが……」

《鋭いですね。そのとおりです。行きます》

私語もそこそこに、まるでちょっとトイレに、とでも言わんばかりの軽快さで、タスクは力強く大地を弾いていた。

柄を肩にかけ、槌を担ぐ体勢で。

《下せ――天誅！》

大木槌は、ジャンの遥か手前で振り落とされた。その質量、そして腕力が根こそぎ大地に叩きつけられて――にわかな地響き。大地震よろしく、構えているジャンの足元を大地ごと鈍く揺るがした。

すると途端に、その衝撃面から大地が盛り上がり、もぐらが地表すれすれで這うかのように、ミミズ腫れのような起伏をまっすぐジ

ャンに向けて走らせた。
高速度での機動。本能的な危機を認知して回避を目的に走り出すが、その起伏はジャンを追尾する。走りだしてもその速度を上回ることが出来ずに、やがて飛び上がろうとした足裏に、その起伏が触れた。
爆発。
火焔はなく、硝煙はない。
大地が爆ぜて土や小石が吹き荒れる。同時に、大地に叩きつけられた”あの衝撃”が、まるで足元から解き放たれたかのように接地していた左足に襲いかかった。
体勢が崩れ、にわかに背後へと押されるように吹き飛ばされる。
その最中にも、油断なく容赦せず、大木槌を横薙ぎに振るうタスクの姿が迫っていた。
「く――っ！」
発動しろ。
「振動剣（バイブレーション）っ！」
戦闘開始前より待機していた剣の紋様が輝き、まもなく魔術が作動する。するとすぐさま刃は肉眼では捉えきれぬ早さで高速振動し――大木槌に対し、その刃を接触面に押し付ける形で対処した。
それは本当に木で出来ているのか不思議に思う。
振動剣に対し、木槌は鮮やかな火花を散らして押し寄せていた。
途方も無い質量に、解放された二〇パーセントのタスクの腕力。それが合計して、どれほどの威力になるのかわからない。
それでもジャンはそれになんとか耐えていて、踏ん張る足で地面を抉りながらも、撒き散らされる火花に身を焼きながらも、木槌に押し切られることはなかった。
――そして限界が近づく。
肉体は、考えるよりも早く行動を起こす。
接触面を刃から胴に変え、振動権を解除する。そうすると抵抗は瞬く間に弱くなって、剣はその勢いに飲み込まれるが、ジャンが構

えた剣に沿うように大木槌は流れていく。
ジャンは押し出される形になるが、それを利用して数歩分を一気に跳躍して後退した。
「穿て、大地の怒り（アース・ピック）」
着地と共に、柄を両手で握って刃を大地に突き刺した。
紋様が刀身に走り、輝き、命ずるままに魔術が発動。
まもなく、ほんの僅かな時間差の後に、数歩手前のタスクへと無数の針が大地から突き出された。
が――それは柔い土だ。ジャンには、土の密度を本来の素材以上に小さくすることは出来ない。
だがそれでも、タスクは大地から突き出た土を崩し、湿り気のある土に塗れて視界を埋めた。
ジャンが走りだす。共に下方から袈裟に剣を振り上げれば、それでもジャンの気配を察知して大木槌を振り下ろす。堅い接触面と鋼鉄の刃が触れて火花が散り、ジャンの足は思わず止まる。
怯まずに一閃。傍若無人な一打が対応する。火花が瞬き、衝撃が両腕に伝播する。肩に鈍い痛みが走り、疲弊に筋肉が悲鳴を上げた。
全身が軋む。
構わず剣を振るえば、容赦なく大木槌が見出した隙を潰してしまう。
一閃、一撃。一進後退の攻防は、傍から見ればタスクが簡単にジャンをあしらっているだけに見えるだろう。
斬撃を振るう一定の間隔が、僅かに遅れた。
それ故に大木槌は頭上から、何の抵抗も無く障害も無く振り下ろされる。
「――っ！」
狙ったわけではなかった。
だが彼は気づいたのだ。
目の前には、両腕を振り上げて無防備になるタスクの姿が。
だから迷わず深く踏み込んだ。息がつまり、全身の筋肉が引き裂

けたかのような激痛が走るが。今更になって、あの衝撃によって剣に細やかなヒビが入っていることに気づいたが、彼は全てを素知らぬように無視して切り捨て。

幸運にも訪れた隙に、一撃に、全てを賭けた。

が――。

「えっ……？！」

居ない。

迫ったはずのタスクの影が、そこには無かった。変わらず頭上から大木槌は迫っていたが、前方、そして左右の視界にも彼女の姿はもちろん、影も無いし、この迫る覇気からタスクの気配だけを察知することは出来ない。

そして衝撃。

腰に鋭く突き刺さる打撃。故に体勢は崩れて、ジャンは突撃体勢のまま背中を押された形で、前のめりになり、転倒。剣を振り上げる無防備な体勢のままで両肩を大地にぶつけ、そのまま顔面を打ち付ける。

素早く身体を引き起こそうと全身に力を込めるが――振り下ろされた大木槌が、優しく背中に落とされた。

《情報提供、感謝致します》

「いえ、おれの為なんでしょう？　むしろ、お礼を言いたいのはこっちの方ですよ」

《しかしお陰で新製品の具合も良く確認できました》

「……新製品？」

コレです、と大木槌の柄を手にとって示した。今では誅の字に斜め一閃の焦げ跡が付いているが、彼女はそれさえも誇らしげに頷いた。

《天誅（ばちあたり）という名称で、魔術仕様。打ち付けた衝撃をそのまま物質を伝播して対象を被爆するまで追尾するという高性能です。ついこの間に協会（ギルド）からよこされた代物で、実験品なのですが、問題はないよ

うですね》
　呼吸は乱れること無く、ただ少しだけ声音に交じるノイズを目立たせて、彼女は続けた。
《そろそろ誕生会もお開きでしょう。予定（プログラム）では、プレゼントお披露目会は終盤です。出遅れぬように戻りましょう》
「あ、はい」
　暗がりの中で、彼女は大胆に衣服をまくり上げる。既にバストも、その引き締まった身体もあらわになっているであろうにも関わらず、先程より暗くなっているお陰か、彼女のその肢体を視ることは出来なかった。
　だが、その腹部に闇よりも深い漆黒が生まれたことだけはよくわかって——そこに大木槌が飲まれたのも、奇妙な感覚だが良くわかった。
《おまたせ致しました。では》
「はい」
　ジャンは改めて頷いて、裏口へと向かうタスクの後をついていった。

　八月二七日。
　誕生日が終わり、その翌日もコロンの街に滞在したジャン一行は、その次の日に荷物をまとめて街を後にした。
　最後までヴェンは心配気な様子だったが、魔術の施術をしてくれたウィルソン、そしてタスクはどこか含みのある笑みで別れを告げて、再開を誓った。
　その際に手渡されたのが、白く濁った魔石——ではなく、それが加工された、透き通る水晶だった。丸いそれではなく、多面体（プリズム）。陽に掲げるだけでそれは鮮やかに陽光を反射させるが、それが目的ではない。
　魔力を込めれば、それがプリズムを所有するウィルソンへと音声（こえ）

が繋がる仕様だ。簡易な通信装置というものらしいが、それはアレスハイムにはない技術だった。

彼はその際に「いい商売相手になってくれることを願う」と、これからのジャンの成功を祈る言葉を告げてくれた。それは未来を失ったに等しいジャンにとっては非常に嬉しく、また彼の知らぬ世界の人間故にどこか希望すらもたらしてくれる言葉だった。

「ねえ、ジャン？」

金貨二枚の価値が本当にあるのか定かではないペンダントを胸に提げるサニーは、上目遣いで声をかけてきた。ペンダントには、何らかの魔術仕様があるのを願うだけである。

「ん、どうした？」

レイミィも、アオイも、クロコも、どこか満ち足りたような表情で同行し、言葉を交わしている。今回の事が、どうあれ彼女らにもタメになったのだろう。

「これ、ありがとね？」

「ああ、気にすんな。そう高いもんじゃないし」

そう口にすると、財布の重量を否応無しに最認識させられる。

ここに来る前に買っておいた、本当に安物の宝石はクリスティンに渡してきたが――妙にはしゃがれたので、なにやらかえって申し訳ないことをしたような気持ちだ。まさか、処分ついでにプレゼントされたとは思ってもいまい。

「大切にするね！」

「ああ、大事にしてくれ」

「私ね、もっともっと頑張って、絶対一緒にジャンと騎士になるから」

「……ああ、そうだな。だけど、あんまり無茶はだめだぞ？」

「わかってるって。ジャンもだよ」

「そうだな」

――背中の魔方陣は元に戻り、そして右肘に小さな魔方陣を刻まれた。

それは、背中の魔術を制御するコツを教えてくれるとウィルソンは言っていたし、右肘の魔方陣単体でも、使いようによっては持て余すとも言っていた。

それがどんなシロモノなのかは伝えられなかったし、試すヒマも無かったが……魔法を持たぬことを今更になって自覚したジャンに対する、ウィルソンなりの配慮なのだろう。

――腰の剣も、既にあの使い慣れた幅広剣（ブロードソード）では無くなってしまった。

それよりも大型の、一メートル以上ある刀身に、長めの柄が特徴的な雑種剣（バスタードソード）。魔石によって加工されたそれはブロードソード同様に魔術の使用を可能にしてくれたが、ブロードソードのように軽々とふることはできない。重さ故に、下手をすればそれに振り回される可能性があるのだ。

そして携える位置は腰から背中へ。

与えられたそれらはまるで、ジャンの心に開いてしまった穴を満たしてくれるようだった。そしてそれは非常に嬉しいことで、喜ばしかった。それだけで十分だった。

それでも、もう気にしていないと口にしても、胸の奥にある喪失感は拭われない。

漠然とした将来への不安が生まれたのだ。まず進路を新たにしなければ、その穴が縮まることはないかも知れない。

「一緒に、騎士に……か」

「ん？　なに？」

消え入るようなつぶやきに反応したサニーが顔を向ける。

ジャンは、なんでもないと首を振った。

――騎士に、一緒になると決めたから彼女がついてきた。

だが、ならばこれからどうなる？　下手にジャンについてくるより、その資質を騎士になって活かすほうがかえって安全なのではないか？

騙してまで、彼女の本来の望みを利用して騎士という枠に押し入

れて――良いのだろうか。
「……っ」
駄目だ。その回答を、今の感情で出す訳にはいかない。
この件についてはじっくり考える必要があるのだ。
ジャンは大きく首を振って、胸いっぱいに息を吸い込んだ。
「がんばろうな、サニー」
軽く頭を叩いて撫でると、彼女はくすぐったそうに肩をすくめて、首をかしげた。
「うんっ！」
元気の良い返事は鮮やかに蒼く晴れ渡る空に反響（こだま）して、それにレイミィたちは楽しげに笑って――。
夏休みのイベントは、結局その帰郷が最後となって、終わりを告げた。

（荘厳、かな。やっぱり、見る立場が違うとこうも思う所が変わるものか……）

アレスハイムの門をくぐった少年は、足を止めて遠目にも見える城を眺めた。肩から提げるショルダーバッグは膨れるほど荷物が入っていて、また左手に握る革張りのスーツケースは彼の腕には過負担なほどに重かった。

ラック・アンは今日からこの国で暮らすことになる。隣国ということだが街の外観は大きく異なるし、文化も少し違う部分もあるだろう。もっとも、その多くは重なっている部分もあるだろうが――見知らぬ土地。母国の領内ですら無いここでは、孤立と同意義だ。

「騎士さん達にゃ話が通ってる。お前のフォローは頼もしいくらいにしてくれる筈だ。これからお前が世話になるのは、その地図にある通り。一人暮らしになるだろうが、慣れるまでは手伝ってくれるそうだ」

漆黒の外套を纏う男――ドラゴは気怠そうに言いながら、門の手前で白墨（チョーク）で魔方陣を描く。

そうして書き終えてから、一仕事を終えたように息を吐いた。

「学校は明日からだそうだな。距離が距離だけに、あんま遊びにこれないが……年末には迎えに来る。年越しくらい、母国でやりたいだろ？」

「色々とお世話になります。ぼくの療養のために、こんなにわざわざ……」

「ま、大切な戦力だからな。今じゃそうでもないが、いつ大きな戦いがあるかわからんし。それに、”あんなこと”があるまでは大切な教え子だったしな？」

「はい。その節は――」

「いまさらいらねえよ。ソレじゃ、達者でな」

ドラゴは気さくに軽く手を上げると、まもなく彼が足元に置く魔方陣がにわかに輝き始めて……。

魔方陣が円柱状に光を放つ。彼はその中に飲まれて、

「さよならです、師匠(せんせい)……！」

その光が失せれば、魔方陣の中からはドラゴの姿は跡形もなく消え失せていた。

――転移魔術。彼が行ったのはその魔術だ。現段階ではその魔術の簡易化には成功していないために、詠唱か、あるいは魔方陣の形成でしか術を発動させることができない高等魔術である。

それは実戦段階では中々に使うのは難しいものだが、こういった日常生活の助けとするには十分すぎるそれだ。

そしてまた、その魔術を扱いきれるものもそう多くはないとされている。もっとも、エルフェーヌ国内に限った話だが。

「明日から学校、か。忙しい日程だな」

これから寝食をすることになるだろう共同住宅に、明日から通う事になる学校の制服やら教科書やらが準備されているはずだ。

となれば、今日は荷物整理で一日が終えてしまうかも知れない。

しかし、エルフェーヌでは既に騎士だというのに――養成学校に入学とは。

彼は短くため息を吐いてから、考えても仕方が無いと、石灰で刻まれた魔方陣を足で踏みにじってから街へと足を運んだ。

九月一日。それは残念なことに月曜日であり、夏休みが九月を飲み込んで始業式の日時を延長させてくれることはなかった。

――くそっ、夢であって欲しかった。

ジャン・スティールは焦っていた。

そして走ってもいた。

隣にはサニーもいないし、トロスもテポンも、おなじみのメンバーは誰もいない。

夕べは、特に疲れていたというわけではなかったし、今日に備えて早く寝た。それ故にゆっくり眠ることが出来たのだ。そう、残念なほどゆっくりと、寝すぎてしまったのだ。

オクトに身体を揺さぶられて目覚めたときには既に全員が登校した時間であり、彼は完全に出遅れた形となっていた。

急げば遅刻は免れる。そんな時間に、ジャンはせめて胃に何かを入れておこうとバナナを一本咥えたまま、勢い良く家を飛び出した。

「居候なのに寝坊って……そりゃあ無いよなぁっ！」

自堕落にも程がある。

いくら雑務の手伝いをしているからとはいえ、裏で幾度ともなく渡そうとした家賃をオクトに何度も断られているとはいえ、それでもテポン一家に甘えていいというわけではない。

確かに帰郷もあったし、あれから新装備と魔方陣を試しても見た。その疲労があったせいかもしれなかったが――。

「ったく、気を引き締めなくちゃ……」

――持っていくか迷ったが、やはり身につけていくことにした木彫りのネックレスを手に取りながら、緊張に高鳴る胸を抑えて一つ息を吐いた。

右腕の肘やや上の部分から、袖は少しの所作から揺れて中身がないことを目立たせる。もう慣れたことだが、まだ朝でも外に出て居る往来の人々は、それを見ては、見てはいけない物を見てしまったように顔を背ける。彼にとって、そういった同情まがいの視線ばかりは、未だ耐え難かった。

これではまるで、自分が弱い人間のようではないか。

ふざけるのもいいかげんにして欲しいモノだ、とラックは思う。

弱ければ腕をなくして尚騎士としての再起を望まないし、わざわざ隣国まで来てそんな事をしようとは思わないはずだ。

木彫りのお守りには、剣と盾が掘られている。それは、妖精族（エルフ）の”成功祈願”の紋章だと――幼少の頃から姉として世話を焼いてく

れた幼なじみが言っていたのを思い出す。
　コレがあれば、いくら失敗したとしても最後には必ず成功すると、そう励ましてくれる言葉を思い出せば、少しだけ元気が出た。
「にしても、どれくらいゆっくり行けば良いんだろう……？」
　学校には、通常の登校時刻よりも遅めに来てくれれば良い。これから担任となる男は先日そう言ってくれた。だから彼は、本来ならばこの速度で歩いていれば遅刻確定となろう時刻に家を出ていたのだが、本当にこの時刻で良いのかわからない。
　もしかして遅すぎたのか。そう不安に思うのも、ここが彼にとって未知の土地であるためという要素があるせいかもしれない。
　――そのよそ見のせいか、不意に前方へと現れた影に対応できずに、
「うわあっ！？」
　飛び出てきた影と、正面衝突する羽目となった。

　衝撃。
　視界は白に黒に明滅し、意識が混濁する。口の中に広がる甘くも鈍い鉄の味に、口内か鼻腔から出血していることを認識した。両手は腰より後ろで大地を掴んでいて、尻は堅い地面に座り込んでいる。どうやら、尻餅を付いているらしい。
「くっ、な、何が……？」
　目を凝らして辺りを視認する。と、まもなく目に飛び込んできたのは小柄な影が倒れている光景だった。
　状況を見るに、どうやらソレとぶつかってしまったらしい。
　ここは曲がり角だ。まっすぐ進んだ先に学校があるところを――さらに、ソレが学校の制服を着ているのを見れば、どうやらこの少年も遅刻寸前で急いでいたのだろう。
　同類が居たのに少しばかりの安堵を覚えながらも、彼は立ち上がり、少年に手を差し伸べた。
「大丈夫か？　正直すまん、急ぐ……っ？！」

「いっつぅ……ったく、ちゃんと前を見て走れよばか！　くっそ……」

悪態をついて立ち上がる少年の右袖には、その中身がないらしい。ぶらりとたれて薄っぺらく揺れるそれを見て、ジャンは思わず絶句した。

まさか。

息を呑む。

転んだ拍子に外れたのか。

「お、おい大丈夫――っ？！」

駆け寄ろうとする最中で、ふと足と石畳の間に異物（イレギュラー）を認識した。

それを理解したのはそいつを強く踏み込んだ瞬間であり、バナナの皮は思いの外石畳を滑らせて、ジャンの足は自分が意図する方向とは別の方へと滑って体勢を崩し、勢い良くすっ転ぶ。

後頭部を打ち付けて、再び意識が混濁。視界内に、極彩色の光点が蚊か何かのように飛び回った。

「ぼくは大丈夫だけど……ごめん、悪いけど先に行くね。バナナさん」

後頭部を抑えて痛みに喘いでいる中で、そんな声と共に足音は遠のいていった。

――ついてない日はとことんついていない。

彼は結局遅刻をして――学校に到着した頃には、既に息も絶え絶えで死に体であった。

「ったく、今日は始業式なのに、もう始業式は終わっちまってんだぜ？」

相変わらずの派手なタテガミヘアーに加えて色黒になっているカールは、呆れたように言ってきた。不真面目な様相だというのに、しっかりと休まず来ている真面目な男――というのが、ここ最近の彼への評価だった。一度はいじめっ子だった彼だが、適度な距離を置いたお陰か、現在では良好な関係を結べている。

「確かに。だが、ジャンにしては珍しくないか？」
取り巻きとも言える黒い髪を長く伸ばした少年は、肩をすくめて言った。
ジャンは軽く笑いながら、まあな、と頷く。
「さすがに油断してたよ」
「――ったく情けない。俺に認めてもらいたいのなら、もっとシャンとしてほしいものだがな。もっとも、選ばれた一人として流石にこの俺もお前を見捨てるわけにはいかんから……」
聞きなれない声が、まるで最初から会話に参加していたかのような気軽さをもって発される。気がつけば、ジャンの机に手をついて、カールらの視線を集める男がそこに居た。
鋭い目付きに、華奢な肢体。まるで似つかわしくないその風貌に、ジャンは奇妙な既視感を覚えていた。
おれはこいつを知っている――そう考えれば、すぐに答えは記憶から引揚げられた。
「えっと、お前は……」
確か、外から魔物が数百と押し寄せてきた際に共に”見学”をした一人だ。もう一人は隣で真っ赤に燃えるような長い髪を目立たせながらも、誰も近寄らせないように殺気立たせて頭を抱えたクリィムだ。サソリの尾は、相変わらず元気そうに逆立っていた。
「よもや、忘れたとは言わせねぇぞ」
「てめー隣のクラスだろ、巣に戻って光合成でもしとけよ」
カールが、意地悪な笑みを浮かべながら彼を指さす。その先には緑色に染まり上がる短髪があって、彼はそれを葉かなにかに見立てていったのだ。
その指摘に、男は眉をしかめた。
「こっ……、まあいい。俺は、挨拶をしにきただけだ。実力の程は知らないが、名前は聞いているからな。ジャン・スティール、俺はあのレイやクランと同じような関係を築きたいと思っている――さらばだッ！」

妙に演技がかったセリフを残して、彼は結局最後まで名乗らずに勢い良く教室を出ていってしまう。
――ルーク・アルファという、どこかの特殊部隊の暗号名（コードネーム）じみた男の名前を思い出すのは、それから暫くしての事だった。

今日の日程は、これから簡単な学級活動（ホームルーム）を行なって終了だ。恐らく、後期も頑張れだとか、授業日程などの用紙を配って終わるだろう。
「えー、今日はちょっとしたお知らせがある」
だが作業服姿の担任は、ちょっと気だるげに教壇に立って告げる。
「お前らの同志がもう一人増える。お隣エルフェーヌから遠路はるばるやってきた……おぉい、入って来い」
声と共に、スライド式の扉が音を立てて開き始める。
不意の紹介にクラス内にはどよめきが走り、各々が期待にざわめき始めた。
――まず始めに、黒い革靴が教室内に侵入した。共にあらわになる、お揃いの詰襟の制服。肩肘を張る制服からでもわかるひ弱さに、肩まで伸びるやや長めの黒髪。その中性的な風貌に、おお、という感嘆が周囲から漏れた。
やがて担任の隣に立って正面を向くと、それとは別の感嘆詞が重なるように響いた。
それは、右腕の袖が不自然にひらひらと揺れていたからだ。故に、その右袖に中身がないことを知る。
やってきた転入生は、その反応に眉をしかめていた。
漆黒のように黒く暗い、吸い込まれそうな瞳。整った顔の造りは幼く、どうにも十八には見えぬ少年だ。
そしてそれは、見覚えのある顔で……。
「あっ、あいつは……！」
確か、今朝ぶつかった少年だ。
同じ遅刻少年だと思っていたが、まさか転入生だったとは。

考える間に、表情を消した少年は短く息を吐いてから、姿勢を整えた。

「今日から皆さんと同じ学び舎で勉学に励む事となりました、ラック・アンです。まだ知らないことも多くて拙い場面ばかりお見せすることになると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします」

深くお辞儀をしてから、また元の直立体勢。まず第一印象は、生真面目な少年、というものだった。が、そうそう接しにくい人間というわけではない。ジャンだけは、なんとなくそう感じていた。

「質問はないか？」

ラックに変わって、担任が言う。彼は既に鉄パイプと質素なクッションで構成された折りたたみ椅子に身を預けて、足を組んでいた。

しかしクリィムの時とは打って変わって、クラス内は静まり返ってしまっている。どうやら右腕がないという事に、異人種もヒトも同様に、自身とは違う異質な風貌、特徴に畏怖してしまったようだ。

担任は察したように軽く手をたたき、

「ラック、お前の席は……おいジャン、手を上げろ」

指示された通りに手を挙げる。

そんな事にも既視感（デジャヴ）を覚えて、ふと左横を向く。クリィムが居るのとは反対側の席には——気がつくと、いつも本を読んでいる静かな少女はそこには居らず、空席になっていた。その彼女の姿を探せば、窓際の方で、おそらく友人なのだろう少女と少年について話しているようだった。

そしてラックも、それでジャンの存在に気がついた。

彼は驚いたように目を見開いてから、ああそうか、と納得するように一つ頷く。

「あいつの隣だ。ジャンも、クリィムから良い評価をもらっている。転入生に優しくしてやれよ」

「ああ、はい」

ぶっきらぼうだった上に、少し付き合いも強引だったから嫌われているのかと思っていたが——ちらりと横を見れば、彼女は朱に染

めた頬を隠すように顔を背けた。
　可愛いところもあるんだな、とジャンは微笑むと、促されたままにやってきたラックが隣に座った。
　担任は教壇に戻り、そしてこれからの予定と、今後の日程などを掻い摘んで説明し始めた。
「まさか、キミと同じクラスだとはね」
　頬杖を付いてジャンを眺めるラックは、誰にともなくそう呟く。が、それを拾ったジャンは顔を向けて、気さくに笑った。
「おれも意外だと思ったさ。ま、よろしくな」
「いや、むしろキミは――覚えていないのか？　ぼくは、あの日の事を、誰がいたかさえも良く覚えている。キミだって……」
　――あの日。
　それはラックが利き腕を失った時の事だ。この国に逃げ込み、自らの失態で多くの異種族（モンスター）を誘い込んでしまったあの日だ。この国の騎士達の協力のお陰で全てはまるく収まったが、このアレスハイムはあの出来事を教育に活用した。上級生は実際に戦闘に参加して、下級生は見学。その中の一人が彼だと、ラックは認識していたのだが、どうにも反応の薄い彼を見て、もしかして勘違いなのかと心配になった。
　それに、騎士の話では期待の新入生（ルーキー）が居るとの話だった。そして見学に選ばれたのは、下級生の中でもその成績を高く評価されている者だと聞いたのだが――。
　勘違いならば、一体誰の事なのだろうか。ここまでが全て取り計らいなのではなかったのならば、一体。
　ラックの言葉の意図が読み取れずに首を傾げるジャンを見て、ラックは小さく肩をすぼめた。
「まあいいや。よろしく……えっと」
「ああ、ジャン・スティールだ。分からないことがあったらなんでも訊いてくれ」
「ありがとう」

――ラックの人生が変わるきっかけは、〝あの日〟からこの出会いまで続く、彼にとっての非日常がそうだった。

触手プレイ　～学校の七不思議2～

一日はまだ終わらない――ジャン・スティールは、学校が始まったからまた組合（ギルド）に疎遠になるだろうからと一つ挨拶をしてこようと考えていた。

だからトロスの誘いも、依然として何かを言いたそうにしているクリィムに心を痛めながら無視して、軽快な挨拶と共に用事があるからと先に帰ったラックを見送りながら、廊下へと出たのである。

サニーは変わらずお馴染みのメンバーで寄り合い、今ではすっかりジャンはハブられてしまっていた。カールはカールで本当に心地よいほどに適当な距離を開けてくれるから帰りを誘ってきたりはしないし、それ故に、ジャン・スティールは颯爽と昇降口までやってきたのだ。

在校生の総数が百未満だから、昇降口からバラバラと帰宅する生徒の数は決して多いというものではなかった。だが楽しそうに、夏休みの空白を埋め合うように騒ぎ立てて、あるいは笑い合って話せばざわめき喧噪がひしめくのはやはり必然だった。

――ジャン・スティールはその瞬間、にわかに時間が停止したと認識した。

「おのれ、ジャン・スティール」

数歩手前で、怨念深く呟く姿があった。

鮮血のような深紅に染まるワンピース。だというのに、彼女の腰まで伸びる髪は透き通るような銀髪だった。睨みつける瞳は琥珀。華奢な肢体は、それ故に少女然としていた。

「遊んでくれると、言ったのに」

反芻するように目をつむり、大きく息を吸い込む。そんな彼女の姿を、周囲はまるで認識はおろかそれ以前に――知覚すらしていないような風ですぐ傍を通りすぎていった。

まるで、ジャンと彼女、ノロとを繋ぐ直線上はまるで別の空間、

あるいは奇妙な隔壁によって隔てられ一切の干渉を許さぬ仕様（よう）になっているのかもしれない。そう錯覚するほどに、辺りは彼らに一切の興味を持たぬように無視を決め込んでいた。

「うそ、つき……！」

「の、ノロ……？」

「ずっと待ってた」

喉元に刃が突きつけられたかのような、明確な殺意。彼女の瞳は鋭くジャンに突き刺さり――初めて人の殺意というものを受けた彼は、その異様な感覚に指先すら動かせずに硬直してしまった。

まるで心臓を鷲掴みされているかのような不快感。それに勝る、無力感。息遣いにすら気を遣い、額から脂汗が吹き出るのを自覚する。

「許さないから」

彼女は笑った。

それは、悲しいことに初めてジャンがみた満面の笑みであり――その表情は、狂気以外の何物でもなかった。

ノロがそう告げた次の瞬間。

にわかに、足元の感覚が鈍くなる。固く踏みしめていたそこは黒く染まり、感触は腐葉土のように酷く柔い。

その感覚に、ジャンは思わずうつむいた。己の足元を確認する刹那、その地面から、不意に何かが付き上がっているのを彼は見た。鋭い四本の、棒状の異物。それはまるで各々が意思を持つように、身体にまとわりつき、その柔く軟体であるその身を最大限に活用して、ただ四本ばかりの触手は、瞬く間にジャンを簀巻きに仕立て上げた。

「な――っ！？」

「続きは、お部屋で」

そう告げる言葉を最後に、ジャンは地面の中に引きずられるのと共に、ひ弱な意識は間もなく途切れてしまった。

腐った肉を放置したような腐臭。それを部屋に撒き散らし埋め尽くしたような鋭い刺激臭が鼻腔に突き刺さり、故にジャン・スティールの意識は急浮上する。

「う……ここ、は？」

耐え切れぬ懐かしの匂いに、思わず口元を覆おうとして、両腕が何かによって拘束されていることを知る。顔を向ければ、その薄暗い空間の中で、空中に持ち上げられた己の肉体を認識した。四肢は四方から伸びる触手に掴まれ、強靭な力で引っ張り上げられている。

「ここはわたしの部屋」

気がつけば眼下で、見上げるようにジャンを眺めていたノロが告げる。

「わたしの領域（テリトリー）」

続くように、別の方向から同じ声が聞こえた。

「わたしだけの空間（ばしょ）」

同様に、その声は少なくとも視界内にいる彼女が紡いだ様子はない。

彼女の、外での活動制限時間は二時間だ。しかしこの部屋の中であればそんな制限は無いし――そもそもジャンが名付けたノロという存在が複数存在できる場所だ。否、外でもそれは可能だろうが、そうする必要は求められなかった。

少なくとも、現時点ではノロが三人いる。だが、その気になればこの部屋を埋め尽くすほどの数を出現させることが出来るに違いない。

「な、何をするつもり、なんだ……？」

『お仕置き』

声が重なった。

『わたしの気持ちを、裏切ったお仕置き』

歌でも歌うように、声音は一寸の狂いも見せずにユニゾンしていた。

「おっ――おれが、何をしたって言うんだ？」

「黙れ」「小僧」「遊んでくれると、言ったはずだ」
切り貼りでもするように、各々はそう続ける。
「遊ぶ？　そんな……」
そんな話。
そう言いかけて、そんなことを言ったような気もした――そう否定できない言葉に、ジャンは深く記憶に探りを入れた。
彼女と最後にあったのはいつだろうか。
図書館？　いや、それよりももっと最近は……。
視線を上にやり、右上にやり、キョロキョロと忙しなく動かしながら夏休みの日程を思い出す。最初はまずギルドで任務に就いたはずだ。それから、タマとノロが、ラァビと一緒にいるところを追跡してきて……。
そして帰り際に、確かに約束した。
今度遊びに行くよ、とは確かにジャンの言葉だった。
ぜったい？　と彼女は念を押した。彼はそれに頷いた。
それから一ヶ月――音沙汰もなく、現在に至る。
「くそうなんてことだ！　好きにしろ！」
おれとしたことが！　心のなかでそう叫ぶなり、彼は全身から力を抜いてなすがまま、なされるがままの準備をする。
「喜んで」
ノロが微笑んだ。
そして眼下より遥か手前の地面から勢い良く突き出る触手の切迫感を覚えて――それは間もなく股間を強打。
衝撃が垂直に脳髄まで走り、意識は強引に、肉体から引き裂かれる形で失われた。

「うおおおお――っ！？」
足元に括りつけられた触手が命綱だった。
部屋の中心から伸びるそれは、勢い良く円を描く回転を行う。故

に拘束されたジャンはそれ故に力強く振り回されていた。同じような景色が目まぐるしく回転し、眼球が圧迫されるような感覚を覚える。臓腑はすべて腹から上方向に押しやられて、血液は余すことなく頭にのぼった。

「くっ……こいつは……！」

死ぬかも知れない。

気がついたときには既にこの状態だったジャンは、その可能性を捨てきれずにいた。

いかに命乞いをするか。果たして、彼女に至ってはその選択が悪い方向へとしか進まないのではないか。

可能性は飽くまで可能性としてだが、それでもそれが存在する限りジャンを慎重にさせた。

「もっと遊ぼう」

ノロのつぶやきと共に、不意に足を拘束する触手の圧迫感が喪失した。

そしてその瞬間、解き放たれたジャンの肉体は滑空する間もなく壁に叩きつけられて——分厚く形成された肉の壁は、彼の衝撃の全てを吸収してくれるクッションとなって、勢い良く引き裂いて突撃してくる彼の身体を優しく受け止めてくれた。

「う、ふぅ……ノロ、おれを、どうしたいんだ……？」

「悪は処断する。それが、わたしの正義」

次いで、他の方向からの声が紡ぐ。

「お前が悪だ」

「これまでの経験則が、そう、確信させる」

「お前たちヒトは、わたしを」

「わたしたちを、玩具か何かと、勘違いしている」

「嘆かわしいことだ」

「万死に値する」

——またヒトがどうとかいう話か。

ジャンはその話題に、少しばかり全時代のヒトに恨みがましい情

念を抱いた。

彼女が異人種なのは一目瞭然だ。そしてこの地下に幽閉されていた事実を考えれば、そしてその身なりを見れば――さらに彼女の言葉から察するに、何らかの実験や細工がなされたのはもはや確実とも言えよう。

ノロが元からこの身体なのか、あるいは元はよりまともな外見だったのか。

出会った当初、彼女は言語を学習していた。それ故に、その学習能力の高さを認識したが――言語が変わるほどの時代とは、いったいどれほどのものなのだろうか。

異人種が、異種族がこの世界に姿を現したのは約一五〇年前。もしかしたらその最初期、あるいは、もしかしたらその”溝”から出てきた存在ではない可能性すらある。この世界発祥の、未確認生命体。小説か何かのような話だが、空の上から落ちてきた、という可能性さえ否めない。

この学校で”呪い”と定義された彼女は一体――何者なのだろうか。

彼女については改めて、調べる必要がありそうだ、が。

不意に、身体に触手が張り付いた。それは肉体を埋める肉の壁から腸絨毛よろしくうねうねと出現した無数のそれらであり、それは器用に詰襟のボタンを外し、衣服を脱がしていった。

「な、何を」

「なに、この魔方陣」

なめらかな触手捌き故に、ジャンは瞬く間に下着一枚になってしまう。四肢は再び縛られて肉壁から引きはがされた。

「肉体強化魔術（パワー・ポイント）……古臭い魔術。肘のは……ああ、そう。なるほど、理念は概ね、理解できた。すごい良い、面白い。これは、ジャンが？」

「あ、ああ、魔方陣の、ことか？　これは、ちょっと知り合いが刻んでくれてな」

「かなり出来る人。なるほど、古臭い魔術なのに、新しい考え方」
「そうか、なんだか、嬉しいな」
「ほう、なぜ？」
「おれもかなり信頼している人だからだ」
「……つまり」
右腕を掴む触手が泡立ち、ざわついたさわり心地となる。気色の悪い感触に思わず全身に鳥肌を立てたが、触手は構わず右手首を幾度ともなくさすり、そして目にも留まらぬ一閃を走らせた。
手首の薄皮が一枚引き裂かれ、鮮血が浮かび上がるようにじわりと滲んだ。触手はその患部をまたさすり、一部を隔離させ、傷口から内部へと侵入させる。
「ぐぅっ？！　な、ノロ、何を――っ！？」
薄皮一枚下を、まるで寄生虫が這うかのように腕から肩、そして深く沈んで体内へと潜り込む、吐き気を催す程の嫌悪感が全身から力を抜かせてしまう。
「わたしの魔術（ちから）を刻む――魔力でつながるから、ジャンはすごく、強くなる。それでわたしの、存在意義も生まれる」
「一石二鳥」
彼女はそう言って微笑んだ。
言葉と共に、彼が本来与えられていた魔力とは別の、より異質で刺々しいソレが混入するのが良くわかった。同じ魔力で、用途も同じだというのにこれほどまで明確に理解できるほどの魔力が存在するとは、ジャンも初めての感覚で、呼吸を乱し、鼓動を高鳴らせた。
「わたしは魔法を持たない」
――異人種のほとんどは、魔法を持つ種族だと言うのが一般的だ。授業では聞かない話だが、誰に訊いてもそう答えるだろうし、だからといってヒトが不公平だのなんだのと喚くことは無い。なぜならば、魔法や魔術の類は異人種がこの世界に現れてから活性化したからだ。
魔石の存在は元からあったし、魔術や魔法という言葉もあった。

だが現在（いま）のように、一般的に使用され利用されているわけではなく、古めかしい儀式や呪術のような、そういった存在であったのだ。

だから少なくともこの大陸では、そういった技術や魔術などの考えが文明に影響を与えている。

一方で、溝が無い大陸ではまるで別世界とも言えるほどに、別方向に文明を進化させていた。いつか”中佐殿”が手にしていた拳銃がその粋である。

「わたしの」

「魔術は、おそらく、図書館のようにある」

「だから」

と、もう一人が言った。

「わたしがあげるのは、一番簡単で、ジャンの名前に相応しい、魔術」

「盗む（スティール）……『禁断の果実』を精製する魔術だけど、その効果は――」

身体の中が熱くなる。酷く熱を持って、頭がぼーっとし始めた。まるで身体が拒絶反応を起こして、体内に潜り込んだあの寄生虫を殺そうとしているようだったが、その甲斐無く、体内での動きは果たして停止した。

身体の表面には魔方陣も何も浮かび上がらないが、それでも身体の中で、どこかに魔方陣は刻まれてしまったのかも知れない。

ウィルソンから与えられた肉体強化の術に、加えて右肘の――魔力を体外に放出する系統の魔術。これは、背中の魔方陣が否応なしに身体の中に魔力を取り込んでくる副作用を利用した画期的な魔術だった。

魔力を純粋な形で放出することはもちろん、その放出した魔力を剣に注いで魔術を強化することも可能。さらに今はまだジャン自身思いつかないが、その汎用性は高いとウィルソン自身言っていたし、彼が掌に刻んだ魔方陣と同様のものだとも言っていた。

ならばお墨付きだと、笑って答えたのが未だ印象的だったが――今、ノロによって与えられた魔術は明らかなまでに不明瞭で不安要

因他ならない。
体内に刻まれたのならば、その副作用が直接命を揺るがすことになることだってある。
だというのに、眼下のノロは恍惚の表情で、うわついた顔で、のぼせ上がったようにジャンを眺めて講釈を垂れていた。
「――飽くまで『禁断の果実』。”齧った”回数はジャンの技量によって、変わる。おそらく、三度が限界。よく覚えておいて欲しい」
「わたしと、ジャンはつながってる」
「もっと、信頼出来るようになったら、わたしの事も、ちゃんと話すから」
「わたしを、信じて」
「おねがい」
輪唱するように、懇願する声は多方向から聞こえてきた。
――しばらくすると熱も冷めて、体調は嘘のように元に戻る。
禁断の果実は認識たものを理解たままに――云々。聞こえたのはそこまでだったが、そのセリフをもう一度訊き返す余裕は無かった。
体調は全快だが、疲弊は肉体に襲いかかっていたのだ。気分は既に布団の中。今にでも横になりたいという願望が、ジャン・スティールの全てとなっていた。
だが、もう二度と適当な返事はできない。
ジャンは胸いっぱいに臭気を吸い込んで、力強く頷いた。
「おれはノロを信じる。もう二度と裏切らない」
縁をきることも出来たのかも知れない。だがそうしなかった理由は――妙な魔術を埋めこまれたからということもあるが――やはり男として、少女の気持ちを裏切るということはしたくなかったからだ。
そのせいで現在の、こんな惨状を導いてしまったのかも知れないが……今は考えないでおこう。
「それなら、いい」
「禁断の果実は、ジャンの持つ最後の手段。ジャンは、魔法を持っ

てないから」
「――っ！　やっぱり、分かったか？」
「うん、でも、わたしだけ。普通はわからない。魔方陣で、身体に魔力を流してるし」
「そうか。……まあ、おれもこれから遊びに来るが、ノロも遊びに来てくれよ？　タマも最近寂しがってるぜ」
「そうする……御意。上まで送る」
「ああ、たの――」
む。そう口にしようとするよりも早く、今度は勢い良く彼を拘束した触手はそのまま天井に衝突して、幾度目になるか、彼の意識は消失した。

「ジャン、おいジャーン！　起きてよ！」
――夕方になっても帰ってこないジャンを心配して探しに来たタマは、学校の門手前で横たわる彼の姿を発見した。身体に染み付く腐臭からノロの所に行っていたことはすぐ分かったが、共に滲み出る異質な魔力を感知した彼女は、彼の身にただならぬ事があったのをすぐに察した。
だからすぐに人型になって身体を揺さぶり、頬を叩いて意識を呼び覚ます。
その甲斐もあってか、瞼がぴくりと痙攣して、静かだった呼吸が大きく、そして胸も見てすぐわかるように上下した。
おそらく、ノロが暴走したのだろう。
彼が夏休みの間も、たまに自暴自棄のように暴れまわることがあった。特に足を掴んで振り回されるのは――高所恐怖症である彼女にとっては、拷問以外の何物でもなかった。あれは良い思い出と言うか、もはやトラウマだ。
だが、それもこれもジャンがノロの所に遊びに行かなかったのが原因だ。呑気にギルドであのウサギといちゃいちゃしながら仕事を

して、帰郷なんかしているからこんな事になったのだ。
「ははっ、ざまあみろ！」
考えていると、不満が爆発した。
だから思い切り肉球で顔面を殴りつけながら叫ぶと、ぼふっ、と肉球に吐息がかかった。
「うぅ、な、何をするんだタマ……」
意識が回復。それを確認次第、彼女はすぐさまネコの姿に戻っていく。
「どうせノロに痛い目見たんでしょ。ざまあないわね」
何が起きているのか分からぬ顔であたりを見渡し、半身を起こす。彼はそれから何かを思い出したように身体を見回して、服を掴み、安堵したように息を吐いた。
それから体を起こし、近くに落ちている手提げかばんを拾い上げた。
「ははっ、身から出た錆ってやつだ」
「まったく、そんなんじゃ、ヘンな女に引っかかっても知らないわよ？」
「もう引っかかってるけどな」
促すわけでもなく歩き出すと、タマはそのまま飛び上がって肩に乗る。
帰路につきながら冗談めかしく言ってみると、鋭い爪が走らずに、頬に突き刺さった。まるで強盗が人質にとって脅すような感覚だ。
「もう、あんたなんか知らない」
「――にしても」
最近は自分の身体に、知らない力ばかりが与えられ始めている。
肉体強化魔術（パワー・ポイント）に、魔力放出（アウト・ルック）。これは慣れれば一対として使いこなすことが出来るだろう。
だが新しくもらったバスタードソードも、いい加減稽古をつけなければ実戦で使えない。あの重さと間合いには戸惑うものばかりだ。加えて、ブロードソードより細身であるから魔力伝達も早く、慣れ

ていた”時間差”が大きく異なってしまう。予想より、遥かに早いのだ。

そして未知の力となる『禁断の果実』。これについては長らく触れずに生活しようと考えているが、理解程度はしておかないといけないだろう。本当に”奥の手”を出さざるをえない状況になった時に、せめてどう使うのか、どういった効果を及ぼすのかを覚えていなければ、それはかえって自分の足を引っ張り死につなげる。

使わずに生き延びる事も出来るかもしれないが――どうせ持っている力ならば、それがどんなじゃじゃ馬だろうと、その力を使って生き延びたい。

彼はそうとも考えて、胸に手を当てた。

「おれはこんな調子で、大丈夫かね」

騎士にはなれない――もしかしたら、王は全てを知っていて見守っているのかも知れない。そう考えられるが、出来るだけ楽観はしたくなかった。

「大丈夫よ、ジャンなら。どっちにしろ、今考えて、頭の中がまとまる？」

「んー、そうなんだよな。でも、考えてないと不安でさ」

「まったく」

ふぅ、と呆れたようにタマは息を吐いて、その暖かく柔らかい毛をジャンに擦りつけた。細く目をつむり、軽く濡れた鼻先が頬に当たる。どうやら顔を擦りつけているようだった。

「頑張り過ぎなのよ。たまにはガス抜きでもしなくちゃ。学校でも、せっかくの夏休みでも、ほとんど休んで無かったじゃない」

「いや、でも楽しかったし」

「楽しくても身体は疲れるの。だから今日だって寝坊したんでしょ？」

「む……確かに」

「ま、明日も学校だから休めないだろうけど……たまには、他人（ひと）のことより自分の心配もなさいってことよ」

「ああ、そうだな」

――その日がきっかけになったのかは、正直ジャンにも分からない。

だが少なくともその日以降から、放課後まれに、大地や床から触手が突き出てゆらめいているという噂が出始めたのだった。

そしてそういった日に、ジャンが地下へとタマを連れて遊びに行くのは、殆ど日課になっていた。

不穏な空気

「スティール、どうした？　今日は珍しく、ご機嫌斜めか」

戦術学の授業中、担当教員が不在のため、その日は自習になっていた。課題は一枚の用紙（プリント）だけで、似たような状況下をいくつも連ねた所に、指定された装備や部隊を生還させる、ないし任務を遂行するためどう動けば良いのか――それを文章として綴るだけだった。

開始三〇分もすれば課題は終了して、ヒマを持て余した折に、クリィムがそう話しかけてきた。

監督教員は既に十分も前に眠りこけている。だから、騒々しいというわけではないが、それでも教室内はいささかにぎやかだった。

「……？　質問の意図がわからんが、特にそういったわけではないぞ。どうしてだ？」

怪訝な表情で返すと、そうか、と呟くように頷いた。

鮮血のような朱の髪を軽く払って、頬杖をつく。視線は依然としてジャンを捉えていた。

「いや、常より刺々しいような気がしてな。まあ、ここ一週間ほどがそうだったから、ただ虫の居所が悪いというわけではなさそうだったが」

「刺々しい？」

「ああ、そうか――知らないのか――。異人種がとりわけ魔術やそれらに秀でていることは知っているな？」

それは個々の能力が抜群に高いから、というわけではなく、本質的に備える潜在的な能力のようなものなのだ。それは現在、魔術、魔法の発祥や起源を”溝の向こう側”と規定しているからであり、事実、この世界よりもより濃密にそれらが関わっているからだった。

故に異人種の方が魔術、魔法の熟練度は高いし、魔力の活用法も、魔石などの魔術仕様の物品への加工もそれらの方が随分と上手い。

ヒトが持つ限界と異人種が持つ限界とはそれぞれ異なるし、それは

仕方が無いことだった。
「まあな」
「勘違いされては困るんだが、お前は隣の席だから、常にその体内で息づいている魔力を感じていた。意識などしていない。私の研ぎすまされた意識が、高ぶり渦巻く魔力を感知するのだ」
彼女は平静を装っているつもりなのだろう。得意げにふふんと鼻を鳴らす彼女だが、その頬が淡く染まり始めているのが良く分かった。なぜ自分で墓穴を掘れるのだろうかと感心しながら眺めていると、彼女はひとつ咳払いをしてから、続けた。
「この最近は、その魔力がやや変わっていた。もっとも、魔力の”質”なんてものはその日の体調や感情によって異なるものだ。そう大きく異質なものになるわけではないが……そういう事だ」
「――でも、ジャンの魔力は他より少ないし、感じにくくない？それくらい抑えられてるってことだろうけど……意識しないと、ぼくでも難しいけど」
そういった無粋なセリフは、会話をしている反対方向からやってきた。
ラック・アンは他意なくそう告げて、ジャンが顔を向ければ愛想を見せるようにはにかんだ。
「お、おいお前。わ、私がスティールを意識していると言いたいのか？」
身を乗り出すように、異議申し立てる勢いで彼女が訊く。白々しくラックは肩をすくめた。
「別に？」
「……なあラック、一つ訊きたいことがあるんだけどさ」
息巻くクリィムは既に尾を逆立たせて、その短気さを見事に表すように取っ組みかかろうとするのを遮るように、ジャンは口を挟む。
視線はクリィムからジャンへと移り、彼はなんだい？　と頷いた。
「やっぱり、魔法を持っていると魔力の絶対量には個人差があるのか？」

「まあね。魔法を使えば魔力を消耗するし、体外から吸収するのは効率が悪いし。だから魔力が回復するのを待つのが一番早いんだけど、それにも個人差がある。そしてキミのように、通常生活での体内魔力を抑えて生活することによって、戦闘と日常とのメリハリをつけられる。そうすれば、魔力の回復や、絶対量も増える兆しにある……と言われている。ま、ぼくも他のヘタなやり方よりは、効率的な方法だとは思うけどね」

「そうか……。ありがとう、参考になったよ」

「どういたしまして。ついでに、ぼくも訊きたいことがあるんだ。この問題なんだけどさ――」

ただクリィムの怒りをいさめるだけだった会話は、いつしか波長のあった者同士での話し合いに変わってしまう。

転入してきてから間もなくこんな仲になった二人に、クリィムは短く息を吐いた。

最近はなんだか蔑ろにされているような気がする。特に省かれているだとか、無視されているというわけではないのだが――まるで普通のお友達のような関係だ。

いや、それでいいのだ。

そうでなければならないのだ。

だが、妙な欲求が胸の中に渦巻いているのを、彼女は知っている。

彼女が師と仰いだ者から受けた愛情、その個人にとっては自分が特別な存在で居られた、そういった意味で必要とされたあの感覚。

長らく森の中の生活で忘れていたが、ヒトとの、異人種（なかま）との生活でそれを思い出してしまったのだ。

自分が社会の歯車として生きる生活。自分が必要とされる世界。

ここに来て、最近では上手くやっていけていると自覚しているし、ジャンもそう認めてくれている。

だがそれだけだ。

それ以上がない。

しかし自分がそれを、ジャン・スティールに求めているのかと言

えば――わからないし、仮にそうだとしても認めたくはない。彼にそうする理由がないし、惹かれる要因も無かった。

「ったく、不抜けている」

彼女は自戒するように、頬をつねってから首を振る。

「意識を変えねば、な」

いつまで続くか分からないこの生活を、少しでも自分にとって快適にできるよう。そして今では自身の保護者となるエクレルの思惑通りの生活を。

面倒な話だが、それができていなければ命はない。

こいつらが卒業するまであと一年と半分――果たして耐え切れるか。

彼女はにわかな不安を覚えながら、授業終了を告げる鐘の音を聞いた。

同時刻。

――アレスハイム領、エルフェーヌ領その境目で落ち合う二人の男が居た。

砂粒の地。常夏の地。色気のない黄色がかった灰色の世界で、二人は共に白い外套を頭までかぶって居た。

「わざわざこんな所に呼び出して、いったいなんのつもりだ？」

まだ若い男の声が、イラついたように発される。それにわざとらしく怯えたように、もう一人がたじろいだ。

「そんなに怒らなくたっていいだろう。何も、ここで貴男を殺すというわけでも、脅すというわけでもないのですから」

「ったく。砂漠中にあるエルフェーヌならともかく、アレスハイムの気候は安定しているんだ。この暑さは慣れてないから、俺にとっては酷く厳しいものになっている」

外套をはためかせ、肌と衣服の間に新鮮な空気を送り入れる。だが熱された大気は、それ故に熱風となってしまう。逆効果だった。

男は短く舌打ちをして、やれやれと立ち直る。目の前の、耳の長い男は可笑しそうに肩をすくめた。
「相変わらず、堪え性のない人ですね」
「そんな話をしにきたわけじゃ、ないんだろ？」
「まったく、貴男という人間（ひと）は無粋ですね。久方ぶりに再開したのですから、まずそれを宿そうという趣はないのですか」
「このくそ暑い中で、何を言ってやがる。……お前も相変わらずだな」
折れたように息を吐いて首を振る。
腰に備えた革製の水袋を手にとって口につけ、一口分だけ水分を摂取してから大きく息を吐いた。
「さ、本題に入ろうや」
近くの木陰（オアシス）を親指で促すのを見て、男は頷いた。

「いくらか楽になった」
頭に被る外套をはずして、黒と黄とが混在する髪の男は、エメラルドグリーンの瞳で色味のない景色を眺めてつぶやいた。
「なら良かった」
妖精族（エルフ）の男は、その細身を包む外套を軽く広げるようにはだけさせて、短く息を吐いた。
「それで、本題なのですが――ヤギュウ帝国、というものを知っていますか？」
「ヤギュウ……ああ、この大陸の遥か北方にある海岸線の。良く知っているさ、連中は土足で人様の領内に踏み込んだ上に、村一つを壊滅させたんだ。はぐれた部隊の独断だっていうのが公式的な発表で、金で解決した。だが連中は挑発したのさ、溝近くで最近国力を増大させている俺たちを。今のうちに植民地か支配下か、そういうのにしておこうとな」
「今我が国で来客として迎えております」
「――ッ！？　まさか、貴様ら……？」

今すぐこの男を殺そうという意思はない。殴ろうというつもりさえない。だが反射的に作ってしまった握りこぶしに、彼は少しだけ気まずそうな顔をした。

歯を噛み締め、胸いっぱいに息を吸い込む。昂ぶる心を落ち着かせて、腕に入れた力を、感情によって増幅した魔力を意識的に抑え込んだ。

「彼らは近々、アレスハイムに攻め込む算段をしているようです。協力しなければ排除する。出来れば戦線協定を結んで欲しいが、不可能ならば補給基地として役割を果たして欲しい、と」

「……随分と本格的だな。理由はやはり、”溝”による地理的なものか？」

「恐らくは。我々も無論、アレスハイムに協力を致しますが……この大陸で、どこまで根回しがされているかが不鮮明で。私もこれから忙しくなりますよ」

「連中の評判は悪い。軍事力は”あの時”を見るに中々にシンドそうだが……ったく、よりにもよってこんな時に、か」

「何か特別に都合が合わないのですか？」

「いや。ただ聞いた話だが、養成学校は豊作らしくてな。上級生下級生共に、期待できる者がクラスに一人は居るらしい。それに、お宅の騎士もウチに来ているらしいしな」

男はまたうんざりしたように肩を落とした。息を吐き捨て、厄介だと言わんばかりに顔をしかめた。

――国同士の争いなんて、いつ以来だろうか。

少なくとも、溝から異人種らが来てからはそんな余裕なんて無かったから、一五〇年は平和だったのかもしれない。

もっとも、この大陸では、の話だが。

しかしまさか、アレスハイムがよりにもよって狙われるとは――愚かな選択をしたものだ。彼は考えて、つくづくヤギュウに同情する。

まず異種族（モンスター）を相手にしてどれほどの部隊数が残るだろうか。

そして疲弊しきった所で、精鋭部隊たる騎士団が畳み掛ける。これで終わりだ。後はない。確実に、作戦なんて言えないくらいの簡単な段取りで終わる。

異種族という自然の異形なる雑兵が、異種族戦に慣れていない兵たちを叩いてくれる。ただでさえ血の気が多い愚かな連中は、異種族というものに対して付き合おうとすら考えなかった連中は、自然淘汰よろしく殲滅されれば良い。

だが問題は、国交についてだ。

恐らくその作戦が実行されれば、アレスハイムがどれほど取り繕うとも、ヤギュウは一方的な嫌悪感を催すだろう。当分は、まともなやりとりができないことを覚悟する必要がありそうだ。

「なるほどな。だが、確定していない以上、想定としてしか作戦を立てられないな」

「情報が入り次第、早馬を走らせます」

「ああ、助かる。というか――お前はこんな事をして、国家叛逆にはならないのか？」

男が言えば、彼は驚いたように呆然と男を見つめてから、気が抜けたように笑った。

何か、間違ったことでも言ったのかと妙な羞恥心に駆られて思わず視線を外すと、すかさず彼は口を開いた。

「いえ、エルフェーヌにはそんな法律が無いですし――残念ながら、ヤギュウには交友関係は無いんですよね。アレスハイムには様々な支援をしてもらいましたが、距離的にもヤギュウは……」

言わずもがな、と肩をすくめる。

確かに、と男は背にしていた木から離れて、砂粒の海を眺めては、ため息をついた。

「……っ、ユーリアをよこせば良かったと、今更心底思っている」

舌を鳴らして、首を振る。

男は外套を頭にかぶって、背中を見せたまま、エルフェーヌの外交官へと手をふった。

「お気をつけて」
――これで建前上、気安くアレスハイムと関われなくなったわけだ。
馬も無く魔術も無く、その身一つで歩いて帰っていく男を見ながら、彼は現状を認識した。
エルフェーヌはヤギュウに力添えする以外の選択がない。国力がそう強いわけではない上に、いくら騎士を実力重視で選んだとしても、国自体が小さければ立ち向かえない。
ヤギュウは、単純な軍事力ではアレスハイムを上回っている。この大陸では随一と言っても過言ではないのだ。
だから、いくらああは言っても、ヤギュウには協力する。もっとも、前線に出るわけではないからそう気重になるわけではないが、彼らの気持ちを裏切るようで胸が痛いのには変わりがない。
「まったく。少しは平和を、満喫しようとは考えられないのですかね」
やれやれと肩をすくめて、彼も自国へと足を向けた。
――そんな表面下のやりとりは、その後もあと”数度だけ”続く事になる。

再検査

ある日の昼下がり。

親しみなれた団長の言葉に、意味が分からないといった様子で肩をすくめるようにして翼を広げ、鳥人（ハルピュイア）のアエロは眉をしかめて口を開く。

「正気ですか？」

怒りをはらんだような声音は、狭い会議室に響き渡った。

それは少なくとも上官に対する態度ではなかった。睨みつけ、気をつけすら解いている気安い立ち方は国が国であれば処罰対象にすらなり得たソレだ。もし――ちょうど話題に出ていたヤギュウ帝国のように軍事国家であったなら、即座に怒号と共に組み伏せられていたことだろう。

だが、このアレスハイムでの軍とは飽くまで自衛手段でしか無く、軍内部での取り決まりはそう厳しいものではない。

だから上官下官の違いといえば、その鎧や制服の胸につける称号くらいのものだろう。が、彼らが基本的に行動する場所ではそれすら身につけていないという現状を顧みれば、殆ど自由、というのが多くの者の見解だった。

動きにくく、実用性もなさそうな装飾だらけの華麗な鎧を着こむ男は、無粋な質問だと言いたげに眉をしかめ目をつむり、刈りこまれた短髪を撫でるように手を伸ばした。

「現在考え得る状況で、もっとも最悪の展開を避けられる作戦だ」

「そんなもの、そんなお馬鹿さん達は勝手にぶっ潰しときゃいいんですよ。”溝起源種（モンスター）”にぐっぷり喰われればいいんです」

それに、とこめかみに青白い血管を浮かび上がらせて、ライトグリーンの髪を苛立たしく羽毛の先で掻き上げて、歯を剥いて食ってかかる。

「そんな実験部隊のような連中……そこになぜ”一年”が入ってい

るのです――ッ！？」

――既にヤギュウの一件が騎士団、さらに戦地での役割は戦闘支援を主とする警ら兵の部隊長に情報が通達された現在。各々には特別な命令が下されず、事態の進展までは通常業務を課されたままだったが、現在アエロは、己が所属する第三騎士団団長から一つの命を下されていた。

それは騎士養成学校で目覚しい成績を残す生徒を選別し、緊急事態の為の臨時訓練を行えとの事だ。さらに実戦に限りなく近い状況を作り出すために、異種族が巣食う森にて訓練を行わなければならないらしい。

あらゆる状況を再現し、少年兵が如き戦歴を与えよというのが、一番の目的だった。

そして、今回の予期される侵攻は、以前の異種族侵攻時のように”教育”に使用する。つまり先と同様に学校からの生徒で部隊を構成し、教育区域と割り当てた区画に前線で戦闘する騎士団が部隊数を調節しながらそこへと部隊を流し込む。

彼らの戦闘は、そこで行われる予定だった。

――と言っても、対峙するのは息巻いて駆けてくるヤギュウではない。

予定されている戦闘相手は紛れも無く異種族だった。

砂漠を渡りアレスハイムに来るためには、遠回りしない限り確実に森を通過することになる。

アレスハイムはそれを利用して、多くの異種族をその地点に集中させておく作戦を立てたのだ。そして早々苦戦し始めるであおるヤギュウに対し、なんだどうしたと素知らぬ顔で小隊規模で巡回する騎士団が応戦。つまり自分でかけた罠に嵌めた獲物を、自らで助けてやるのだ。

自作自演も良いところだと、アエロはつくづく思う。

だがアレスハイムは、ヤギュウの侵攻については一切の情報を与えられていないというのが相手の認識だ。あらゆる手段を用いて知

っている筈だと理解していても、証拠がない。
だから、ヤギュウは一方的にアレスハイムに”借り”を作ることになるだろう。
それが、現在挙がっている中で最も平和的な作戦だった。
次点に挙がっているのは、通常通り殲滅するといったものだ。しかしどちらにせよ、期待され部隊に所属することになる生徒の役割は変わらない。相手が人間になるか、はたまた異種族になるかの違いだけだった。
「将来、このアレスハイムに利となる人材は丁重に成長させる。機会があれば、戦争さえも経験したほうがいい。今回は、”あの村”の生き残りも体よく居るらしいしな」
「あの村……まさか、あのユーリアさんが珍しく、八つ当たりするくらい怒ってたって言う……ヤギュウの偵察部隊が襲った村の事ですか？」
「ああ。その生き残り二名が、騎士を目指している。嬉しいことではないか？」
「ジャン・スティールにサニー・ベルガモット……その中でも、ジャン・スティールは以前の異種族侵攻の際にも選ばれていました」
「戦闘面では頭ひとつ抜けているらしいな。秘める魔法によって、その特性も、今後の成長も大きく方向性が変わってくるはずだが……ジャン・スティール、名簿にはその欄だけ未だ”不明”の印が押されている」
もう半年が過ぎたというのに、だ。
団長は呆れたとでも言うように肩をすぼめる。
「少年のためにも、我々のためにも、もう一度検査をした方が良いのではないか？　半年の間型通りの訓練を重ねてきて、環境に刺激されて、少しはその己と言うものがわかってきた筈だ」
「ええ、そうですね。検討しておきます」
頷き、一礼。そうして背を向ける彼女へと、嘆息混じりに団長は言った。

「出来れば近い内に頼む。これは君の個人的感情が左右できる場面ではないことを、良く理解してくれなければ困るからな」

授業終了の鐘の音が鳴り、担当教員が明日には特別何があるわけではないと告げて、一日の教育課程（カリキュラム）が終了する。

各々は気の抜けた声を出して席から立ち、荷物を纏めて教室を後にする。

ジャンも同様だった。

「なあスティール、一緒に帰らないか？」

と、クリィムが誘う。彼女も随分と素直になって、今ではそれに加えてラックとトロスとで帰り道を一緒に歩んでいた。

「ああ、喜んで」

「……喜ばれても困るんだがな」

気安く頬を赤らめて、横顔を見せる。

ジャンはそれに軽く笑い、間もなく二人も合流し、教室を抜ける――すると、対面の窓際に立っている甲冑姿の男を、ジャンは捉えていた。そして男もまた、待っていたかのようにジャンだけを見て、壁に寄りかかっていた身体を引き剥がし、立ち直る。帯剣したままであったが、敵意もなく、どこか使命感に駆られたような面持ちで、立ち止まるジャンへと一歩前に出た。

「ジャン・スティールで間違いないな。悪いが、少し時間をくれないか」

言われるがままに連れてこられたのは、それでも学校の敷地内だった。

ちょうど校舎裏にあたる、焼却炉や”ノロの地下室”などがある場所。そこから程なく歩いた所にある、小さな納屋のような建造物。小奇麗な鉄筋造りの白い小屋だ。

促されて中へと入ると、どうやら武器庫らしい。壁には無数の剣

や槍が並び、そして扉があるが、恐らくその向こう側には防具が同じように備えられているのだろう。
ジャンが中へ入るが、ここまで案内した警ら兵らしき男は出入り口で足を止めたまま。そしてその理由を知るのは、室内中央に置かれたテーブルに肘を置き、椅子に腰を落とした一人の女性が居たのを認識してからだった。
両手のあるべき箇所には鮮やかな緑の羽毛。それは鳥の翼であり、下半身さえも鳥のソレである彼女は鳥人族と呼ばれる異人種だった。
「アエロ……さん？」
「あら」
と彼女は驚いたように、そして嬉しげに微笑んだ。
「名前を覚えてくれてるなんて嬉しいわねえ……！」
「ええ、名前くらいなら。それで、おれを呼び出したってのは、またなんでですか？　用があったなら、また前みたいに飛んできてくれても良かったんですが」
「あはは、そんな事まで覚えてるの？　もう、恥ずかしいなあ……それに、今日は仕事でね」
「仕事？」
彼が席について問う間に、彼女はポケットをまさぐって一つの石を取り出した。
それはもはや見慣れた、白濁色の魔石だった。魔力伝導率がこの上無く高いとされている種類の鉱物であり、主に武器や装飾品に加工され、魔方陣を刻んだり、あるいは魔術の紋様を刻んだりして魔術仕様へと精錬する事で、戦闘用にも扱えるすぐれモノだ。
以前ウィルソンから渡された多面体（プリズム）も、それを器用に加工した一種である。
彼女はそれをテーブルの上に置くと、気軽く気安い彼女らしからず表情をしかめ、気まずいようにジャンから少しだけ視線を逸らしてうつむいた。
「別に、ジャンくんの資質を疑っているわけじゃないのよ。気を悪

くしたら、ごめんなさい。だけど上から――適性検査の再検査要請が出ていてね。再検査の場合は、君が持っている魔術の刻印か、魔方陣を見せてもらわなければならないんだけど……ある、かな？」

その言葉に、ジャンは呼吸の仕方を忘れたように息を止めた。

いつか来るとは思っていた。だがそれは、卒業間近だと無根拠にそう予測していた。

しかしそれは思っていたよりも早すぎたのだ。

自身が魔法を持たぬことを自覚してから、まだ一ヶ月と経過していない。まさか、同時に彼女らもそれを知り、確信を持つために再検査などを行おうとしているのだろうか。

もしここで魔法の有無が判然として、その処遇はどうなる？　入学を許可したのは学校側だ。国だ。だが、どう処分するかも学校側、国だ。こちらが……ジャン・スティールが不正をしたと判断するに違いない。

ならどうなる。逮捕して、独房に押し入れて……この時点では、まだなんの機密も情報も手に入れられていない。ならばそう罪が重くなるはずもないだろう。だが、この学校を追い出されるのは確実――。

「……ジャンくん？」

そこまで考えて、止めていた息を勢い良く吐き出して、胸を抑えながら肩を激しく上下させ、呼吸する。

声をかけられて我に返った。

それに怪訝そうな表情で、アエロが続ける。

「どうしたの、体調でも悪かった？」

脂汗がにじむ額を拭いながら、ジャンは背もたれに預けていた身体を起こし、座り直す。

感づかれないように深く息を吸い込んで、アエロを見据えた。

「いや、今日は戦闘訓練があったんで、ちょっど疲れてただけですよ」

「あら……それじゃあ、また後日にした方がいいかしら？」

「ああ、いえ。大丈夫です、問題ないです」
「本当に？　別に急ぎというわけじゃないから――」
「気にしないでください。ほんとに、ちょっとぼーっとしてただけなんで」
食い気味に遮ると、少し驚いたように目を大きくして、そう、と顔に微笑みを湛えて頷いた。
「なら、始めようか」
ジャンにはそれが、どうしようもなく死刑宣告に聞こえて仕方がなかった。

自己申告だったが、ジャン・スティールは思いの外素直に肢体を晒した。
腹には内なる筋肉が表面にまで浮かび上がり、六つに割れているのが良く分かった。図太いとは言えないが、がっしりと筋肉がついた対の腕。筋張った首に、衣服を脱げばあらわになる、割合に大きい肩口。
筋肉質な身体があらわになる一方で、同時に彼の肉体に”意外にも”刻まれていた魔方陣を、彼女は発見する羽目になっていた。
魔術は、そう詳しくない方である。だがそれは昔ながらの、古典的な魔方陣として有名なものであるのを、アエロは知っていた。
ジャンの背中に広く刻まれる魔方陣。小難しい魔法文字（ルーン）に、特殊な配置の紋様。そして力の象徴たる剣が交差する柄。
それは見紛う事無く、分かる。
肉体強化魔術（パワー・ポイント）と呼ばれるそれは、肉体に魔力を流しこんで強制的に干渉、増幅し、肉体の総てを活性化させる強化魔術だ。本能的に制御している力を解放するに等しいそれらは、故に肉体に高負担となる。
だからと言えるが、その為に最近ではあまり見ないそれだった。
しかし、経歴を見るに彼は六年ほど鉱山で働いているのだ。恐らく、崩落などから身を守るために、それを刻むことを義務とされて

いたのかもしれない。
「なるほど、ね」
彼女は頷きながら、次いで右肘に同様に刻まれる魔方陣へと視線を移した。
直立不動で、頷きさえしないジャンはただ目をつむり、瞑想でもしているかのように微動だにしない。
眠っているのだろうか――アエロは思いながら、軽く屈んだ。
「これは……？」
見たことのない形の陣だ。
どこかの魔術師のオリジナルだろうか。
しかしこんな箇所に、迷いなく魔方陣を刻むとなれば――これをしたのは、随分と手だれだろう。魔術については門外漢とまでは行かぬが、それでも他よりやや疎い彼女でもそう認識できた。
「これは、体内の魔力を体外へと放出するための魔方陣です」
つぶやきを拾い、ジャンが答える。
「そう」
納得し、そして背中のそれと関連性があるのだろう造りに、頷いた。
「それで」
彼女はそこで一度止め、咳払いをしてから続ける。
ジャンは思わず肩を少しだけ弾ませたが、アエロは構わず言った。
「君は、魔法についての自覚はあるの？　あるのだとしたら――」
どんな系統の魔法かしら。
彼女は無情に口を動かした。
具現化系か。あるいは属性を持ったそれらか。転移か、分解・再構築系か、錬成か、はたまた未だ現れぬ未知の魔法（ちから）か。
ジャンはツバを飲み下し、喉を鳴らす。
額から流れた汗が頬を伝う感覚が、己の研ぎすまされた感覚を刺激する。
いつか――ラックは、ジャンの体内の魔力は抑えこまれているか

ら少ないと感じるのだと言った。
だがそれは間違いだ。
肉体強化魔術を使用しない限り、体内に残されている魔力は限りなく少ないのだ。だから、少ないと感じるのは当然だし、抑えこむ以前に絶対量がまず無いのだ。あの期待は、まっすぐにジャンの胸に突き刺さっていた。
「自覚は、あります」
「そう。それは、どんな――」
「おれには魔法がない。その自覚が、あります」
彼女の返しを許さぬように再び遮り、ジャンは振り返る。そんな不意気味の行動にあっけに取られたアエロへと、ジャンは再び見据え、悲観とも失意ともつかぬ感情の入り混じった表情（かお）で、繰り返した。
「おれには魔法がありません。魔石が反応したのは、肉体強化魔術（パワー・ポイント）が肉体に魔力を注いだからです」
逃げ場など無い。
ここで偽る意味はない。
仮に分岐点があったとするならば――おれにとってにそれは、今なんだ。
ここで逃げて、おれはまた選択を誰かに委ねて、誰かに促されて生きることはしたくない。
おれはおれが決める。
無いものはないし、あるものはある。
だったら、おれはおれの中にある力だけで生きていく。
ただ突き進む――それだけだ。
汗はひき、表情には余裕が戻ってくる。
それとは対照的に、彼が発した言葉を、理解できぬといったように硬直するアエロがあった。
「魔法が、ない……？　ど、どういう事？」
彼女を横目に、ジャンは脱いだ服を着直していく。そうしながら、

簡単に答えてやった。
「そのままの意味ですよ。どんな処罰でも、おれは甘んじます」
「ちょっと待って、この学校は、魔法を持つことがまず受験資格の一つだったはずよね？」
「ええ」
詰襟の白い学生服を着こみ、ボタンを締める。
「だけど、魔法がない」
「魔石は、おれの持つ魔術によって体内に蓄えられた魔力に反応しただけですからね」
だが、それが妙に滑稽に思えてしまって、ジャンはホックまで締めてから、そのすべてを外して全面を開放した。すると中に着る、輸入品の綿生地のワイシャツがあらわになった。
「……前例が無いわ」
それは失望の意を孕んで漏れた言葉ではなかった。
単純な驚愕だった。
そんな事例もあるのかという、思わぬ発想に純粋なまでに驚いていた。
そうか、この魔術にはそういった使い方まであるのか――という驚きと同時に、それをしれっと答えてみせるジャンに、不信感を抱く。
その様子はまるで、バレてしまっては仕方ないと開き直るそれに等しかった。
ならば、意図的にここまでを過ごしていたのか？　あわ良くば、魔法を持たぬまま騎士になろうと。その高い戦闘能力に驕って？
彼はそんな……それほどまでの”クズ”だったのか。
眉をしかめ、ジャンを見る。すると視線は交錯し、蔑みの感情を持つ視線を受けて、ジャンは肩をすくめた。
彼はそのまま、手提げのカバンを手に取り、ついで白濁色の魔石を手にとってみる。
それは相変わらず、何の属性もない、純粋に魔力だけを感知した

”透明の輝き”を放っていた。
短い嘆息の後、再びアエロへと向き直る。魔石を手渡せば、それは彼女の羽毛の中で淡い緑色の輝きを漏らし始めていた。
「おれは、国の選択に甘んじます。おれは、おれがしたことの責任くらいはとるつもりだから」
そうそう大げさな言い方になってしまったが――見ようによれば、国を騙したのだ。
なんらかの処罰があってもおかしくはない。
ましてや、この学校が国の軍事力に直線関係してくるような施設だからなおさらだ。
ジャンは飽くまで表情を消し、アエロの横を通り抜ける。その所作、顔つきには――初めて会った時のような気さくさや、あのこっちまで恥ずかしくなるような初々しさはない。それは既に、決意した男のものだった。
少年の部分は一切無く、青年としてもその精神は研ぎ澄まされていた。
――アエロの意識が己の思考から外れたのは、背後で扉が閉まる音が、小さくしてからだった。

ガス抜き

アエロは、まるで突然重大な秘密を暴露されたかのように、詰所に戻ってもその頭の中では物事の整理がつかぬままだった。

だから一先ず報告書を書こうと思うが、混乱しているままではまともに文章が成り立たず、彼女は心底困っていた――その折に、団長が顔を出してきた。

今日のうちに再検査を行うということは既に伝わっているから、彼女は彼女なりに、しどろもどろではあったが、相談でもするように総てを吐露した。団長はカウンセラーよろしく頷き、肯定し、受容する。そうして、状況を改めて説明して彼女自身も落ち着き始めた頃、同様に団長も事態の大体の全容が見えてきたのだ。

つまり、それはごく単純な結論で――ジャン・スティールは魔法を持たず、つまり本来の受験資格を持たずに養成学校に入学したというものだった。

そしてそれが判然とした時、その問題は既にある一つの”事例（ケース）”として、彼らの間で取り扱われることになる。

――夜も更け、サニーにおやすみと告げて部屋を後にしたジャンは、そのまま自室に向かうでもなく、少も躊躇う様子も無く階段を静かに降りていった。

普段着のままで、足音一つ立てずに玄関の前に立つ。昂ぶる感情が、腕に伝播して思わず震えたが、彼は構わず強引にドアノブを掴み、ひねり上げた。

「どこかに出かけるの？」

背後から気配もなく声をかけられる。だが不思議と驚くことはなく、まるで予期されていた出来事のようにジャンは動きを止めて、自然に振り向いた。

暗がりの中にある小さな影。それはテポンのものだった。
「ええ、眠れないんで、夜の散歩でもと思って。テポンさんもどうです？」
訊いたのは、本気で誘ったわけではない。
彼女がこれに乗ってこないと確信してのことだ。そして同時に、下手に勘ぐられないようにした配慮でもある。
「いや、もう寝るけどね。ただ明日も学校だから、あんまり夜遊びは感心しないわよ？」
「はは、わかってますって。一時間もすれば戻ってきますよ」
「そうなの？　ま、それじゃあいってらっしゃい」
「ええ、行ってきます」
軽く手を上げ、挨拶に応じた後、再びドアノブを捻って扉を押し開けた。

月明かりに照らされる石畳の往来は、昼間とは打って変わった物静かな様子に、ジャンは新鮮さを感じていた。人通りは少なく、またそのほとんどは警ら兵のそれである。
ジャンは足早になる己を抑えることは出来ず、そして気がつけば走りだしていた。景色が早送りになって背後へと流されていく。闇の中、不鮮明な視界の中で構わず突っ込んでいく無防備なままでありながら、ジャンは既に他者への配慮や己へ降りかかる危険など、その一切を無視していた。
「めざ……めろ……っ！」
胸の奥底から、感情のままに言葉が吐き出される。
体内で渦巻く魔力がにわかに膨張して、背中の魔方陣が熱を持つように、淡く輝き始めた。
「発現（めざ）、めろ――っ！！」
背部の衣服がはじけ飛び、それと同時に背後へと虹色の光臨が幾重にも重なって溢れ、魔方陣の輝きはその中心を貫いて――置き去りにされた。

ジャンは肉体の強化を自覚すると間もなく大腿筋を収縮させて、力強く大地を弾く。空間を切り裂いて垂直に跳び上がるその肉体は、いとも簡単に建造物の屋根へと至り、着地と共に膝を折り曲げて衝撃を殺す。

「くっ、そ……っ！」

屋根を弾き、他の建物へと。さらに次へ、次へ。風を纏い、闇の中に迸る一閃の輝きと化してジャン・スティールは宵闇を切り裂いた。

やがて目前に、その屋根よりもやや高い外壁が現れた。

だが止まる訳にはいかない。

止まれば、この壁を飛び越えられなくなる——決意する間に、その超加速した肉体は、百メートル近く離れる建造物の、最後の屋根の先端へと迫っていた。

「おれは、なんで——」

後悔するはずはないと思っていた。

だが実際に全てをさらけ出してみれば、なんだこの醜態は。胸を締め付けるこの苦しみに耐え切れずに家を飛び出して暴走するなんてのは、最早言うまでもなく始末に負えない。どうしようもなく精神は脆弱で、成長したと思っていた己は錯覚だったのだ。

「はじけろ……はじけろぉっ！」

右肘の布がはじけ飛ぶ。暴走するように渦巻く体内の魔力は、まるで桶に貯めた水が小さな穴から吹き出るように掌中へと集中し、魔方陣が制御するように右腕に纏われた。やがて可及的速やかに体内の半分以上のそれらが体外へと放出された頃、ジャンの姿勢は限りなく前かがみであり、そしてその右拳は、既に屋根の端を狙って振り下ろされていた。

「——魔力放出（アウト・ルック）……っ！」

腕にまとわりついていた魔力は、その言葉と共に拳に移行、集中。そしてそれが頑強な人造石へと触れるか否かの刹那、魔力は全ての存在を拒絶するように——爆発。人造石の一部は爆ぜて破片を宙に

弾き、拳と屋根とに圧縮された魔力の衝撃が、容易くジャンの身体を吹き飛ばした。

空高く、拳を振り下ろした前屈体勢のままで、無防備なまでに空を舞う。それはただ吹き飛ばされているだけだったが、再び右肘の魔方陣から魔力が溢れれば、体勢を整えて推進する。それは確かな滑空となって、やがて眼下に迫った外壁に、ジャンは足を伸ばした。

魔力放出を遮断し、体内に残った魔力で再び肉体を活性化させる。勢いによって、足裏にある確かな感触は、滑るようにして背後へと送られてしまう。だがジャンは構わず、そのまま僅かに腰を落とすと、それまでと同様に足場を蹴り飛ばし、空を切り裂き月に届かんばかりに、高く、己の理想とした己よりも遥かに高く、飛び上がった。

その瞬間だけは、ジャン・スティールという自分を忘れることができていた。

「はぁ……っ、はぁ……っ――おれは、なんで、おれは……！」

街から遠く離れた草原で、ジャンは足を止める。全身の筋肉はズタズタに裂けてしまったように激痛を覚え、関節、骨は悲鳴を上げるように軋んでいた。

身体はもう限界だった。

立ち上がれば、生まれたての子馬のように膝がガクガクと小刻みに震え、体勢を維持できない。心臓は今にも破裂してしまいそうなほどに鼓動を繰り返し、汗に濡れた服は絞れる程に水気をはらんでいた。

どれほど走ってきたのか覚えていない。

もう魔力も無いから、歩いて帰っても朝方になってしまうだろう。

だが、もうそれもどうでもよかった。

――腕を振り上げ、全身全霊を込めて大地を殴る。鈍い打撃音を鳴らすだけで、大地はえぐれず、拳に鋭い痛みが走るだけの無意味で虚無な行為だった。しかし、それでも腹の奥底で吐き出されるこ

と無く溜まっていた怒りが、にわかに緩和されたような気がした。
こんな八つ当たりは彼自身、初めてのことだったのだ。
今までは、何があっても耐えてきた。我慢してきた。そうすれば、いつのまにか忘れているからそれで十分だったのだ。
しかし今は違う。もう我慢もできないし、耐えられない。
もしあの時、再検査を拒否して、あるいは誤魔化していれば……
アエロならば、騙し切れていたかも知れなかったのに。
――なぜ口にした。
自問自答は、その行為に対する後悔の深さを表すように、既に幾度も繰り返されていたものだった。
――なんで、なんでおれは、自分のプライドなんかのために……！
「くそっ！」
また地面を殴れば、小石が皮膚を裂いて突き刺さる。息を殺して呻くが、ジャンはそれでもまだ地面を殴り続けていた。
「なんでおれには」
村を壊滅させられて、それでも命を助けられたから必死に生きてきた。体を鍛えて、自分で金を稼いで、それでようやく念願が叶おうとしていたのだ。夢は既に、手が届く位置にまで迫っていた。
しかし、無に、水泡に帰した。最終的にそうしたのは、自分の手によって、だ。
「なんで、どうしてよりによって……」
あれほどの苦痛に耐えてきたのに。
おれだって、弱かったわけじゃない。自分だけが不幸だと嘆くわけじゃない。だが少しくらいは、せめて自分が目指した場所に立てる”権利”くらいは、平等にあっても良いのではないかと、思っていただけだ。
現実は非情だ。
たかが、魔法がないだけで。
それがないだけで、ジャン・スティールの夢は、望みは、救いはいとも簡単に潰えてしまった。

「おれには、魔法がないんだよ……っ！」

最後の一撃とも言える、体力の総てを出し尽くす殴打。大地はびくともせず、傷一つない。己の無力さを再確認させてくれるそれが、むしろ清々しくさえ感じていた。

――こんなに感情的になったのは久しぶりだ。

草原に横たえて、無数に星が散らばる夜空を見上げながら、胸いっぱいに吸い込んだ息を吐き出した。

外気に触れて蒸発する汗が、感じる冷気が熱した肉体に程良く心地よい。

静かに目を閉じて、何もかもが空っぽになった身体を感じながら、全細胞に針を突き刺したような痛みを覚えながら、されどそれさえも気持ちよく感じていた。

自分はどうしようもない。

他者からの期待や評価は、所詮上辺のものにすぎない。しかしそれは、誰しもがそうであるはずだ。つまり、他者の前で自分がどう取り繕えるのか、どう体裁を整えられているのかが、他者にとっての自分の実力だ。

もういい。

明日は学校を休もう。

アエロだって、まさか明日までに処遇を決定させるはずがない。あの顔を見るかぎりでは、彼女自身も戸惑っている様子だったから、一週間位は待ってくれるだろう。

騎士になれないのならば――少し、世界でも回ってみようか。その為には組合（ギルド）の仕事で資金を貯める必要がある。

それに、サニーだってもう十九だというのに、独り立ちができていない。おれが居なくても大丈夫な位には慣らしておこうか――なんだ、思っていたよりも、騎士を目指さなくても忙しいじゃないか。

ジャンは無自覚に、口元が緩んでいたことに気がついた。

汗だか涙だか分からぬ液体が蒸発して、顔の熱が引いていく。

もう身体を鍛えた意味も、魔方陣を刻んだ意味もなくなった。

ジャンは静かに目をつむり、自然にその身全てをまかせて、闇の中に意識を沈め始めていた。

「――こっちの方か？」

「――ああ、確かに。少なくともオレはこっちから声を聞いた」

静寂に支配されていた空間は、不意に紡がれたその声音によって破られる。

身体を起こそうとすると、既に始まっているその筋肉痛やにわかな関節症によって激痛が走る。痛みに喘いで身体は草原に沈み、足音は、気配は、話し声が、如実に近づいているのが良く分かった。

今、ジャンにあるものは何も無い。

それ故に研ぎ澄まされた五感が、今更になって奇妙な二人組を捉えていた。

しかし、仮に一方的に相手を察知し構えられたとしても、動けなければそこに優位性などは存在しない。

「ん……、おい」

「ああ」

やがて、為すすべもなく、立派な鎧を着込む二人の男は低い声で示しあった後、ほとんど同時に剣を抜いて構えた。

草原に、半身だけ起こして横たえるジャンへと敵意むき出しで現れた二名の男に、彼は素直に両手をあげて無抵抗の意を示す。

見なれない鎧だと、ジャンはまず思った。

流線形の肩当ては外側に向かうほど細く伸びて鋭利になる。幾枚ものプレートを重ねたような甲冑はまだ新しく、脚甲の膝部には鋭くとがった棘が、そして足甲の先端も同様に尖る。

そして羽織る黒い外套の背には国章が刺繍されているが、ジャンの位置からではそれを見ることは出来なかった。

「何者だ？　俺たちがここに来ることを知っていて……そうか、罠か」

「ちょっ……な、なに言ってんだよ、あんた。罠？　こんな見晴ら

しの良い所で、待ち伏せなんてするわけないだろうが」
　柄には見事な装飾の剣。月明かりに照らされる顔は、まだ若い男のそれだったが、表情に同様も何も無いのを見れば、やはり修羅を経験し場数を踏んでいることが分かった。
　ならば軍兵か、あるいは騎士か。
　しかし、どうみてもエルフェーヌのそれではない。だとしたら、こんな夜遅くにやってくるのはどこの人間だ？
「方角からして、アレスハイムの人間か。まだガキだな、こんな所で何をしていた？」
　男が冷静に、冷徹に訊いた。
　――熱していた意識が瞬く間に鎮静とした。捨てかけていた思考を掴み直して短く一呼吸を置いて、彼は自身の状況を再認識しながら、己の存在が如何に国に不利益を、迷惑を被らせるかを考えながら、口を動かした。
「ええ、そうです。少し嫌なことがあって、走って気分を紛らわせていただけですよ」
　そこに嘘、偽りはない。
　少し表情を引きつらせて、怯えているという様子を見せながら、内心では面倒な事になったと、胸の奥から息を吐き捨てていた。
「実は俺たちは隠密任務訓練でな。誰にも発見されずに街に戻らなければならなかったんだ」
（――声のした方向へと自分から近づいておいて何を言っていやがる）
「そうなんですか」
　しかも、訓練ならばそこまで闖入者に不審がる必要もない筈だ。客観的に見れば、彼らのほうが不審であるのは明らかなのだから、そのセリフが欺瞞であるのは明らかだった。
　ならば、何者だ？　隠密任務、というのは近いか、恐らくそのとおりということなのだろう。
　だとすれば、偵察か。

（敵国……？）

政治の話は得意ではないジャンは、そこいらについての察しは鈍かった。

現在、アレスハイムには敵対国家は存在しない。貿易や技術の共同開発などで多くの国と関わっているが、どれもこれもが建前上は少なくとも友好的であるし、面と向かって嫌悪を示す国は”今のところ”は存在しない。

それに近しい国とすればやはりヤギュウ帝国だが――やはりそれを、ジャンが知る由もない。

「ああ、だからお前に見つかったという事実を処理しなけりゃ、俺たちは教官からこっぴどく叱られちまうんだ」

「うわ、大変ですね。……処理っていうのは、具体的にどうするんですか？」

腰の脇に手を下ろして、力を込める。尻を浮かして足を折り曲げ、膝を立たせる。ジャンはそうして立ち上がると、全身の痛みに喘ぐ暇もなく大きく二度ばかり呼吸を繰り返して、草原から舗装された道へと降りた。

魔力は大体、半分程度は回復した。全力を尽くせば街まで戻れるだろうが……肉体は耐え切れるだろうか。今の状態を見れば、休めば治る程度の疲弊だ。だがこれ以上の無理を言わせれば、正直な所どうなるかわからない。それ以上の領域に、彼は踏み込んだことがなかった。

相手は他国の人間だ。しかも、偵察任務で来ているとすれば、無論、相手にしてみれば自分たちの存在を知覚した者を殺害することも厭わない。

一方で、ただの国民であるジャン・スティールは個人の私情で手を出すことは許されない。その選択で、どれほど国が立場を失うか、計り知れないからだ。

（くそ……せっかく、いい気分なのによ……！）

二名の男はそれぞれやや左右に別れて、剣を構えた。表情には、

不敵な笑みさえ湛えている。
余裕の表情だ。
そして眼光は鋭く、殺意に満ちていた。
「分かりやすく説明してやると……こうだよッ！」

深く踏み込み、縦一閃。距離が離れていたと認識していたはずなのに、気がつけばその剣先は肩口を通り越して肉を切り裂かんと閃いていた。
ジャンは慌てて地面を弾くように横に飛ぶ。そのまま草原に飛び込んで——肉体強化を発動。させようとした刹那、全身に電撃が流れたような激痛が走り、不発に終わった。
息が詰まり、思わず意識が飛びかける。眼球が圧迫されたように視界が狭まり、世界から自分以外の総てが排除されたかのような錯覚に襲われる。
背中は輝きすらせず、されど発動には十分なほどの魔力量はささやかなれど、肉体には戻っていた。
「くっ……限界、か……！」
「逃げてんじゃねえぞ、おら！」
素早く回りこむ男が、再び鋭い剣戟を払う。ジャンは大げさにのけぞって尻餅を付けば、剣先は僅かに頬を掠めただけで通りすぎていった。
（最悪だ——最悪すぎる！）
転がるようにして男たちから離れようとするが、彼らは駆け寄って離れない。受身を取るようにして何とか立ち上がるが、そうすれば逃げることもままならぬほど肉体が激痛に悲鳴を上げていた。
「走りまわってお疲れか？　なら楽にしてやるよ！」
「ふざ、けんな……！」
薙ぎ払う一撃。ジャンはそれを深く地面に沈むような進撃で避け、頭上でそれがすぎるのを感じながら、迷いなく男へと特攻した。
右腕を抱くようにして、肩を突き出して危険を顧みずに突撃。そ

して男は不意気味の行動に、避ける間もなく、ジャンの攻撃を甘んじた。

堅い衝撃がジャンの肉体にそのまま跳ね返る。だが少なくとも、男は反動によって大きくよろけ、その背後に並んだ相棒にぶつかってしまった。

「うわッ！」

「てめ、どこ見てんだ！」

よろけて無防備となる男へと、ジャンはさらに踏み込み、大げさなほどに右腕を振り上げた。

肘の陣が鈍く輝く。

残された魔力が、行き場を失っていた力が、本来あるべき手段に使われることを喜ぶように右腕へと集中する。

「解放だ――魔力放出（アウト・ルック）っ！」

体外から背中の魔方陣に強制的に干渉させて、一時的に強化を行う。さらに物質を透過できぬ魔力は、街を出る際の屋上と同様に、鎧と拳に挟まれて高圧縮し――踏み込んで拳を穿てば、それ故に男の腹部の鎧は爆発と共にひしゃげ、足が浮かび上がり、凄まじい衝撃によって後方へと力任せに押し出されていった。

間もなく体勢を崩して転倒し、呻き、あるいは悪態をついて立ち直ろうとする。だが、攻撃を直接受けた男は腹部を押さえるばかりで、四つん這いから体勢を変えることができないようだった。衝撃は鎧を貫き肉体をなぶった。故に、それも当然の結果とも言えたものだった。

そしてまた、ジャンへの負担も限界を超えてしまったようだった。

「っ……、まあいい。言えない、よな、あんたらは。こんなガキに、手ぶらのガキに、苦戦した、だなんて」

普通に考えれば、先の通りに下手に手を出せばジャンの行動が国を左右することになる。

だが今は、それ以前の問題だ。

敵は彼が言ったとおりに、子供だと侮った相手に苦戦している。

相棒などは不意を打たれて鎧をひしゃげさせて、ダメージを負ってすぐさま戦闘に再入できぬ程の痛手を負っていた。

これはつまり、命がけで逃げる事無く、命がけで戦えるということを教えてくれていた。

「くそがきが……、そんなに死に急ぎてえか」

剣を高く構え、切先をジャンに向ける。

男は嘲笑じみた声を漏らして、さらに続けた。

「本気でやってやるよ……発現(めざ)めろ――」

剣が輝く。眩く、闇を白く塗り替えるほど眩く光るその反応は、魔術などの反応(それ)ではなかった。

魔法――ジャン・スティールが本能的に察知したのは、それだった。

「付加属性(アトリビュート)」

輝きは、その直後に臨界点を突破したかと思うと、さらにバチバチと迸る電撃を纏っていた始めていた。

肩にまで引き上げた剣の、突きの構え。男はそれで構わず、十数歩ほどの距離を持っているのにも構わず、相手がまるで眼前にて待っているかのように踏み込み、剣先(きっさき)を穿つ。

と、その先から伸びた電撃が目にも留まらぬ速度でジャンへと向かい――反射的に横に飛べば、彼が居た虚空を電撃が貫き、その背後の大地を、まるで巨大な槌(ハンマー)で抉ったように地面が弾けた様子が、爆音と共に目に写った。

「ちっ、避けやがって」

さらに一閃。

下から振り上げる袈裟斬りは、その切先から増幅した火焔を伴って振り上げられ、大地を這う獄炎、加えて斬撃となって迫る業火が共に容赦なくジャンへと切迫した。

――肉薄する、純粋な魔力を伴った攻撃。

それに、指先がぴくりと弾けるように痙攣した。

心臓が、緊張や恐怖故か――あるいは高まりを覚え、期待をする

ように激しく力強く高鳴った。
意識が、僅かに肉体からブレる。意識が今まさに迫る火焔から、己の肉体へと移ってしまった。
もう避けられない。
為す術もない。
だというのに、ジャンは己の胸に手を当てて、魔力を集中させていた。
「覚醒(めざ)めろ」
口が勝手に動く。
身体が乗っ取られてしまったかのように、彼の意識とは別に、手は、喉は、そして魔力は自動的とも言えるほど勝手なまでに動いていた。
胸の手前に、魔方陣が浮かび上がる。極彩色の小さなそれだったが、声と共に、大気中からの魔力さえも取り入れて高圧縮されて何かを”精製”し始めているのがよく認識できた。
（なんだ、これ。おれは、どうなったんだ……？）
魔方陣から姿を表しつつある球体。
それがなんであるか、そして火焔が肉体を焼き尽くすまであと何秒の時間が残されているのか――同時に考えながら、声は紡がれた。
「禁断の果実(フォービドゥンフルーツ)」
ジャンが精製されたその深紅の果実を手に取るのと、巨大な火焔が足元から、そして眼前から共に迫り彼を飲み込んだのは、ほぼ同時だった。

初めての魔法

「ふう……眠れないなあ」

アエロは深夜になっても、やはりジャンのあの言葉が頭から離れずに居た。

団長の、「それでも魔石は輝いたのだろう？」という言葉から、魔術作用の一切ない状態での再検査を再要請され、また後日彼の元に行かなければならないのだが――そもそも仮に、本当に彼に魔法がなかったとして、それは罪と相成るのだろうか。

それは明らかなまでに国の不手際だ。そしてあの時にわざわざ、隠し通せたであろうものを暴露したという事は、彼自身、魔方陣によって魔力が供給されていた、という事実に気づいたのは近頃の筈だ。

知らなかったのならば何をしても良いというわけではないが……それでも王が自ら選別した人選だ。下手に退学になるわけじゃない。そして何よりも、今もっとも目覚ましい成長を遂げている少年だ。それをむざむざ、手放せるだろうか？

今日は思考が情報に追いつかずにフォロー出来なかったが、また明日にでも行って、早く彼を安心させてやろう。根拠はないが、それでもそう大事になることは無いのではないか、と彼女はそう考えていた。

なによりも、そういった中でも初めての事例（ケース）だから、何らかの配慮がなされても可笑しいことはないのだ。

寮を出て、夜風に当たる。

闇に散りばめられた煌く星が輝きを放ち、三日月が夜道を照らす。

今日は久しぶりに、夜の散歩と洒落こもうか――そう考えた最中、タイミング悪く背後から迫る足音を聞いて、彼女は振り返る。

そこに迫っていた影は立ち止まり、背筋を伸ばした直立姿勢で軽く敬礼した。

「夜分遅くに、失礼致します」
りん、と鈴がなるような透き通る声音。彼女は月明かりに色素の薄い金髪をきらめかせ、私服姿でそこに立っていた。半袖に、いつもとは異なるパンツスタイルの彼女は第三騎士団副長となるアエロの部下だった。
彼女は答礼し、気軽に立ち直る部下へと、同様にいつもどおりの気軽さを以て口を開いた。
「どうしたの？　こんな夜に、あなたも散歩かしら」
アエロの言葉に、『クレア・ルーモ』は苦笑するように首を振った。
「私は、まだ実力面が不確かです。もしよろしければ、明日以降、副長のご都合がよろしい時で良いのですが、稽古をつけていただきたいという相談に来たのですが――」
彼女の夜は、そうして更けていった。

テポンは夢の中へ。
そして彼を取り巻いていた多くの友人らは、全てが眠る丑三つ時――。

爆裂音と共に塗りたくられた闇は一瞬、真っ白な閃光を上塗りし、やがて真紅の火焔の輝きが周囲を照らし始めた。その獄炎とも言える炎に飲み込まれたジャンは、長い間切っていなかった為に伸びた髪の表面を焼いて縮毛し、そして衣服からあらわになっている肌を焦がして居た。
ジリジリと内部を焼き尽くす高熱に、また全細胞を死滅させる灼熱の中で、それでもジャンは何かにとりつかれたように握りしめた果実――リンゴとも、ザクロともイチジクともつかぬそれを口に運び、歯を剥いてかじりつく。
新鮮な果実は音を立てて一部を引き剥がし、ジャンは口の中に広がる、味もない、食感もない魔力の感覚だけを確かに覚えて……口

腔内の破片の消失と共に、手の中の果実も瞬く間に魔力と化して霧散した。

（こいつは……！）

体内に広がる特異な力の存在を自覚する。

そしてそれは、意思も思考も一切無視して、体内の魔力を伴って発動。瞬時にジャン・スティールを中心とする暴風が吹き荒れて、つい数瞬前まで肉体を消し炭へと変えんとしていた炎は、くすぶる暇無く周囲に飛び散り、消火された。

周囲は再び闇に包まれる。

だというのに――身体は火照り、それまで身体を動かすのもやっとだった筈なのに、激痛は失せ快復。加え、肉体は何かに高揚するように、内から覚えのない原因不明の溢れ出る力を持て余していた。

「なんだ、こりゃあ……？」

呟きが漏れるのと同時に、ジャンは相手がうろたえるのを見る。

「てめえ、やっぱ魔法持ちか……だが――」

「な、なにを」

「面白くなってきたじゃねえかッ！」

両手で構えていた剣を片手に持ち替え、男は意気揚々とやや前屈姿勢になってから、大地を弾く。修錬されたとも言える行動に、ジャンはその反応を鈍くする。

しかしそれまで、その魔術を発動にまで至らしめた彼の”無意識”の部分が、さらに肉体を駆った。

『付加属性（アトリビュート）――っ！』

声が重なった。

男の剣が淡く輝き、凍えて大地に霜を降ろす。そうしてその刀身は、月明かりを反射する氷の薄膜に覆われ、そこから周囲へと冷気を放った。

対するジャンは、その全身に火焔を纏う。表面に引火してしまったような姿だったが、肌は焼けず、焦げず、髪はあの独特の悪臭を振り撒かなかった。意識をすれば火焔が膨張し、爆発的に増大する。

それは意のままに炎を操る、さながら火炎龍（ドラゴン）のようだった。
「……てめえ、そりゃあなんの冗談だ？」
――認識（み）たものを理解（み）たままに”再現”する魔術。
それがジャン・スティールの肉体深く、その心臓よりも深い最も行動に関連する位置に刻まれた魔方陣の効果だった。
「なんでてめえが、俺の魔法を使ってんだよッ！」
快活な笑みが消え去り、表情には憎しみしか残らない。
同時にジャンは――周囲に強い気配を覚えて、振り返った。
戦場で、敵に背を向けることは自殺行為であるのだが、男はそれでも襲いかからず、そんな妙な行動をするジャンへと罵声を浴びせる。
言葉にならぬ声を聞きながら、それでもジャンは感覚を尖らせた。
見晴らしの良い草原だ。だが近くには森がある。そんな所で、ただの血肉の匂いでさえ集まる”連中”は、これほど派手に魔力を散らして戦っていればやはり当然のように”誘われる”はずだ。
そして小高い丘になる向こう側に、いくつかの動く影があるのを、彼は確かに捉えていた。
「おい、てめえ――」
既に背後にまで近づく男は、呆然とするジャンの肩をつかもうとした。だがそれよりも早く、彼は屈んで伸びる腕を掻い潜って後退すると、そのまま背後へ、男の真横へと回り込んだ。
「てっ……！」
「状況が変わった。あそこを見てくれ」
肩を掴んで指をさす。
――この状況で、こんな魔法を使う相手と取っ組み合いながら異種族（モンスター）との戦闘なんて、到底できるはずもない。下手をすれば横から突っ込まれて一瞬にして全滅だ。それに手負いだって居る。そいつを庇いながらの戦闘だって、かなり苦労だ。骨を折る。
この男の実力は、戦ってみて分かったが――本気でやってくれれば、恐らくおれより遥かに格上だ。恐らく肉体強化を施したとして

も、行動を起こす前に潰される。その自信があった。
「……なんだありゃ。俺たちの直援なんていねぇぞ」
「あんたら、北の国から来たな？」
大陸南端にあるアレスハイムは、そこより遥か南西に存在する”溝”にほど近い。それ故に異種族の戦闘能力は他の国に比べて劣化すること無く最高精度の実力を発揮できていた。
溝より遠ければ遠いほど、異種族の戦闘レベルは低くなる。そしてその弱体化した異種族が住み着けば、そこに生息する異種族のレベルは落ち着き留まるのだ。
だから、同じ大陸内といえども、アレスハイムから遠ければ遠いほど異種族との戦闘には苦労しないし、そもそも環境に適応していなければ異種族との関わりさえ薄いはずだ。
一見して”人間”と異形たる”異種族”とを、この状況で誤認するとなれば、彼らが他大陸か、あるいは少なくともエルフェーヌ……否、異種族を軍事利用した”ブリック”より遥か北方、あるいは東西のどちらかであるのは明らかだった。
「よく分かったな。俺は色白なのが自慢なのさ」
――となれば、その冷気こそが彼の持つ”付加属性”の中でも最上であり本領であるのか。
考えて、思わず怖気が走った。
”認識（み）たままの火焔”であったなら、恐らく純粋に力負けしていたはずだ。
今回ばかりは、この闖入者の登場に感謝せざるを得なかったが、
「異種族（モンスター）だよ、お上りさん」
彼は、鎧ごと殴り飛ばした男が落とした、見事な装飾つきの剣を拾い上げて、なんの感慨もないように「そうか」と漏らす男に促すように先に出た。
「おれが見るかぎりじゃ十八体」
「多いのか？」
「ちょっと前は、五、六〇〇体相手に五人が圧勝した」

「なんだ、くそ雑魚じゃねえか」
「おれはこれまでで最大で三体までしか相手したことない」
「てめえがくそ雑魚じゃねえか。まあいい、倒しゃいいんだろ？手伝え坊主、異種族って野郎の殺し方をご教授願おうか！」
ジャンとの共闘になんの疑問も不快感も表さずに、むしろ喜ばしいとばかりに叫んだ男へと、ジャンは苦笑を漏らし嘆息しながら並んだ。

夜はまだ始まったと言わんばかりに、新しい戦場は構成された。
――見慣れぬ異種族の群れ。身体を包む剛毛に加えて強靭な骨格を持つ巨躯……それは猿人のような肢体をもつものだったり、表面を堅い甲殻で覆う二対のハサミを持つサソリともザリガニとも付かぬ、だが少なくともそれらより遥かに大きい異種族。あるいはお馴染みの強い酸性の唾液を持つ狼だったり――そういった纏まりのないのが総数五体。割り当ては、猿人が一体、サソリが二体、狼が二体。
そして残りの十三体は全て同種の異種族であり、ジャンが目の当たりにした中で、最も異形なる存在だった。
「なんだあ、ありゃあ……気ッ持ち悪ィな」
石灰を頭からかぶったかのような白い肉体。四本の足は馬のように蹄を持ち、肉体は豚のように肥えている。前足よりやや高い位置にある対となっている両腕はしなやかに伸びて、三本の指は獲物を見つけて以降、わきわきと動き出していた。
そして腕が生える中央部に細い首が伸びて、楕円形の頭。歯並びの良いエナメル質の歯は先程からガチガチと音を立てて噛み合わされていて、その上にはいくつもの目を散りばめる顔があった。
――異種族（モンスター）とは、この世界に準拠した生物ばかりだと思っていた。
だがそれは違う。
これまで見てきた、聞いてきた動物、昆虫に決して該当しないその異質な生命体は、本来の意味で”異形”だと言える代物だった。

（なんだ、こいつ……）

そしてそれはまた、ジャン自身知らぬ異種族でもあった。

聞いたこともない姿。見たこともない格好。色、気持ちの悪い目、肢体。その全ては、彼にとって未知でしかなく、それ故に畏怖の象徴ですらあった。

異種族の恐ろしさ、その強さを中途半端（にわか）に知っているが為に覚える恐怖を、彼は抱いていた。

対する男は――やはりジャンとは打って変わって、その緊張を程良く感じて、肉体を昂らせていた。

彼はジャンよりも遥かに実戦経験が豊富な男である。特に対人間が多く、そして人間は個体ごとにその実力を大きく変えてくる。だから対峙する敵は全て未知の力を持っていると言え、だからこそ、目の前の異形たらしめる気色の悪い生命体も、彼にとっては同じ未知の存在であり、外観以外、その戦闘方法や可動、機動、身体能力などの違いはあれど、今までの敵と大きく変わっているものとは思えなかった。

だからこそ平常心を保てている。

どんな攻撃をしてこようとも関係ない。殺し、殺されるのが戦場の全てであり、唯一の帰結だ。

故に、今は目の前の敵を殲滅する。

明らかに、この手の敵には慣れているはずだったこの少年が怯えている様子は少し面倒だったが……。

「おい坊主、今ビビってるようじゃ、殺す価値もねえな」

前に出るジャンの頭を掴んで強引に後衛へと送る。

そうして、彼は切迫するように侵攻してくる十八体の異種族（モンスター）へと立ち向い――勢い良く、足元に剣を突き刺した。

「――食らい尽くせ、大地の怒り（アース・ビック）」

間髪おかずに大地が隆起したかと思うと、無数の隆起現象はさらに鋭く天へと突き上がる錐状に変形して、十数メートルにまで迫った異種族群を串刺しにする。

そしてまた、表面が凍り付いているそれはそれ故に流した鮮血を冷却し、凝結。凍結させて錐状の隆起に張り付かせた。

鼓膜を打ち破らんとする、轟く咆哮。

己の攻撃によって怯む異種族へと、男は構わず突っ走り――己が作り出した隆起ごと横一閃で両断する。だが綺麗に分かつわけではなく、砕き、そしてその中にいる異種族の肉体を切り裂いた。

断末魔さえも許さず、男は前線に立った二体の狼、そして猿人を倒した所で、隆起したその大地を乗り越えて、飛び降りる。冷気を纏う彼はそのまま、待機していたサソリの背中に刀身を突き刺す……が、甲高い金属音をかき鳴らして、その切先は硬質な甲殻によって弾かれてしまった。

背後から迫るハサミの一閃。

男は反射的、さらに弾かれた反動を利用して、振り返りざまの一撃でハサミの付け根を叩き上げる。

反響する程の硬質な打撃音をかき鳴らし、サソリは諸手を上げる。それが降参の意ならどれほど楽なことか――男は無駄に考えながら、嘆息混じりに魔力を増幅。氷の膜はさらに分厚く、冷気が増す。

そしてその膜が氷塊となって、剣からまるで水滴にように地面に滴った。

氷滴は大地に触れれば、その地面を凍りつかせる。波紋のように広がるそれらはただの数敵で、攻撃に転じようとしていた二体のサソリの足を飲み込み、地面に留めた。

「おい坊主！　出番だ、”俺の炎”で焼き尽くせえッ！」

――そう声をかけられて、男がサソリを放置してさらに先へと迫るのを見て、ようやく自身が呆然と、己が畏怖した敵へと意気揚々と駆ける男に見とれていた事に気がつく。

肩が弾けたように跳ねて、それから息を呑む。

剣を片手に走りだし、己に――ごく限定的、一時的だが――宿った炎を剣に増幅させて纏わせる。

ジャンはその中で、胸の奥で渦巻く感情の全てを遮断し、ただ目

の前の敵にだけ集中する。そこでようやく、彼は本来すべき事をするべく、心は持ち直していた。

「今は”おれの炎”だっ、てっ！」

男の後を続くように隆起に飛び乗り、そこを踏み台にするように高く跳び上がる。

身体がやがてその重さを感じなくなる一番高い位置で、ジャンは剣を振り下ろす。まとわりついていた火焔は放射されて一直線にサソリへと撃ちだされた。

凍りついて身動きできぬ異種族は、容易く火焔に飲み込まれて――ジャンはそこを飛び越えて着地する。膝を折るかがんだ姿勢で、剣を握る手は放り投げ、そして眼前に掲げた手には、魔力が集中して再び果実が精製された。

「そしてこれが――あんたの――おれの雷だっ！」

大口で果実を齧り、そして魔力へと帰す。

放出しきった火焔の代わりに、今度は雷が全身から迸り――振り向きざまに剣を振るえば、その切先から穿たれる稲妻一閃が鋭く甲殻を抉り、弾き、砕いて……火焔の舌が内部を焼き尽くし、瞬く間に二体の巨大なサソリを討ち取って行った。

――それで、再び彼が”再現”した魔法が肉体から失せていく。

凄まじい力の奔流を体験したジャンは、確かに魔術と魔法の違いを理解し、認識し、それで納得した。己には、本当に魔法というものが存在しないということを。

そして肉体が忘れていた激痛を思い出したように膝まずき、灼熱によって熱した肉体は全身から汗を吹き出させた。

意識が朦朧とし、そして一度心臓が大きく高鳴って――息がつまり、血管が詰まった感覚。意識が遠のき、視界がぼやけ、周囲の存在感が瞬く間に失せていき、だというのに、自分の中にある痛みや、奇妙なほどの孤独感だけが膨張していって……。

力量を超える技術（ちから）の駆使に、肉体が、精神が耐え切れずに、ジャンはそのまま吸い込まれるようにして地面に倒れていった。

魔力の極端な減少に、男は背中越しにジャン・スティールの気絶を悟った。

負けたわけではないだろう。おそらく、慣れていないのだろう”魔法”の発動によって力尽きたのだ。

ビビっていた割には随分と動けていたし、まだ若い。このまま行けばまだまだ強くなる……出来れば、万全の時に戦ってみたかったが。

男はガラになく考えながら、見上げる程に巨大な異種族へと駆けていた。

身にまとう冷気は既に無い。

その代わりに、身体の周囲には常に風が吹き荒れ、

「きめえんだよ、てめえら！」

未だ十数歩分の距離がある。だというのに男は剣をなぎ払い――その動作の直後、剣から振り払われた衝撃（かぜ）が刃となって宙を駆ける。目に映らぬそれは、緩慢な動きの”白い何か”連中を瞬く間に切り裂いた。柔い皮膚を裂き、緑黄色の鮮血を周囲に振り撒いた。骨は砕けず、ただ筋だけは確かに切断して――それ以前に、異種族でも基本的な構造は同じなのだろう。頭を潰した時点でそれらは崩れ、大地へと沈んでいった。

目に痛い蛍光色に塗れる姿を送りながら、男はさらに接敵。肉薄、そして己へと振りかぶられた腕に対して剣を振り上げ、降ろしの手早い二連撃で切り落とす。さらに下方からの突き上げで眼前にまで迫った顔面を串刺しにして――蹴飛ばし、次へ。

ステップ混じりの移動と共に、円の機動で剣戟を薙ぐ。囲まれた男はそれで瞬時に数個体の首を跳ね、脊髄反射で襲ってきた蹄を腹下へと潜りこんで躱す。

崩れる前にその下から滑りでれば、顔のすぐ横に蹄が落ちて――その死角となった位置から腕が飛来。男の反応速度を上回る俊敏性で肩を掴み上げて、身体を引き上げた。

「こ、こいつら――」
剣を振るう。すると剣が届く位置より遥か先にある、肩をつかんだ一個体の頭が吹き飛んだ。
力が失せて、無防備な体勢で地面に叩きつけられようとしたが、男は無理に足で着地し、立ち直る。
「まさか、知能があんのか……？」
――残るは二体。
死骸の山は果たして出来上がり、その向こう側に待機する月明かりに光る白い影。それらは様子を伺うなり、やがて背を向けて、蹄を鳴らし……。
「に、逃げた――だとッ！？」
盛大な蹄音で素早く道を引き返していく奇っ怪な影は、瞬く間に見えなくなってしまう。
――あんな気持ちの悪い生物が、さらに頭が使えるなんて……最悪だ。
むしろ、あんな異種族（もの）を”飼って”いながら、よくこの国は国として保っていられて、さらに村や街を外壁も砦も無く、孤立できたものだ。
領内のあらゆる人種が集まってできた国で生まれ育ったからこそ、彼はそう、感心できた。
緑黄に染まる剣を振って血を払い、短く息を吐いて、振り返る。
そうすると、隆起の手前で、ジャンから強引に剣を奪い取った男の姿があった。
彼は、自身に気づいた男に手を振りながら歩み寄り、苦しそうな顔で声を上げた。
「おい”クリード”、あのガキどうすんだ？」
このまま放置すれば、他の異種族が死骸を餌に寄ってくる。その巻き添いにあって食われてしまうだろう。
だが、そこで死ねばそれまでだ。

されど、クリードと呼ばれた男は、自らの手で彼の未来を終わらせようとは、もう思っては居なかった。

「将来に期待、っつう所だな」

羽織る外套を翻す。そこには、雄牛が二匹、その横顔を向かい合わせるような刺繍がなされている。

それはヤギュウの国章だった。

「また出た。お前の悪い癖だ。どのみち、あのガキが騎士だったら、今度の作戦で死ぬだろ。あの程度の実力じゃあな。中途半端に強いと思ってるから、さらに確率は膨れ上がる」

腰の鞘に剣を収め、やがて二人はその場から離れ始めた。

大まかな”偵察”は終了した。まさか最終日にこんな出来事（イベント）があるとは思わなかったが――異種族との戦闘は良い経験になった。

あの存在を知らなければ、下手な動揺が周囲に伝播し、対処しきれる場面を逃して最悪全滅する。あの程度の数ならば、恐らく強みと言えるのが”異形の外見”なのだろう。見た目で驚かせ、畏怖させ、隙を作り殺す。

事前の理解があれば、そう難しい敵ではなさそうだ。

「いいだろ、あんな国での唯一の楽しみだ。平和な国の強者くらいいいだろ……、ある意味で性（さが）なんだよ。あの国で理解できねえヤツぁ居ねえ筈だ。自分の強さを再認識できる、そして戦いこそが自分の生きがいだってな」

――作戦の準備にはまだ時間がかかる。だが少なくとも今年中に実行されるのは確実、という話だ。

ならば、長くて残された時間は約三ヶ月……それまでで、どれほど彼が成長するか。そして己が強くなれるか。

彼は未来に思いを馳せて、やがて気配の失せた森の中へと歩みを進めていった。

保護

「ジャンが居ない！」
まず寝ているテポンの部屋に駆け込んできたのは、タマだった。
午前三時の出来事である。
そんな彼女に布団を誘い、落ち着かせると共に散歩に言った旨を説明してやって、
「彼にも色々あるのよ」
そう、最近晴れない彼の表情を思い出しつつ、タマをたしなめた。
「――ジャンが居ないんです！」
午前六時。
ようやく目が覚めて、制服に着替えていると、今度はサニーが扉を開けて入ってきた。瞳は潤い、今にも涙がこぼれ落ちてしまいそうな程であり、またこの上無く不安な様子で、それを訴えていた。
そして間髪おかずにオクト、スクィドもやってくる。
まったく、騒がしい朝だ――そう思いながら、並ぶ三人へと一喝した。
「あの子だって子供じゃないのよ、お腹がすけば帰ってくるわ。放っておきなさい」
わずか一言のうちに矛盾をはらませた台詞だったが、その点には触れず。
「……しかし、テポン様が最も動揺なされているのでは？」
見逃さない無粋なスクィドの指摘によって、テポンは初めて自分の手が震えて同じボタンをしめたり外したり、それを繰り返していることに気がついた。
「う、うるさいわね……でも居ないものはしょうがないわ。今日中に帰ってこなければ警ら兵にでも捜索願を出す。これでいいわね？」

「……うぅ……」

小さな呻き。それがジャン・スティールの存命証明であり、そして間もなく――夢も何もない、暗闇の中から意識が急浮上した。

――無意識が、本来鼻腔を刺激する筈だった腐臭や、あの独特な鮮血の錆の匂いが存在しないことに違和感を覚えた。筋肉を硬直させる堅い地面の上に、その肉体がないことを、次いで認識した。

まず疑問。

そこからは、ジャンの意識が確認事項を読み上げるように、多くを確認していった。

指先を動かし、そして両腕の筋肉、肩、首……共に損傷なし。上肢は無事であり、足を同様に確認。問題なし。つまり五体満足だったが――じんじんと、脈拍と共に激痛が肉体に残り続けていた。

もはや慣れたものだが、無理に起き上がれば耐え切れずに声が漏れる。

下手に近くに異種族がいれば、太刀打ち出来ずに死んでしまうはずだ――そう考えてから、ジャンは気がついた。

太陽光が鈍い。正確には本来頭上、寝転がっているならば目の前から降り注ぐその光源が瞼を隔ててもよく分かるはずだったが、まるでまだ日が出るばかりであるように、横方向からの鈍い光を流し込んでいた。

そしてこの体を包む暖かなもの……これは布団ではないのか？

風もない、自然が周囲には確認できない。

ならばここは？　まさか、異種族の穴倉に連れ込まれたのか？

胸の奥がざわめくのを感じて――ジャンは思わず目を開けた。

視界がぼやけ、だが徐々に鮮明になる。

「……ここ、は――？」

まず目に入った天井は、板が立体的に貼りつけられていて、空へと高く伸びてゆくような錯覚を覚えた。そしてある一定の高さで壁と壁へ支えとなる棒を伸ばし、その近くには縄が垂らされていた。

首吊り自害ようのソレかと思えば、その縄には加工された肉が連

なって括りつけられていた。保存食としての調理中なのだろう。
そして顔を横に向ける。ジャンが横たえる寝台の横には小さなローテーブルがあって、その上には綿糸を粗く織った布と、包帯がいくつか置かれていた。その向こうには台所。薪がくべられている調理台の上に乗っている鍋はコトコトと静かに音を立てていて、僅かにずれて置かれる蓋の隙間からは白い湯気を漏らしている。
何の香りもしないところを見れば、それは単純に加湿のために行われているのだろう。
ならば、ここは乾燥地帯か――となれば、最後に居た地よりやや東や北方へと連れ去られたのか。
「いや……」
彼は言葉を言い直した。
連れ去られたのではなく、〝保護〟されたのだ。
明らかにこれは人智が及ぶ作りであり、納屋を改装したであろう狭い室内だったが、それでも生活するには十分な物品で溢れかえっている。台所の下に小さな蓋があるのを見れば、地下収納庫もあるはずだ。
そしてこの布団。衣服を縫い合わせたものの中には、恐らく羽毛か、綿か。それらが入っていて、敷き布団はシーツ、そして藁が敷き詰められている。
周囲は小奇麗で……集落や街ではない、おそらく好きでこういった僻地に済む道楽家や猟師といった所だろう。
異種族の毛皮や骨を採取して加工することは珍しくない。肉だって、野草の選別のように食用として扱えるものとそうでないものがある。今回は残念ながら毛皮や骨格以外に〝使える〟ものは無かったが……それでも加工技術が確かならば、防寒具として、あるいは武器、ないし装飾品として商品に変えることができた。
この小屋ではこれから寒くなるにあたって、それを凌ぐ術が少ないから、そういったものを作るのに必要なはずだ。
「やっと目が覚めた。五時間も眠っていたのよ、人様の寝台（ベッド）で、あ

んたは」
　足元から聞こえた声に、思わず心臓が跳ね返った。
　息を止め、決してすまいとしていた愚かな行いを――彼は思わず反射的に、身体を起こしていた。
「――っ！！」
　そして暴発する激痛の嵐。どうすればこんなに余すことなく緩急もなく痛みが全身に広がるのか、疑問になるほどの苦痛を覚えながら、ジャンはうめき声すらもらさずに、そのまま倒れこんだ。
「まだ薬も塗ってないんだから寝てなさい。いいわよ、こっちはお陰で睡眠不足だけど、いつかやろうと思ってた薬の精製ができたし」
　やがて目の前に現れ、木目調のローテーブルに腰を落とす影。
　どこまでも冷静で、筋張ったような声はどこか頼れる風もあったが、しかし飽くまで澄んだ女性のそれだった。
　毛皮のベストを着こみ、下には網目のシャツを。太ももまでしか裾がない短めのズボンは妙に光沢を持っていて、されど堅いというわけではなさそうだった。そしてシャツは全身一体のものなのだろう、ズボンの下から足先まで伸びていた。
　彼女はそれを魅せつけるように足を組んで、それからその美貌に見とれるジャンへと屈み込む。
「元気はありそうね」
　言われてから、はっと彼女の肢体を見つめてしまっていたことに気がついて、すぐに視線を逸らす。
「あ。いや……すみません」
　上気したように朱に染まるジャンを見て、くすりと笑う彼女は軽く肩をすくめた。
「いいわよ。ほら、布団どかすわ」
　手に持った器を片手に、彼女は手を伸ばす。そういった所作と共に肩甲骨を過ぎる長い黒髪が揺れて、毛先が彼女の背中をくすぐった。
　彼女は首元に置かれる布団の端を掴むと、力任せに足元へと吹き

飛ばす。
——闇に似た白目のない黒き瞳。それが柔和に細まって微笑みかける。顔に刻まれた魔術の紋様はいささか女性としては似合わぬ厳(いか)つさを見せていたが、彼がそれに畏怖することはなかった。
美女といえる風貌を持つ彼女だが——何かが引っかかる。ジャンはその違和感を覚えていた。
布団の下には、半裸の上肢。彼女はしなやかな指先で器の塗り薬を掬いとって、まず彼の胸に滴らせ、手を伸ばし、摺り込むように広げる。
冷たい液体は彼女の手によって温められてぬるくなる。艶やかな手つきは胸から腹へ、そして脇、腕へと這いまわり、そしてくすぐるように渦を巻いてから、しっとりと触れ、押し付けられた。
粘度の高い樹液のようなそれを肌に摺り込んで、ついで重なるガーゼを数枚てに取って肌に貼りつけ薬液を吸い込ませ、包帯で固定する。
それを幾度か繰り返せば、上肢のほとんどは包帯に包まれることになった。
「筋肉の酷使が原因ね。幾つかの筋が切れてるみたいだけど、薬を塗ったから一、二週間くらいで完治するわ」
「すみません、助けていただいたみたいなのに、その上こんなことまで……」
ジャンの言葉に、軽く笑うように鼻を鳴らした。
「ふん、何言ってんのよ。こうするつもりが無かったら、そもそも拾ってこないってのよ」
テーブルから寝台に座り直し、退屈そうにつま先で包帯の表面を弾きながら、肩越しにジャンを見る。
「……あんたって、どっかで見たことある顔してるのよねえ」
「あ、おれもなんか、見たことありますよ。アナタのこと」
瞳と同様に黒い塗料を塗ったように黒い爪を持つ彼女は、その指を唇に当てて思考する。果たして、最近は忙しくてまともにヒトと

会っていなかったから昔の話だろうが、それでも彼のような顔はまだ記憶に新しい。

最後にまともにヒトと会ったのはここより東に進んだ位置にある都市である。独立国家ではなく、領地の境目付近にある大きな街であり、コロンの街よりも加工品や武具の製造で有名な鉱山都市である。

日銭を稼いでのどかに暮らしていたが、その仕事で少しばかり面倒事があって、恒例となるアレスハイム襲撃ができなかったが――ああ、そうか。彼女の記憶はそこで蘇った。

彼は最後の襲撃の日に会った男だ。

見ない顔が正義感を奮わせて現れて、妙に頑張っていた。弱いが、なんだか期待させられるような顔が印象的だったのだ。

だったら――口にしないほうがいいだろう。

襲撃の理由を話すことも面倒だし、なにせあの国では何人も殺している。せっかく助けたのにこの怪我で逃げられて、自分の目の届かない所で死なれても後味が悪い。

「全然思い出せないわ。ま、お昼を獲ってくるからそれまで寝てればいいわ」

彼女は立ち上がり、ジャンに布団をかけて背を向ける。扉の前で立ち止まって、そこに置かれるズボンの裾よりやや下まであるヒールが高いブーツを履いて、外へと出ていった。

残されたジャンは、言われるがままに目を瞑って、未だ肉体に染み付く疲労故に、瞬く間に意識は深淵を転がり落ちていった。

「ど、どういうことッ！？」

「どういう事かと申されましても……説明したとおりで、それ以外は調査中ですが――午後十一時以降の門の開扉は記録にございません。他の手段で街から出るなんて、外壁を飛び越える以外しか……」

アエロの怒号めいた言葉に、警ら兵はすくみ上がりながらも、調

査結果を再び端的に告げた。
――ジャン・スティールの捜索願は、その日の正午に〝タコ型の異人種〟によって提出されたという。記録によれば、その人物はジャンが居候する屋敷のお手伝いさんだ。
そしてジャンが家を出たとされるのが午後十一時前後。
現在までで、既に十五、六時間が経過している。
情報では武器も何も持たず、そして現在街を捜索中だが、手がかりはなく、また今までで誰も彼の姿を見ていなかった。
「……ッ、面倒ね！　ッたく！　自分の持ち場に戻っていいわ、この件は私が受け持つから」
「はっ！」
学校へと向かっていた足を早めて目的地へと急ぐ。
それを、わざわざ簡単な調査をしてから伝えてきてくれた警ら兵は敬礼をして、その姿を見送った。

「ジャンくんの友達は……」
既に門から多くの学生が吐き出され始めていた。
もしかしたらかえってしまったかも知れない。書類を探して、一軒一軒調べるのも良いが……時間がない。それに友人らが何も知らなければ完全に徒労だ。
わざわざ来てみたは良いが――来なければよかった。
アエロは己の思慮の浅さに腹が立って、短い舌打ちと共に踵を返す。
すると、
「あら」
視線の先に、見慣れた姿があった。
「アエロさんじゃないですかあ。どうしたんです？」
捻れた角を持つ牛人族の騎士――エクレルは気易い私服で立っていた。薄いシャツは胸元が緩く、故にそこをピンと張れば両肩があらわになってしまう。そんな衣服も、彼女のたわやかでありながら

も誇張なくその存在感を大きくしているバストにかかれば、胸元からずり落ちることなくそこにとどまった。
「なによ、乳牛（ホルスタイン）のくせに」
歩けば胸が揺れる。動けば胸が躍る。アエロにとって彼女のイメージは、まずそこから始まった。
「っと、そんな悪態はいいのよ」
いつもの事だから、挨拶がわりのようなものだ。それにアエロのエクレルに対する悪口は、局所的な――主にその嫉妬対象である胸に対するものでしかない。
「エクレルはなんでこんな所に？」
「なんでって……今日は仕事が休みなので、”リサ”を迎えに来たんですよ」
「リサ？　……ああ、あのはぐれの娘（こ）ね。学校では偽名を使ってるんでしょ？」
「そうですね。へたに”はぐれ”ってバレても可哀想なので」
「そうね。ったく、優しいわねー、胸も大きいし」
「かっ、関係無いですよそれ！」
そんな発言に思わず両手で胸を抱くようにしてそれを隠し、動揺混じりに、ソレより、と話題を転換した。
「アエロさんだって、なんで学校なんかに……？」
「実は、ジャン・スティールを探しているのよ。なんでも失踪したとか、なんとかで――」
「――え、エクレル！　な、んで……こんな所に！」
会話を遮ったのは、不意の闖入者。
それは尾を力なく垂らしているクリィム――リサの姿だった。
真っ赤な髪は鮮やかだったが、同様に真紅の瞳は、されどくすんでいるようだ。それが感情と共に変わるのならば、やはり尾と同じに元気がなくなっているという事だろう。
「なんでって、迎えに来たんですよ。みんなして……そんなに私が迎えに来るのが不思議なの？」

「い、いや、そういう訳じゃないが……お前は？」
リサは、そしてエクレルは共に歩み寄って並ぶ。そうする中でリサはアエロの存在に気が付き、エクレルと話をしていたらしい事を思い出す。
声をかけられて、再び思惑の海に飛び込もうとしていた彼女はリサに目を向け、立ち直った。
「アエロよ。エクレルと同じ騎士団をやらせてもらってるわ」
「そうか。昨日の甲冑の男と関係があるのか？」
「昨日の甲冑？　……ああ、まあね。ジャン・スティールを探しているんだけど、知らない？」
昨日の甲冑の男はジャンを校舎から校舎裏の武器庫へと連れてきた使いっ走りだ。
と言うか、まだ昨日の事なのか――イヤなまでに長く感じる昨日と今日を振り返って、アエロは思わずため息を漏らした。
そしてまた、彼女の言葉にリサが眉間にシワを寄せる。右腕が、徐々にハサミへと変化し、尾がいきり始めているのをアエロは見た。
「スティールが、どうしたんだ？」
「こっちが聞きたいわよ。学校には来てなかったんでしょ？」
「ああ。サニー……ヤツの妹の話では、朝起きたら居なかったと。心当たりも無いようだ。当然私も分からないし、他の連中も同様の反応を見せた。だからてっきり、お前らがどうこうしたのだと思っていたのだが……違ったのか？」
怪訝な表情で、疑るような声色で、彼女は言葉の裏でアエロを責めた。
しかし訊くまでもなく全てを説明してくれた彼女に軽く頭を下げてから、首を振った。
「知らないわ。彼の行動は単独で、そして突発的なもの。現在は、なんらかの手段で街の外に出たという事が有力とされている」
本来ならば一般人には与えない情報だが――この国ではそういった機密はごく重要でない限りは曖昧に流れ出している。それを取り

締まる法律はないし、注意する警ら兵も居ない。
簡単に言えば、このアレスハイムという国はごく限定的で危機敵状況こそで本領発揮できる法がなされていて、大した事件や事象でなければ、多くは警ら兵などが対処して終える。それは、この国が根本的に治安がよく平和な国であるからだった。
「じゃあ昨日、スティールに何を吹き込んだ。精神的不安から暴走したんだろう。そのきっかけを、お前達が与えたんじゃないのか？」
「――仮にそうだとしても、もう遅いわ。彼の安全を祈るしかない」
「よくそんな口が利けたものだな？　外から中に入ってくる者には厳しく、大切な国民が情緒不安定からの暴走で外に飛び出れば無関心か。だからムカつくんだよ、この国は。体裁よく”溝の連中”と”交友”しているみたいな事を演(や)っているようだが――」
「そんな話は知らないわね。そうやって”ひねた”考え方をしているから、はぐれなんでしょう？　どちらにせよ、そんな話を異人種(どうるい)に語った所でなんにもなりはしないわ」
食い気味に言葉を遮り、高ぶった心が挑発的にリサに言葉を返した。
どちらも冷静とは言えない。生産的とは言えぬ言い合いに、エクレルは静観していたがなんとか止めようとわたわた動くが、どうすればこの事態を沈静化できるのか……彼女にはわからない。
そうして、各々の胸に渦巻くそれぞれの憎しみが火花を散らし、にらみ合いが続く。が、それを解いたのはアエロの方だった。
翼を広げ、大きく上下させれば――風を起こし、高く跳躍して翼を動かせば、間もなく風を起こし、風に乗り、彼女は空に舞った。
「悔しかったら強くなって、国を――あなたの理想を現実に反映できるようになりなさい。あなたは、それが出来るところを目指しているんだから」
彼女はリサに言葉を残し、さらに空高く飛び上がって、姿を消した。
残された二人は、それぞれ彼女の言葉に思うところを見出したの

か、だまりこくり、それから誰ともなく歩き出して、帰路についた。

「なに、これ」

門付近の建造物の屋上。平たい、家屋内からそこへと出られるようになっていて、さらに固められているちょっとした広場にも使える場所だ。そしてその末端部分はヘリとなっているのだが――その一部が砕けて、周囲に破片をまき散らしていた。

人為的な破壊だ。そして破片は、屋上の端まで飛んでいるところを見れば、さらにその先、地面にまで落ちていることは確実。ならばその破壊力は相当なものだった筈だ。

ここを殴り飛ばして、その勢いで高く飛び上がって……。

「いや、現実離れしすぎでしょ……」

どんな強靭な拳とでたらめな腕力を持っていれば、それが可能となるのだろうか。そう自嘲気味に考えて、ジャン・スティールはそれが出来るはずだという理解に至った。

彼は肉体強化魔術（パワー・ポイント）を持っている。それがどれほどのものかは知らないが――わざわざ魔方陣としてそれを得ているならば、精錬されきった魔術と考えて間違いはないだろう。

可能だ。

自棄になっているなら、自暴自棄気味ならばその確率は格段に上がる。

「……もうッ、もうもうッ……物分りの良い子だと思ってれば、面倒臭い子ね！」

彼女は手ぶらで外に出た時の危険性を良く知っている。戦闘面での実力を持てども、それが未だ未熟であると判断されていれば尚更だ。

一般人ならば、異種族と接触して――五分以内に死に至る。基本的にはそう言われている。ある程度の戦闘経験があればその時間は伸びるが……魔術を持たぬ限り、異種族にもよるが、それに勝利し、あるいは逃げ切れる可能性は極めて低い。

彼女は再びそら高く飛び上がると、迷いなく外へと飛びさって行った。

西の空は、早くもその景色を朱に染め始めていた――。

保護？

「結局、おれの世話で一日が終わってしまいましたね……」

あのあと、どこからか獲ってきたイノシシを解体して、血を抜き、新たな食料とする間に、調理中だった干し肉を昼食とした。

その後は他愛もない話や、ジャンがどうしてあんな所で倒れていたか――その説明が終われば、既に時刻は夕方に。今度は野菜スープとパンがついた食事を終えれば、ジャンの整容へと移った。

包帯を外して身体を拭き、そして再び薬を塗って包帯を巻く。

今度は下着一枚になって足も同様に塗布――運良く疲労のために性的な反応はなく、ジャンは彼女の期待はずれなため息を受けながらも、平静を装うことができていた。

至れり尽くせりの一日で――最後は寝台の端にジャンは追いやられて、すぐ隣に彼女が布団の中に潜り込んでくる。

鼻を掠める石鹸の香りは、外にあるという樽を用いた簡易浴槽での入浴が行われた結果を知らしめていた。

ジャンは相変わらず仰向け以外では寝られなかったが、彼女はそんなジャンを見つめるように横になる。

白目のない、どこまでも深い闇たらしめる瞳はどこか恐ろしげもあったが、彼は既に愛嬌さえも見出していた。世話焼きで、口は少し悪いが頼りになる姉御肌だ。締まった肉体や、素手で外に出て狩りが出来るのだから、その戦闘能力は極めて高いのだろう。獲物の刺創を見れば、周囲の障害物を即座に武器へと転換して使用したとすぐに察せられる。

つまり、遊撃戦（ゲリラ）であれば敵はないといえるほどなのかもしれない。

怪我が治れば戦い方を教えてもらえないだろうか。いや、それ以前にお礼をしなければならないのだろうが……。

「まあね、覚悟はしてたけど……人様の世話なんてもうコリゴリよ」

変な怪我しやがって、と彼女は冗談交じりにジャンを殴る。包帯

越しの衝撃はひどく鈍いものだったが、じんと響き、それでも和らぎ始めていた痛みが全身に伝播したが――大きく息を吸い込み、彼女に笑顔を向けた。

「そういえば、お名前を伺っても……？」

「あー、そういえばね、忘れてたわ。いいのよ名前なんて、好きに呼べば？」

「そんな。ここまでして貰って――」

言いかけた言葉は、彼女がジャンの唇に添えた人差し指によって遮られた。

顔を向ければ柔和な微笑み。月光に褐色の肌が照らされ、艶やかに潤う唇が静かに開いた。

「好きでしたのよ。あんたは、勝手にされただけ。帰りたいと思ってるのを無理やり拘束して、わけわかんない薬塗りたくって、身体を締め付けるように圧迫して、自分の料理を毒見させただけ。それでいいのよ。これが終われば私を忘れなよ」

「な――なんでそこまで……」

「こんな世界に居たって苦しいだけよ。あんたは、あんたの道を進めばいいのよ。騎士は……ダメだったんだっけ？」

「あ、ああ……はい。おれは、魔法がないですから。今回、暴走する羽目になったのも、それがきっかけでした」

彼女の言葉に思わず視線が泳ぎ、無意識に忘れようとしていた事実を思い出す。心地の良い、自分にとって都合の良い世界に逃避しかけていた意識が現実を直面させられて、それでも彼女の前だから気分は害さず、どこか気恥ずかしすら感じていた。

憎しみや怒りや、失望や絶望感は今はもうない。緩和されたのはあの八つ当たりに加え、魔法の体験、さらに彼女との接触が大きく影響されたゆえだろう。

「もう、ならあたしの魔法をあげたいくらいよ」

彼女から伸びる腕が、枕と頭の隙間に潜り込む。そうしてもう片方の手が優しく向こう側の肩を掴んで、優しく抱き寄せた。

身体が完全に密着し、たおやかな肢体を余す事無く感じられる。吐息が耳にかかり、鼓動は早鐘を鳴らすように拍動し始めた。

緊張や動揺によって顎が震え、焦点が定まらない。

女性とは普通に話せるはずだったが――こういった、一層深い接触は苦手だ。どうにも緊張して、頭が真っ白になってしまう。

ジャンは胸いっぱいに息を吸い込んでから、横目に彼女を見た。

「あんたは今、成長しようとしているのね。自分の殻を破ろうとしている。だけど、”どう”破れば良いのか分からない……そんなトコね」

「……なんで、アナタはこんな所で生活をしているんですか？」

結局なんて呼んでいいか分からずに、そういったぶっきらぼうな呼び方になってしまう。

だが、藁をもすがる思いで手にした質問は、確かにジャンが疑問にしていたそれだった。

窓から見える景色は針葉樹の群ればかり。となれば、ここは林、あるいは森の、少し開けた場所であるのは明白だ。

いつ異種族が襲ってくるかも知れない危険地帯に、わざわざ住居を構えるなんて正気の沙汰ではない。

だから”なぜ”と考えた。暇な時間を使って考えてみたが、答えはでなかった。

――そして彼女、”ボーア”はその質問に、思わず言葉に詰まった。

こんな僻地に住む理由……それは割と現在までに至った問題の根底に関わるものだ。

彼にこんな話はしたくないし、気まずくなりたくない。こんな少年に同情されたくないということもあったが、自分の過去を誰かに知られたくなかった。

悲劇ぶっているわけではないが、この過去こそが今の自分を作っている。嫌な事ばかりだったが、それを一蹴されることは己を否定されることと同義。それがたとえ相手が正しいとしても、だ。

何も正論ばかりが、自分にとって正しい訳ではない。正しいことが正しいとは限らない。

綺麗なままの世界では生きて行けないのだ。

まだ純粋であろう彼には、まだ早い。せめて、この怪我が治って、もう二度と合わなくなる時にでも……。

「さあね、気がついたらこんなトコに住んでたから覚えてないわよ、んな事は」

「そうですか。街に来ようとは思わなかったんですか？」

「必要に思わないからね」

「色々あって便利ですよ？」

「その利便さを知らない者にとっちゃ、どれほど便利なものだろうと便利じゃないの。その生活に満足できれば万々歳よ、住めば都って言うでしょ？」

「あー、確かに……」

最初は鉱山も地獄だったが、一年経てば、二年、三年と経てば我が家のように振る舞うことができた。もう故郷がなくなった彼にとって故郷たらしめる要因は、そういった生活に深く関わった人間関係や、どんな悪環境でも慣れてしまったから、というものだろう。

今では夢のような環境で寝起きしているが、慣れてしまった今では記憶の中の劣悪な環境が浮彫のように浮かび上がって、目立ってくる。よくあんな所で満足できていたな、と思えることができた。

だが後悔など無い。

そして二度と戻りたくないと思うわけでもない。

ひたすらに懐かしく、まさにジャンにとって故郷なのだ。

「アナタには、故郷ってあるんですか？」

だから、つい思い出してしまってそう口にしてしまう。

彼女にどんな背景があるかもしれないのに――もしかして同じような境遇だったかも知れないのに、そんな無神経な質問をしてしまった。

が、ボーアは飽くまで微笑みだけを湛えて、小さく首を振った。

「もう無いわ」
「……すみません、おれ、何も考えないで――」
「ああ、違うのよ。滅んだとか、そういうんじゃなくて……」
どう言うのかな、と彼女は少し迷ったように漏らしてから、そう、と続ける。
「縁を切られたの。もう帰れないって事。ま、ちょくちょく行ってるんだけどね」
「縁を……それはまた――あ、いや、なんでもないです」
「いいのよ、別に隠すことじゃないし。そうねえ、理由は……」
そう、理由。
アレスハイムを追放された理由。
当時となっては忌々しく腹立たしいものだったが、成長して、大人になって、政治というものがわかってきて、彼らのそういった選択は必ずしも間違ったものではない――国として生きるには、むしろ正解なのだと理解することができたから、その意識は薄れている。
それはまだ、目の前の少年と同じくらいの年の瀬だったろうか。
懐かしい。あの時いきがっていた多くの”老害”はもう居ない。
取り分け、その中で誰よりも先に”送ってやった”あのジジイは、既に多くの者の記憶からも葬り去られているはずだ。
そんな話を言っていいものだろうか。
いや、このうぶな少年はごまかせる。
――自分の過去を知られたくはない。
だが同時に、知っていてほしくもあった。
否、誰かに、自分のことを考えていて欲しかった。自分のことを、その存在を、ボーアという女が居ることを記憶に刻んで欲しかった。
その欲求だけは、あの門から叩き出された時から消え去ったことはない。忘れたことなど無い。唯一、彼女を苦しませ続けているのが、その孤独感だった。
「ヒトを、殺しちゃってね」
胸に走る鈍痛――直後、痛みから解放されるような妙な快感、快

楽が全身に走る。心臓から末端のつま先まで広がる電撃にも似た衝撃。それが、脳髄に染み渡るほどの強烈な幸福感となって広がった。

自分のことを、”真実”を話したのは彼が初めてだ。

疲労からの眠気や、懐かしい人のぬくもり。緩和される孤独……

それらがもたらした彼女の状態が、それを口にさせていた。

後悔はない。

だがこれで、にわかに依存欲求が強くなった。

下腹部に鈍い痛み。それは緊張による鈍痛だ。

言葉の後、ジャンの顔を見れずに布団に顔を埋めた後、暫くの時間が経過したように感じた。

だが実際には、ものの二、三〇秒だ。

期待していたのは「冗談でしょう」や「はは、まさか」なんて否定的な言葉。それらは、今の告白を”無かったこと”にしてくれる魔法のセリフだ。今の、この状況を少し前までに巻戻してくれる。この気持も、感情も、全てはジャンから強制的に引き剥がしてくれる。

しかし、ソレ以外のセリフは——肯定的なそれは、無自覚にボーアを受容することになる。

それがもたらす結果は、ボーア自身未だ知らない。

だから、胸がにわかに膨らみ、喉が鳴る、その声が発される瞬間になると、ジャンを抱く力がにわかに強まってしまった。

「——そう、なんですか」

その言葉は、彼女が待っていたそれらに該当しない類の言葉だった。

そして最も——勝手なことだが——失望に値する反応だった。

それが意味するものはただ一つ、どう答えて良いものか分からずに流す事。

だから思わず、ある意味で爽快を得て、諦められたという意味で、胸がすくような気持ちになった。

「それは、どんなヒトだったんですか？　話したくないなら構いま

せんが……」

追撃。

それは、そのセリフは彼女が待っていた否定、そして肯定ともとれない曖昧な表現だった。

しかしただ一つのその言葉で、彼女の得た爽快感は瞬く間に一蹴されて――胸を締め付ける鎖が緩んだような気がした。胸にぽっかりと空いた穴がにわかに縮まった気がした。

人の暖かさだ。

だめだ……欲しくなる。求めたくなる。

目の前に、自分と話して、自分を求めてくれる人がいる――どうしようも無く求めていたそれが、思わず爆発しそうになって、彼女は奥歯を噛み締め、寸でに食い止める。

もう胸の高鳴りは包帯越しに伝わっているだろう。高揚ゆえの体温の高さは吐息から察せられているだろう。

彼がバカな男なら、それを性的な意味で捕らえてくれるかも知れない。それで誤魔化せたのだ。

だが、こいつは――未熟で、世間知らずだからこそまだ純粋で、まだ坊やなのに……だからこそ、ボーアを期待させた。

「……ねえ、ジャン？」

「はい」

「――なんでもないわ。早く寝なさい。怪我の治りが遅くなるわよ」

これ以上会話をしていれば自分が駄目になる。

自分という重荷を彼に背負わせるわけにはいかなかった。

今日一日を通して分かったが――仮に彼が彼女を、あの時の”はぐれ”だと認識しても、嫌いはしない。むしろ何か理由があったのだと配慮してくれるはずだ。

彼は決して正義漢というわけじゃない。自分のできる範囲で、自分のしたい事をしているだけだ。結果的にそれが良い方向に向いているだけで、その根本的な行動意欲や真髄は、その現状を自分にとって居心地がいいものに維持するためのものに過ぎない。

周囲に取り繕いへつらって場を収める。なりふり構わなければそういったものだ。

ごく貧弱で、一人では何も出来ない種類の人間……。

そうだ。この気持は――この守りたくなるような気持ちは、彼をかつての自分と重ねているからだ。

以前も自分はそうだった。いや、今でもそうなのかもしれない。

だからこそ、自分よりも弱い人間に近づきたくなる。

否定はしないし、それでいいと彼女は思っていた。

少なくとも、当分の間は彼によって心が満たされる――その後のことは知らない。どうでもいい。今は、今だけは他のことを考えていたくなかった――。

「ジャン、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

――間もなく、傍らで自身に抱きついてくる女性は寝息を立て始めた。

温かい人のぬくもり。そして柔らかさ。意識せずには居られないものばかりだったが……それを凌駕する彼女の過去。

ヒトを殺したという事実。否、それが彼女の勘違いをそう信じているだけかも知れないし、あるいは自分の中のそういった妄想が彼女の中では真実となっているだけかも知れない。

だがやはり、おそらくそれは事実なのだ。

そこから見る、今日一日の生活は、ジャンに対する世話焼きは、久しぶりの来客に浮かれているもの他ならない。

ヒトを殺したことによって街を追放された。それは彼女の意思でないとなれば、それまでを孤独にすごしてきたのだろう。

人恋しかったのだ。どんな過去があれど、それでも彼女は人間で、自分と同じ感情を持っている。どんなに強くても、一人の女性なのだ。

サニーの幼少期を思い出す。

あの時の彼女は、いつもジャンの手を握って離れなかった。それは最後まで、施設に送られるまで意識を保っていた彼女だからこそ、その全てを声を押し殺して見守ることしか出来なかった彼女だからこそ、もう一人になりたくないという気持ちが強かったからだろう。

目の前の彼女に至っては、今からその境地にたとうとしている。

最後をはぐらかしたのは、自分の全てをさらけ出すことになるから。彼女はそれをすべきではないと判断したのだ。

（……おれは、どうすべきなんだろうな）

彼女を守りたいと思う。

それは、彼女が単純に女性として美人だからというわけではない。

一人で孤独に生き抜いて、そして久しぶりに出会った人間に、それまで耐えてきた孤独を忘れようとしている。

強い女性（ひと）だ。

強さの種類は違うが――ジャンがこれまで尊敬しつづけている、ケンタウロスの女騎士と同じに強い。

やはり、おれは強い女性に惹かれるのか……そう思いながら、彼はボーアを一瞥してから、眼をつむった。

（おれは、どうするべき……か）

街の生活。そしてここでの出会い。

街はともかくとして、自分を信じ、頼ってくれる人達がいる。それを切り捨てる選択を、思い切る勇気を彼は持たない。さらに、出来ることならばこの彼女にも、自分以外の人というものを多く得て欲しいとも思えていた。

もし、彼女さえよければ……。

考えても仕方がない思考を打ち切って、ジャンはそのまま意識を深淵の中へと踏み入れさせた。

――そうして、彼らの夜は更けていく。

捜索

「ここの地理に詳しい者、名乗り出なさい」
アエロはテポン、サニーを伴って、彼が雇用を登録していた冒険者ギルドへと出向いていた。
扉を強引にこじ開け、そして中の酒気にも動じず、玄関の前で声高らかにそう告げる。
そういった怒声じみた言葉に、中で酒を嗜む多くの男達は思わず息を飲み、そして彼女が騎士たる鎧を眼にすれば、一様に背筋を伸ばして酒瓶、あるいはジョッキから手を離してアエロへと向き直った。
――地理に詳しい者。
つまりここで高らかに手を挙げれば、瞬く間に拘束されて案内役となること請負だ。給金は得られるだろうが――そんな胃に無数の穴が空きそうな仕事など、どれほどの金を積まれようが嫌だった。
だから彼らは、ごく自然的に、そんな状況でもお構いなしで酒瓶を逆さにしてぶどう酒を飲み干す一人の女性に視線を送った。
あのずぼらな女なら大丈夫だろう、と。
「こんなに居て、さらに冒険者も居る筈でしょう!?」
そして外界から来た冒険者だ。実力も申し分なく、それ故に幅広い仕事をこなしている。そうすれば、自然的に領内の地理は概ね把握できているはずだ。
そういった視線が、一様にまとわりつく。
――ラァビはそんな気色の悪い眼に思わず背筋に凍える不快感が走って、手を止め、辺りを見る。すると、それまで楽しそうに酒を傾けていた男たちは、何か縋るような目付きで自身を見つめていることに気がついた。
「な、なによぅ」
「騎士さまが道案内しろだとよ」

「はあ、騎士さまぁ？」

一つの空席を挟んで呑んでいた男が玄関を指さして伝える。彼女は言われるがままに視線を向ければ、確かに立派な鎧に身を包んでいる、鳥人（ハルピュイア）の騎士が立っているのが良く分かった。

そしてその傍らには――最近は信頼できるようになってきた相棒（ジャン）の妹分であるサニー・ベルガモットの姿。

最近音沙汰無い彼の事を考えれば……ジャン・スティール関連か。

彼女はその二つを適当に直結させると、

「せめて何とか言ってよ！」

泣きべそをかこうとするアエロへと、元気よく跳びはねるように立ち上がって手を挙げた。

「はいはい！　その仕事、あたしが請け負ったッ！」

「――ッて、ばっかじゃないの！？」

簡単な手続きを踏んでから、一行は外に出る。ギルド通りと名付けられる、無数のギルドの館が並ぶその通りを抜けて手近な喫茶店に入ると、さっそくアエロから詳細な説明が入ったのだが……。

「ば……ちょっと、騎士に向かってバカは――」

「手がかりも無し、既に何日も経ってる。それで、外に出てったジャンを探せ？　アンタ達はだからバカにされんのよ、給金の割には全然働いてないって！　普通、そんなんなら人海戦術で探すでしょ！？　理由はいくらでもでッち挙げられるっていうのよ！」

「そ、そんな人員は――」

「この平和な国で、あんたらは歩哨に何十人割いてるわけ？　しかも待機してるのだって相当いるでしょ？　何のための軍事予算よ、ふざけんじゃないわ。来年から半分あたしが仕事するから、予算の半分をちょうだいね」

「あ、あんたね――」

「口答えする暇があったら予測ルートと、あんただってその立派な翼で調べたんでしょ？　なにか形跡。話しなさい。いっつも事務仕（デスクワーク）

事してなまってるあんたの仕事を、健気に働いて頑張ってるあたしが請け負ってやってるのよ。せめて必要な情報くらい提示しなさい」

アエロはすっかり気圧されて、負けたと言わんばかりに肩をすくめた。

正直な所、ラァビの正論の嵐は今日まで一生懸命頑張ってきた自身に対する罵詈雑言にしか感じられなかったが――そしてまた正直な所、そんな発想があったのか、という驚愕が半分を占めていた。

追い詰められていた感覚ばかりで自覚はなかったが、そのせいで思考が一点にとどまっていた。そう言い訳をしたかったが、また責められるだけだ。騎士なのに、そしてもうこの歳でこんな一方的に怒られたくはなかった彼女は、素直に、机上に一枚の紙を載せる。

「なにこれ、ゴミ？　ゴミはゴミ箱に――」

冗談めかしく言いながら、近辺の地図が手書きで描かれている紙を手にとって、彼女はじっくりと舐め回すようにそれを見る。前側に垂れていた耳はピンと張って、耳でしっかり興味を持っていると返事をした。

「バツ印が、ここ数日間で大きな変化があった場所」

「一つしか無いけど」

「そこで戦闘があったとしか思えないのよ。道を塞ぐ隆起現象に、凍結現象。散らばる骨の破片から、異種族が居た形跡もあった。だけど今のジャンくんの実力で、正直あの隆起は再現できない……はず」

「なら無関係の他者による行為。あるいは、その場にジャンが居合わせたと考えられるわけね。それで？」

「……それで、とは……？」

アエロのとぼけた顔に、ラァビは思わず紙ごとその平手を机に叩きつけた。

盛大な打撃音と共に、みしり、と机が悲鳴をあげたのを、アエロの隣でオレンジジュースをストローで吸っていたサニーは椅子から弾むように驚きながら確かに聞いていた。

「ばっかじゃないの！？　なんでそんな重大な証拠を見つけといて――チッ！　まあいいわ、それで、この地形の変化はいつ頃見つけたの？」

「……ごめん」

心の底からの謝罪ではなく、少しおどけたように肩をすくめて、顔は半笑い。混乱しきった頭では、その態度が何を引き起こすか、彼女には予測できなかった。

「……この鳥頭。一回ぶん殴って治してあげようか？」

ラァビは珍しく満面の笑みを浮かべていたが、既に外套の袖に手を通して収納可能な鋭い鉤爪を突き出して眼前に引き上げていた。

「い、いや……だけど安心して！　かっ、身体が、身体がさ！　身体が覚えてるから！」

殺気によって正気に帰るアエロは慌てたように翼をばさばさ広げてわたわたと振れば、周囲に彼女の羽根が抜けて周囲に散ってしまう。店主はカウンターの奥から心底迷惑気に思いながらも、彼女はそこまで気を回すことが出来なかった。

そして立ち上がり、銀貨を一枚机に残す。

アエロはそそくさと出口に向かいながら、

「ほら、ラァビ！　こっちこっち！」

額からだらだらと流れる脂汗をそのままに、彼女は素早くその場から辞した。

呼ばれた彼女はやりきれないといった風に肩をすくめて、後に続く。そうしてすぐ横に並んだサニーの頭を軽く撫でて、

「安心して、家に帰ってなさい。ジャンはあたしが連れ戻してくるから」

「……約束、ですよ」

「そうね。約束」

小指と小指を絡めあって、小さく握り合ってから手を放す。

彼女はそれで満足気に頷いて、喫茶店から外に出た後、ラァビに大きく手を振って家へと帰っていった。

「はっはー！　爽快爽快っ！　って……あれっ？」

景気よく空を飛んでいれば、それまで足に掴まっていたラァビの悲鳴や悪態が不意に聞こえなくなっていた。

慌てて旋回。下方を見れば慣性に律儀に従って、これまで進んでいた方向にそれまで進んでいた同じ速度で落下しているラァビの姿が見えた。耳を澄ませば、絶叫さえも聞こえてくる。

急降下。その頭を虚空に突き刺すように斜め下へと向けて、翼を身体に沿わすように流線型に。風を流し空気抵抗を現象させれば、落ちる速度はラァビを容易に上回る。

馬車のように落下中の彼女に横付けし、背中を蹴飛ばすようにして強引に鳥足で身体を掴む。それから不意の拘束によって落下の勢いが四肢を力いっぱい外側へと投げて――身体はくの字にへし折れ、ラァビは喉から生気を吐き出しながら意識を手放した。

「――このくそバカッ！　あんた、本物よ、お馬鹿さん……」

先ほどまで呑んでいたぶどう酒を道の端に吐き捨て、口から鼻腔に物理的に突き刺さる刺激臭をまき散らしながら、口の端から垂れる唾液を拭う。四つん這いになりながら、素知らぬ顔で辺りをうかがうアエロを睨むが、話にならないと嘆息して立ち上がった。

「にしても、ここがそうなのね」

大きく息を吐いて周囲を見渡す。

そこから少し離れた道は、舗装されたばかりのように、異様なまでに綺麗だった。

ジャンが失踪してから三日……それほどの時間があれば、魔術の影響で変異した大地も、そう激しいものではないだろうからすぐに直せるだろう。そして直さなければ外からの来訪者が立ち往生してしまうのだ。

だから、この現状は仕方ないが……。

「三日か。誰かに保護されてればいいんだけど」

この付近に人里や村はない。ここからどこに行ったかを探すのはかなり骨だ。

これほどまで手詰まり感を覚えたのは久しぶりである。もっとも、やる気になれば虱潰しにでも頑張れるが――騎士がこんな調子では。

再びアエロを一瞥して、また深い溜息。

「な、なによ！」

「バーカ」

「な、なん――ラァビ、あなたに言われたくないわよ！　騎士である以上、私の方が上なんだから！」

「あたしはこんなバカにもバカにされてるのか……死にたくなるわ」

頭を抱えて髪を掻き毟る。

こんな事をしている場合じゃないのはよくわかっているのだ。もしかしたら死んでいるかも知れないし、元気にどこかでやっているかもしれない。あるいは急げば見つかる場所で、困窮している可能性さえある。

だから、今は少なくとも彼が元気で無事である事を祈りながら、危機に瀕しない内に保護しなければならない。

仮にジャンが新たな生活を築き始めていたとしても、こんな周囲を不安にさせ心配にさせてから出来上がる生活なんて、個人的に許せるものではない。だから、何があっても、連れ戻してもまた外に出ていくとしても、一度は街に戻さなければならない――それが決定事項であり、最優先事項でもあった。

「まあいいわ」

彼女は首を振ってアエロのペースに飲まれぬよう意識を変え、短く息を吐く。

「あんたは道なり森の方に。あたしは西（こっち）に行く。明らかに何も無さそうだったら東に向かって。あたしも向かうから」

「うん、了解……って、なんであなたが指示を出してんのよ！？」

「うっさい、さっさと行って」

向かってくる彼女の肩を掴んで方向転換し、そのまま背中を突き

飛ばして森に向かわせる。
それを見送ること無く、ラァビはそそくさと草原を突っ切るために走り出していた。

草原を抜けると、針葉樹の乱立する湿原が広がっていた。
野生動物がのどかに草をはみ、ヤギや小動物の姿が目立っている。異種族の気配は無く、また人が頻繁に立ち入っている様子もない。このまま西にまっすぐ進んでも街や村、集落があるという話は聞かないし、これ以上行っても無駄だろう。
だが、これほどまで野生豊かな地がまだあったとは――大切にしなければならない。
彼女は感心深く頷いて、少しばかりその光景をみつめていた。
近頃は、この世界でも野生と化して繁殖する異種族に自然が食い散らかされているのだ。弱肉強食に無理やり割り込んだその存在は、さらに辺りの生態系も一様に変化させている。もっとも、殆どの野生動物が絶滅しかけているという話ではないが、これを看過すればいずれそれが実現することは確実だった。
単なる野生の動植物が、溝から向こうの力を持っている異種族に太刀打ち出来るわけがない。だから現在では溝に門扉(ふた)をして自由な行き来を防いでいるのだが、その間に世界になだれ込んできた異種族の数は予想以上に多かった。
ともあれ、早い内に対処しなければならない事柄だったが――だからといって早急に対応して、すぐにどうこうなるわけではない。
この問題には長き時間を置いて処置する、というのが国の方針で、確実だろうと彼女も思えていた。
「……あのバカも心配だし、もう戻るか……」
良く騎士なんかになれたと思いながら、彼女は踵を返して草原へと足を向けた。

「……結局コロンまで行ったけど、ないわね。手がかり」

低空飛行で周囲をくまなく観察したが、夕方ということもあって人影はひとつもない。何らかの形跡すらなく、彼女は仕方なしに引き返していた。ついで空からさらに、指示された通りに西へ向かう。が、しばらくすればまた濃密な森があった。その遥か向こうには巨大な岩盤があって、その岩盤は真ん中に亀裂を入れて――そこを中心に街が展開している。

そこは噂の鉱山都市だ。距離にして、飛んで一、二時間。歩けば二、三日というのが彼女の大雑把な計算の結果だった。

しかし、何の装備も無く森を抜けて何の支援も無しに飲まず食わずで向こうへと行くのはかなり困難だ。

近くに人里はもちろん、民家の一つもない。

ならば、やはり森に迷い込んで遭難しているのだろうか――そう考えて、草原を越えた先にある濃密な森に視線を向けた所で、彼女は木々の薄いすこしばかり開けた位置に、廃屋に近い外観の納屋を一軒発見した。

――ボロボロだ。

だが、近くに大きめの樽や、水を貯めてある巨大な瓶（かめ）があった。さらに納屋に吊るされるようにされているイノシシ。そして近くに、使用されたばかりなのだろう刃物が無造作に置かれている。

明らかに人が住んでいる様子だった。

ラァビに相談してから行こうか――そう考えて、上空を旋回しながらアエロは首を振った。

これでは行動の緩慢さからまた怒鳴られてしまう。あんなにバカバカと怒鳴られたのは初めてだから、もうイヤだった。

私はバカじゃない――心のなかで叫ぶのと同時に、彼女は先程の急降下よろしく円を描く旋回をしながら、徐々に地上へと近づいていった。

やがて着地し、大きく深呼吸をする。

「あのー、すみません！」

胸いっぱいに吸い込んだ息を吐き出して声を張る。納屋に向かって言ってみるが、暫く待っても反応がない。
今は留守なのだろうか。
彼女は考えて、扉に近づいた。
コンコン、とノックを試みる。
が、やはり反応がない。
「し、しょうがないわよね……？」
肩をすくめてから、彼女はドアノブを捻って強引に中へと押し入った。
――そして視界に飛び込む空間。
いくつもの家財が並び、寝台や、テーブルなど、完全に人が住んでいる様子がそこにはあった。が、やはり本当に留守であるらしく、人は中には誰も居なかったのだが。
彼女は中に数歩立ち入ってから様子を伺い、それから何事もなかったようにそこを出る。
それから今度は周囲を見回して……首を振った。
「まったく、どこに居るのよ……もうっ！」
彼女は力なく肩を落としてから、高く飛翔。
そうして、間もなくその場を後にした。

「だめだめ、全っ然居ないわよ」
「ええ、こっちも同じく」
「まったくもう、あの子はどこ行っちゃったわけ？　拉致でもされ――」
アエロは嘆くように漏らして、そうして己が口にした言葉に、はたと気づく。
拉致。
近日中に、ヤギュウ帝国がこの国に攻め入るらしい。もしこれが真実であるならば、この地形を偵察に、どう攻めて来ようか調べに

来る可能性がある。
もっとも、以前村を滅ぼした際に侵入した部隊がその役割を果たしていたならば話は別だが――その可能性は十分にある。
もしジャンが運悪くそれと接触して、口封じに殺害されていたら。あるいは情報を抜き出すために連れ去られていたら。
なぜ思いつかなかったのだろうか。
この状況下で、もっとも危惧すべきことはそれだったのではないか。
「……なに、どうしたの？　今言おうとしたことも忘れたの？」
「ち、違うわよばかっ！」
神妙に冷え切った頭が、茶々が入って加熱する。
「あ、あのさ。これはたとえ話なんだけど――」
そうして、明らかなまでに見え見えであるたとえ話を、彼女はラァビに言った。
まだ確定したわけではないという念を押して、彼女が知る事と、伝えるべき事をしっかりと区分して、必要なことだけをラァビに渡す。
そうすると彼女の顔つきは見る間に変わってきて、そしてアエロの言葉が終わると共に、怒りとも嘆きともつかぬ表情でアエロを見つめた。
「そうね。もし接触した可能性っていうのがあるなら……」
自分の国だったら、まず”ただ”では済まないだろう。
彼女はそう思ったが、敢えて口にはしなかった。それはアエロとて重々承知なものだろうと思ったからだ。それを重ねるほど、口にして彼女を無駄に不安にしてやるほど、ラァビは無粋な女ではなかった。
「三日の時間は長いわね」
初日ならまだ見つかっただろう。
二日目だって希望は残っている。
だが三日となれば……休まず移動すれば国境まで辿りつける時間

だ。捜索範囲は広大で、そして彼が近くで隠れているとしても、誰にも見つからぬような場所を見つけるには十分過ぎる期間である。

「うん。……ごめん」

「いいわよ。ともかく、今日は帰りましょ？　日が暮れたら見つかるものも見つからなくなる。また明日、朝一で外に出ればいいわ」

出会った当初よりも随分と幼く見えてしまうアエロの頭を撫でてやりながら、ラァビは様々な思惑に駆られて頭を動かした。

――彼女が見つけたという戦闘現場は、恐らくその”偵察兵”と戦闘した結果なのかもしれない。凍結と言うならば、そういった魔術が使用された証拠だ。

氷雪系の魔術は北方出身の者ほど得意とする。理由としては、弱点属性となる火焔でないのはそういった魔術を使用するに適していない環境だからだ。だから環境を最大限に活かして、本来ならば会得できない程の特性（レベル）の魔術を身につける。それが最も適当な判断であり、王道（セオリー）でもあった。

一撃で敵を打倒しようとするならば、自身の最高峰の力を以てして対峙するのはごく自然な事である。

もしそこで怪我でもしたならば、血痕を彼女が見逃すまい。だが、氷が残っているというのに、彼女は血を見なかった。魔術による氷の自然的な融解は約半日というのが一般的だが、”最高峰”となれば一日ほど保てていてもおかしくはない。

そしてあの位置は、アレスハイムからそうそう離れた場所ではない。

状況説明によれば、彼女と”魔法の話”をした日に失踪したという話だ。ならばあれほど騎士という職、存在に夢見て憧れた少年が、あと少しでそこに至れた彼が、不意にその資格すらも失ったとなれば――そのショックは計り知れない。

ならば情緒不安定からの精神暴走によって街を出たのだろう。そして城壁に最も近い建造物の屋上を殴り飛ばして外に出たという推論から、もはや肉体強化魔術（パワー・ポイント）が使用されていたのは明白。

そして彼女が確認したあの魔術による肉体強化率を鑑みれば、街からあそこまではおよそ二時間。時刻にして午前一時に、偵察兵と接触したことになる。

アエロがその形跡を発見したのが午後として――接触から約十四～十六時間後。

伺えたのは異種族のどす黒い血液や、見たこともない緑黄の液体というだけの話だから、ジャンの被害は無しと言える。

問題はその後だ。

その十五時間前後で、彼はどこに行ったのか、あるいはどこに連れ去られたのか。

――ようやく過程が見えてきたが、重要な結果ばかりは闇の中だ。

「まったく、頭がいたいわ」

帰路につきながら、ラァビは嘆息混じりにそう漏らした。

なぜ自分が、こんな探偵まがいな事をしなければならないのか。

居なくなってしまったものは仕方が無いのだ。形跡がなければ尚更、探す術がない。

だが――また今夜にでも外に出て、調べてみよう。

彼女はそう考えながら、また大きく息を吐いて、当分はゆっくり眠れなさそうだと、空を仰いだ。

空はすっかり朱にそまり上がって、季節的にも、夜の帳が落とされるのも時間の問題だと思われた。

保護？

ジャン・スティールの肉体が、彼の動きに十分耐え切れるほどに回復したのは、ボーアの小屋に来てから三日目の朝の事だった。

――そして、あらゆる苦難や苦悩、自身を苛む現実から唯一守り安息させられる空間がやぶられてから三日目の朝でもあった。

断裂したいくつもの筋は結合し、焼き尽くされていた細胞はその多くを再生させた。今では自立行動を可能とし、単独での整容はもちろん、外出さえも可能だとジャン・スティールは意気込んでいた。

そして身体の”なまり”を訴えていたからだろうか。

いつものように薬を塗布し包帯を巻きつけた後、ボーアは今日に限って彼に上下のそれまで来ていた衣服を身に付け、靴を履いた。

「なら、狩りでも手伝ってもらおうかしら」

立ち上がればジャンの方が気持ち目線が高い。だが目立つほどの身長差はなく、ボーアがブーツを履き込めばその差は瞬く間に塗り替えられてしまう。

「狩りですか。懐かしい」

悪戯に、まるで突然幼子に一人でおつかいに行かせようとする、少し冗談交じりの声色は、そんなジャンの漏らしと共に熱が篭った。

「したことあるの？」

「まあ。最近はめっきりでしたが……大体半年くらい前までは当番でやってましたね。大型動物なら自力でシカくらいまでは」

自信あり気にジャンは鼻を鳴らし、へぇと感心するようにボーアは頷いた。

この年頃の若者はそんなサバイバル精神はたくましくない。街や村に住んでいれば、自然的に加工された食肉などが販売されているのだ。金さえあれば、わざわざ危険を顧みずとも生活が出来る。食は安定する。

そしてまた、そういった生活に慣れきった者が狩りに初挑戦する

際は、その行為を侮りがちだ。ただ動いている、逃げるモノを仕留めれば良い――そういった、根底に軽視があり、根本たる命の尊厳、命に対する尊重の精神は置き去りにされている。

由々しき事態だが、所詮精神論だ。人それぞれという言葉があるように、そもそも狩りの本質にそれを重んじるものが少ないことは確かである。

果たしてジャンにはそれがあるのだろうか。

仮に無かったとしても、たかがそれでどうこうなるわけではないが……。

「趣味での狩りはやっていなかったの？」

引き締まる腰に両手を添えて、片足に重心を傾けて立ち直る。

ジャンは胸の前で両手を閉じ、開きを繰り返して調子を確認しながら答えた。

「飽くまで生活に必要な分ですね。深い意味もないし信条もありませんが、そうそう無駄に命を散らすのは好きじゃないんで」

「ははっ、そう！　そうよね、不必要に生きているべき生命は蹂躙すべきじゃないのよね」

「……でも、異種族との戦闘があるから――とやかくは、言えないんですけどね」

「何言ってんのよ、あれは蹂躙すべき生命よ。同じ命だから、なんて言ってたら、命がいくつあっても足りゃしない。それに野生動物だってそうよ、油断してたらこっちがやられるかもしれない。襲いかかってきたら迷わず立ち向かう。知能もへったくれも無い連中に、倫理観を掲げても意味が無いわ」

彼女は親指で己の喉を掻っ切るようなジェスチャーをして、悪意を孕む笑みをみせた。狂暴な印象を残す顔には、どこかあどけなささえ残っているような風だった。

それから無邪気に笑って、ジャンの手を引いて外へと促した。

「武器は無いんですか？」

やはり小屋は森の中にあり、少し歩みを進めれば彼らは、木々生い茂る森の中へと入り込む事になる。

既にここがアレスハイムからどれほど離れた場所で、どこに位置し、どこに近いのかは分からない。まだ早い段階ならば推測も可能だったのだろうが、あの”偵察兵”との戦闘の場所さえも忘れてしまったし、あれからどれほどの時間が経過したのかさえも曖昧だ。

不安定な腐葉土を踏み鳴らし、蜘蛛の巣を避けながら森を進む。

ジャンの問いに彼女は、静かに頷きながら手を伸ばして眼前にあげた。

塗料を塗ったかのように黒い爪は、彼女の意識が集中すると共に瞬時に鋭く尖ってその長さを倍以上にする。それは鋭利であり、爪でありながらも決してヤワであるような様子はなく、まるで抜き身の刃のような危なげな雰囲気さえそこにはあった。

「魔術、魔法を使うまでもなく爪(こいつ)があるわ。それとも、ジャン？あんたが必要なの？」

「ええ、まあ……徒手空拳はやったことがないので」

「なら小屋の裏に剣があるわよ。あんたの身の丈くらいの大きさの」

彼女はいつか”拾ってきた”その剣の外観を思い出す。

自身には扱えぬあの巨躯。巨岩をそのまま打ち砕いて剣の形にしたのかと言うような無骨さ。だというのに力いっぱい地面に叩きつけてもビクともしない頑強さで、そして持ち手の大きさから鬼族(オーガ)が元々の持ち主だったのではないかと推測された。

が、彼女が見つけたときには既に放置されていたのだ。岩の刀身にはコケが自生し、鋼鉄製の柄に巻きつけられる緩衝材なのだろう布にはキノコが生える。それは長い間、森の中で眠り続けていた証拠でもあった。

「あー、素手でなんとか頑張ります」

ジャンはさすがに男らしくがっしりとした体つきだったが、それでもあの巨剣を扱えるような筋力は持ち合わせていない。病み上がりなら尚更だ。

そもそも、あれほどの武器は大型異人種――鬼族や、そういった戦闘に種族の特性を重く置いている異人種が装備するべき代物なのだ。下手に、無理に扱おうとするべきものではない。

「あはっ、そうね。あんたはまず、あたしの言うとおりに動いていればそれでいいの」

――守ってあげるから。

言葉を飲み込んで、長年の間狩場となっている森の中を、まるで我が家の庭のように――実質的には本当にそうなのだが――歩きまわり、そして気配を感じると共に彼女は立ち止まる。即座に身体を伏せ、草むらの中に身体を隠した。ジャンをすぐ近くの木の影に隠し、そして人差し指と中指の二本を立てて、指し示す。

「シカが来るわ」

「鹿？　――ああ」

疑問を呈する間に、茂みをかき分けて果たして鹿はやってきた。こんもりと盛り上がる丘の少し下、中腹辺り。距離にしておよそ数百歩という遠距離にして、僅かな気配と臭いという野生の感性を最大限に生かして、ボーアはその獲物を見つけていた。

「ここから少し進んだ先に小さな川があるわ。海に続くわけじゃないけど、それが小さな池を作ってるのよ」

「つまり、処理はそこで行うってわけですか」

「その通り」

――しかし、足の早い野生動物を前にして、弓も持たずに狩りをするなんてかなり”ホネ”だ。

だがボーアは嬉しげな顔で鹿を覗き、そして鹿は何も知らぬように数匹の雄鹿、雌鹿は群れをなして近づいてくる。そしてやや窪み地帯となるそこは当然のように風下であり、存在を察知されることはない。

「ま、狩りって言ってもそう難しいことじゃないんだけどね」

「いや、道具も何もないんじゃ――」

「しッ。ほら、見てて」

中腰になって指の腹でジャンの唇を押さえる。
その直後だった。
ぼん、という篭った爆発音が大気に伝播した。
――多くの鹿が一目散に逃げていく中で、一匹の鹿は糸か縄か、そういったものにがんじがらめにされたようにもがいて、その場から動けなくなってしまう。
「やっぱり、異人種は魔術を使わなくちゃね？」
彼の唇を抑えていた指で自分の唇に触れてみせてから、また彼の手首を掴むようにして、捕らえた鹿へとまっすぐ走りだした。ジャンのペースなんてお構いなしの猪突猛進――それは獣人族の中でも、イノシシ科に分類されるからなのだろう。
地面がもっとまともならば、より早く、そして力強く攻めこむことが出来るだろう――そういったイメージに、再び彼女に対する違和感が過ぎって、ジャンは考える。が、やはり誰だったのか思い出せずに、ただジャンは手をひかれるがままについていった。

ボーアの説明に寄れば、魔方陣を刻んだ紙を罠として設置しておいたというだけの話だった。そしてそれを踏みつけた衝撃で魔術が発動し、ツルやら何やらで備えていた罠を起動させる。
今回の仕様は、魔方陣を中心にしてツルを四方八方に伸ばしておいて、魔術が作動した瞬間にツルが高速回転してまず足元を掬い絡め、そして転んだ所で全身にまとわりつくといったものだった。
――腹をかっ捌き、頭を落としてから手近なツルで近くの木に吊るし上げて血を抜く。水場の近くだから作業も滞り無く進み、食用に使える内臓を木の葉に包み、鹿の両足を結んで木の棒に引っ掛けて運ぶような時間になると、既に辺りは暗くなり、空は夜のとばりが落とされようとしていた。
「やっぱり、二人でもこんな時間になっちゃった」
「いつも家でやってるんですか？」
「いや、徹夜で作業して持って帰ってる。でもジャンが来てから時

間がなくてね」
「なら、おれも動けるようになってよかったですよ。あのイノシシもまだ調理中だし、今日は鹿の内蔵がありますしね」
「そうそう。ジャンは料理出来る？」
「い、いやー……そういうのはちょっと。住み込みで働いてた時も、ずっと寮母さんとかに任せきりで」
「そうよねー。でも、料理が出来る男って格好いいって良く言うけど、やろうと思わなかったの？」
「特別、そうは思わなかったですね」
ジャンは特に感情を込めず、そう流すように告げる。
ここでサニーの名前を出さなかったのに、特別な意味はない。だが少なくとも、彼女にそうした事をすべきではないように感じたから、という理由があるのは確かだった。
だが、それ以上の深い意味はない。
ジャンは、そういった事については求められぬ限りは話さぬようにしていた。
「――ふう、くたびれた」
やがて家の前について、ボーアは雑に投げ捨てる。
最初は燻製にして保存しようという話が出ていたが、燻製器が出来上がっていない現状を見ればまずそれが不可能だった。だから、今日はこのままにして、明日辺りにさらに解体し、そして使っていない瓶に押し込めての塩漬けだ。
処理が終えて三日前後で完成するそれは、冬が到来してもまだ保つ。この量だから、むしろ食べきるほうが難しい。恐らくこれからも狩りを続けていくのだろうし、それに何年もそれを続けているのにも関わらずあの鹿の群れだ。居なくなってしまう、という可能性は極めて低い。が、冬眠の可能性はある。
冬が来るまでにあと二、三頭ばかり獲ってくれれば十分といったところだろう。
これまで世話になったのだから、この位の恩返しは……。

そう考えている間に、不意にボーアの身体が垂直に弾むように跳ねた。
目を見開き、半開きにした口からは鋭い八重歯が見える。彼女は呆然としたようにジャンを見つめてから、我に返り、そしてふり返る。
そして、そうした瞬間から――彼女の顔からは血の気が失せ、それまであった陽気さの一切は消え失せた。

「こいつ――あいつかッ！」
気配。そして魔術、魔法を持ち得ないのに本質的に孕んでいる魔力。それらが合わさった禍々しい雰囲気が、異種族の気配というものだった。
だが、今回はその中でもとびきり嫌な気配のするそれらだ。
ボーアは脳裏に蘇る、一度だけ対峙したあの異種族――全身に石灰をかぶったかのような白い肢体に、豚の身体。馬の蹄に、二対の触腕。縦に長い楕円形の面には、鋼鉄製の並びの良い歯が常に噛み合わせを確かめている。さらには、あの全てを見ているかのような、気色の悪い散らばった無数の眼。
異形たる存在。
名前も知らないその異種族は、正直な所畏怖の象徴でしか無かった。
――そして現在は、ジャンすら感じられるほどの地響きがそこにはあった。
理由としては――考えたくないが――途方も無い数の”白いやつ”が迫ってきているのかもしれない。
ボーアはイラついたように頭を掻き毟り、そしてにわかに止まっていた思考をフル回転させる。
誰かと居ると楽だった。頭を使わなくて済むからだ。誰かが考えてくれるから、それに従えばよかった。身体が慣れた行為を、慣れ

たままに見せびらかすだけで良かったのだ。
が、もうそう言ったわけにはいかない。
「何体だ？　”以前（まえ）の地響き”から考えれば……一、二〇〇前後ってとこか……ッ！」
泣きたくなる。歯を噛み締めて、思わず目を細めた。
もうあんな気持ちの悪い敵と戦いたくはない。正体不明の、訳のわからない敵を相手にしたくはない。
膝が笑う。
脳裏にあの気持ちの悪い笑顔が浮かぶたびに、胸がぎゅっと締め付けられるように苦しくなって――。
「楽勝、楽勝！　あんなの、万全のおれとアナタなら、屁でもないでしょう！！」
――ジャン・スティールは今何が攻めて来ているのか、正直な所判然としていなかった。だが少なくともそれは人ではないだろうし、彼女の怯えようからまともな異種族でもなさそうだと考えられた。
となれば、あの”偵察兵”と共闘するハメになった際に現れた、未確認の異種族だろう。あの”白いやつ”だ。男も、随分と気持ちの悪いやつだと言っていた。
が、彼でも倒せたのだ。
十三体を相手にして、たった一人が。
「バカかッ！　素手で、どう戦うっての？　ジャンは！」
顎が震えて、ガチガチと歯が鳴る。
あれほどまで強く、優しかった彼女の面影はもうない。だが、その弱さは――ジャンだから見せてくれていた。少なくとも彼は都合よくそう解釈する。
たった三日ほど一緒に居ただけでそこまで信頼してくれる筈がない。しかし好意には思ってくれているようだ。
ならば、ここでの活躍で一気に距離を詰めるのもアリかもしれない。少なくとも、ジャンはこれから彼女に”街”に来てもらうならば、そうしなければならないと考えていた。

「何言ってんですか。あれがあるでしょう？」
ジャンは親指で、くいっと小屋を指し示す。そこには閉まった扉と、その手前に転がっている鹿の死骸しか無いのだが――ボーアは察する。そして瞬く間に、表情を怒気に塗り変えた。
「あんなの使って戦えるわけ無いだろうがッ！　ただでさえ、はち切れた筋がくっついたばっかなのに――」
彼女が言い切る前に、ジャンはその頭を二度ほど優しく叩いてみせる。それから頭に手を載せれば、ジャンの腕の震えが、直に伝わってきた。
ボーアがそれをきっかけに、良く彼を観察する。と、表情には余裕がなく、額から流れでた汗はその量をひどく多くしていた。不安を噛み締め、焦点が定まらずに視線が宙を泳ぐ。
そうだ。彼も怖いんだ。
ジャンは何も無茶を、その過剰な自信で通そうとしているわけではない。
彼は彼なりに己の可能性を、彼女に対して励ましとして語ったのだ。つまりは、こんな少年にさえ気遣われていたのだ。
表面上だけは、彼を護る側でいようと思ってたのに――。
胸が高鳴る。
それは緊張していることもあったし、こと上無く不安で仕方が無かったが――今この瞬間はジャンと心が、意識が繋がっている。
その興奮が彼女の緊張を解いていた。
そうだ。そうなんだ。
彼がいてくれればいいと思った。それは、ただ一緒にいるだけでいいと思っていた。なぜ彼なのかは、彼女自身いまだよくわからないがー一今は違う。
一緒に戦って欲しい。
一緒に生きて欲しい。
欲求は確かな形となって、新たにボーアの胸に刻まれた。
もう、この戦いが終わったら、だめになってしまうかもしれない。

頭の芯がとろけるように熱くなるのに、力が、体の奥底から湧いてくるような感覚を覚えて――。

「あんたは家から油をもってきて。奴らの弱点はその柔な皮膚だから」

指示をして、ジャンが頷き、家の中へと駆け込んでいった。

ボーアはそれを確認してから――巨剣なんて目もくれずに、振動の方向へと走りだす。

大地を弾き、そしてそうしようとした瞬間、彼女の中から迷いや不安や、その全てが吹き飛んだ。

――依存するわけにはいかない。

彼に頼るわけにはいかない。

理性がそう叫んでいた。

だから一人で立ち向かう。死んでもいい、彼に自分という重荷を背負わせないためなら、どんな事だって――そうジャンに対する言い訳を正当化して、身体を駆った。

そして、悪夢とも言える長い夜が始まった。

保護？

ジャン・スティールならば、肉体強化魔術による副作用の影響で肉体の治癒が早い。朝にでもなれば、走って逃げるほどには身体が治っているだろう。

もっとも、完治ではないから無理はきかない。だが十分だ。

微笑みさえ湛えて、既に数十メートル先に見えた白い軍団を見据えながら、彼女はどうすべきか、どう立ち向かうべきかを考えていた。

先ほどまでの心地よさは一変。胸の奥底から溢れでた不安、恐怖は既に全身を包んでいて、意識は既に現実を虚構と認識。故に彼女が今目の前にする大軍には現実感がなく、されど全身に伝播する畏れ故の震えは決して収まることがなかった。

――少しでも多く数を減らす。

それが当面の目標だった。

震動がやがて激震となって視線を体ごと上下させる。

その瞳の奥には何を思う――ボーアは右額から目を抜いて頬にかけて刻まれる刻印を輝かせて、魔術の発動を準備する。

激動。

白い連中は既にボーアへと進行方向を一様に変えているようだった。

生命に反応して動いているのか。何を目的としてこの地に移ったのか。

知性さえ垣間見えないそれらを見ながら、ボーアは一つだけため息を漏らした――直後に、掌に火花を散らせば、その火花は瞬く間に業火球と化して顔を飲み込むほどに、さらには頭上に上り、森を焼き尽くさんとする巨大な球体となった。その変化は時間にして、僅か数秒。

その数秒で、”連中”と彼女との距離は半分以下になった。

不安をかき消し、目の前のおぞましい光景を焼き払わんとするように振りかぶり、そして叫んだ。

「灼熱の牙（ブロークン・ブレイズ）ッ！！」

火焔は二対の槍と化す。灼熱は彼女の雄叫びと共に頭上から弾け――戦闘の数体に食らいつく牙となる。

それは大気を揺るがし震動する凄まじい爆発音と共に、直撃した幾つかの”白い連中（やつら）”が吹き飛んだ。焼け焦げ、肉体から離別する四肢が、頭部が周囲に撒き散らされて、肉の焼ける悪臭が辺りに立ち込めた。また蛍光系の緑黄色が大地に塗りこまれ、炎はそれで大地にとどまった。

――恐らく見た限りでは六体がはじけ飛んだ。

だがそれだけだ。

にわかに勢いを停止したかに見えた連中だったが、列をなすそれらは前面のみの被害で恐るるに足らぬと判断するや否や、蹄を高らかに、再びボーアへと駆け寄ってくる。

距離にして二〇メートル。殆ど目と鼻の先だ。

彼女は指を鳴らし、今度は両手に火球を創りだす。それは同様に頭上にまで上ると、二対の牙が上顎、下顎となって構成された。火焔は大気を喰らって唸り、そして振り下ろされる腕と共に、再び爆炎となって白い連中を飲み込んだ。

敵は爆散。

だが焼き尽くされ爆ぜた仲間を踏みつぶして、それでも尚迫る敵は、未だ半数以上を残して――四分の一も減らせずに――大地を駆る。

周囲の気温は瞬く間に跳ね上がる。周囲を包み込んでいた木々は焼け焦げ火災を起こし、触れ合う葉に伝播して炎が広がる。バチバチと乾いた木が爆ぜる音がして、そして帳が落とされたばかりの夜空を、眩いばかりの火焔の灯りが照らし始めていた。

「ふざけやがって――発現（めざ）めろ……」

既に、何の揶揄も比喩も無く、白い連中は既に眼前に迫っていた。

彼女の中に昂ぶる何かがあった。それは心情的なものでは決して無く、魔法発動によって強制的に肉体が干渉されるが故の、身体能力向上の証拠だった。

血湧き、肉踊る。彼女の身体はだからこそ、歯を剥いて笑顔で触腕を振るうそれらの腕を見切り僅かな足取りでそれらを避けることができていた。

二対の腕が大地を殴りつけ、そして脇から飛び出てきたそれらが虚空を穿つ。

「熱暴走(ヒート)ッ！」

諸手が真紅に染まり、加熱――その鋭く伸びた爪を含め、彼女の両腕は閃光たる輝きを放ち始めた。そして再び肉体ごと迫り来る無数の敵を認識(みて)、腕を一閃。そうすると、触腕の腹が彼女の指先に触れた瞬間に、瞬く間に細胞が焼き切れ、そして鋭さ故に両断される。

見上げる巨体に飛び上がって迷いなく首を刎ね、そして着地と共に即座に後退。凄まじい物量に押し潰されぬように間隙を縫い、呼吸にあわせて足を動かす。

攻撃を避け、カウンター気味の一閃。触腕と共に肉体を袈裟に切り裂き、半ばから割れた肉塊からは見たこともない臓物が溢れ出し、緑黄の鮮血が周囲に飛び散る。高熱を帯びる両腕は更に踊り、軽い跳躍と共に喉元を焼ききり、かっ捌く。

その瞬間。

避けきれぬ、十を超える触腕が頭上から、そして同様に左右から彼女目掛けて襲いかかってきた。

「く――ッ！？」

両腕を振るい、同時に紋様による魔術を発動。同時に一対の触手を切断し、そして満足に増幅されない火焔は手のひら大のままでつかみかかってくる一本の腕を吹き飛ばす。

が、それだけだった。

彼女の抵抗は、その身一つで出来る最大限の攻撃は、それで精一杯だった。

「う……いやぁッ！？」

両肩を掴み上げる腕があった。両腕を、両足を掴みあげられたボーアは、そのまま掴まれる箇所をぎりぎりと握り潰さんとする腕力に襲われながら――連中はまるで己等に襲いかかった愚かな女を晒しあげるように、ただでさえ巨躯であるそれらより、さらに高い位置に持ち上げた。

「ぐッ……く、くそ……ッ！」

骨が軋む。

息が詰まる。

行動が止まったが為に高揚感が失せて、そして押し殺していた不安や恐怖が、再び髄の髄から肉体を支配し始める。全身が小刻みに震え、視線の焦点が合わなくなる。にわかに現実と認識できぬ現状を、それでも意識は現実だと、逃避を許してくれなかった。

心臓が、早鐘を打つ。今にも肉を突き破って飛び出てしまいそうな、あるいは破裂してしまいそうな程に鼓動が早く、力強くなった。

――静かにのびた手が、緩慢な様子で頬に触れ、そして粘膜に包まれるその表皮でボーアの顔を撫で回した。

瞼の上から瞳を触り、鼻筋を確認して、唇に触れて――背筋が凍えるような思いを覚えた。まるで、盲目の人間が人の顔を認識するような手つきだ。

そして唇に触れた指先は、さらに強引に唇を開き、噛みあわせられた歯をなぞる。

「……ッ？！」

ボーアの唾液にまみれた指でそのまま下唇、顎を経て喉元。指は止まること無く胸元へ。そのたわやかな感触を覚えたのか、興味深く、そしてあらゆるモノを”触れて学ぶ”ように、その指先は優しく豊満なバストをなぞり、そして弾く。

気色の悪い、憎悪にも嫌悪感にも似た感情が腹の奥底で渦巻いた。

今にでも叫んで抵抗したかった。いや、抵抗する以前に理性がこの状況に堪え切れずに全てを手放してしまいそうな感覚を覚えながが

らも――決して屈したくはない、この連中の好きにされたくはないというごく彼女らしい意地が、深淵の闇たらしめる瞳の奥底には宿っていた。

指先が衣服をつまむ。同時に、もう一本の手が同様につかみ、そして勢い良く引き裂いた。

小気味良い布の裂ける音と共に、網目のシャツに押し付けられて淫靡に形を歪めるバストがあらわになった。

「き、貴様ら……な、何を――ッ！」

言うよりも早く、指先は力強くそのバストの先端を摘み、ひねり上げて――。

「あぁあぁあぁあ――」

――怒号と共に空気を摩擦するような甲高い亀裂音が”白い連中”ごと、真正面からその無数の腕を肉塊へと変貌させた。

それはおよそ、少年の肉体には見合わぬ巨剣だった。

手に握れば、それを構えただけで筋の断裂音が体内に響く。だが構わず、引きちぎれればその度に結合した――肉体に過負荷たらしめる副作用の代わりに、肉体強化魔術（パワー・ポイント）は常識はずれな身体能力への向上と共に、驚異的な自己治癒能力の強化さえも可能としていた。

故に走りだす。細胞が死滅するたびに再生し、そして再生した先から死滅する。幾度ともなく繰り返すその中で、数分とせずにジャン・スティールは目的地に到達した。

そして目にする、悪夢の光景。

およそ予測し得た事態。

だが最も回避すべきであり、そうであってほしくなかった未来がそこにはあった。

――無数の手によって祀り上げられているボーアの衣服が剥かれ、その手はまるでいかがわしい野郎共の汚らわしい手によって、今まさにその純潔を穢されようとしているようだった。

「――て」

息が詰まった。
岩盤から切り抜いたような岩剣を振り上げる。
関節が悲鳴を上げ、筋という筋全てが断裂する。
構わない。
目頭が熱く、視界が真っ赤に燃え上がる。
鼻腔に突き刺さる悪臭も、肌を焼き尽くす高熱も、その全ては彼の意識に介入することは出来なかった。
「てめぇえぇえぇえぇ――あぁあぁあぁあぁあぁっ！！」
咆哮。
背中から吹き出る輝きが、真っ赤に燃える森の中で一筋の閃光となる。
距離半ば。そこでジャンは剣を勢い良く振り下ろす――が、僅か一秒にも満たぬ時間で距離を半分以下にさえ縮める速度にとっては、その反応速度が一番ちょうど良かった。
そして接敵。
やがて接触。
振り下ろされた剣戟は、最早斬撃たる破壊力を持っては居ない。
破裂音、爆撃音、共に弾ける肉塊に、爆風と共に吹き荒れる緑黄の血。真正面に捉えられていた一体の”白いヤツ”は振り下ろされたまま爆散して、地面にこびりつく影となる。
最早”爆撃”と化した一撃によって、ボーアを拘束していた十数体はそれ故に一様に吹き飛び、致命傷、あるいは即死となって肉体を崩壊させていた。
風が吹き荒れ、火焔が勢いを増す。無防備に空中に放り上げられたボーアの周囲には、されど白い連中は居なかった。
ジャンはその異種族の脂に濡れた刀身を、近くの燻る木々の中に放り投げて――落ちてくるボーアを両手で受け止めた。衝撃が両腕に流されること無く打ち叩いて、骨が軋む。大きな筋に亀裂が入った感触を覚えるが、肉体の損傷は随時快復された。

「なにやってんだ、あなたは一人でっ！」
一時的に、魔術を途絶。
未だ一〇〇体を超える数が息巻くその中心で、ジャンは無防備なその身を晒すが――今度はボーアとは異なり、その破壊力を認められた。戦術もクソもない直球な力比べに、敵は知性でも持つように足を止め、ジャンを観察するように停止していた。
「逃げろ！　あたしはいい、ここは危険なのよ！　あんたの敵う相手じゃない！」
潤んだ瞳で、ボーアは力なくジャンの胸を叩いて、その手で彼の衣服を掴む。無力気にそうする様子は、言葉とは正反対に、行かないで、とでも言うようだった。
「逃げるわけがないっ！」
腕の中で、ついにはぽろぽろと涙をこぼし始める彼女を自立させ、そうしてから彼女の涙の意図さえも知らずに、ジャンは彼女の肩を力任せに掴んで見据えた。
「おれが目指した騎士は、こんな所で逃げるわけがない！　おれは、守りたい人を守るために騎士を目指したんだっ！」
ボーアが見つめるジャンの瞳には、一瞬だけ黒い何かが過ぎった。しかしそれが何か、気にする暇もなく、彼の登場、存在、それに安堵し溢れ出した涙は留まることなく、再び視界を濁らせた。
「だけどあんたは……、騎士のなりそこないじゃない！」
隠されること無い事実が叫ばれる。
だというのに、ただ一つのその真実が今を困窮、苦難たらしめる要因となっているのにも関わらず、彼はほんの僅かな動揺の色さえ見せずに頷いた。
「ああ、だからだよ」
「はぁ！？」
「おれは騎士じゃない――だから、せめて今だけは、アナタの騎士でいさせてくれないか」
――肉体は既に破滅と再生を幾度ともなく繰り返している。これ

が示す、肉体強化魔術という支えが失せた先に待つ未来は、いくら魔術に明るくない者だろうとも容易に想像できる筈だ。

おそらく、まともに戦えるのは今日が最後かもしれない。

奇跡があったとしても、その肉体が快復するまでにどれほどの技術と労力、そしてどれほどの途方もない時間を費やすか知れない。

もう他の職業を目指すという問題ではない。

身体を資本として生きてきた彼の生き方というものを、大きく変えねばならぬのだ。

その先に待つものは――。

その覚悟を秘め、ジャン・スティールは全てを賭していた。己の存在理由も、己の強さも、無意味となり得ようとしたその全てを、この瞬間に。

ついこの間出会ったばかりの女性のために。

そして目の前に現れた、巨大な壁を突き破る為に。

――彼は静かに深呼吸を一度だけすると、近くの幹に突き刺さって炎に炙られていた巨剣を引きぬいた。その刀身は、従来の作戦通りに火焔を纏い始めている。

「あッ、あたしを、守るゥ？　あんたが？　あ、あんたがァ？」

手の甲で涙を拭い、あらわになるバストも構わずジャンの横に並ぶ。鼻をすすり、下がる口角を無理やり吊り上げた。

集団は未だ様子を伺っている。

二人は臨戦態勢で並び、そしてボーアが続けた。

「〝元〟騎士のあたしが認めるわ。あんたは今、立派な騎士様よ。存分に、戦友（あたし）と共に戦いなさいッ！」

ジャンは力強く頷き、思わずほころびる頬をそのままにして声を荒らげた。

「ああいいとも――連中の暴走は、おれが止めるっ！」

認められた。

ただひとことだけでも、たとえそれが虚構だとしても。その言葉は、ジャンに力を与えてくれた。

血湧き、肉踊る。
ジャン・スティールの肉体内から、強化魔法とは異なる別の力が湧いてくるのを彼は確かに感じていた。
あれほどまで”やられかけていた”ボーアが今ではこんなにも頼もしい。
ただの重い荷物としか思えなかった巨剣が、まるで肉体の一部のようだ。
目頭が熱くなる。
闘争本能が昂り、吐き出す呼気は火焔のような熱を孕んでいた。
そして夜は――明ける様子すら見せずに、更に、更に深き闇へと誘い始めていた。

保護？

大剣はその巨大さ故に破壊力は魅力的であるものの、緩慢、鈍重であるイメージを払拭することはできない。それが身の丈三分の二などの大きさならまだしも、等身大などの大きさならば尚更である。

しかし、そもそも大剣とは巨躯を持つ者のための武器だ。その肉体に見合った剣を作れば必然的にそれは巨(おお)きくなり、また小柄であってもそれを扱える筋力さえあれば使用するのは無理な話ではない。

巨体が大剣を使えばそれは剣たりえるのだが――その大剣を中心と見て――小柄な者が扱うとすれば、それは剣たりえない。単なる巨大な近接格闘用の武器であり、それを飽くまで刀剣としての概念を捨てずに使用するならば重量や大きさから、足かせにしかなりえない。

「くそどもがぁっ！」

本領発揮とは、まさにその事だった。

剣術という型に当てはめれば弱体化し生かしきれぬ巨剣は、力任せに振り回し、敢えてジャン自身が剣に振り回されることで脅威的な破壊力をもたらしていた。

さらにその重量ゆえの緩慢さは、遠心力に振り回されることによって解消。その勢いを孕んだ暴力はまさに疾風の如し。

――数十センチにまで距離を縮められたジャンは、それまでと同様に俊敏たらしめる勢いを殺さずに剣を振るう。故にその加速は、留まるところを知らずに速さをさらに求め続けていた。

眼前にその大口を開けて迫ってきた顔面に横薙ぎにして剣を振るえば、頭は吹き飛び、下顎は並びの良い歯を小刻みに揺るがしながら突撃の勢いを殺せずに、死して尚ジャンへと突っ込んでくる。彼は振り薙いだ勢いと共に斜め後方へと勢い良く跳躍すれば、すぐ脇

を通り抜けて体勢を崩し、地面を抉りながら急停止した”白いヤツ”が視界を過ぎった。

着地点には、ジャンへと手を伸ばすソレが待っていた。

「はっ、くたばれっ！」

脇に構えていた剣を背後に振り下ろせば、その刀身に触れた手が半ばから袈裟に切り裂かれて吹き飛び、さらに身体に沿うように切迫してから振り上げれば、腹半ばから肩口にかけて肉体を切り裂き、一度抜けた刃は再び首を刎ねて空中に飛び出た。

蛍光色の鮮血が周囲に飛び散り、見たことも用途もわからぬ臓物が溢れ出る。辺りは腐臭に満ちたが、嗅覚は麻痺し、奴らの鮮血に対する補色か、瞬きの度に真紅の残像がチラついた。

ジャンは着地とほぼ同時に、左足を軸にして腰を回し、身体を大きく開くように捻りを加えた。足は半円を描くように開いて地面を踏みしめ、それに追いつかぬ大剣は、それ故に白い連中の全方位からの包囲を許してしまう――否、彼は余裕を持ってそれを”許可”していた。

そして捻りを解消するように力強くその巨剣を薙げば――深く食らいついた剣は下方から振り上げるようにして”白い連中”を切り裂き、その胴体を瞬く間に両断する。一体を切り裂けば、その横に並ぶ一体、さらに次を切り裂き、勢いは衰えずに肉体を吹き飛ばす――。

鋭い円の軌道が終える頃には、瞬時にして十以上の”白い連中”が肉塊と化した。

「はぁ……っ！　まだ終わらねえのかよっ！」

呼吸を乱しながら、ジャンは改めて辺りを見回した。

――敵の数が本当に一、二〇〇体程度ならば既に戦闘は終えているはずだった。

一度に十体以上を屠るジャンの機動は、既に数十回と繰り返されている。随時行われる魔力供給から肉体強化が絶えることは無かったが、それでも自己治癒が鈍くなっているのは確かだった。

筋の結合が一瞬だったはずが、今では数十秒もの時間がかかっている。そして回復の為に時間を稼ぐが、その際に無理をして怪我が悪化し、またそのための時間を作り――悪循環の堂々巡り。

「くそったれが」

吐き捨てるジャンは、怒りや憎悪から、本来口にするはずのない言葉を口にする。それは彼が、幼少期の”出来事”以前に持っていた本質的な性格であり、環境によって矯正されたより攻撃的な一面であった。が、彼にはもちろんその自覚はないし、多くの者にはあるだろうそれだ。

が、その性格こそが、彼を死を畏れぬ幽鬼とさせていた。そして本能的にそれを携えているからこそ魔術よりも近接戦闘よりなのであり、ジャンをジャンたらしめる、彼を受容するには知らねばならぬ部分である。

――周囲には白い連中は居ない。

先ほどの戦闘で習性と”力押し”を学んだボーアは、獣人族特有の”種族解放”と呼ばれる――タマの獣化のように、彼女の持つイノシシ系の獣を肉体に憑依させるようにして戦闘能力を強化した。全身に毛皮を纏い、その両手は蹄のように硬質化する。牙が太く鋭く伸びて野性味を帯び、そして彼女の本質を見せるように――真っ直ぐ一直線に踏み込む一撃が、彼女の身を守り、そしてしのぎを削った。

「なるほど、な。そういうことか――異種族（モンスター）の恐ろしさってのは」

木々をなぎ倒してやってくる同数、あるいはそれ以上かもしれない”第二波”を遠目に見ながら、青年は考える。

――ジャン・スティールの肉体強化から始まる驚異的な破壊力は、されどそのお陰で状況が有利になったというわけではなかった。

白い連中自体はそうそう戦闘能力が高い存在ではない。

まれに”学ぶ”知性を見せることもあるが、個体が学んだ所で周囲にその情報や知識が伝播するわけがなく、その知力を活用するよりも早く屠るが故にそういった異種族は本来持たざるだろうと考え

られていた習性は、苦にはならなかった。
ならばなぜこれほどまでに苦しまされているのか――理由は簡単であり、明快だった。
無尽蔵を思わせる敵を前にして、
「格好はついたが……生きて帰れるかな」
その独り言はどこか喜色すらはらんでいた。
異種族の脅威はその圧倒的なまでの物量であり、また痛みや傷に怯まぬ狂乱的な本能でもあった。
どれほど殲滅に尽力したとしても、いずれ疲弊し力尽きる。
敵は味方の多くを犠牲にしながらも、ただひたすらにそれを待っているようだった。無論、連中にそんな知性はないだろうが、彼にはそう思えて仕方がなかったのだ。
――戦闘能力が脅威などではない。
その無限を彷彿とさせる物量こそが、最大の脅威であり恐るるに値する”現象”たらしめていた。
そう、異種族の襲来はもはや現象である。彼は全てをひっくるめ、そう理解していた。

「ジャン……、あたし……ジャン……ッ！」
硬質化する五本の指が瞬時にして白く染まりあがり高熱を帯びる。その手がさらに貫手となって、敵の肉体に横一閃を走らせていた。
焼ききられた肢体は為す術もなく内蔵を零して倒れ、されど執念深くボーアをつかもうとする両の手を切り裂いては、足を振り上げて頭を打ち砕いた。
――体内の昂りは、最早抑えられはしない。
ジャンの登場によって爆発的に増幅した脳内麻薬が、彼女の戦闘能力をぐんと跳ね上げていた。コンディションは最上のものとなり、戦闘意欲はそれ故に彼女をより効率よく確実な生存へと導いていた。
だからこそ、己の中で定めた規律（ルール）は無自覚に破られ”種族解放”が行われた。

獣人族はその獣化、人型化は自由自在だ。他の種族は分からないが、少なくとも獣人族はそういった変身能力の向上が顕著であり、今のところ確認されている限りでは唯一と言えた。

そして彼女のそうする戦闘態勢は、人型の臨機応変である柔軟性と、獣型の力（パワー）、俊敏さという根本的に高い身体能力を併せ持った、彼女の全力たる形だった。

それ故に、最初期の戦闘とはまるで別人のようにその殺害（キル）数は跳ね上がり、ジャンのように一撃で数体を倒せぬ者の、地道な戦いで今では五〇をゆうに超えていた。

が、敵の数は一時消えたかに思えたが、肉塊の山の向こう側。未だ森の火災が及ばぬ、月光に照らされる薄暗い向こう側に、さらなる援軍を彼女は見た。

悪臭立ち込めるそこで、いよいよ体力的にも追い詰められ始めたかというところで。

首を回して背後を見やる。やや離れた位置で立ち尽くしているジャンを一瞥するが、彼はその視線に気付かず、大剣を杖代わりにして身体を支え、肉体強化魔術によって全身を淡い光に包んでいた。

表情には余裕があるが、おそらく無意識なのだろう震えは遠目に見ても明らかだった。肉体が限界を迎えようと、あるいは既に限界を超えているのだろう。そしてそれは、当然だった。

ただでさえ、肉体強化の限界を超えて治療中だったのだ。そこでさらに本来は扱えぬ超重量の大剣を簡単に振るい、そして一時間にも及ぶ全力全開の気が抜けぬ戦闘を続ければ、肉体がズタボロになってもおかしくはない。むしろ、彼がそうして立っていられる事自体が奇跡と言っても決して過言などではなかった。

が、ボーアもそれを当然として見ていた。

ジャンならそうして当たり前だ。

というか、彼ならばそうしなければならない。

にわかに失われた、もしかしたらまだ戻れるかも知れないという生半可な位置で燻るより――未来を一度失ってから、まだ戻るとい

う強い決意のもとで立ち直ったほうがいい。その成長性は別人のように変わる筈だと、経験則上で彼女は考えた。

「ジャン……、あたし……あんたとなら――」

口にしようとした言葉を、はっと我に帰って飲み込んだ。

一時的にだが、敵も失せて落ち着いた所で心が弛緩したが故に、思わず零しそうになってしまった。

これぱかりは、心に秘めなければならない。彼には背負わせてはいけない。この戦闘が終わったら、彼に気付かれぬように退陣して、全てを忘れてもとの生活に戻るのだ――頭ではそう考えていた。

だが、彼女は知っている。もうジャンを忘れることはできない。そして、もうジャンから離れることができないことを。

心が彼に釘付けだ。理由は知れないが、その状態でここに駆けつけられたのが大きかった。

やはり危機を救われるというのは鉄板か――こんな状況での場違いな考えに思わず吹き出して、軽く頭を掻いた。

「一目惚れ、なのかな。だったらすごい情けないなァ」

ひたむきさ、あるいはその弱さに魅了されたというのも恥ずかしい話だ。己自身の精神的な強さを誇っている彼女は、だからこそそういった軟弱な理由が嫌だった。

どうせなら運命的な何かで結ばれていたかったが……現実的ではない。

そしてより事実に近く説明すれば、やはり呟いたとおりになるのだろうか。初めて対峙した時は何も思わなかったから――やはりそうなのかもしれない。

――軍団は、再び距離を縮めていた。

「ビビってます?」

背後からジャンが声を掛けた。ついで肩に手をやると、驚いたようにボーアは身体を弾ませる。

「ああ?　誰に言ってんのよ、実力面では誰もが認めるボーア様よ

？」

「……ボーア？」

――彼女から漏れた名前は、まるで電撃のようにジャンの中を走り、そして脳を刺激する。電撃はそのまま記憶の海に飲み込まれて……ボーアという名前に関連する、全ての記憶を引き出した。

あのドワーフの女騎士が、街に襲撃してきた獣人をボーアと呼んでいた。

鳥人の女騎士が、同様にボーアの名を出していた。

そして、目の前の獣人たる彼女は己をボーアと名乗っていた。

食い違う事実は、何一つとして存在しない。

そしてそれまで存在していた、たった今思い出した違和感は、それと同時に解消された。

「ああ――」

感嘆となって、その判然とした快感が思わず口から漏れた。

「あなたが、ボーアだったんですね」

今まで、あれほどまで接していて思い出せなかったことを恥じるように後頭部に手をやって、はにかんだ。

「あ、あの……ジャン？」

「まあいいや。つもる話はまた後だ」

馴れ馴れしく肩を叩いて見せても、ボーアは嫌がる様子一つなく、どこか気恥ずかしいように苦笑して頷いた。

「行くわよ？　……発現（めざ）めろ――熱暴走（ヒート）ッ！」

言葉と共に、彼女の肢体は熱によって芯まで白く染まり上がる。

同時に発動させたらしい灼熱の牙（ブロークン・ブレイズ）はその影響だろうか――既に頭上で上、下顎の二本で一対となる牙を構成していた。

「全力でな。覚醒（めざ）めろ……禁断の果実（フォービドゥンフルーツ）」

肉体の強化に充てていた魔力は、おおよそ魔術を主として戦闘する魔術師ほどの量になっている。つまりは近接戦闘を主体とする者にしては異様な程の量であり、そしてその全ては強化の為に増幅されているという現実が、その強化の程度を知らしめていた。

そしてその魔術によって、魔力の半分ほどが消費されて、胸に現れた小さな魔方陣から瞬く間に紅い果実が精製。彼は空中に投げ出された球状のそれを手に取り、流れる動作で一齧り。

口腔内に芳醇な魔力があふれたかと思うと――同時に全身へと熱が伝播し、間髪おかずに意思を剣へと送れば、その巨剣は瞬く間に熱を帯びて真紅、やがて融解する勢いで白く塗り固められた。

「そして、熱暴走（ヒート）――これがおれの、奥の手です」

ジャンのひと通りの所作を眺めていたボーアは驚愕し、言葉を失う。彼はそれを見ながら悪戯っぽく笑って、

「さあ、行きましょう」

肉体は既に死に体。思考は一辺倒で身体の反射的な機動に頼り切った戦闘方法。戦闘領域は剣の届く範囲までであり――破壊力は最上。速度は敵に反撃を許さず、その戦闘能力は圧倒的だった。

相棒たるボーアは体さばきの柔軟性の全てを捨てて猪突猛進気味の攻撃に転ずることによって、加速。故に敵に捕えられる可能性を低下させた。

そして――走駆。

切先を背後に向け、腰に引きつけた両手で柄を握り引きずるように走りだすジャンを確認しながら、ボーアは微笑を湛えて業火の二対の牙を敵の軍団へと振り下ろした。

前衛も後衛も無いその軍団の、最前列はボーアの灼熱の牙が吹き飛ばした。焼け焦げ体液を燃やし、全身を吹き飛ばすそれらの数は、されど見た目的に大きく減ったようには感じられない。

そしてい炎にさえも怯えず押し寄せてくる”白い連中”へと、ジャンは瞬く間に肉薄する。速度は明らかなまでにジャンが上であり、それ故に切迫し、接触するのにそう時間はかからなかった。

――地面に抵触する程の下方からの、切り上げ。右腕の下腕がすり切れて鮮血が溢れたが構わず力任せにその身の丈の巨剣を振り上

げる。
眼前に迫っていた気色の悪い”奴ら”は、先程までと同様に岩剣に深く食らいつかれて、柔く肉体を両断。切断面を焼き、肉が強制的に結合する。
肉体は二つの肉塊となって崩れ落ちる。
本来ならば、そこから先に続くはずだった――。
「く――っ！？　なんだ、こいつら……っ！」
いつものような後続は、周囲を囲む連中はそこには無い。未だ大気を消費する爆炎の中に身を置く白い連中は、皆が一様に歯を噛みあわせて斉唱するように音を鳴らしていた。まるで様子を伺うような、異様な光景。
ぞわりと全身が泡立ち、そしてそれまで無視していた”学習能力”が脳裏によぎる。
「ジャン、こいつら……」
「ええ、最悪、かもしれません」
今までは無闇に突っ込んできた。だからそれをなぎ払い、その破壊力と囲まれた際に発揮する最大限の戦闘能力で一度に多くの敵を屠ってきた。
しかし、その時点ですでに”第二波”が待機していたとしたら。奴らがそれを目の当たりにしていたら。
第一波と考える先ほどの連中が、いわゆる特攻隊のような存在だとしたら。もともと犠牲にする予定の軍団が予定通りに消化されただけだとしたら。
――異種族の脅威とは他に、この”白い連中”の本当の恐ろしさが”学習能力”にあったとしたら？
「ビビってんの？」
ボーアの肘鉄が脇腹に食らいつく。だが勢いや力は無く、それが単なるスキンシップであることくらいはわかっていた。
「誰に言ってんですか？　おれは――」
何があるだろう。言いかけて、思わず口ごもる。

彼女のように戦闘能力で信頼を築いているわけではないし、現在の機動力や破壊力は、全て強化あってのものだ。そしてこれが終われば、この肉体は使い物にならなくなる。

ならば何が残されているのか。魔術にだって秀でては居ないのに。

「おれは？」

後ろ向きに考えて、いや、と唸る。

そうだ、一つだけあった。

「おれは戦闘もできる元鉱夫ですよ？　あんな連中、鉱山の崩落に比べたら屁でもない」

「あははっ、なにそれ」

「唯一誇れる事です」

あの生活は、自分を支えてくれた人たちは未だに大切なものだ。現状は散々だが、それでも捨てたものではないし――しかし騎士でもなんでも無い今名乗るならば、それが最適であるように思えた。

彼女はジャンの真似をするように肩に手を置き、ガチガチと手拍子でもするようなかみ合わせ音を聞きながら、寄りかかってくる。

「――これまでの戦い方が通じなくなるのか、な？」

「ははっ、面白い事言いますね」

そう言って笑い、頭を叩くジャンを横目に睨む。彼は相変わらず無意識の震えが続いているが、それは決して恐怖故の畏れだとか、武者震いだとかいうものではない。全身の筋肉が既にズタズタに切り裂かれていて、ただの直立体勢が、彼にとって一番負担になるからだ。

「戦い方は確かに相手に理解されているでしょう。だけど、速度や力に、連中が一度でも対応できたことがありますか？」

そして同種族が、わずか一時間前後でそれに対応できるほどの成長、あるいは進化を遂げられるわけがない。ならば同じ身体能力で、同じ戦闘能力。学んだだけで代わり映えもない、その個体数だけで数的優位に立つだけの存在だ。

そんな連中が勝てるわけがない。

ましてや、
「おれたちに？」
「……確かにな」
彼女は、どこか引きつったような顔で頷いた。虚栄たる微笑は無いのは、ジャンに下手な演技で心配や心遣いをさせないためだ。
「だが」
釈然としない。
彼女はその言葉を飲み込んでから、いい変えた。
「”学習”するとして、それまでを理解したとして、よ。よく考えてみて、もし本当に”知能”があるなら、その物量を利用した特攻が一番効率が良くてあたしらを倒せる確率が一番高い戦術って事に行き着かない？」
「つまり」
「そう」
ボーアは頷いた。
「罠、かもしれないわね」
「まさか」
にわかに驚いた、という様相を演じて目を開く。
頬、そして両腕、腹、背、引き締まるがやや肉付きの良い腰回り、筋肉質の腿、形良く伸びるしなやかに長い足……その全てに肌触りの良い毛皮を纏う彼女は、さらにその身を強く押し付けて首を振る。
「信じたくは、ないわよねぇ」
「だけど、良く言うでしょう？　虎穴に入らずんば虎子を得ず……なんにせよ、相手が”待って”いるんじゃ、動かなければなにも始まりませんね？」
「ああ、そうね。すごくイヤだけど」
「さて――行きますか」
まるでこれからどこかに出かけるような気軽さで。
ジャンの声を契機（きっかけ）に、ボーアは四肢を、そしてジャンはその巨剣を真紅を経て純白へと熱し、駆け出した――その瞬間の事である。

軍団の横腹に盛大な花火よろしく爆発が巻き起こった。
肉塊が宙を飛び爆ぜて闇を蛍光系の緑黄の鮮血で塗り替える。森の火災はひたすらに拡大する一方で、再び爆発が軍団を襲った。
――もう歯の打ち鳴らし音は聞こえない。
大気を激震する爆発音に、さらなる爆発。一方でどこからともなく飛来する無数の真空波は一瞬にして木々と共に白い連中を刻み細かく分解していく。
「まったく、夜中に起こされてみたらこれだもんなァ」
――白い連中は、己らに襲いかかる予期し得なかった方向へと転換して戦闘に向かう。もう、彼らには興味を失った、あるいは向かってこない連中を相手にしていられないというように、こちらに向かってくる様子は一切なかった。
背後から聞こえる、どこか聞きなれた声にジャンは振り向いた。
「や、ジャン。君はいつもこうなのかい？」
母国では新参ながらも確かな実力秘めたる騎士であったラック・アンが手斧を片手に、そこに居た。
「まったくだ。学校では優等生然としていれば、まるでそれまでの不満をブチ撒けるように……情緒不安定と、貴様には二度と言われたくはないな」
そして、ここは違う森で生活していた”元はぐれ”のリサ――偽名はクリィム――が、鮮血のように朱たる炎にその真紅の髪を照らして、腰に手をやり立っていた。口調は荒く言葉は暴力的だが、決して本心からの言葉ではなく、表情から見て取れるように、呆れ半分、安心半分のそれだという事が良くわかった。
――全身から力が抜ける。
無意識に『禁断の果実』が解除されて、そして次いで肉体強化が消え失せる。肉体内から魔力が霧散し、そして筋が断裂、細胞の死滅が回復する事がなくなって……とても立っていられはしない、そもそも正気を保っていられない程の拷問じみた激痛が全身に打ち付

けられた。
手の中から零れた巨剣が、大地を揺るがす衝撃を響かせながら、そこに横たわった。
喉が詰まる。
視界がゆらぎ、ぼやけ、意識レベルが低下する。既に肉体の感覚は無いのにも関わらず、痛覚だけは鋭敏で……。
ほっと、どこかわざとらしくジャンは肩をすくめて表情を綻ばせた。
「まったくお前らは……なんでここが？」
そんなジャンの自然な顔にボーアは心底訝しむが、それ以上に”無理をしてでも無理をしていない”体裁を取り繕う彼に、心底驚き、そしてある種の畏敬すら覚え始めていた。
恋心とは似つかわぬ感情。
そうだ、これは知っている。これは――母性だ。
「ラァビさんがね。ココらへんを探ってる時に火事になってる森を見つけて、消化の為に援軍を呼んだらこうなってたってワケ。ま、火事を見つけた時点で大方大変な事になってるって感じたから、ここに僕らが呼ばれたんだけどね」
「あの連中には今、ラァビ、そしてアエロ、エクレルがあたっている。話は後だ。帰るぞ」
リサが説明する中で、ラックはジャンに近づいて肩を組んだ。ボーアは慌ててもう片方を支えて、手持ち無沙汰になるリサは周囲の状況を確認しながら、ジャンが落とした巨剣を引きずり、極力異種族に接触しないよう気を巡らせて道を促した。
「ああ、悪いな……みんな――」
――夜は未だ更ける。だが彼らにとっての悠久（とわ）に思えた悪夢は終わりを告げ、そして同時に、ジャン・スティールの意識は眠りにつくような自然さで、ゆっくりと泥沼へと沈んでいった。

獣人オフ会

「ジャンがまた新しい女をはべらせて来た件について――」

穏やかな日差しが差し込む、柔らかな布団の上。そこでは三毛猫たるタマが、茶の毛皮を纏うウサギが、膝を抱えて座り込むノロが、そして――はべられた女という議題にさえなったボーアが、ウリ坊姿で寝台に寝転んでいた。

「懲りないわよねー」

あの戦闘で怪我一つないボーアを眺めながら、ラァビは無気力気に声をあげる。それは、先日から癒せぬ疲弊のせいであった。

白い連中を殲滅したのがちょうど昨日の朝っぱら。帰ってきてから、騎士を派遣した事による”報告書（レポート）”を提出させられ、また未確認の異種族との交戦ということから、そのことについても報告書提出の義務を課させられ。それが出来上がったのが、今日の朝だ。

今日はタマの誘いを断っても良かったのだが、せっかくのお誘いだからと来てみたがやはり疲れているのは仕方がない。獣姿で良いと言うのは、唯一の救いと言えるだろう。

――”白い連中”の総数は合計で五二八体というのが公式の見解だった。うち、実際に彼女らが交戦したのは二〇〇体あまり。つまり、まだ未熟なジャン・スティールに、ボーアの連携もとれぬ殆ど単体と単体という二つの戦力が個別に行う戦闘で三〇〇体を殲滅した事になる。中でも半数以上が斬撃によって肉体を分別された死骸ばかりというのを考えれば……。

ラァビは部屋の片隅に、バスタードソードと共に並ぶ規格外な大きさの巨剣を一瞥して、軽く嘆息した。

今では無茶が祟って入院中だ。修道女の見立てでは”状況は深刻”らしいが決して治らぬものでもない、というのが一見してからの報告だった。

もっとも、運任せというのが殆どだろうが。

「まったくよ。ったく、起こしてくれればあたしも行ったのにぃ」
「起こした」
座っているタマの頭をノロが叩く。といっても暴力的なそれではなく、ごく平和的なツッコミだった。
「うっそ、起こされた記憶ないけど……？」
「二度寝してたわよ」
ウサギ姿のラァビはそのつぶらな瞳を閉じたまま告げる。
「いびきもかいてた」
人型で、ジャンの布団の上に大の字になって寝ていた彼女を思い出しながら言った。
「まじでっ？！」
「割とマジで」
「うわー、恥ずかし――ッ！」
タマは言いながらゴロゴロと寝台の上を忙しなく転げまわる。そして断末魔と共に彼女らの視界からその姿が消え失せて――直後に、寝台の影から飛び上がってくるタマは、何事もなかったかのように飛び乗り、そして座りなおした。
「――あんたら、いつもこんな感じなの？」
気怠げにウリ坊が口を開く。うんざりしたような顔だが、どこかその平和的な光景を傍観し満ちたような微笑を湛えるのを見て、ラァビは頷いた。
「これからジャンの話になるから、もっと騒がしくなるわよ」
「まったく……。あんたらはみんな、ジャンの事が好きなの？」
「そうね。タマはヒトとして気に入ってる上にしっかり手懐けられてるから恋愛的な観念はないし、あたしはあたしで、仕事上信頼できる将来性のある相棒として見てるし」
「あの子は？」
顎をしゃくって、膝を抱えて座り込むノロを一瞥する。
ああ、と何やらを納得するような頷きをみせてから、ウサギは首を傾げた。

「知らないわ。ただタマとジャンと仲が良いみたいってだけ」
「そうか」
「それで、どうなの？」
「何が」
「アンタの方よ。三日間ジャンと一緒で、あの戦いでも一緒だったんでしょ？　少しはどうこうなってもいいくらいだけど？」
「……知らないな。あたしそういうの興味ないし」
白々しく首を振ってから、彼女は体を起こして寝台の下へ。
その直後に鈍い輝きがあって――イノシシの姿は消え失せた。その代わりとばかりに跪いていた”何か”が立ち上がる。
まず始めに肩甲骨まで伸びる艶やかな黒髪が垂れるのが見えた。ついでしなやかな四肢、網目のシャツに包まれた肉体。光沢を持つ革の腿があらわになる短いズボンに、網シャツの上にそのまま羽織られる毛皮のベスト。
それは確かな人の姿であり――それがボーアの人の姿だった。
「つーか、なんでそんなかッたるい格好で居なくちゃなんないわけ？」
「まったく。アンタは風情ってものを知らないわね」
彼女に習うように、ウサギも人の形に――毛皮に包まれるウサギの下半身だけを残して、彼女は鋭い爪が収納されている袖のある外套を羽織ったままで、さらに頭に生える二本の長い耳は垂れていた。茶系の長い髪は外套の中に流れて長さは知れないが、丁寧な手入れがされているように、柔らかい外見を持っていた。
彼女はやや広めの寝台に寝転びながら、肘を立てて枕にしてボーアを見やる。彼女は寝台に腰掛ける形になっていて――気がつけばタマも、同様に人型になっていた。
肘から先をネコの四肢に。塗料を塗ったようなしっかりとした黄金色の長い髪は背筋にまで伸び、彼女は尾を忙しなく動かしながらラァビ同様に寝転がる。たわやかな肢体、特にその豊満なバストが自重と布団に挟まれて形が崩れ――。

その艶やかたる光景には、だが反応するような無粋な異端児は居なかった。

飽くまでほのぼのとした午後を満喫しているのであり、飽くまで女性同士という関係で、この時間を共有していた。

「んなこたぁいいのよ」

切り出したのはやはりタマだった。

「ジャンとお付き合いする確率が一番高いのって、誰？」

身近な男性陣で、そういった浮いた話に近い場所に居るのがジャンだけである。だからごく必然的に話題の中心になるのは彼だった。

修道院で激痛に堪えながら療養中の本人のことなんて素知らぬ顔で、現状とはかけ離れた話題にうつつを抜かす。

ボーアは誰よりも早く、知らないわ、と肩をすくめて傍観に。ノロはただ場を見つめるだけであり、会話は必然的にラァビとタマのふたりだけのものになった。

「やっぱりサニー？」

とタマ。目を輝かせる彼女に、ラァビは短い嘆息で返した。

「な、なによ」

「ジャンはサニーちゃんを本当に妹としてしか認識してないわよ。そのうち、自立させるつもりよ？」

「じゃー誰？　あたし？」

「すっとぼけて。ジャンを異性として意識してるのなんて、誰かいる？」

「えーとね。レイミィでしょ？　アオイでしょ？　クロコでしょ？　あとあのヘンなサソリ」

「もっと大穴が居るわよ」

「え？　だれだれ教えてー！」

心の底から楽しげに彼女は身を起こしてラァビに詰め寄った。彼女は鬱陶しげにタマの顔面をわし掴みして一定の距離を保つと、指を一本立てて注視させる。

そして妙な”溜め”にボーアは”まさか”と思って胸を弾ませ、両者から少しだけ視線を外した。
それからラァビはゆっくりと、イタズラな微笑を持って口を開いた。
「騎士の――」

「へっくし！」
「……風邪ですか？　今クスリを――」
「あ、いや良いんだ。気にしないでくれ」
――修道院の一室で、寝台にて包帯によって包まれるジャンを見守っていた一人のケンタウロスが、慌てて退室しようとする修道服姿の少女を引き留めた。
指先で鼻下をこすり、ただの噂だろう、とバツが悪そうにくしゃみの言い訳をする。
彼女はそうですか、と頷いてから、
「スティールさんのクスリを準備してきます」
そう言って、どちらにせよその場を辞した。
それが彼女の気遣いだったかは知らないが――下半身に馬の身体を持つ女騎士、ユーリアはドアが閉まる音を聞いてから、深くため息を吐いていた。
本来ならば何があっても、不必要な接触は避けるべきだと考えていた。理由はないし、それは彼女が勝手に作った自分の中での規則（ルール）だった。
だが来てしまったのは、とんでもない大怪我をしたと聞いたからだ。そして実際、彼は本当にとんでもない怪我を負っていた。
目立った外傷はやけど以外には見られず、またそれは治癒魔法によって癒すことができた。今はクスリを塗布して新しくできたばかりの皮膚を慣らすだけなのだが――最も酷いのがその表面下。全身を駆るために必要である筋系だ。

無茶な肉体強化に加え、それでさえも無茶だと言える超重量の武器を身体を気遣わずに使用したことが原因とされている。

身の丈ほどの大剣だ。さらに軽量化など考えすらしなかったであろう、岩に鋼鉄の柄を突き刺しただけの造り。頑強で力強く、切れ味も関係のない凄まじい破壊力を誇るソレだが、欠点があるとすればその取り回しにくさや重さだった。

確かに身の丈ほどの武器は出回っているし、身の丈の数倍はあろうかという武器もある。彼と同じ体躯でそれを扱う者がいるのも事実だが――彼はそれに適した人間ではない。

故に現状に至ったのだ。

そして、肉体強化による幾度とも無い死滅と再生の繰り返しによって、いくらか神経も狂っている可能性があると、受け持ちの修道女は言っていた。正確な判断はジャンが目覚めなければわからないが、あまり楽観視は出来ない、とも。

「変わっていない、と言うのかな」

ユーリアはジャンを見つめながら、ぽつりと漏らした。

そもそも、彼の過去は知っているが、彼がその過去でどういった人間なのかは詳しく知らない。それなのに知ったふうな口を利くのはいささかはばかられたが、思わずそう言ってしまう。

「全く――だが、私も変れたかな？」

十六歳の夏――彼と出会った日の事を思い出して、考えた。

あの時代はまだ騎士の適齢が十五歳以上というハードルの低かったから、彼女は持ち前の身体能力と魔法で騎士となることができた。

あれから八年が経過して……戦闘面の実力は確かに上がっていると言ってもいいだろう。お陰で以前は精鋭部隊たる第一騎士団の特攻隊長（トップアタッカー）を務めていたし、今ではその功績から前線を引くことが許可された。

だが人間的にはどうだろうか。

彼が尊敬してくれた自分のままで、あるいはそれ以上で居られただろうか。

しかし、ジャンも成長して見方というものが変わる。それでもまだ、同じ感情で居てくれるだろうか――。考えて、それが虚しいことだと首を振る。

「私という奴は」

最近は特にジャンを気に掛けているような気がする。

理由は、彼に魔法がない事が判明したからだ。

そして彼がこうなった理由は、そういった事が原因となる自暴自棄からの暴走……というのが推測だし、間違っては居ないように思える。そういった人間らしい部分がなければ、むしろユーリアは距離を置いているだろうと、彼女自身思っていた。

もしそうならば、自分より卓越した存在になっているからだ。もはや見守り世話をする必要など無い。

だが違うとなれば……。

「スティール。これから、忙しくなるぞ」

彼の処遇に、さらにいつ来るか知れないヤギュウ帝国の侵攻。

一応、彼はその訓練部隊に編入される予定だったのだが、この調子では除名せざるを得ないだろう。少なくとも全身の筋肉が断裂しているようでは、魔法とクスリによる治療を続けていたとしても長い時間がかかるし、ケガをする以前のようにしっかりと治るとは限らない。

治ったとしても、その後はリハビリ生活だ。まだ九月だが、今年中に完治するような怪我ではないことくらいは、医療に明るくない彼女でも良く分かった。

――彼女はそれだけ告げると、修道女が戻ってくるよりも早く、その場を辞した。

「えー、ありえないでしょ？　だって、会ってる以前にすれ違ってるのすら見たことないけど」

タマは不敵なファビの発言に、うっそだーと大きく身体を仰け反

らせて首を振る。今回の救出作戦に参加したアエロやエクレルならまだしも――と続ける。

だがラァビは頑固として彼女のセリフに首を振った。

「でも、ジャンが尊敬してる騎士は彼女だって言ってたし」

「――好きだって？」

そう口を挟むのはボーアだった。

ラァビは肩をすくめて、首を傾げる。

「恋愛感情は知らない。でも、騎士を目指した理由はそうだって」

「ははん、だからね。だから、”そう”なのね」

何かを納得するように、タマは顎に肉球をやってなるほどと頷いた。

「好きなのよ。だから、いくらあたしとか、他に魅力な女の子が居たって見向きもしない。純なのよ！」

「ただの奥手ってことじゃ？」

再びボーア。

タマは視線を移し、首を振る。

「ジャンが奥手？　んなワケないわよ。すっごいバカか、鈍感ってならまだわかるけどね」

「そ、そうなの、か？」

「そうよ、そー。だってあたしなんかさ、一回殆ど”誘われ”てんのよ。相手その自覚ないのに！　もー、信じらんないったらありゃしない」

「ヘンな病気にかかるのがヤになって、やっぱりって考えなおしたんじゃない？」

「ちょっ、病気ってなによ！　ビョーキって！」

悪戯な笑みを浮かべるラァビへと、タマは思わず食って掛かってその顔面に肉球を叩きつける。

ラァビはそれに抵抗しながらじゃれあって、そのまま寝台から転げ落ちて行って――。

その始終を眺めていたボーアは、肩をすくめるように溜息を吐い

た。

——自分がこの国の中に入る事に何のお咎めもなかった事に驚いたが、しかし……平和だ。

彼女はしみじみそう思って、頷いた。

これこそが幸福というものなのかも知れない。最早懐かしくあり、そしてもう二度と手に入れることができない、ごく普遍的なあの生活を思い出しながら彼女らを見守った。

「いいな、こういうのも」

顔を上げれば、寡黙を貫くノロと視線が交差する。

彼女はボーアのそんな言葉に同意を示すように頷いて、薄く微笑んだ。

ボーアもそれに頷き、微笑返して——。

あの死闘が嘘のように、穏やかな日々が、ごく自然的に、あの延長線上で開始した。

入院生活

学校が開始して四週間目。

しかし実質的に二週間しか登校していないジャンは、出席日数や成績ににわかな不安を覚えていた。

騎士たちからの処遇の通達は未だ来ないし、修道院に運ばれてきてほどなくして目を覚ましたジャンは暇ばかりを持て余していた。ちょうど眠っている時にユーリアが来たという話だったが、それ以降見舞いに来てくれている様子は無いという。

「……はあ」

「どうしました？　溜息なんて」

包帯を取り替えてくれている、修道女見習いの少女がそう声を掛けた。

最後に腕の包帯を金具に引っ掛けて止め、拘束。彼女はそこで軽く腕を叩いてから、終わりましたよ、と告げる。そうして道具を片付けながら、言及した。

「どうせまた、学校だとか、他の人の事を考えていたんでしょう？」

まったく、と腰に拳を当てて、呆れたと言わんばかりに肩をすくめた。前髪まで隠す修道服姿だが、澄んだ目元に潤う瞳が常に煌き、また顔の小ささや輪郭の丸さから幼さが強調されている。背丈が低く、色々と仕事をするのに大変そうだが、一生懸命なその姿に胸を打つ何かがあるのは確かだった。

応援したくなる少女だが――そんな少女の説教に、ジャンは苦笑しながら上着を羽織った。

「あのですね、スティールさん。一言言わせてください」

そこから始まる一言は、実質的には二言にも三言にもなる長く続く説教だ。それは心から怪我を心配するが故の彼女の心遣いであり、またこの修道院の中でも最も歳が近いという事から妙なまでに湧いた親近感からの言葉だった。

そして世話をしている、という事からいつも妹扱いだったところを逆転的に年上然とした振る舞いをしているのだ。

「確かに誰かの心配をするのは良いことです。自分を省みないその真摯なる態度がスティールさんの魅力でもあります」

意外にも高評価だった。

しかし、が、と続く言葉に不安を禁じ得ない。

「今は正直楽観できる状態じゃないんですよ？　痛みを感じてないって言ってますが、それはマヒしていて、かつ神経系に異常があるという事です」

彼女が言うとおり、目覚めてから痛みが完全になくなったというわけではないが、それでもその感覚は随分鈍くなっているし、全身も以前のような肌から感じる鋭敏な反応は無い。特に右腕の二の腕からが顕著で、動かすことはできるが、痺れているようにまるで自分の腕であるような感覚ではないのだ。

それは彼自身、無茶が祟ったと諦めてはいたが、修道院では皆が一様に口をそろえて「治らないことは決して無い」と説明したから、少しばかりは希望が湧いた。

もっとも、元に戻るという可能性は未だ分からないのだが。

「本来ならば他人のことより、自分のことをもっと心配して労るべきなんです」

枕元の壁に立てかけられている一対の松葉杖を一瞥して、彼女はまた一つ、肩を落とすように嘆息した。

「内臓系に負担や怪我が無いことだけが救いですよ。ご飯をいっぱい食べて、いっぱい寝て休むのが完治の近道ですし」

「あれってクリスの手作りなんだろ？　いやー、うちの妹には負けるけど、お陰で食欲は十分あるさ」

「修道院（ここ）に居る限り、料理は自分でしなくちゃですし。でも、ありがとうございます……ちょっと、嬉しいです」

彼女はそういって微笑んだ。

やはり大人ぶるより、歳相応に居るほうが十分可愛らしいことを

再確認してから、ジャンはゆっくりと上肢を倒して仰向けに寝る。
「ほらほらっ、食べてすぐ寝ると牛になっちゃいますってば！　散歩いきましょーって！　お外！」
痛みが鈍い事を良い事に、クリスは包帯の上から力を込めて脇腹を掴み、前後に揺する。
ジャンはわざとらしく、くすぐったそうに身を捩ってから「分かった分かった」と繰り返し、彼女を跳ね除けて身体を起こした。
「ったく、いくら患者が居ない上におれの担当だからって、そんなに面倒見なくたっていいだろ？　学校が終わればサニーだって来るのによ」
「ダメですよ。筋系が結合したって弱ってたら、リハビリがもっと困難になります。わたしはですね、いいですか？　あなたの担当である限り、あなたの健康のために尽力しなくちゃダメなんですっ！」
先輩方がそう力説してました」
「受け売りかよ」
「いいんですよ、だってわたし、まだ勉強中ですし」
開き直るように彼女は笑って、寝台から足を放り出し前屈みになって床に足をつくジャンの介助をしながら、松葉杖を手渡した。

修道院の中庭は、自然で溢れる心癒される空間だ。空気は澄んで、また周囲の喧噪から隔絶された場所。ジャンはそこのベンチでくつろいでいた。
右腕の感覚の鈍さを確認しながら、背もたれに身体を預ける。
――痛みが鈍いということは、既に回復しているからではないのか？　そう疑問を呈しながら、クリスが雑務に追われて修道院内に駆け込んでいったのを見送りながら、サニーから持ってきてもらった多面体（プリズム）を取り出し、右肘の魔方陣を軽く意識して掌に魔力を込めてから、目の前の芝生へと放り投げる。
通信用の多面体は空気中の魔力に反応して、〝通信〟を開始する。

耳に当てて声を聞く、一般的な”電話”のようなものだと思っていたジャンは、初回始動時には驚いたものだ。

白い魔石は透明であり、太陽光を吸収して、広い角度で跳ね返す。そうして半透明の人型の影が、等身大で魔石の上に現れた。

人影にノイズが入り、ブレる。それが幾度かあってから、「テス、テス」と人影の中から声が響いた。

『聞こえるか、ジャン？』

気易い男の声。ジャンは頷き、肯定を言葉で示す。

男は肩をすくめるように、「そりゃよかった」と呟いてから疑問を呈した。

『どうしたんだ、こんな時間に……っとスマン。そっちは今、昼間か？』

「ええ、ちょうど昼下がりです」

『そうか。こっちはちょうど夜中でな。言ったっけ？　今本国で、協会（ギルド）に戻った所なんだ』

「そうでしたか……すいません、迷惑なら――」

『いやいや、んなこたぁねーよ。どうせ後は寝るだけだ。明日は魔術開発しか仕事ねーし、好きなだけ話してくれ』

男は笑い、直立姿勢から何かに腰を落としたように身を屈め、大きくのけぞった。足を組み、そしてグラスを手にして、随分とリラックスした体勢でジャンを促す。

彼はそれに頷いた。

「実は、ですね――」

神妙な面持ち、と言っても影でしか相手には伝わらない。だが声色でそれを判断したウィルソン・ウェイバーは、両肘で膝を打ち、前屈姿勢で言葉を胸に止めた。

話すのは、現状としてどうしようもない怪我のことではなく。

まず始めに、今回問題になり、”未確認の異種族とされている”存在の特徴や、北方から来た”偵察兵”の存在。加えて、少しばかり気になった魔術開発の事を訊いてみる。

まず未確認とされている異種族だ。あれほど目立つ外見をしていて、さらに近辺の森に生息していたとなれば未確認である筈がない。ならば一体何者なのか……その存在を隠蔽されていると考えれば、最も適切かもしれないが、〝なんなのか〟という疑問に対する答えにはならない。そしてまた、この数日間考え続けては見たが、答えが一切見つからないものであった。

そして偵察兵。北方の出で、さらに氷雪系の魔術を得意とするとなれば……この大陸での最北端であるヤギュウ帝国である可能性が高い。だが、その帝国がわざわざ少数精鋭で最南端たるこのアレスハイムを偵察に来たのか。

――今回の自暴自棄で得たのは、大きく考えてこの二つの疑問だ。

『あー、そりゃあアレだわ。厄介だなってか――異種族の専門家っつーお国柄なのに知らねぇってなると、言っていいもんかなあ？』

ウィルソンはどうしたものか、と頭を掻く。もし国家的に隠蔽されているのならば、下手に漏らし、それが彼個人の仕業だと判明したら……彼は思わず身震いさせる。

「お願いします。おれの交友関係なんて、国が知るはずないでしょう？　それにこの多面体（プリズム）の通信を傍受できる筈がない」

『いや、魔法で――ああ、いいや。分かったよ、熱意に負けた。話してやるから耳かっぽじって良く聴けよ？』

「お願いします」

『今の一般的に生息している異種族は、動物の奇形みたいな連中だよな？　狼とかさ』

「……はい。確かに」

『そいつをおかしいとは思わないか？　異種族（モンスター）は基本的に〝溝の向こう側〟からやってきたとされてんだ。しかも、溝が出来る一五〇年前には一切繋がりが無かった筈なのに。だっつーのに、異種族と動物には、外見的に共通するものがある……なあ？』

「……、それは、どういう意味ですか？」

溝の向こう側とこの世界とは繋がりがなかった。

だが異種族には、外見的な共通点があった。
要約すれば彼はそう説明している。そして思わせぶりなもったいぶる言い方に、ジャンは思わず食いついた。
『もし、お前が一般的に知っている異種族が、本当にもともとこちらの世界の生物だったとしたら？』
「……？」
『溝の向こう側に居る、本来の異種族と呼ばれるべき存在に”何らかの施術”をされた生物だとしたら？』
「それは――」
『つまりだ』
ジャンの言葉を遮るようにして、ウィルソンは”おそらく”不敵な笑みを浮かべ、グラスを傾ける。
『そいつらが、今の異種族共の始祖たる存在の”可能性”がある。溝の向こうの世界で生息する、本当の異種族ってやつだな』
――その予測とも事実ともつかぬ、妙なまでに説得力のある言葉は、されど妙なまでに現実離れしているように聞こえて仕方がなかった。
あの白い連中が固有能力で動物に”ある施術”をして”異種族化”させた……ウィルソンのそのセリフに、ジャンは思わず言葉を失う。
そんな事があり得るのだろうか。そう疑問に思い疑っても、それに反論するための情報がない。それに加え、ジャン自身に言葉巧みに扱う技術が欠けていた。
肉体ばかりを使う生き方だったから仕方が無いとはいえ、否定したい本能を言葉に出来ぬ、胸の奥に渦巻く気持ち悪さにジャンはどうしようも無く、うなだれた。
「……あの、白い連中が？」
『飽くまで可能性の話だ。ありえない、と否定することも出来る。めんどうだが、とりあえず分かってるトコだけ説明するならそういう事だな。俺たちの商業組合（ギルド）でも、そういった事を研究する機関に

口が利くから調べてみたりもするが……今んとこの有力説だ。期待すんなよ？』

「参考までに、考えさせてもらいます」

『そうそう、そうに物分りがいいとこは好きだぜ』

しかしな――ウィルソンは困ったような声を上げて間もなく続ける。

『お前さんとこの国は、それどころじゃないんじゃあねーのかって、思うんだがな？』

「……どういう事です？　まさか、あの白い連中の登場が、これからの侵攻を――」

そうじゃない。彼は食い気味に台詞を遮って、やや怒気孕む声音で興奮気味のジャンをいなした。

『落ち着け。こりゃ、第三者から見れば明らかなまでに不穏でアブない空気だ。おそらく、事実に近い』

偵察兵の話だ――ウィルソンはそう切り出した。

大きく、胸いっぱいに息を吸い込む。

ジャンはベンチに深く座りなおしてから、周囲から未だ人気が失せていることを確認する。

『どこの国だかは知らねえよ、だがな、少なくともそいつらは目撃者のお前を殺そうとしたんだろ？　つまり、奴らにとっちゃ、自分らがこの国に居ることがバレちゃまずいわけだ。そこから繋がることはそう多くはない――つまりだ』

最早おなじみとなる言葉に、ジャンは頷く。

彼は再びグラスの中の酒を呷ってから、口を開いた。

『侵略だろ、常識的に考えりゃ』

「――侵略、ですか？」

『そう。鉱山も豊富で海も近い。それに”溝”も近いから他国に侵攻される心配もない。武力も十分。お前はその国に住んでるから分からないかも知れないが、割と強国だぞ、アレスハイムって。ま、文化の違う”こっち”の大陸もすげぇけどな。蒸気機関から発展し

てったわけだが、それだけじゃなく、魔術、魔力の観念を取り入れた科学技術ってお陰で、そっちの数十年先の技術を持ってるって話だ。実感はないがな』

侵略、と言う大それた事を言ってみせたウィルソンは、だというのに話をそらすように別の話題を振ってみせる。

――確かに彼が見せる理論は正しいような気がする。

軍事力も高いし、入念な訓練のお陰でいつでも戦闘を行うことができるし、物資の流通もなめらかだ。さらに鉱山に住み着くドワーフのお陰で武器の質は高く、また警ら兵のみでも異種族と対峙できる程の戦闘能力を有している。

特にこれといった特産物は無いが、国としては自立し、また国交も捗っているいわゆる”良い国”だ。

しかし、わざわざ遠征してまで攻めてくる理由というものが、ジャンには分からなかった。挙げた通りの国を我物としたいという気持ちは分からなくはないが、より決定的な、多くの命を犠牲にしてまでも必要とするもの。

わからない――だがそれで当然であるような気もした。

理解する必要など無い。

攻めてくるのならば、受けて立ち、抵抗し、殲滅するのみ。

一五〇年前までの、人々の争いが一般的だった時代ではそれが普通だったし、そもそもこれまでそういった事が無いのが異常だったと言える。

『世界が平和だからな。異種族だって、被害に悩まされてるとしたらアレスハイム近辺だけだ。こっちにゃ、魔術の発展しか届いてないし。だから、お前も知ってるだろ？　こっちは紛争や冷戦が絶えやしない』

蒸気機関を発明したのは、ジャンらが住むアレスハイムが存在する大陸ではない。大海を挟んだ遥か向こう側にある、同程度、あるいはそれより大きな大陸にあるどこかの国の発明家だ。今から約二〇〇年前の事であると、義務教育で学んだ覚えがある。

こちらでもそれを流用しようとしたが、異種族や異人種の出現に進展した文化が一度破綻した。それは溝の出現の契機（きっかけ）となる”大地震”による施設の壊滅や、慣れぬ異種族の侵攻、さらに異人種との対立による争いの為である。

今では異人種との共存を第一として考えられ、そしてまた、そういった科学技術ではなく魔術的要素をより強調し、そういった特色を持つ文化を進展させようとして――現在に至る。

向こう側では火薬を使用した無数の武器ができたというし、蒸気機関車や蒸気船などが生まれ続けている。そのせいで文化的な遅れを思わせるが、魔術的な技術は恐ろしく進展しているし、科学技術が一般的な向こう側とは対照的に、国民にまでそれらは一般化している。

また軍事力でも同様だ。

向こうではそういった魔術は確かに使用されるが、主ではない。騎士団という概念はなく、アレスハイムで言う警ら兵のみで構成されていた。

各々が火器類を装備し、ごくなめらかな機動と侵攻で敵を殲滅していく――同じ人同士の戦いだからこそ、そういった戦闘術が浸透していた。

――そして、そういった科学と魔術の粋を集めて造られたのが人型移動用武器収納庫（マクロ）と呼ばれる、人造人間（ヒューマノイド）だ。

ジャンらが一般的に知る”魔導人形（ゴーレム）”という魔術によって使役する人型兵器をより高性能にし、人智を与えたような存在である。

『ま、科学があっても魔術も怠っちゃいけねえってんで、魔術開発っつー仕事があるんだ。もとは”そっち”の生まれだからな、有望株の俺が行かなくちゃいかんってわけ』

会話はごく自然的に、ジャンの三つ目の質問に移行した。

「それで、その魔術開発って何をするんですか？　新しい魔術を作る、とか？」

『まあ、そんなトコだ。もっとも、適当なモンを作りゃいいってても

んじゃない。軍事的に利用できる、戦略魔術だ――まったく、魔術師ってわけじゃないんだがな？』

戦略魔術。

それは読んで字の如し、戦略的な目的によって使用される魔術だ。戦術魔術と言うものもあるが――いわば大魔術。ジャンらが知り、また使用する魔術をより大規模だ破壊力を重視したものである。

知るかぎりでは都市を壊滅するレベルの破壊力を誇ると言われており、長い間、この大陸では『禁呪』として封じられてきているものだ。

「いや、ウィルソンさんは十分魔術師じゃないですか」

そしてまた、魔術師というのは文字通り、魔術を扱う者だ。

もっとも、魔術を扱えれば誰でもそう呼ばれるかと言えば、そうではない。騎士団でも魔術を主力として戦う部隊があるように、ある一定のレベルがあり、そこに到達することで魔術師という”称号”を得られる。そしてその称号により騎士団の魔術師団もそうだし、冒険者ギルドでの特殊な仕事や、その他の”魔術師でなければできない専門的な仕事”をすることが出来る。

彼が請け負った魔術開発という仕事も、おそらくは専門的な仕事であるに違いない。

『ま、どのみちこの仕事は魔術師じゃなくても出来るんだけどな。連中は俺みたいな”高名”な”元大魔術師サマ”を呼んで立派な仕事をしてるって体裁を保ちたいのさ。今はただの”営業担当”だっつーのによ』

「魔術師じゃなくても？　既存の魔術を、新兵器ないし既存の兵器に加えて実用化させる、みたいな事ですか？」

『まー、そんなトコだな。っと――テメエこらおい、何をしやがる……！』

気楽に背もたれにより掛かり、手酌で再びグラスに酒を入れた所で、闖入者がそれを奪い、力いっぱいウィルソンを蹴飛ばした映像を、魔石は写していた。

そして消え失せた彼の代わりに、今度は線の細い、タスクの影が現れる。

《お久しぶりです、スティール様。その後いかがですか？》

「ああ、タスクさん。イヤ、まあ元気なもんですよ。元気すぎて逆に怪我しちゃいましたけどね」

《スティール様らしい、しかし元気なようでよかった。こちらも、この不抜けた主人（マスタ）が古女房なぞにうつつを抜かして、現相棒たるこの私に目もくれないと来ています。まったく、ただの一度の過ちすらない女（アマ）が、呆れますよ。それに訊いてくださいスティール様、この間なんて――》

――擬似脳は、基本的に製作者、あるいはモデルとなっている人物によく似た思考や言動を取るとされている。それは、機械的な人工知能では”おもしろくない”という現行技術を超越した力を持つ科学者の意向によっての仕様だった。

ジャンは、愚痴なのか惚気なのかよく分からない彼女の言葉を聞きながら、彼女がもし人間だとしてもウィルソンは大変そうだな――そう思って、静かに浅く座りなおした。

程なくして彼女は満足気にその場から退場し、そしてウィルソンも眠そうに大きく欠伸をして、挨拶もそこそこに通信が途切れる。

ジャンがそれを拾い上げると、タイミングよくクリスがやってきて――太陽は西の空を茜色に染め上げながら地平線へと逃げていく。そうして夜の帳が落とされようと、藍色が後を追い……十月ももう近い。昼が短くなり、夜が早くなるのを実感した。

「サニーちゃん、お見舞いに来ましたよ？」

「……ああ、今行く」

彼は見上げた空でそれを感じながら、肌寒く感じる外気に身震いを一つして、松葉杖に手を掛けた。

体力づくり

「はぁ、はぁ、はぁっ――」

自身の体温で頭が沸騰しそうだ。

結合したばかりの筋が、房では無く小さな細い筋ごとに引き裂かれていく感覚がよくわかる。ふくらはぎがパンパンに脹れて、頭がどうにかなりそうなほど蒸し暑い密林の、まとわりつく不快極まりない環境でジャン・スティールは走り続けていた。

薄暗い森。道という道はなく、足場はひどく悪い。下がったと思えばまるで崖のように上がる道。だがそれを回避することは出来ない。

彼が命じられたのは、〝真っ直ぐ進んで密林を抜けろ〟というだけの指示だからだ。

息が詰まる。

喉が渇く。

顎が上がり、自分が一秒間で幾度呼吸を繰り返したか知れない。

男らしい歳相応の精悍な顔つきは、今やだらしなく半眼が開き、口を半開きにするばかりでとても原型が残ったものではない。開いた口からは喘鳴のみが漏れて、稀にあえぐ声が喉から溢れた。

――入院生活が二週間。怪我は順調に治療され、予定されていた退院時期を大幅早めた十月上旬に、彼は晴れて修道院を後にしたのだが……。

待っていたのは、リハビリというにはあまりにも過酷過ぎる〝ブートキャンプ〟だった。

いわゆる文化的に発展した〝向こう側の大陸〟譲りの新兵訓練法だ。

（誰も、誰も居ないのか……！）

自分が何故こうしているのかすら判然としなくなる意識の中、歩幅は無意識に緩くなり、走る速度は遅くなる。

（歩く、わけじゃない）

ただ走るのが遅くなる。腕が垂れ、大地を弾く体力すら既に尽きている。だから、仕方が無いのだ。こういった極限なまでに走るのが遅くなるのは、どうしよもうない、本当に――。

「走れッてのよ！」

決定的なまでに身体が止まる、その直前。

彼は頭上から落ちてくる、正確無比な投石による狙撃が眼前に落ちたのを、確かに見た。

大地がにわかに震え、全身が慄える。

「走れ、走れ、走れ――ッ！　まだ八マイルすら到達してないッ！」

気がつけば、昨日はあえなく脱落した地点を既に過ぎていることをその言葉で理解した。

身体はそれで活気づく。

本来ならば、もっと走れる。走れたはずだ。おれはそういう体だった。体力だけは一人前以上はあった。だから戦えたのだ。

白兵戦を主体とする以上、体力は不可欠な要因となる。何だかんだで、戦場で最後まで立っている者は一瞬で敵の背後を取るような暗殺者や、一瞬で数十、数百を殲滅する化物などではなく、体力がある者だ。

炭鉱でもそうだった。

だから今もそうであるべきだ。

みなぎる力を全て足に流し、ジャンは言葉に対する反応も無いままに、再び走りだした。

鈍かった視界がにわかに晴れる。ゴールは未だ無いが、少なくとも昨日よりは十分走れている。

肉体は、あんな怪我のあと故の過労で既に死に体だ。

だというのに今日はまだ走れる。

明日は、もっと走れるはずだ。

「ふざけるな！　腹から力を出しなッ！」
怒号が頭から振りかかる。同時に眼下から振り上げられた短刀がジャンの木刀を撃ち上げ、諸手が無防備に頭上を超える。息がかかる距離に迫る彼女は、さらに鋭い瞳でジャンを射殺し、にわかに開く股下に深く踏み込んだかと思うと――自由になる右腕の肘鉄を、その水月に打ち込んだ。
胃の腑が悲鳴を上げる。肺から、全ての空気が吐き出された。
さらに無力化されたジャンの足は払われて天地が反転し、世界が廻った――にわかにそう認識した瞬間、その肉体は力強く大地に叩きつけられ、組み伏せられる形となった。
ジャンは怯みながらも腐葉土を転げて彼女――ボーア――から距離を取る。受身を取るように立ち上がると、彼女は再び距離を縮めていた。
「今！　この五分間で何回死んだッ！？」
「く――っ！」
逆手に握る真剣の白刃が閃き、瞬時に眼前を掠める。ただの勢いや手さばきだけで切り裂かれた前髪が宙を巻い、薄皮を切り裂かれた額に血がにじむ。
ジャンは即座に身を翻して一度背後へ退く。そういった”フェイント”を入れて、踏み込んできたボーアへと下方から袈裟に木刀を振り上げた。
「八回だッ！　一分間に一回以上とは、随分と器用な事じゃない！？　ねえ、そう思うでしょうッ！」
切先が顎を砕く。そういった未来は果たして訪れず、その寸での所でどこからともなく現れた短刀がその横腹を叩き、弾く。軌道がそれた斬撃は彼女のすぐ横を掠めて、ジャンの両手は再び上へと挙がる。見てくれはさながら、降参の意を示す怯えた新兵といったところだろうか。
しかし教官役を買って出た彼女の容赦は一切ない。
威圧的な切迫。

無駄のない足さばきによる、必要最低限度の歩数による肉薄。
そして修錬された、滑らかなまでの所作。
相手の攻撃を防ぎ、あるいは弾いてから行われる必殺必中の反撃（カウンター）。
それらが、今ジャンを悩ませている要因であり、ボーアが見せている全てだった。
だが――いくら何でも最大で一分間に三度も撃破されたジャンは、何も学ばぬまま撃墜されていたわけではなかった。
再び踏み込み、完全な零距離からの近接格闘――倭国伝来、と彼女が嬉々として説明したのを思い出しながら、ジャンは再び彼女の地面と並行に突き出された鉄拳を腹部に受けた。やや上ずり、衝撃の瞬間に僅かに落とした腰を挙げた故に、水月よりやや下の引き締まる腹筋に堅い拳が穿たれる。
彼女の表情がにわかに変わる。無表情から、僅かに口を開いただけの、どんな表情かはわからない些細なものだったが――勢いはそのまま、力もそのまま。故に、先ほどと同様にジャンの肉体は”くの字”にへし折れる。
諸手は頭上に振り上げられ、木刀を握ったまま”くの字”にへし折れた。故に自然的に、己の全力が為に止められなかったその力を強制的に、テコの原理が如く解除し、そして腕は振り下ろされる。
ジャン・スティールはそれを待っていた。
倭国伝来なら、同じ倭国伝来のことわざで返してやるまでだ。
肉を切らせて骨を断つ――果たして彼の木刀は、不意をつかれながらもジャンを突き飛ばし、また後退する彼女の肩口に、しっかりとその切先を叩きつけていた。
「はぁ、はぁ、はぁっ――さ、さすがに一分に、に、二回死ぬとか、平均的に出されたら、ヤだかべぼっ？！」
言葉もそこそこに、不意に眼下から気配と影が迫ったかと思うと、殆ど認識と同時に顎先を拳が突き抜けた。
ジャンは直立したまま顔だけで上を向いて、意識が白に染まる。
疲弊と鈍痛の中で限界を超えていたジャンの肉体は、そこでよう

やく意識を別離させ、吸い込まれるようにして柔らかな腐葉土の上へと倒れていった。

「ったく――バカッ！　気絶するまで無制限マッチだって、自分でルール決めたクセにッ！」

油断してんじゃない！　彼女は言いながら額から流れる汗を腕で拭い、それから木刀が力強く叩いた右肩を柔らかく撫でながら、静かに彼の横に寝転んだ。

まさか一週間で一本取られるとは――彼女は確かな成長を、そして最初に見た時とは遥かに顔つきや体つきはもちろん、その意気込みや、多くの彼を構成する要素が変わっている、あるいは大きく、力強くなっていることを認識した。

十五で騎士団に入団し、二十で追い出され――そしてまた、この国に戻ることになるとは。

そしてまた、罪の償いとしてジャンの世話をする事が条件だというのには、裏のやりとりが見て取れたが……今は、考えても仕方がない要素だ。

「……っはあ、まだ訓練残ってるって言うのに――おい起きろッ！　あたしはあんたの為に徹夜なんかしたくないッ！」

数分の休憩の後、ボーアの平手は無情にジャンの頬を叩き、意識を呼び起こした。

狭い十三平米ほどの個室の中央には、楕円形の卓が鎮座していた。そして周囲を取り囲むような椅子の数は全てで六つ。それらに腰を落とせばすぐ後ろは壁になり、隙間も失せる。

上座に座る軍務大臣は、呼び寄せた幹部諸君らの話を聞きながら、丁度良いタイミングの所で手を打った。傾注せよ、と副大臣が無意味なまでに声を張る。

「気楽にしてくれ」

穏やかな笑みを湛えた中年男性は、その軍服がはちきれんばかりのふくよかな肢体の持ち主だ。それ故に外見的な人当たりの良さや、軍を統括しているような個人とは思えぬ穏やかさから、部下はもちろん、多くの人々からの支持を得ていた。

禿かけた頭は、近頃いっその事剃ってしまおうかと思っていたが、それでも名残惜しく残してある側頭部の髪を撫でるのは彼のクセだった。

「それで、今回の不祥事によって予定された作戦が水泡に帰したわけだが――あの”齎る者（バイ・ター）”に代わる異種族（モンスター）は配備できそうにない。よって、ヤギュウ帝国との総力戦が予期されるわけだ」

「責任を取らせましょうか？」

問うのは副大臣。責任を追求する相手は、何も知らずに”襲われて”殲滅”してしまったあの少年だ。

「まさか、国が手ずから異種族を意図的、人為的に用意したなどと公言できんだろう。だが、お陰で一人釣れたじゃないか。戦力になりうる、かつて信心深くこの国に尽くしてくれた”元騎士”が」

「ああ、あの獣人の」

「だが――彼女はいささか問題が……」

「そ、そうですぞ。だからこそ、”あんな事”が」

どよめきが幹部に伝播する。ただでさえ少人数の幹部らが、一人の発言から不安にかられて焦燥する。

大臣は再び手を叩いて場を収めると、失礼、と手で示しながらポケットに無造作なまでに突っ込まれた葉巻のタバコを咥える。そうすると副大臣が火の灯るマッチを差し出し、火をつけた。

彼はゆっくりと味わうように紫煙をくゆらせてから、胸いっぱいに吸い込んだ息を吐き出す。

会議室は、いささか小気味の良いタバコの臭いに満たされた。

「不思議なことに、今回議題に上がる少年は養成学校の生徒であり、またにわかに話題となる”事例”であるらしい。そしてその”少年A”と彼女は失踪から発見までの時を共に過ごし、殲滅戦で背を合

わせて戦っていたという話だ」
彼が指摘するのは、今回でやたら話題の中心に渦巻く少年Aの存在。
養成学校に入学して、良好な成績を残し将来を期待されていた少年は、ここに来て魔法を持たぬことが判然とした。加えて街を飛び出し、”偵察兵”と接触し、またヤギュウ帝国の侵攻妨害の為に配置していた異種族を単騎で相当数殲滅するという偉業を成し遂げたのだ。
いくら肉体強化によってヒトならざる身体能力を持っていたとしても、それは単純に、そして明らかなまでに彼の実力ありきの結果だとしか言いようがない。いくら立派で強い武器をもっていたとしても、扱うのが素人ならば結果は火を見るより明らかであるように。
そしてその少年Aと元騎士の現はぐれは意気投合しているらしい。彼女のそれまでの罪を、負傷している少年Aの世話で償わせる事で、当分の安置を保証してはみたが……不安要因としかなりえない戦力に期待するのもどうかと思う。
また、少年Aの治療も順調なようだが――それでも訓練部隊からの除名の決定は覆せない。将来有望であるなら尚更だ。
「私は考える。現在の”彼女”の抑止力たりえるのは、この少年Aなのではないか、と。今でこそ少年の世話係をさせているが、いずれは立場が逆転する可能性をもたせようと思うのだが」
「……彼女を使うのだとしたら、私もそれが確実だと思う所存です。彼らの関係は良好で、心を許さぬ彼女が唯一、開き始めていると見ていますので」
「ならば決定だ――が、少々興味がある。この少年Aは、我が部隊の元”超精鋭”のお気に入りでね。少し、調べたいことがある……」
「な、何をでしょう？」
大臣の不敵な笑みに、言葉を返していた副大臣が怯むのがよくわかる。
彼はそれに気を良くするようにタバコの煙を吸い込み、そしてに

やりと笑う歯の隙間から、煙を漏らした。
「派遣した傭兵部隊から連絡が来てな。丁度来週辺りに来てくれるらしい。そこで一芝居打ってもらうことにした。騎士を目指し、少なからずその胸に正義を燃やす年頃の少年ならば我慢ならぬ芝居をな」
「なんとも……傷心の子には、いささか手厳しいのでは？　それに今はまだ、基本戦闘訓練（ベーシック・コンバット・トレーニング）でのリハビリの最中でしょう？」
「だからだよ、だからこそ、だよ」
男は笑う。
幹部に、再びどよめきが走る。
イタズラな、どこか悪意さえ孕んだ笑い。穏やかで温和な彼には普段、見られぬ一面に彼らは不安を呈する。
しかし大臣は、そんなことなど気にせず、鼻を鳴らし、また「だからこそ、さ」と続けた。
「己が勝てぬ、勝たなければならぬ悪との対峙。それこそが、彼の成長を促すと私は思うのだ。人には挫折が必要だとは思わんかね？」
「し、しかし――万が一、心が折れ二度と……と言った場合は……？」
「仮にそうなるのならば、いずれそうなるのだ。所詮その程度、切り捨てろ。私たちの目は節穴だったことの証明になる。それに、傭兵部隊が居る。ただ一人の戦力にすらならん”損失”など、我々は気にしては居られん」
「確かにそうですが……いえ、承知しました。当日の門兵に、そのように伝えておきます」
「くくく、頼んだぞ――それで、話は変わるのだが……諸君。いや、本題に入ると言うのかな。各々の、訓練成果の発表と行こうじゃないか――」
ヤギュウ帝国の侵攻に合わせた訓練内容の変更。一ヶ月の経過発表が、今回彼らが呼び出された目的だった。
大臣が手元に配られている冊子をめくり、「では」と意気込む一

人が立ち上がる。
彼らは大臣の言葉に緊張しながら、静かに紫煙の消え行くその先を、ただ為す術もなく見つめるだけだった――。

一閃、一閃、一閃――。
縦横無尽、変幻自在とも言える短刀捌きは、留まることを知らない。西の空が朱にそまり始めた頃、ジャンはそれでもその近接格闘に対応し、その全てを木刀で弾き続けていた。
が、終わりは唐突にやってくる。
「はぁ、は――っ!?」
慣れたように後退、そして剣をいなして横に回る。だが今回は、周囲の確認が不十分だった。彼女の死角に回りこもうとした瞬間に不意の衝撃。身体がそこに最初から鎮座していた幹に衝突したのだ。
ジャンはよろめき、それでも回避行動に全力を込める――が間に合わない。時既に遅し。ボーアの剣撃は瞬時にしてよろけたジャンの首筋に叩きこまれて、その冷たい刀身で優しく皮膚に触れた。
――六時間経過。無制限マッチの結果、ジャンはこの中で、既に三〇〇回近く死んでいた。しかし生き残れた最長記録は二八分であり、その記録を最後に成績は下降の兆しを見せる。
ジャンは思わずへたりこみ、座り込んだが、ボーアはそれを注意せず、同様にくたびれたと言わんばかりに顔をしかめて隣に腰を落とした。
「まったく。やられたわよ」
短刀を背にする幹に突き刺してから、彼女は肩をすくめた。
「五回も攻撃を許すなんて」
額の汗を拭い、彼女は肩、腿、横腹、小手、そして喉元に触れながら言った。その箇所は、油断や隙を露わにしたせいで穿たれた箇所である。
背もたれにする木に全力で寄りかかりながら、肩を上下させ、破

裂せんとする心臓を胸の上から抑えてジャンは言葉を漏らした。
「ご、五回くらい、いいじゃないですか……」
「一本も取られない自信があったのよ」
終始呼吸を乱さなかった彼女の言葉は、虚勢でないことをジャンはよく知っていた。
――あの”白い連中”との戦いでは撃破数がジャンより少なかったが、どれもこれもが確実に息の根を仕留める攻撃ばかりであったし、またジャンのように身を無防備に晒すような特攻ではなく、洗練された無駄のない動きでの戦闘だった。
どちらが強そうかと言えばジャンと答えるものが多いだろうが、どちらが生き残りそうか、と言えば大多数がボーアと答えるだろう。
そして一対一との戦いともなれば、その性格や戦闘方法はより顕著に現れる。
だからこそ苦戦したのだ。もっとも、その多くは苦戦する暇もなく圧倒されていたのだが。
「全く、敵わないや――」
疲れすぎて、尻が腐葉土に癒着しまったようだ。起き上がろうにも、全身に力が入らない。
鉱山での仕事でも、これほど疲れることなどなかったのに。
思いながら、ボーアに顔を向けた。
「でもまあ、見所はあるわよ？　正直そもそも、この一週間で最後までついてこれるなんて思わなかったし。基礎体力のおかげだとは思うけど――学校じゃ、こんなトコまでやらないし。やっぱりセンスは少しあるみたいよ」
「そりゃ、無かったら騎士になりたいなんで夢もいいとこ、口にしませんよ」
「ま、そうよね。でも夢を持って、志すのはいいと思うけど」
「夢は見るものですしね」
「そうそう。夢が叶うんじゃなくて、もう叶えられる時点で夢は目標だしね」

「あ、なんかそれいいですね。明日から使います」
「使用料取るわよ？」
「ええっ、最近は全然、組合（ギルド）行ってないから金なんて――」
言葉を遮るように、彼女は垂れるジャンの手を握った。
やわらかな、アレほど硬くジャンを苦しめた手は一変して、女性らしい柔らかで暖かな皮膚が彼の手を包み込んだ。
思わず、どきりとする。
汗まみれであるはずなのに、ことボーアに限ってはそれが良い匂いであるように感じられた。
ジャンを見つめる顔が近づく。黒しかない瞳が、まるで愛おしく感じられた。
「ねえ、ジャン？」
「は、はい――」
「立たせて」
「は、はい……？」
恥ずかしげに、眼を伏せがちに彼女が続ける。
「なんか、訓練が終わったら安心して、腰が抜けちゃったみたいなのよ」
だから、と握る手に力を込めた。
「立たせてちょうだい」
ジャンはあざとく上目遣いで頼んでくる彼女に根負けして、動かぬ肉体にむち打ち、全体重を掛けて彼女を起こして――手はそのまま、帰路へとついた。
空は既に夜の帳が落とされていて、密林はそれ故に深淵たる闇に包まれている。だが不思議と不安はなく、むしろ高揚さえあったのは――ボーアには秘密だった。

「まったく……魔力を流して、初めて痛みが現れたということは、そもそも魔力供給による自然的な”副作用”による回復は行われていなかったということですね？」

医務室で右腕に包帯を巻きながら、クリスは嘆息を漏らしてからそう言った。その傍らでは、細長い診察台で足を組みその様子を見守る、修道服を着こむ妙齢の女性が興味深げに頷いていた。

「つまり、あと少し遅かったら壊死していたかもしれないというわけね」

――まるで筋肉痛……など比にはならぬ、まるで筋肉に剃刀の刃を埋めこまれているかのような激痛がある。腕を動かそうとする以前に、力を込めたり何かが触れたりした時点で全身が硬直してしまうような痛みが走るのだ。

そうなったきっかけは、ボーアの”肉体強化魔術を使いこなすための訓練”によってだ。

体内の魔力を増幅してそれをそのまま肉体に充てるだけではなく、体内の魔力を体外に放出し、魔力量をある一定の均衡で維持する。そうすれば肉体を強化するために本来必要である魔力が足りずに、体内にあるままの魔力で肉体が強化される。それ故に効果は薄いが、今回の目的はそこにある。

魔力量を調整することにより、効果を変容させる――そうすれば、常にヒトを遥かに凌駕し諸刃の剣となりうる魔術を、己に対して適切に運用できるというわけだ。

そしてその際に右腕に魔力を通した瞬間に……このザマだ。

「怪我だらけってのが格好いいと思ってるのは、男の子だけよね」

「ですよねー。女の子としては、いつでも元気な人の方が安心して隣に居られますし」

「せーっかくのいい男が、台なしよ」

「ほんとです」
ジャンは”壊死”の言葉に思わず顔をひきつらせてから、指先すら動かせない右腕を流しみて、そうして垂らして立ち上がる。
彼女らの、褒めているのかけなしているのかよく分からない言葉を受け流しながら、軽く頭を下げて踵を返した。
「はあ……ありがとうございました」
今日はお陰で訓練は休みだ。このまま家に戻るのも忍びないから、久しぶりに街をぶらつくのも良いだろう。
最近、特に癖になりつつある溜息を漏らして、ジャンは修道院を後にした。

「――っと、言う手筈になっている。大臣の催しだ、良ければ頼まれてやって欲しいんだが……」
正午からやや時間が経過した頃、甲冑姿の門兵は来客にそう告げる。
外套のみを羽織り、腰には剣を、あるいは手ぶらで――防具を何一つ装備しない簡単過ぎる格好の住人に満たぬその集団は、門兵の言葉に対して一様に顔を見合わせた。
そうして、戦闘に立つ左目に黒い眼帯を当てる男は頷く。その所作に、途端に上下関係が見えた彼らは押し黙り、隊長たるその男の判断に全てを委ねるように視線を送った。
「……一つ、聞きたいんだが――オレたちゃンなガキの対戦相手って為に呼ばれたのか？」
「いや――」
否定しようとして、門番は大臣から託された対処法を思い出す。
もし拒否された場合、あるいはあまり色の良い返事をもらえなかった場合。彼は男の目を見据え、頷いた。
「お試し期間だ。あんたらを使うか否かは飽くまで我々が判断する。こちらの要望が聞き入れられないなら好きにしろ。だが、”得体の

しれない武装集団”を中には入れられないがな」

――傭兵は金で仕事を請け負っている。主な仕事は命をかける戦闘だ。戦争の代行や、さらに教導なども行うことがある。そして彼らの組合（ギルド）では主に後者の方が圧倒的に多いのだが、教導の場合、軍で言う精鋭部隊レベルの戦闘能力が必須であるために、彼らの実力が確かであるのは門兵さえも知っている。

傭兵組合”ブラックオイル”は世界でも実力者集団で有名なギルドである。それはこの”対異種族戦”であっても、銃火器を使用する”現代戦”であっても十分に通用する戦術や魔術、魔法、そして圧倒的なまでの機動や的確な行動などのおかげだった。

その中でも戦闘訓練を行う部隊は、さらに精鋭を極めていた。

「そうか。そういやそうだったな――まったくムカつく国だ！　オレたちをこんなに侮り信じなかった連中はここが初めてだ！　その”ジャン・スティール”とか言うガキは、本当にそんなに強ェんだろうな!?　この国はそんなに強ェんだろうな!?」

「軍を統括する男が、そう認めている」

「はっは！　おもしれェ、野郎ども！　ここはやらなきゃ男が廃るぞ！　いっちょ、芝居でも鉄砲でもうってやろうか！」

男――左目に眼帯を持つ目立つ”ディライラ・ホーク”は力強く右腕を上げれば、控えていた部下が雄叫びと共に活気づく。彼のすぐ背後に控えていた眼鏡の男は、そんな様子にやれやれと言った風に肩をすくめた。

「さて、案内してもらおうか！」

両腰に携える一対の剣を揺らして門兵に歩み寄るホークは、力いっぱい甲冑の上から彼の肩を叩いて、門の開扉を促した。

――大地が揺れる。火焔を伴った岩石が宙を舞い、そして再び大地を穿つ。地は揺れ、屋外訓練中だった生徒たちは皆一様に身を屈めて縮こめていた。

そうして、一拍おいてやってくる阿鼻叫喚。女性の甲高い悲鳴に、

男性の低いどよめき。そして突如の事態にすぐさま避難の指示を出している教官は、されどその言葉を聞き入れる余裕を失った生徒たちにさらに怒声を響かせて……僅か一度の魔術で、養成学校は瞬く間に混沌の海に蹴落とされていた。

「はっはっは！　野郎ども！　まず話が通じて無さそうな教官共に事情を説明してこいッ！　オレはここで道化師（ピエロ）を演じてるぜ！」

「隊長がんば！」

「応援してるぜ、隊長！」

部下たちは、手際の悪すぎるアレスハイムに呆れて溜息を漏らしながらも、いつもの調子で誰もいない方向に火焔を放ち大地を抉り続けている隊長の肩を叩きながら、集団のままで教官へと向かっていった。

――そうして、また呆れ顔で教官が静止する。

もっとわかりやすい状況が良いと、ジャンと同じクラスであるらしい少年少女らの要望から彼らを縄で縛り付けるのは、それから間もなくの事だった。

そして門兵の指示通りに、被害者を装ってジャンをさりげなく学校へと呼び出すことに成功するのは、それから数分後のことであった。

傭兵の仕事は早い。

聞き及んではいたが、初めてその存在を見た戦闘教官はそれを再認識した。

「た、大変だー！　養成学校で不審者が生徒たちを襲っているぞ！」

目の前を通りすぎていった外套姿の男は、ジャンの前で一際大きな声でそう叫ぶと、瞬く間に彼の視界から失せて走り去っていった。

それ以降の声は聞こえず、まったくもって珍妙な男だと考えたが――言葉がもっと違う台詞であったならば、彼の存在を切り捨てることができたのだ。

養成学校の不審者。
そして以前会った偵察兵。
疑念が渦巻く彼の中で、この大事と以前の経験と憶測とが直結した。
それは見当違いも甚だしいのだが――ジャンは動かずには居られなかった。
「学校が……連中、先に”これからの脅威”を潰しとく気か……！」
怒りが燃える。
走りだせば右腕の激痛が息を止めたが、ジャンは構わず、その意識を全て前方へと差し向ける。本屋へと向けていた足を、すぐさま学校へと差し向けた。
痛みや、不安や、焦燥や……それらを全て切り捨てて、ジャンは走りだす。
向かう先は、およそ想像できぬおぞましい光景が広がる養成学校。
それを防ぐため、守るために、正義を二の次、因縁を晴らしにジャンは向かう――。

「だぁ――らっ！」
木剣が弧を描き、武器すら構えぬへと襲いかかる。
ディライラ・ホークは舌打ちと共に軽いステップを踏み、それが眼前を落ちて行くのを見送った。
が、相手の動きはそこで終わらない。さらに身をぶつけにかかるタックルが如く踏み込んだ青年は、横に飛び回避行動を取るホークへと、小刻みに大地を蹴り飛ばして対象を追尾する。故に、どれほど遠く、あるいは相手にとって死角となる位置に飛び込もうにも、その細やかな機動が許可しなかった。
また、短く舌打ち。
射程距離内ぎりぎリに深く踏み込んだ青年は、陽の光に煌く緑の髪が軽やかに揺れ、汗が宙に舞う。そうしてその引きつけを最後に、

彼は振り下ろした剣を、袈裟に巻き上げるように振り上げた。
（ガキってやつぁ、自己顕示欲の強いこって）
避けることはできた。だがここで、己の持てる力を全て使って相手を完膚なきまでに倒してやるのは、どうにも無粋な気がして――ホークは敢えて距離を保ったまま、勢い良く振り上げられた木剣の切先が額を擦り上げるのを甘受した。
ヤワな皮膚が摩擦で焼かれ、引き裂かれて鮮血が飛び散る。
目の前には、歴戦の勇士を相手にそうした偉業を成し遂げた青年が、ただそれだけの機動で肩で息するように立ち止まる。もしこれが真剣であったならば相当な痛手を与えていたであろう現実に、ルーク・アルファは不敵な笑みを浮かべていた。
が、やはり呼吸は整わない。
それが殆ど実戦じみた戦闘での、慣れぬ緊張や、そこから伴う調整しきれぬ無駄な動き、不必要に入ってしまう力が急速に体力を奪っていくのだ。
いくら訓練などで好成績を残していたとしても、実戦ではその経験の不足から本来持つ力を十分に発揮できぬことがあり、また新兵の場合ならば殆どがそうである。
対人はもちろん、対異種族であっても相手は容赦してくれず、故に兵士の多くは養成学校や訓練課程を終了した後、主に初めての実戦で散っていく。だからこそ、この国ではより実戦に近い形での戦闘訓練を要求するのだが――。
「へえ、中々やるじゃねェか」
左目の眼帯を軽くさすってから、親指を額の幹部に押し付けた。
流血はそう激しいものではなく、暫くそうしていれば血は止まる。
ホークは嘆息してから片足に重心を移動させて、片手を垂らし、もう片手を腰に当てた。
「どうだ、このオレを相手にして一本取った感想は？」
「ふざけるな、あんた――本気にすらなってねえ！　俺を侮蔑（なめ）てんのか？　せめて剣くらい――ッ！」

「ガキを相手に本気になる大人なんざ立派じゃねえよ。それに、オレァお前さんの相手をするような仕事を請け負った覚えはねェ。追加料金を払ってくれんならまだしもな」

どこかで見ているはずだ。

これから試されるであろう青年、ジャン・スティールの戦いぶりを――何かを秘めていると判断されたからこそ、こんな大事にまでして力を試される少年を。

だが、だからといってそこでも本気になる予定ではなかった。理由は先のとおりだし、それに本気になるほど高揚するようには到底思えない。

目の前の青年だって、上手く見事に精錬されている。歳の割にはやっていけるだろうし、これから徐々に力をつけていけば目覚しい程の実力を持つことになるだろう。先ほどの機動や剣撃の流れから、ほのかに才能（センス）が漂ってきたのは確かだ。

しかしなれど、まだ未熟だ。

熟してすらいない果実を、齧ってやるいわれはない。どうせならば熟した”食い時”という所がいいだろう。

訓練中の、しかも鍛え始めてまだ半年という子供を相手になどは尚更――。

ルーク・アルファが再び剣を構えるのに、うんざりとしたように肩をすくめて吐き出す溜息で返した。

「いい加減うぜェよ。ジャマだ」

「だったらもう一回だ！　ジャン・スティールばっか、優遇させてたまるかよ！」

「……ああそうかい、なら後悔――すんなよ」

飽くまで笑みを浮かべようとしたが、結局は口元が痙攣するように引きつっただけだった。

やはり、ふざけていない限りは笑えないな――下手な戦闘をしていつくるか知れぬジャンに目撃され、そこから推測、自身が試されていることを知られる、なんて事はしたくなかった。予定では飽く

まで純粋に、正義漢が感情のままに突っ込んできてそれに応対するのだから。

だから、手早く終わらせる。

ホークは迷いなく腰の剣を一本だけ抜きルークに対して斜めに構えて、切先を相手につきつけるように構える。剣を持つ右腕はややしなやかに曲がり、柔軟性、伸張性を孕むのを外観で見せていた。

それを見て、ルークがやや怯むように足を止める。距離が殆ど無いような近接戦闘を得意とする彼にとって、やや相性が悪い戦い方であったようだが――実戦ならばその畏怖が生死の決め手になる。

――先手を取ったのは、それ故にホークだった。

大地を弾くように切迫。

意表をつかれたルークは慌てて剣を対応すべく構え直すが、根本的な速さが足りない。

そうして気がつけばホークの動きは止まっていて、そうして気がつけば、己が喉元には、構えを掻い潜った白刃が冷たくその切先を突きつけていた。

ジャン・スティールが学校に到着した頃、見覚えのある緑頭の青年が、正眼の構えのまま硬直しているのが見えた。グラウンドの端では教官ともども縄で簀巻きにされた生徒たちの姿があり、それを取り巻くのはくすんだ黄土色の外套をお揃いで身につける、妙な男たちの姿。

そしてその”ルーク・アルファ”の向こう側には、左目に眼帯をつけた男が腕を伸ばし――そこから伸びる剣で、ルークの喉を突き刺していた。

「な……っ?!」

理解不能。

現状を視覚で認識するが、この光景が意味するところを彼は理解出来ない。

なぜルークが刺されているのか。なぜクラスメイトたちが拘束されているのか。

この連中の目的は？　わざわざ、こうする理由は？

わからない――そうだ、ならわからないままでいい。

相手を理解する必要なんて無い。

それを理解したはずだ。ついこの間、新愛なる友人ウィルソン・ウェイバーとの会話でそう認識したのだ。

敵が敵としているならば、その理由や心情や背景は無視するべきである。

敵が敵としているならば、己も敵にとっての敵として対峙するまでだ。

唾棄すべき対象は目前。

ならばどうする？

（おれはどうする？）

「どうすればいい？　答えは――簡単だ」

背中の魔方陣が、衣服越しに輝きはじめる。もうその圧倒的な勢いによって服ははじけ飛ばないし――右肘の魔方陣を発動させるにあたって脳髄に勢い良く釘を打ち付けられたような激痛が電流のように走ったが、本能はそれを抑えつけた。と彼は己の中で、痛みを極力無視しようと尽力する。

「く……いってえなあ――っ！」

右肘からの半永久的な魔力の放出。それゆえに、中途半端な魔力量での肉体強化。お陰で右腕の回復は不十分になって、拷問とも思しき激痛は絶え間なく、また脈拍と共に全身に伝播する。

「だけど、良い感じだ」

緊張と不安と、怒りと憎悪がいい具合に混じり合う。

脳内から分泌された麻薬にも似た成分が、痛みを徐々に和らげる。

「いい気になりやがって。おれが、ぶっ潰してやる……っ！」

ジャンはそれまでの訓練の成果か、肉体強化の具合の良い配分のおかげか――およそ人生で最良なコンディションで、走り出してい

た。

「来たか」

既に恐怖に飲み込まれてしまったルーク・アルファを横になぎ倒して、剣を収める。

すると直線上にて走りだしたジャン・スティールは、既に数メートル手前の距離にまで迫っていた。

「来てやったさっ！」

漏らした言葉は聞こえていたらしい。咆哮混じりに、ジャンは何の工夫もなく真正面から拳を振り上げた。

「もっと来いッ！」

「黙って待ってろっ！」

深く踏み込み、大きく振り上げた拳をホークの顔面に叩きこむ――が、それは寸でで現れた掌が防ぎ、拳を力強く弾く。しかし同時進行で左半身を捻るようにして肉薄すれば、無防備な脇腹にジャンの肘鉄が見事に突き刺さった。

――衝撃の反射に、右腕の神経が力いっぱい弾かれたような激痛。脳を素手で握られているかのような苦痛に、ジャンは思わず顔をしかめる。が、不意を突かれた、妙なまでに”実戦慣れ”している攻撃に意表をつかれたホークは同様に表情を歪め、僅かに数歩分、距離を取った。

まだ相手は、ただ”突然だったから攻撃を受けてしまった”と考えているに違いない。しかし、その判断こそがジャンにとって丁度良かった。侮られているならばまだ勝ち目がある。相手が敵を舐めている時点で、格下だと判断している時点で好機はゆうに存在する。

だが……。

（あいつじゃない……？）

敵が、あの時の偵察兵でないことに疑問を覚えた。

加えて、外套も随分と様子が違う。武装も貧弱だし、まず鎧すら装備していない有様だ。

そして目的すら判然とさせぬように、こんな所で待機をしている。さらに、ジャンの登場に”来たか”とまるで待っていたかのような発言。

何者だ？　ジャンはそうに、彼らはおそらくヤギュウ帝国からの先遣隊ではないのではないか、と考え始めていた。

だが、彼の無意識とまではいかぬが、反射的に続く行動が思考を遮断する。

――ジャンはつま先で地面を蹴り上げた。するとつま先に掬われた土や砂が巻き上がり、ホークは思わずそれを右腕で防ぐ。共に、視界は封じられた。

大地を弾き、大きく左側にステップを踏んでフェイントを入れる。音に反応して、ホークはその方向に構えて、ジャンはそこから力強い跳躍で目を覆っていた腕を引き剥がす瞬間に、懐に潜りこむように飛び込んだ。

男が目を剥く。

ジャンはそれでも無表情のまま、強く固めた左の鉄拳を男の水月へと叩き込み、さらににわかにひるんだところを右の拳で追撃。顎を横方向から穿ち、勢いをそのままに身体を捻り、腰を落とし、身を翻し相手に対して上肢を横に向けた状態で、再び肘を腹部に打ち込んだ。

振り薙いだ足でさらに足払いをかけようとして、嫌な予感を彼は覚えた。背筋にぞわりと悪寒が走る。そうして気がつけば、本能が身体を駆り、男からその身を引き剥がした。

「ったァく――もう引いたのか、面白くねェな？」

機嫌の良さげな、笑いを含む声。

そこでジャンは改めて男を見れば――腹部には左手が、そして右手は顎を保護するように構えられたままだった。彼が水月を打ち抜いていたと信じていたが、それは飽くまで防御のために置かれていた腕を叩いていただけであり、顎は同様に手の甲を殴り飛ばしていただけにすぎない。

故に、怯んでいた筈の彼は僅かに腰を落とした体勢のままで固定されており、アレほどの猛撃を受けて尚微動だにしていないことを認識した。

強い――ジャンは相手をそう評する。ただ強いわけではない。相手の動きやその法則性を、僅か二度ばかりの接触で理解する強さだ。並々ならぬ実力でないことを、そして男は最初からジャンを”侮ってなど居なかった”ことを、彼は察知した。

「だけどよォ、今の。避けただろ？　退いただろ？　それをお前さんは本能で理解したわけだ」

男は腕を交差させるようにして、両の腰に備える刀身が波打つ”フランベルジェ”と呼ばれる種類の剣を、対にして引きぬいた。

刀身が特殊な仕様によって波打っているせいで、肉が引き裂かれ、治療が困難になる。故に失血や破傷風などの直接的な死よりも、その後の苦痛が大きいとされている剣だった。

それを一対にして、男は構えた。

「お前は割と、動きはいいぜ。その右手がまともならもっと面白かったかもしれねェが、いや、歳の割には中々――かなりやる。やりやがる。ああ、いいな。期待してなかった分、いいぜ、お前さん」

嬉しげに、楽しげにその口元は釣り上がった。先程は失敗してしまった笑みが、この青年を前にしては容易に成功してしまった。

ふざけている自覚はなかったが――ディライラ・ホークはこの状況を楽しんでいた。

先ほどの青年とは同年代であるはずだ。だがこの、ルークよりも激しい運動の直後だというのに息すら上がっておらず、また相手の隙を突いた攻撃も中々に上手い。学校以外にも自己鍛錬を行なっている証拠だった。

だがそれだけではここまでの成長は望めなかっただろう。が、軍務大臣からの手紙で与えられた情報によれば、肉体強化魔術を使用したが――単体で異種族を、相当な数殲滅したという話だ。

彼はその言葉を思い出して、なるほどな、と頷いた。その所作に

ジャンは眉をしかめるばかりだが、ホークは気にせず〝助言〟する。彼ならば会得できる領域への成長を促すための言葉を。そしてそれを自分のものにすれば、初見でもホークを倒せるほどの台詞を。

彼は短く息を吸い込んだ。

ジャンは、律儀に彼の言葉を待っている。それに仄かな笑みを浮かべて、

「今度は理屈で理解しろ」

――その助言から、ディライラ・ホークによるジャン・スティールの戦闘試験は開始した。

対傭兵？

「しまった」

ディライラ・ホークとジャン・スティールの戦闘が始まるにつき、まず始めにそう漏らしたのはノロだった。

彼女は、校舎の屋上で単眼鏡を片手に観戦する軍部の関係者二人を見下ろしながら、ジャンに対してにわかな驚きを覚えていた。

それはまず――というか、単純に一つの事実について。

ジャン・スティールという男は魔術の才能はさほど無いように見えていた。そして実際、彼自身が”覚えている”――身につけているとも言いかえられる――魔術は、事実上存在しない。彼が使用する魔術は己の肉体に刻まれた魔方陣によるもの、あるいは武器に刻まれた紋様を用いての魔術のみだ。

だから、その代わりとばかりに白兵戦では目覚しい成績を残しているし、現に世界で活躍する傭兵の一部隊長にさえ見初められ始めている。魔術的な才能がないために、彼が個人として魔術を身に付けないのだろうと、彼女はそう認識していたのだが、それはどうやら違ったらしい。

「まさか、魔術の才能も……？」

彼女が与えた『禁断の果実』という魔術は、この国のどこの図書館を探しても魔術書として残されていない遥か古代の魔術であるし、意図的に葬り去られた”禁呪”でもあった。

魔術の適性が殆ど無いような青年が、その禁呪を扱えるわけがない。だから彼女の”意思”を持つ”破片（かけら）”を彼に与えて、魔術使用の補助をしてやった。初回の使用時には肉体をわざわざ動かしてまで”コツ”というものを教えてやった。

だから、それ以降は不器用ながらもなんとかそれを流用して、”見たものを再現”するレベルにまでは自力で到達できた。もちろんそれは禁呪としての『禁断の果実（フォービドゥンフルーツ）』では最低限度の効果であり、ジ

ャンにとっては活用できる最大限の効果だと思われていた。
だが違う。
ノロは、図書館に備え付けられている時計塔の屋根の上からそれらを見下ろしながら、そう確信した。
彼女だからこそわかる。そしてまた、彼に埋め込んだ細胞は自意識は無いが、それが感じる反応を、遠隔的に彼女自身も感じることができていた。
――今では、背骨に刻んだ魔方陣は移動してしまっている。それはより効率的に、本来の能力を発揮するために自発的な動きを見せていたのだが……今ではその動きを、ジャンの肉体が無意識に操作していた。
最初は瞳に留まるものとばかり思っていたのだが……。
「いやまさか」
彼女はやはり驚きを湛えたまま、されど無表情を貫き通して口にする。
「すごい逸材」
にわかに信じられない事だが、この短期間でその境地に達するのはおよそ将来の”大魔導師”の地位を約束されているといっても過言ではないだろう。加えてあの白兵戦での実力ならば――世が世なら、恐ろしい男へと成長を遂げるはずだ。
しかし、ノロにはどうしても彼がその境地に辿りつけるようには思えなかった。
だからこそ、素直に驚く。
なぜそれほど”中途半端”に極められる才能を持っているのか、と。
故に漏らしたのだ。
「しまった……まいったな」
自分が強いと錯覚して、死んでしまわなければ良いのだが……。

「お前さん、素手でいいのか？」
意気込んだ所で、不意にディライラ・ホークはそう口にする。まるでヤル気を削ぐような言い草に、ジャンはわざとらしく舌打ちをしてから首を振った。
「いらねえよ。今日はなんだか、調子が良いんだ」
言葉とは裏腹に、ジャンはいまいましげに肩をすくめる。
屋上で光に反射する何かを睨みつけたかと思えば、そこからさっと消え去る影が見えたのだ。
つまりこれは――ヘタくそな演技に、まんまと乗せられたという事になる。試されたのだ。おそらく、たった二人きりであの異種族の群れから生き残ったから、才能か何かがあるのではないかと魅入られたのだろう。
かまうものか、とジャンは再び構えた。
「そうか――なら」
ホークは右腕を振り上げ、左腕を前方に突き出すように構えた。ただそれだけで威圧が増す。故に、ジャンは瞬時にして攻めの手を拒まれてしまった。
「今度はこっちから、行かせてもらうッ！」
――踏み込めば横と縦からの攻撃が襲いかかる。ならばどうすればいい、どうやって”突き破れば”いい？
鈍い痛みを携えて唸るように筋肉を痙攣させる右腕の感覚を認識しながら、強く踏み出したホークに相対するように、ジャンも足を動かした。
直後に、間髪おかずに頭上から切先が落ちてきた。同時に脇腹から切り裂く斬撃が現れる。
正に神速――思わず息を飲み感心しそうになる意識を奮い起こし、その状況で最も適切である”後退”をまず始めに選択肢から切り捨てた。
この状況での最適な行動は、それ故に相手にとっても予測し易い。だからそれはある意味で、否、本来の意味で誘導されているという

事になる。
ジャンは攻撃と殆ど同時に前方へと大地を蹴った。
肉体強化故に増強されている動体視力、伸びる主観的時間を存分に使って振り下ろされる一対の剣の機動を推し量りつつ、その懐に潜り込む。だが――ジャンが肉薄するのと同様に、ホークの身体は後ろへと退いていった。
「っ！」
嵌められた。裏をかいたと思ったが、それさえも見透かされていたのだ。
既に斬撃は肌からさほど離れているわけではない。
時間がない。
どうする、どうする、どうする――。
――斬撃は左の肩口に食らいつくと同時に、右横腹へと襲来。肉を切り裂き、抉るように通過する中で鮮血を撒き散らし、そしてその一対の剣は交差した。
縦の鋭い一閃に、横の狡猾な一撃。十字からなるその一連の動作に、逃げ場などは存在しない。
「く……ぐあっ！！」
思わず身を引こうとすれば、波状の刃が肉に繊維に引っかかる。
ジャンは呻き、さらに攻撃が肉体を切り裂いて過ぎるのを確かに感じていた。
剣が腹部から股を通り、その刃から剣先までを血のりで濡らし鮮血の尾を引いて過ぎ去り、また薙いだ剣は同様に血で弧を描く流れの軌跡を描いて、その勢いを伴いホークはやや後方へと距離をおいた。
ジャンの肉体に深い切創が施され、新調したばかりの麻の服が見事なまでにボロ布へと変わり、また激しい流血によって赤く染まる。
咳き込んでも血はでなかったが、患部の燃えるような痛みや――それまで覚えの無かった肉体表面に対する想像を絶する激痛に、ジャンの思考は瞬時に白く染まりあがる。

「や、ろう――っ！」

――こんな下手な芝居を打たれて、何者かに試されて。まだ病み上がりだというのに、おそらくこの後に魔術による治療などがあろうとも、こんな致命傷に近い傷を負わされて。

そんな理不尽を被って、自分だけが傷つくのだから構わない――そんな風に笑って許せるほどジャンは寛容ではなかったし、そもそもこの間の異種族戦での一件でむしろ血生臭くなっているほどだった。

だからもう退こうという本能からの撤退命令や、これ以上は危険だと頭の中で鳴り響く警鐘なぞは全て切り捨て。

理性が痛覚の悲鳴を無視し、真っ赤に染まる視界の中の影を、鋭く睨んだ。

「てめえ……ぶっ潰してやんぜ」

「凶悪な顔貌（つら）だな。そいつが本性ってわけか？　お前さん」

「っせえよ、イラつくんだ――おれが何したってんだ！　ふざけやがって……っ！」

「この不条理が気に食わねえってか。ま、年頃の少年（ガキ）がしょうがねえかもしれねが……」

「ああ？　誰がガキだって？」

「お前さんだよ、たかが自分を傷つけられる事だけにイラついてどうしようもねェ、ちっちぇえガキさ」

ホークの台詞に、ジャンは小さく舌を鳴らす。

それに、彼は意外そうにしかめていた表情を消し、口笛を吹いた。口元は依然としてにやにやとひきつっている。

「なんだ、今度はオレが試されてたってわけか？」

器の小ささを指摘しあわよくば矯正せんとするばかりで”のって”来なかったという事実に肩をすくめるジャンに、ホークは思わず噴きだした。

笑い声は立てずに押し殺し、それからくつくつと肩を震わせてジャンを見据える。

「てェしたもんだ」
というのが、その後の開口一番だった。
飽くまで自分にとって有利な状況を作り出そうとは――それまでの、演技には見えぬ怒りの演出にホークは思わず舌を巻く。これならわざわざ騎士なぞを目指さずに、俳優か何かでもやったほうが良いのではないか。
あの状況でさらに叩き潰そうと向かっていたならば、ジャンはどのような反撃に出たのだろうか。少なくとも今回が試験のような形でなければそうしていた筈だ。大怪我をしたねずみが、万全の態勢であるネコにどう噛み付いてくれるのか。ホークはそこに、少しばかり興味が湧いた。
そして己のプライドなどはかなぐり捨ててまで、相手を油断させ隙を狙おうとする狡猾さを彼は認めた。
こいつは強くなるかも知れない。
そう思うと、少しだけ肉が踊る。血が沸き、心臓が力強く跳ねて全身にその弾みが伝播する。
「お前さん、武器は何を使ってる？　弓か、槍か？」
「剣だよ。ドワーフ特製の立派なやつだ」
「ああそうかい。なら急場しのぎ、おざなりですまねェが――これでも使えや」
言うが早いか、ホークは手にしていたフランベルジェを投げ捨てたかと思うと、それは空高くに飛び上がって数度ばかり回転し、落ちてきたかと思えばジャンの眼前を通過し、地面に突き刺さった。
ジャンは迷いなくそれを引き抜き、構える。同様にホークも今度は剣を両手で構えていた。
「今度はそれで、オレを本気にさせてみろ」
ド派手な流血沙汰は、それ故にそう長く続くものではないように思えた。
もって数分。激しく行動するとなれば、その寿命とも言える残り

時間は刻々と減っていくばかりだ。
理屈で理解しろ、オレを本気にさせろ――今や試験官としか見えなくなった眼帯の男に対するジャンの苛立ちは確かなものだった。
命令ばかりだ。
しかも的確に足りないものを言い当てている。さらにいまいましい事に、奴は本気にさせろと言ってきた。剣まで抜いているのに未だ本気でないと来ている。その斬撃を受けて今にも死んでしまいそうなクソッタレな待遇を受けているのにもかかわらず、本気でない生半可の攻撃によってそうなってしまったという事実を突きつけられていた。
そんなこと、許してたまるか。
これ以上、されてたまるか。
怒りがふつふつと沸き上がる一方で、酷く冷たく沈んでいく一面を彼は理解していた。
鼓動が落ち着く。全身の筋肉が痙攣するように震え始めるが、それが畏れなのか、武者震いなのか彼には分からなかった。
興奮はする。あわよくばその首を刎ねてやろうという意気込みさえある。それは真剣を渡した相手の不注意だから、だと殺した際の言い訳さえも考え始めている。が、相手がどう動くか、相手が持つ魔術は、どこまで速く、どこまで鋭く動くことが出来るか――考えられる、想像できる範囲内で彼は思考する。
だが時間がない。
男は既に走りだしている。
長く長く伸ばされた主観時間の中で、ジャンは唯一辿りつけた一つの手段を念頭に置いて、行動を開始する。
――理屈で理解しろ。
まったくもって難しいことを言ってくれる。
(理屈ってなんだよ)
殆ど本能的、直感的に戦いそれを骨の髄にまで染み込ませているから、その言葉にピンとこない。来たとしても、下手に考えるより

己の察知できる範疇内で考え行動したほうがまだ安全なのではないだろうかと思えた。

（理屈で考えろって……まるでおれが単細胞みたいじゃねえか）

理論的、あるいは論理的な思考を根本に根付かせろと言っている事はよくわかっているつもりだった。簡単にいえば、相手の行動からどう動くか、思考を読むが如く理解しろと言っているようなものだ。つまり必要となるのは注意力と経験だ。あるいは想像力か。

――やがて男がジャンに対して斜めに構え、片手で突き出した切先が鋭く切迫し始めた頃。

ジャンは短く嘆息して、腰を捻って腕を振るった。

勢い良く襲いかかってくる白刃の横腹を、剣で叩き上げる。軌道はジャンの喉元から外れて宙を穿つ。鍔迫り合いの要領で刃を外さずにジャンはそのまま肉薄し、剣を両手で握り直して相手のフランベルジュを腕ごと、対角線にたたき落とした。

左腕はそれによって自然に封じ込まれ、ジャンの構えた手元によって下半身からの追撃は許されない。

「こいつァ……ッ！」

「うるせえ！」

にわかに驚く顔のホークへと、ジャンは鋭い頭突きを撃ち込んだ。衝撃が頭の中身を激しくゆらし、視界を歪ませる。ノイズのかかった景色を映し出す中で、目の前の男のうめき声だけは確かに聞こえた。

さらに身体をぶつけて距離をとり、剣から離した腕を振り上げてその顔面に肘を叩き込んだ。

通った鼻が歪む。皮膚が切れ、鮮血が漏れた。

ジャンは行動と共に襲いかかる激痛に堪えながら、肉体強化の影響によって徐々に痛みが薄れていくのを実感した。

さらに追撃。死角となる足元を払えば、ホークの身体はいとも簡単に――崩れない。力強く踏み込まれた足は、重心が落とされた肉体はローキックごときの威力ではビクともしなかった。

これに、ホークはいやらしい笑みを浮かべる。対照的にジャンは再び、舌を鳴らすばかりだった。

言葉はなく、ホークの斬撃。

ジャンは応対し、それを受け止める。が、瞬時に刃が翻り、甲高い音を鳴らすのとほぼ同時に次が来た。

落ち着き払った対応。数瞬の間に降り注ぐ無数の剣撃を、それでもジャンは打ち払う。だがそれが彼の限界速度での対処だった。

だから次の刹那に下方から隆起する大地が如き切迫を見せる切先には、思わず息を飲まずには居られなかったが――ならば対処しなければいいだけの話だ。

そしてそれが、最も最適（ちょうど）いいタイミングでもあった。

切先が顎に触れる。その鋭い刃先が肌を容易に引き裂いて肉を抉り、骨を削ろうと言う所で背を反らした。刃は喉元に滑らずに頬へと向かう。緊張する頬の筋肉が力づくで引き千切られる一方で、再度足を振るった。

身体全体で反動をつけるように反らしたを戻し、それ故に顔の傷がより深くなるが構わず行動を進める。腰を捻り、その反動で膝を上げ――軸足を回して一気に対象へと衝撃をぶち込んだ。

手堅い衝撃（インパクト）。ジャンのスネがホークの膝を打ち砕き、見る間に体勢が崩れていく。ジャンは手早く後退すると、虚空を切り裂く白刃があった。完全に出遅れた剣撃は間隙を抜くことすらできずに無様に舞う。

ジャンはそれに確かな手応えを覚えてほくそ笑んだ――が、刹那の撃墜から蘇るホークの表情（かお）に、未だ嬉しげな微笑があるのを見て、思わず笑みが引きつった。

全身に燃えるような激痛が走る。

もはや息も絶え絶えで、左目などは視界が赤すぎで何がなんだかわからない。それ以上に緊張が下腹部を痛めつけ、腸の中は空っぽだと言うのに腹を抱えたくなった。

「ははっ、悪いな。足癖が良すぎて上手く行かなかった」

虚勢。

当然として、心情を映し出す顔でばればれだったのだが。

「確かに。お陰で膝が砕けずに済んだ」

彼はにやにやと笑いながら膝を叩いてみせる。そこには余裕の態度が見て取れて、だというのにこの男はまるで戦意でも失せたと言わんばかりに握っていた剣を左の鞘に収める。中々の長さである為に鞘の先は地面すれすれで、口は胸元に届かんとする勢いであるのだが、手馴れたような手つきで収納する。

ジャンは握ったままだったフランベルジュを返そうと差し出せば、彼はそれを手で制す。

「……どういう事だ。むしろやる気がなくなったってわけか？」

「いいや、まさかさっそく一撃はいるとは思わなくてな」

しかも足止めされるほどの一撃を。

彼は厭味ったらしく、だがどこか嬉しそうに呟いた。

「いいぜ、次で最後にしてやる。見てろよ、オレの本気だ――」

当然の帰結として、両者の間に試す試される、あるいは憎しみや怒りなどの、今回の騒動に至る根本的な理由が失せていた。

そこに残るのは実力者同士の、己の力を押し付けあう、己の力を見せつけ合う――つまり己という存在（もの）をぶつけ合う闘いだ。

だが、戦いと言っても、両者の距離ははるかに離れ、今では校庭の端と端と言わんばかりの距離があいているのだが。

「発現（めざ）めろ……」

肩幅に足を開き、右手を前に突き出す。左腕をその支えにすれば――にわかな光が掌を包む。それが魔法による反応だというのは、さしものジャンにも理解できた。

光が長大に伸びて形を作る。およそ等身大ほどの大きさになると伸長は停止し、剣にしてはいやに細い、そしてどこまでも起伏の失せた外見（フォルム）、握る部分の高さに、それがただの剣ではない事を彼は認識する。

ならば槍か。考える間に、ホークの声がその輝きを確かな武器として具現させた。

「無限射程の長槍（シューター・オブ・ボーイズ）ッ！」

――それはおよそ、見たこともない機械的な外観だった。

メタリックな質感。長細いそれは槍などではなく、その先端にはウィスキーボトルのような黒い箱型の、その側面に穴が空いた道具がついている。金属製の部品を組み合わせたような長大な武器ではあるが、思ったよりも細くはなく、わしづかみしたとしても指が届くようには思えなかった。

その長い鉄骨のようなものから、取っ手のような部品がありホークはそれを掴んでいる。さらに小さな突起があり――その下部の対面たる上部には箱状の部品が不自然に飛び出ていた。

ある一定の部分からはパイプのように細くなって先端へと伸び――そのすぐ手前には、彼が掴む取っ手を長くしたようなそれは、短いコンパスのような二脚となって生えていた。おそらくは地面に伏して使う際に、安定させるためのものなのだろう。

確かに鈍器として使うには不自然な形をしているし、無駄に大きく扱いにくそうな武器である。槍や剣としてもまともに機能はしないだろう。

――ディライラ・ホークは握る取っ手のすぐ近くにある金具を手に取り、起こしてひきつけるように引っ張る。ガチャリと何かが”込められた”ような音がして、彼はその金具を定位置に戻した。

その形。

構え方。

握る部位の、不自然な突起。そこにかかる指。

金属で構成される、どこか砲筒を思わせる鉄パイプのような円筒。

妙な既視感――それを覚えると同時に、いつの日かに訪問した本屋を思い出した。手のひらサイズの、火薬を使用した武器。それは決して近接用武器などではなく、立派な”向こう側の大陸”から輸入された遠距離武器である。”拳銃”と言う名のついたそれは、そ

の筒状の先端から弾丸と呼ばれる主に鉛で構成される道具を発射する。

彼には、それに関連した何かにしか見えず……またそれ故に、その危険性を大いに理解した所で走りだそうとして――。

破裂音。

先端の箱状器具から眩い火花が瞬いたかと思うと、遥か後方で盛大な衝突音が鳴り響く。ふり返るまでもなく鉄門がその門壁ごと破壊された様子がよくわかり……その”射撃音”と呼ぶべき空気を引き裂いたかのような音は、大気を激しく揺るがし、未だその余韻を遠くに残していた。

それがいわゆる、彼の本気だった。

瞬間的に崩壊した門は、彼の超能力でもなんでもなく、純粋なまでの物理的攻撃が要因だった。それはその巨大で長大な銃から発射された、拳銃とは似ても似つかぬ大きな弾丸で打ち砕いたのだ。剣撃がどうだとか、蹴りが、込めた力がどうという次元の破壊力ではない。そしてまた、その衝撃は計り知れないレベルのものだ。

「……ッ！？」

だから息をするのも忘れて、ジャンはその銃――”狙撃銃”を睨みつけた。

ホークは依然としてニヤニヤと、あるいはやっとジャンを驚かしてやったと喜ぶような笑みを浮かべて口を滑らせる。

「やっぱ傭兵（おれたち）の本分は鉄砲（こいつ）だろォ！？　だよなァ！　大長槍（ラハティ）だとか槍（バレット）でも良かったんだがな、大見得きらせてもらったぜ！」

なめらかになる口元は、その魔法に種類があることを教えてくれる。おそらくは”火器類”を出す固定効果があれども、出現できる種類はいくつかあるということだろう。

再び金具を引けば、中身のない弾丸の入れ物である”薬莢”が押されて吐き出される。同時にその薬莢を押し出したのは弾薬であり、その行為が終える頃には既に次の弾丸（たま）が込められたことになる。

「だが、良くこれが危険だってわかったな。走ってなけりゃ、割と

マジで死んでたぞ？」

顔も、胸も腹も、その全てがそれまで覚えていた、苦しませていた痛みや傷を忘れてしまっていた。

背筋が凍えて、流血も相まって意識がはっきりとしない。

戦慄が走り、こいつにはどう勝てば良いのか――そればかりが頭の中で繰り返された。

いや、まだだ。

まだ終わらない。

まだ終われない。

――肉体強化の魔力が全て、瞬時にして消え失せた。その効果が無くなった瞬間に傷の痛みが増幅して全身を燃やしたが、最早関係ない。

だから口にする。

だから魔力も、自然に胸よりやや高い……喉に集中した。位置が以前とは変わっているということには気づいたが、気にしている余裕など、無い。

「禁断の（フォービドゥン）――」

「――しかし、参ったな」

だというのにホークは、いとも簡単にその長槍（ボーイズ）を消し去ったかと思うと、まるでわざとらしく困ったというように肩をすくめた。

顔はいつもどおり、にやにやとしたいやらしい笑顔のままだ。

「想像以上にやりやがる」

最初の猛攻は中々だった。もし相手がホークでなければ勝負はついていただろう。

次は助言を与えたばかりだというのに、その学習の良さを示していた。大怪我を負ったばかりだと言うのに挑発する余裕を残し、さらには諦めすらしない強い精神を見せてくれた。また適切な判断から、相手の思考を読む流れは驚かされた、とホークは評した。

最後は、ぎりぎりで外す予定ではあったが――引き金を弾く直前で回避行動を取ったことには正直驚いた。殺気や雰囲気などおよそ

彼が察知できそうなものの一切は排除したつもりだったのだが……。

「お疲れさん」

言葉と共に、集中させた魔力が霧散する。

胸に当てた右手は力なく垂れ落ち、左手から失せた握力が握ったままであるフランベルジュを滑り落とした。

緊張から解き放たれた肉体は、存分に与えられた激痛の海に飛び込んで……。

精神、肉体の疲弊は、病み上がりである青年にとっては既に限界であったらしく、

「ま、ゆっくり休めや」

昏倒するように前のめりに倒れるジャンを受け止めると、副長と――妖精族（エルフ）らしく耳が長い少女が走り寄ってくるのを確認した。

療養

その後のことは、想像に難くない。

――せっかく肉体表面下、つまりずたずたに引き裂かれていた筋肉がまともに結合して、通常通りの生活はもちろんリハビリ代わりとなる訓練を行うには差し支えない程度に治癒したと思えば、今度は深い、致命傷足りえる切創に、もはや致命的となっているほどの失血は、落ち着いたばかりの修道院にまた波乱を呼んでいた。

そしてそれが一段落する頃。

目が覚めたジャンに対して、今度はクリスのみならず、多くの修道女からの説教や同情の目などを向けられる事になっていた。

また、右腕の怪我が悪化したのは言うまでもない。

「なんか悪ィことしちまったかなー？」

「いや、仕方がなかったことです……と言いたいところだが」

ジャンが自室呆然として寝台から窓の向こう側を眺める一方で、眼帯の男と丸メガネの男が困ったように言葉を交わしていた。どれほどの罵詈雑言を浴びれば廃人になれるのだろうか――冗談でありながらも、どこか的を射ている話題の中で、眼帯の男ディライラ・ホークのそう漏らした言葉に、副長”スミス・アーティザン”はその丸メガネを中指で押し上げてから、息を吐いた。

「やりすぎです。お陰で部下の士気もあがっていましたし、この国に対する見方も彼の健闘のお陰で良い方向に転じましたが……」

「当の本人がこれじゃあなってトコか？」

「少しは責任を感じてもらいたいところですよ」

「確かになァ。てめェの尻くらいてめェで拭けってことだ」

「ディライラ、あなたって男は――いや、むしろいつもの調子で安心しましたがね。私はこれから一先ず軍部に顔を出してきます。ディライラ、あなたは王への挨拶が終わったので、今日は好きにしていてください。部下たちにも、この国の法のもとで好きにするよう

伝えてあります」
　まだまだこれからが忙しいんだ――スミスはこの遠征から今日まで休みなしで裏方で働き続けている。ようやく昨日の試験じみた闘いが終わったと思えば、部下たちに指示をして校庭を舗装しなおさせ、宿の手配、加えて当面の計画の再修正。
　今日は今日で実際に派遣要請を出した大臣に当面の日程や仕事を仰がねばならぬし、長い間を金のかかる宿屋にたむろするわけにはいかないから、国に衣食住を用意してもらう交渉もしなければならない。用意してもらっても木賃宿であった場合は部下の士気にも、体調にも関わることだから時間がかかるだろう。
　隊長としての役目は、王に顔を見せて挨拶をする程度だ。さすがにこればかりは代わってやれないので頼んだが――僅かな空き時間に彼と一緒にジャンの見舞いに来たスミスは、手首に巻きつけた腕時計を確認した後、忙しそうに病室を後にした。
「まったく働き者だなァ。もう一部隊くらい来れればまだ話は違ったんだがな……」
　彼らの部隊は隊長、副長を含めて十人前後で構成される。
　そんな人数が基準の部隊で構成される傭兵組合だから特に問題はないのだが、その問題がないのは主に戦闘面だ。政治的に関与する必要がない存在だからそうそう裏方で忙しいことになるわけではないが、それでも裏で指示を受け取り伝達する役目がひとりきりでは、とホークは思った。
　が、自分は動きたくないときたものだがから、解決のしようがない。
　困りものだ。
　ホークが悩んで唸っていると、ふとそんなノイズじみた声に気がついたらしいジャンが顔を向ける。
「うっせえ」
「んだと？　目上には敬語を使えって学校では教えてねェのか？」
　ツナギのような服の胸ポケットから、この国には無いタバコを取

り出し、手馴れた手つきでオイルライターで火をつけ、紫煙をくゆらせる。

ジャンはその煙を忌々しげに睨みつけながら、まるで入院する羽目になった怒りをぶつけるように悪態をついていた。

「バカでも生きてりゃ目上になれるから良いもんだよな」

「てッ、てめェ言ってくれるじゃねえか。ンな事に頭使う前に、オレとの時に頭使ったほうが良かったんじゃねェか？」

「いちいち返し言葉に頭使うかよ。こんなもんで頭使ってるって思われるほどおれが馬鹿にされてんのか――それとも、あんたの頭の程度が知れたってわけか？」

売り言葉に買い言葉。その応酬はとめどなく、そのうち握りしめて腿に押し付けたその拳が、いよいよ相手に向けられようとした所で……何かが破裂したような音をがなり立てて、扉が開いた。

「怪我人は黙って寝ててッ！」

怒りを湛え、その幼い丸っこい顔に精一杯の怒気を孕め青筋を立てるクリスに、両者の勢いは瞬時に霧散した。

昼食を終えた所で、ホークは世界地図をジャンの膝下に展開した。

「地理のお時間だ」

いやらしい笑みに、紙巻たばこの匂いがふれ回る。

そういった要望をしたのは確かにジャンの方だったが、やはり――この男からモノを教えてもらうのは気に食わない。そう、非常に癪に触るのだ。

「オレたちの居る大陸を指してみろ」

寝台に腰をかけるホークは、肩と肩、腕と腕が密着しあうような近さで訊いてくる。吐息が、その呼吸がかかる程の距離で、ジャンは大げさに首を捻って顔を背ける。そうしながら、指で示した。

――世界地図は基本的に、造られる国の大陸を中心に描かれている。これはおそらく”向こう側の大陸”で造られたものらしく、くびれがある縦に長い大陸がやや左側に寄せられている。

海を挟む向こう側には、その大陸よりも遥かに大きい、地図の半分よりやや小さいという程の大陸。倭国はその大陸に寄り添うように存在するが、それでも地図の最も東という位置だ。

その他にも様々な列島や大陸があるが、大きく分けてこの世界にはそれら二つの大陸が中心となっていた。

ジャンが指し示すのは、その巨大な大陸。

ホークは満足気に頷いた。

「そう、ここが『ヴォルヴァ大陸』で、地続きの最南端にあるこの国がアレスハイムだ。大体ここの半分位までを領地として占めていて、だいたい半分くらいからある広大な砂漠地域に食い込むかたちでエルフェーヌがあり、この橋みてェに唯一繋がらせてる細い陸地の手前から向こうが『ブリック共和国』だな」

縦に伸びるナスのような形の大陸をすぎれば、横に広がるそれよりも広大な大陸。それらの総称は彼が言うとおりヴォルヴァ大陸であり、その知識のほとんどは義務教育で与えられるものばかりだった。

ホークは続ける。が、彼が頼んだ説明は中々語られずに、既に得ている情報ばかりが垂れ流された。

――曰く、その”向こう側の大陸”と呼ばれているのは『ディアナ大陸』であり、彼らの本国となる『ガウル帝国』はその中ほどに存在する。

これから侵攻してくるらしいヤギュウ帝国はヴォルヴァ大陸の北方、アレスハイムから真っ直ぐ北に進んだ最北端に存在する。さらにヴォルヴァより海を渡り北へ向かえば”氷の大地”なるものがあるらしく、また南にも同様のものがあるらしい。規模は未知であり、そこに異種族が生息しているかは不明。

「んで、まァ地形的にブリック、エルフェーヌを抑えられてるとしたらかなりキツい所だろうな――と考える。普通はな」

ようやく本題に入ったかと思うと、ホークはそこで言葉を止める。

「普通は？　溝がある分、そこを配慮した考え方をしないのか？」

彼はそういったジャンの疑問を経て、頷き、促されるように先に続けた。

「いいや、違うな。他国はアレスハイムが溝と上手く付き合って行けているとは思ってない。異種族にすげェ迷惑かけられて、自国のことで精一杯だと思ってる。実際、オレらもこの国に来るまではそう思ってたしな」

「……ヤギュウはそこまで含めて、ここに侵攻する価値があるって？」

「その通りだ」

「理由は」

「知らねェし、興味ねェよ。それを探るのはオレたちじゃなく、この国の仕事だ。オレたちはただ兵を育てて、前線で敵を蹴散らすだけだ。ま、この国がその調査を怠ってりゃ、勝てる勝負も勝てなくなるがな。少なくともオレやお前みたいな駒は無駄なことを考える必要なんざねェのさ」

「そう、だな」

力なくそう頷くジャンは、ホークから視線を外して世界地図を凝視する。そんな殊勝なジャンが珍しかったのか、ホークは目を丸くして彼を見つめた。

「どうしたんだ？　気持ち悪ィ」

そんな挑発じみた台詞にも、ジャンは反応せず、ただ小さく首をふるだけだった。

「いや、早く怪我を治さなくちゃなって……ヤギュウの動きがアレから無いってなると、そうとう準備してんだろ？　学生のおれがどうこう出来る話じゃないだろうけど……」

「そうだな。二年ならまだしも……だがよく考えろ。ちょっと気にしてみろよ。なんでその二年生よりも、一年のお前が注目されているかを――」

「――して、演習の結果は？」
大臣の部下から手渡された資料に視線を落としながら、スミスは中指で滑り落ちる丸メガネを押し上げた。以前から考えていたが、いよいよ買いなおさねば戦闘に支障が出てしまうだろうと考えながら、促されるままに読み上げる。
「記録されている成績に見合った動きがなされていると考えてまず間違いはない上、単純な戦闘能力で言えば十分新卒生レベルだと言えるでしょう。右腕の負傷をカバーする機転の良さや、観察力、柔軟性など場慣れしているように見えます。ただ、魔術が肉体強化や魔力解放しか持たないことが不安要素ですが、部隊での行動ならばそれをカバーすることができます」
――概ねそのとおりだとは言えるが、やや大雑把すぎやしないか。スミスは思いながらそれを読み上げ終えて、机の上に下ろした。
卓を挟んだ向こうに座る大臣は葉巻を咥える歯の隙間から煙を吐き出しながら、訊いてくる。
「して、君の評価はどうだね？」
わざわざ他を追い払った理由はこれか。
狭い会議室で、彼と大臣の二人きりで開始された会議に抱いていた疑問はそこで解消される。
スミスは大きく息を吸い込んでから、小さく頷き、口を開いた。
「この報告書（レポート）はやや誇張気味ではありますが、将来性があるのは確かですね。正直、ディライラ――隊長も気に入っていることですし、このまま勧誘して本国で訓練させたい所です。現在の戦闘能力は、上位を占める学生の戦闘能力が分からないので判断材料に困りますが……確かに、異種族の群れを単体で薙ぎ払ったという信ぴょう性はあります。限界まで肉体を強化した場合につきますが。しかし、センス自体はあるとは思います」
「ほう。簡単に、強いか、弱いかで言えばどうなるのかな？」
大臣は飽くまで簡潔な答弁を好んでいた。
スミスは頷き、失礼と、机の上に出されている紅茶を口に含み、

飲み下す。
「”今は”強いでしょう。あの歳で、所属している学校では。ですがこれから――例えばヤギュウ侵攻での掃討戦に実際に投入する、となれば弱いと判断せざるを得ないでしょう。それほどまでに、ある一定の実力は持っているでしょうが、不安定で、断定しきれない強さがあります」
鼻から抜ける芳醇な紅茶の香りを嗜みつつ、大臣が優雅そうに椅子の背もたれに身を預け、楽しそうに首を縦に振るのを見守った。
「ただの優等生だ、と？」
言葉に、ただ頷く。
ガラスでできた灰皿に葉巻を押し付けて大臣は続けた。
「私の期待は外れたのかね？」
そうは言い切れない。
スミスはそういう意味で首を振った。
「二年制の学校でしょう？　彼にはまだ、あと一年半の時間が残されている。成長する時間は存分にある……でしょう？」
「いや――」
自信満々の、されどそういった様子をおくびにも出さないスミスに、残念そうに大臣は首を振った。
そして彼の脳裏には、スミスの言葉の直後に過ぎった”事例”があった。
ジャン・スティールには魔法がない――この事実が、ジャンの学校生活を大きく揺るがしているし、実際、それが判然としてから以降、怪我が治癒し完治とまではいかぬが日常生活が可能なレベルにまで立ち直ったのにもかかわらず、彼は学校に通おうとはしていなかった。
リハビリと言う名の基礎訓練に明け暮れ、それ故にその肉体はより実用的なものに練りこまれていく。
これほどの逸材を、たかが原則的な決まり程度で捨ててよいモノか……これを例外的にして、決まりに穴を作ってしまうか。その決

定権を持っていない大臣でさえそれほど混迷するのだから、実際に判断し下す者はどれほどのストレスに襲われるのだろうか。

将来有望な少年少女は多くいる。その中での、より突出した男だ。この国が望んでいた、超精鋭たる特攻隊長やそれに類する重鎮的人物となりうる存在。

強き者は士気をあげ、敵を打ち砕く。士気はさらに上がり、敵を屠り――その軍の理想的な在り方に、必要なものだ。

いずれは海軍にも、騎士の手を回したいから軍力はさらに増強せねばならぬし……。

「ジャン・スティールは――彼の明日は未だ分からない。魔法を持たぬという事実から、彼が在校できる可能性は皆無だが、その実力から考えれば決して捨ててはおけぬ男だ。私に決定権がないことが、心底悔やまれる事例だな」

「なるほど……憲兵に留めておくという考えは？　他にも、彼を活用できる組織を創設することだって出来るのでは？」

「その価値があるか、試したのが今回の演習だ。だが騎士においておくのが安牌だったのだが」

「そういうわけですね。なら今回の紛争が終えるまで、彼の身を”貸して”貰えませんか？」

「……どうするつもりだ」

新たな葉巻に火をつける大臣は、悪戯に微笑むスミスの、その丸メガネの奥の瞳が鋭く細まっているのを見た。まるで悪魔の微笑みだ――そう思いながら、見慣れた悪代官の面に煙がかからぬよう、口の端からそれを吐き出した。

スミスは飽くまで落ち着き払う大臣を見ながら、小さく、まるで痙攣するほどに小さく頷いた。

喉が鳴る。

自分の言葉が青年の人生を変えることになるかもしれないが――どうせ騎士を目指しているのだ。変わらないだろう。

「我々が育て上げて見せましょう。ヤギュウ侵攻戦で、まともに戦

場に立てる程度には」
自身あり気にスミスは鼻を鳴らす。
が、大臣は疑うような目付きで彼を見つめる。スミスはただくゆる紫煙だけを眺めながら、決め手となる言葉を叩きつけた。
「もともと、我々は教導隊です。ネコはおろか、ライオンでさえ噛み殺せるネズミを育てて見せましょう――ですから」
続く言葉に、大臣は思わず苦笑した。
自身の望みとも言えることを無償で請け負ってやる”代わり”に、と彼が突き出した交換条件に、大臣は快く頷くほかなかった。

――正直な所、ジャンは己の実力に自信があるし、また無いとも言えた。
戦えることは戦える。そしてある程度の強者にも打ち勝てる自信がある。
だが、相手がホークやボーアなど、歴戦の勇士とも言える実力者が相手となると、より燃えるのに対して、その行動がどこかなげやりやけくそ気味になっているように思えて仕方がなかった。
それには明確な理由がある。
ただ一つ、それは――彼自身が、魔術である肉体強化に頼っていることである。これは使い方を間違えれば諸刃の剣にもなる魔術であり、そのお陰で無数の異種族を薙ぎ払って生き残ることができたのだ。技術や判断は確かにジャンのものだから、生き残れた要因はただそれだけというわけではないのだが、言い換えれば肉体強化も生き残れた一つの要因だという事になる。
つまり、そういった外的要素を除いた素の己は、本当に強いのだろうかという疑問が残るのだ。
昨日の演習――試験だってそうだ。あの時点では既に肉体強化を発動させていた。そしてまた、その魔術がなければとてもホークの攻撃に対応しきれなかったし、仮に頭が働いていたとしても身体が

思考に追いつかなかったのだ。
つまり……本当は、自分は弱いのではないか。
生身では、魔術やら何やらがなければ誰にも勝てないのではないか。
不安が思考させ、その結果がさらに不安を募らせる。まさに悪循環たる落ち込みは、ホークが帰宅した今では誰も止めてくれはしない。
「強く、なりたい……」
もれる言葉を、誰かが聞き止めてくれることはなかった。
「力が欲しい……っ！」
魔法はもう良い。
だが、ならばせめて、誰にでも通用する、もっと強い力を――。
病み上がりで負った大怪我によって、彼の精神状態は不安定になっている。今こそ、誰かがそばにいてやる必要があったのだが、今回に限っては誰もいない。窓の外はもう暗がりに飲み込まれ始めたばかりであり、これから始まる孤独な夜は、その長さ故に彼にとって絶望でしか無かった。
立ち直れそうだったところを挫かれた……意図的でないにしろ、タイミング的には的確なまでにそうであったこの現状に、ジャンはただうなだれるだけであって……。
為す術もなく、夜が更けると共に、彼の肉体も静かな闇に飲み込まれていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1050x/

続・knight of monster　ナイト・オブ・モンスター

2011年11月27日01時48分発行